野市町埋蔵文化財報告第３集

高知県

野市町本村遺跡調査報告書

１９９３

野市町教育委員会

本村遺跡発掘調査報告書

野市町埋蔵文化財調査報告書第３集

巻頭カラー

出土土器集合写真

ガラス製勾玉　表

ガラス製勾玉　裏

序

この度，平成３，４年度に実施しました本村遺跡の報告書を刊行する運びとなりました。

野市町は近年，人口が増加しそれに伴う開発行為も増加する傾向にあります。この様な一方で本町の主要産業である農業の近代化も進めています。本村地区においても圃場整備事業の進展が図られておりましたところ，弥生時代の遺跡である本村遺跡が発見されました。

野市町では，貴重な文化財を保護・保存し後世に伝える方途を検討いたしましたが，発掘調査によって，記録保存を行い，その成果を広く公表し，郷土の歴史解明に資することになりました。

発掘調査では，弥生時代中期の小集落を中心に，縄文時代～中世までの遺構・遺物が発見されました。特に弥生時代中期の資料は，高知県において初めての発見となったものも多く，野市町の弥生時代を明らかにするだけでなく，県内の歴史の発展過程を解明する上で貴重な資料になりました。

今回の報告が，埋蔵文化財への一層の理解を深めていただく一助となり，考古学研究の資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが，本調査にご尽力いただいた（財）埋蔵文化財センター及び高知県教育委員会，調査に携わった方々にお礼申し上げますとともに，本村地区の方々，本村地区土地改良区の文化財への深いご理解とご協力に感謝申し上げます。

尚，今後とも文化財保護行政に邁進してゆく所存ですのでご指導，ご協力をよろしくお願いいたします。

野市町教育委員会

教育長　弘　田　忠　士

例　　言

1．本書は，高知県香美郡野市町に所在する野市町本村遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書は，野市町埋蔵文化財調査報告書第３集である。

3．本書に収録したのは，1991年度に実施された三度の試掘調査，1992年度に実施された本調査である。

4．調査は野市町教育委員会が主体となって実施した。各役割分担は以下のとおりである。

調査員　　坂本憲昭　……財団法人　高知県文化財団　埋蔵文化財センター　調査員

庶務担当　　小松大洋　……野市町教育委員会　　社会教育主事

5．本書の執筆，編集は，坂本憲昭が行った。

6．本書に用いた遺構記号は以下のとおりである。

ＳＡ　柵列　　ＳＫ　土坑　　ＳＤ　溝　　ＳＸ　正確不明遺構　　Pit　柱穴

7．出土遺物は野市町教育委員会が保管している。なお出土遺物の注記は，以下のとおりである。

91年度試掘調査		91- 9 ＮＨ
92年度本発掘調査	調査Ⅰ区	92- 9 ＮＨ
	調査Ⅱ区	92- 9 ＮＨ谷西

8．遺構平面図作成にあたっては，グリッドを組んで行なったが，軸線は任意で設定し，調査Ⅰ区ではアラビア数字とアルファベットで表した。調査Ⅱ区は，調査Ⅰ区のグリッド杭Ｇ－４を（0.000,0.000）としてアルファベット軸をＹ軸，アラビア数字軸をＸ軸としてグリッド杭に座標をのせた。尚，図面中Ｎは磁北である。

9．調査にあたっては，ご理解，ご協力をいただいた地元改良組合をはじめ，地元住民のかたがたおよび関係各位には，記して謝意を表したい。

10．調査現場，整理作業では多くの方々の協力を得た。名前を記して謝意を表したい。

（現場作業）

石川康人，井上郁夫，井上速男，井上博恵，臼木由里，馬地節子，小野川和子，片岡真弓，門脇あつ子　門脇ひろみ，加納末雄，狩野孝子，貞岡重道，佐野宣重，杉本認喜，武吉真裕，中野三徳，野中勝徳，百田進一，宮本幸子，湯本好美

（整理作業）

大原喜子，高橋千代，竹村延子，田村美鈴，橋田美紀，松木富子，宮地佐枝，山中美代子，山本裕美子，矢野雅，吉本睦子

11．現場での発掘調査並びに，整理作業，報告書執筆では埋蔵文化財センターの先輩諸士に多大のご指導，ご援助をいただいた。記して謝意を表したい。

報 告 書 要 約

1．遺 跡 名　本村遺跡（91-9 NH，92-9 NH）

2．所 在 地　高知県香美郡野市町本村

3．立　　地　三宝山から続く低丘陵（標高約30ｍ）

4．種　　類　弥生時代中期後半の集落

5．調査主体　野市町教育委員会

6．調査契機　団体営による圃場整備事業

7．調査期間　平成４年５月11日～７月31日（本調査）

8．調査面積　4,500㎡

9．検出遺構　竪穴住居址６棟，土坑３基，溝状遺構16条，性格不明遺構１基，掘立柱建物２棟，旧谷状地形の自然遺構１ヶ所

10．出土遺物　縄文の石鏃，弥生中期後半土器，鉄鏃，石鏃，石包丁，石斧，ガラス製勾玉，古式土師器，須恵器，土師器，土師質土器

11．内容要約　本遺跡は，三宝山から続く低丘陵上に立地した弥生中期後半から後期前半の集落と考えられる。出土遺物は凹線文を主体とした土器を中心に，石器，鉄鏃，ガラス製品等が出土しており，高知県における同時期の様相を知る上で貴重な資料を提供した。

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　地理的環境……3
Ⅲ　歴史的環境……5
Ⅳ　調査の概要……6
Ⅴ　遺構……17
Ⅵ　遺物……47

図　版　目　次

第１図　野市町位置図……2
第２図　野市町地形図……2
第３図　周辺遺跡分布図……4
第４図　試掘調査トレンチ位置図及び本調査区割り図……9
第５図　調査Ⅰ区地形図……11
第６図　基本層序……13
第７図　ＳＴ１実測図……17
第８図　ＳＴ２実測図……19
第９図　ＳＴ３実測図……21
第10図　ＳＴ４実測図……22
第11図　ＳＴ５実測図……24
第12図　ＳＫ１実測図……25
第13図　ＳＫ２実測図……25
第14図　ＳＫ３実測図……26
第15図　ＳＤ１～５実測図……27
第16図　ＳＤ６実測図……28
第17図　ＳＤ７～10実測図……29
第18図　ＳＤ11,12実測図……30
第19図　ＳＤ13実測図……30
第20図　ＳＤ14実測図……31
第21図　ＳＤ15,16実測図……31
第22図　ＳＡ１実測図……32
第23図　ＳＸ１実測図及び遺物出土状況実測図……33

第24図　ＳＴ６実測図……36
第25図　ＳＢ１及び調査Ⅱ－Ａ区ピット実測図……38
第26図　ＳＢ２実測図……39
第27図　旧谷状地形発掘調査区実測図……40
第28図　ＳＴ１～５出土土器実測図……57
第29図　ＳＴ６，ＳＫ１，２出土土器実測図……58
第30図　ＳＫ２出土土器実測図……59
第31図　ＳＫ２，３出土土器実測図……60
第32図　ＳＫ３，ＳＤ１，５，６，Ｄ区包含層出土土器実測図……61
第33図　ＳＤ６出土土器実測図……62
第34図　ＳＤ６出土土器実測図……63
第35図　ＳＤ７，８，10,13～16，Ⅱ－Ａ区ピット出土土器実測図……64
第36図　ＳＸ１出土土器実測図……65
第37図　ＳＸ１出土土器実測図……66
第38図　ＳＸ１出土土器実測図……67
第39図　ＳＸ１出土土器実測図……68
第40図　ＳＸ１出土土器実測図……69
第41図　ＳＸ１出土土器実測図……70
第42図　ＳＸ１出土土器実測図……71
第43図　ＳＸ１，包含層出土土器実測図……72
第44図　包含層出土土器実測図……73
第45図　Ⅱ－Ａ区　旧谷状地形埋土中出土土器実測図……74
第46図　Ⅱ－Ａ区　旧谷状地形埋土中出土土器実測図……75
第47図　Ⅱ－Ａ区　旧谷状地形埋土中出土土器実測図……76
第48図　Ⅱ－Ａ区　旧谷状地形埋土中出土土器実測図……77
第49図　Ⅱ－Ａ区　旧谷状地形埋土中出土土器実測図……78
第50図　Ⅱ－Ａ区　旧谷状地形埋土中出土土器実測図……79
第51図　Ⅱ－Ａ区　旧谷状地形埋土中出土土器実測図……80
第52図　Ⅱ－Ａ区　旧谷状地形埋土中出土土器実測図……81
第53図　Ⅱ－Ａ区　旧谷状地形埋土中出土土器実測図……82
第54図　Ⅱ－Ａ区　旧谷状地形埋土中出土土器実測図……83
第55図　Ⅱ－Ａ区　旧谷状地形埋土中出土土器実測図……84
第56図　ミニチュア土器実測図……85
第57図　ミニチュア土器実測図……86

第58図　鉄鏃，石鏃実測図……87
第59図　石鏃実測図……88
第60図　石包丁実測図……89
第61図　石包丁，石斧実測図……90
第62図　石斧，石剣，剝片実測図……91
第63図　ガラス製勾玉，管玉，敲石実測図……92
第64図　敲石実測図……93
第65図　敲石，叩台実測図……94
第66図　叩台，砥石実測図……95
第67図　砥石実測図……96
第68図　砥石，性格不明石器実測図……97
第69図　性格不明石器実測図……98
第70図　付図　調査Ⅰ区全体図

表　目　次

第１表　周辺遺跡分布表……4
第２表　ＳＴ１ピット計測表……17
第３表　ＳＴ２ピット計測表……18
第４表　ＳＴ３ピット計測表……20
第５表　ＳＴ４ピット計測表……22
第６表　ＳＴ５ピット計測表……23
第７表　ＳＡ１ピット計測表……32
第８表　ＳＸ１ピット計測表……33
第９表　ＳＴ６ピット計測表……37
第10表　ＳＢ１ピット計測表……37
第11表　ＳＢ２ピット計測表……39
第12表　調査Ⅰ区ピット計測表１……41
第13表　調査Ⅰ区ピット計測表２……42
第14表　調査Ⅰ区ピット計測表３……43
第15表　調査Ⅱ－Ａ区ピット計測表……44
第16表　遺物観察表１……99
第17表　遺物観察表２……100
第18表　遺物観察表３……101

第19表　遺物観察表４……102
第20表　遺物観察表５……103
第21表　遺物観察表６……104
第22表　遺物観察表７……105
第23表　遺物観察表８……106
第24表　遺物観察表９……107
第25表　遺物観察表10……108
第26表　遺物観察表11……109
第27表　遺物観察表12……110
第28表　遺物観察表13……111
第29表　遺物観察表14……112
第30表　遺物観察表15……113
第31表　遺物観察表16……114
第32表　遺物観察表17……115
第33表　遺物観察表18……116
第34表　遺物観察表19……117
第35表　遺物観察表20……118
第36表　遺物観察表21……119
第37表　遺物観察表22……120
第38表　遺物観察表23……121
第39表　遺物観察表24……122
第40表　遺物観察表25……123
第41表　遺物観察表26……124
第42表　遺物観察表27……125
第43表　遺物観察表28……126
第44表　遺物観察表29……127

写　真　目　次

写真１　調査区遠景　調査区調査前風景……131
写真２　調査区調査前風景　ＳＴ１完掘状態……132
写真３　ＳＴ２完掘状態　Ａ区完掘状態……133
写真４　Ｂ区完掘状況　ＳＫ２遺物出土状況……134
写真５　ＳＴ３完掘状態　ＳＸ１完掘状態……135

写真６　ＳＫ３完掘状態　ＳＤ６完掘状態……136
写真７　ＳＴ４完掘状態　Ｄ区端部完掘状態……137
写真８　ＳＤ13，14完掘状態　ＳＴ５完掘状態……138
写真９　ＳＴ６完掘状態　Ⅱ－Ａ区ピット完掘状態……139
写真10　調査区完掘状態遠景……140
写真11　遺物出土状態１……141
写真12　遺物出土状態２……142
写真13　出土遺物１……143
写真14　出土遺物２……144
写真15　出土遺物３……145
写真16　出土遺物４……146
写真17　出土遺物５……147
写真18　出土遺物６……148
写真19　出土遺物７……149
写真20　出土遺物８……150
写真21　出土遺物９……151
写真22　出土遺物10……152
写真23　出土遺物11……153
写真24　出土遺物12……154
写真25　鉄鏃　石鏃……155
写真26　石包丁　石斧……156
写真27　器台状ミニチュア土器　ガラス製勾玉，管玉……157

Ⅰ章　調査に至る経過

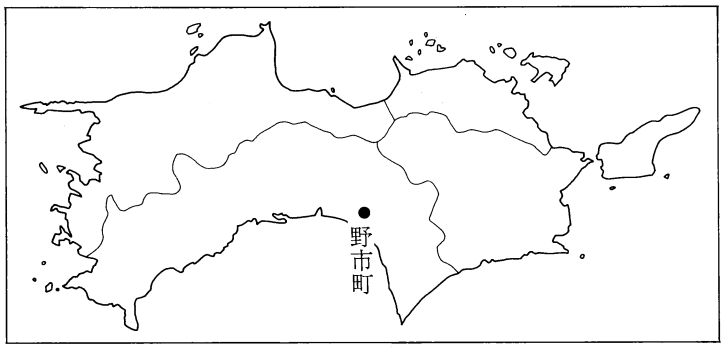
野市町本村遺跡の発掘調査は，野市町本村地区の区画整理事業に伴う緊急発掘調査として，平成３年度に試掘調査を実施し，続いて平成４年度に本発掘調査を行った。

本村地区は，園芸農業の盛んな野市町の中でも，花卉園芸を盛んに行っている地域であるが，同地区では排水路を有しない水田が多いうえ，現在ある用排水兼用の水路は，老朽化が進み漏水も見られる。このため地区内の耕地は常時地下水位が上昇しており，半湿田の状態で主要作物のスターチスの生産性の向上にとって大きな妨げとなっている。また農道の整備も遅れており大型機械の導入ができないことも生産性向上を阻害する一つの要因となっていた。このような状況を受け，同地区では，平成３年度より土地改良組合を組織し，約10.5haを対象に平成５年まで農林水産省より補助金を受け区画整理事業を行うこととなった。

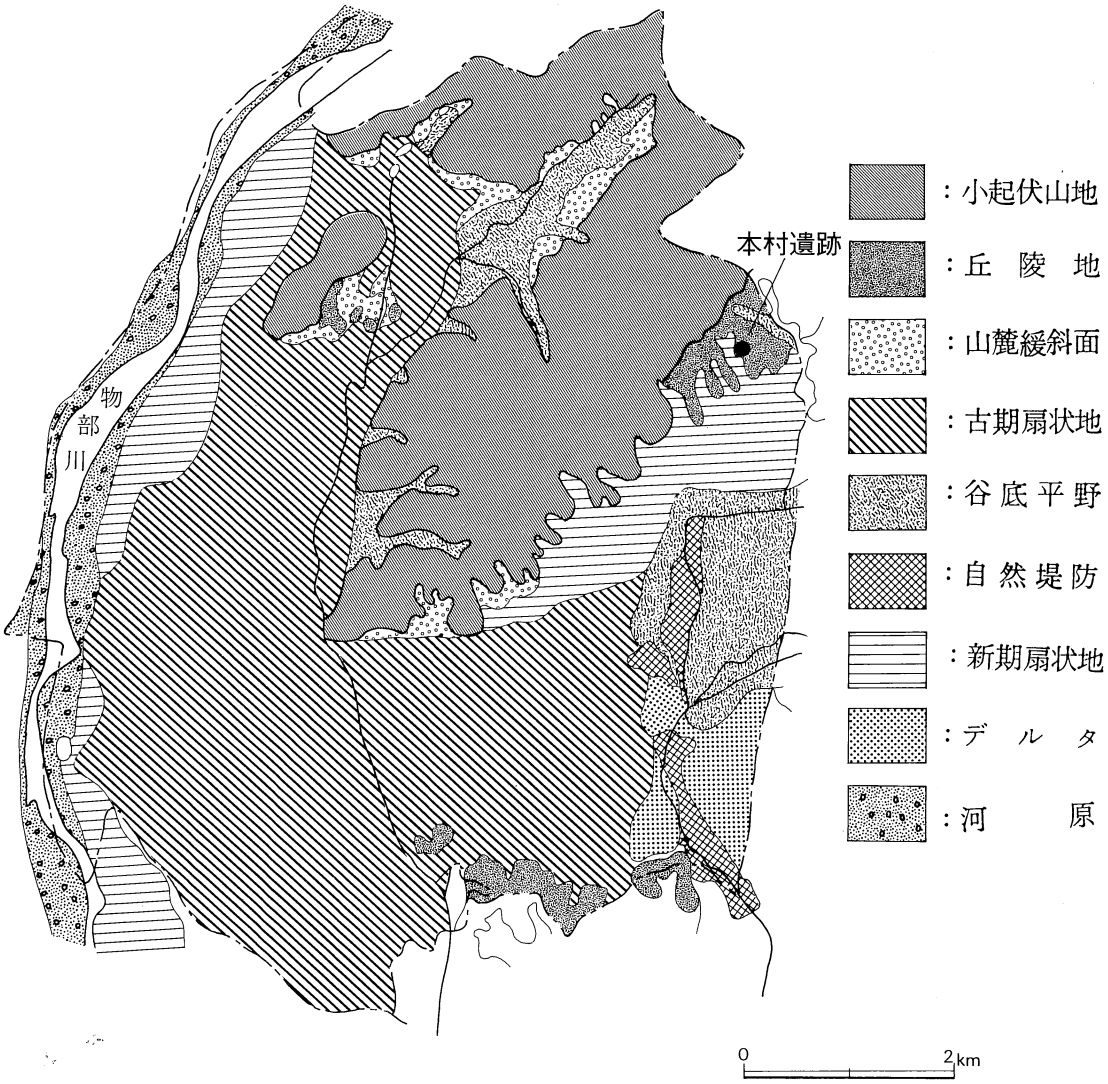
当該工事区域内には，遺物の散布地である野市町本村遺跡の所在が高知県教育委員会により確認されており，平成３年９月より事業に先立つ試掘調査が実施された。試掘調査は平成３年度中に合計３回に及び，野市町本村遺跡が弥生時代の集落遺跡であることが確認された。特に11月14日より行われた第二次試掘調査は一部本調査を兼ねて行われ，竪穴住居址２棟を確認し記録保存を行い計画地中央部に位置する低丘陵に集落が営まれていたことを確認した。

このような試掘調査の結果を受け，文化財保護部局と開発部局との間で数度にわたる協議が持たれ，本村遺跡保存の方途が探られたが，現状での保存は困難であるという結論に達し，工事が地下の埋蔵文化財に影響を与える範囲を発掘調査し，本村遺跡の性格を明らかにするとともに記録保存を行うことになった。発掘調査は野市町教育委員会が主体として行われたが，同町教育委員会には，埋蔵文化財専門職員が配置されておらず，（財）高知県文化財団埋蔵文化財センターより専門職員の派遣を受け平成４年５月11日から７月31日まで調査が行われた。

調査は前年度，竪穴住居址が確認された調査区中央部の低丘陵が当該工事において全面的に削平されるため，この部分を中心に行うことになった。高知県では丘陵部の本格的な調査は現在まで行われておらず，今回の本村遺跡の発掘調査に大きな期待がかけられていた。本調査は，高知県において丘陵部に営まれた弥生時代の集落の全体像解明の端緒を開く契機となった。



第１図　野市町位置図



第２図　本村遺跡の位置

（土地分類基本調査図「高知」より）

Ⅱ章　地理的環境

野市町本村遺跡の所在する香美郡野市町は，高知県の中央部に広がる高知平野の東端に位置し西を南国市，東を香我美町に接し，北側は聞楽山地で土佐山田町と分けられる。南側は吉川村，赤岡町と境を接し土佐湾へと向いている。町役場の位置は北緯33度33分37秒，東経133度42分12秒である。面積は約23.15km²，人口約１万3,000人で，古代以来交通が発達し，現在も県都高知市と県東部を結ぶ幹線である国道55号線が走るなど交通の便が良く，近年は高知市郊外のベットタウンとして人口が年々増加している。主要産業としては，江戸時代に潅漑施設が整えられて以来，穀倉地帯として米作が盛んであったが，現在は温暖な気候と交通の便の良さを生かした近郊型の園芸農業が盛んになっている。

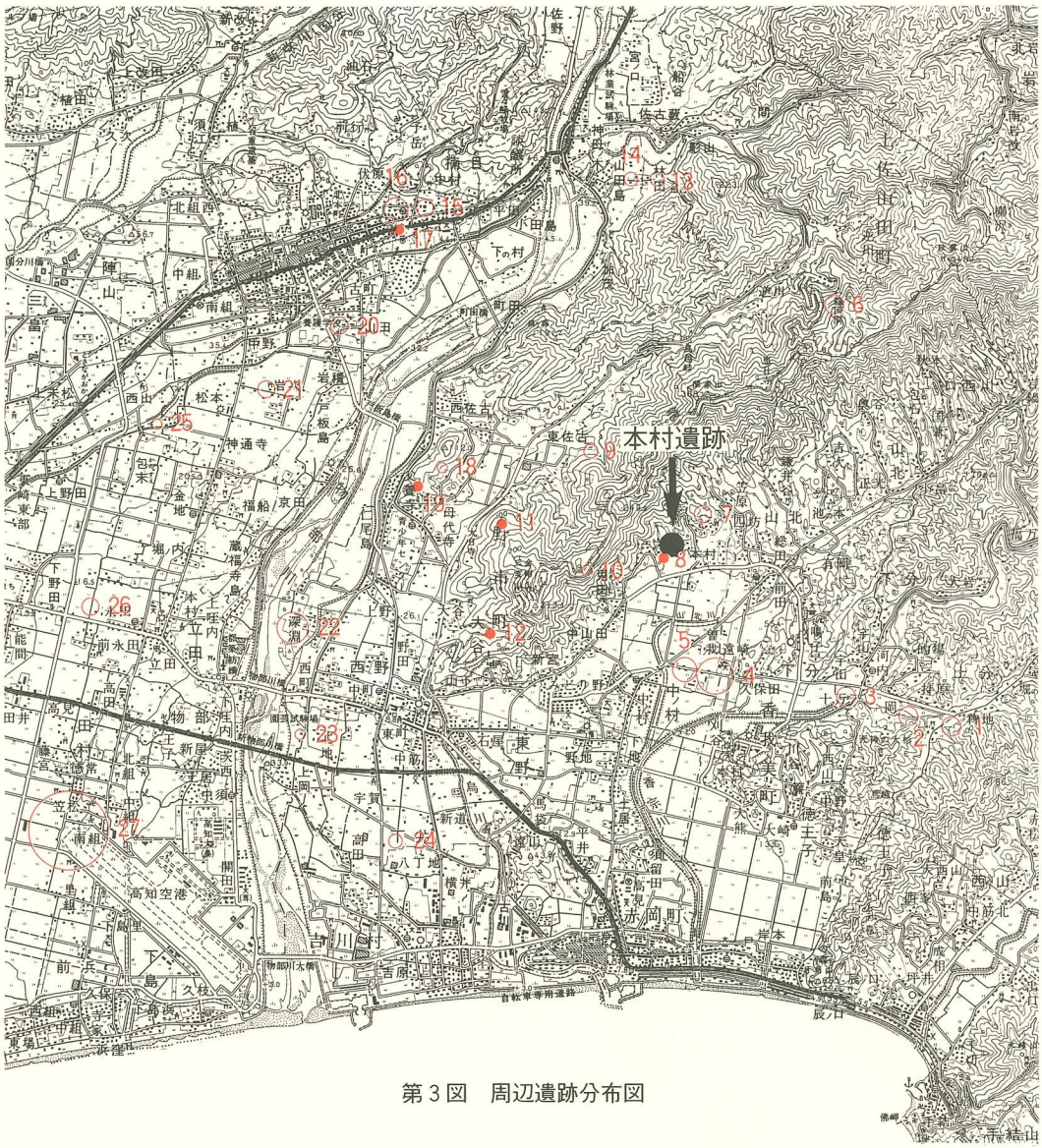
野市町は自然地理学的には，山地部と物部川左岸の古期扇状地に大別され，これに付随する形で野市町の地形はいくつかに分類することができる。(第２図参照)

現在の市街地は，物部川の下流左岸に発達した古期扇状地性の台地状平地に立地している。この古期扇状地性の台地は海抜高度40～10mを測り，同町から南に向かって高度を下げ，沖積平野につながる。古期扇状地は同町山下を扇頂として秋葉山系西端の三宝山山麓部でさえぎられた物部川の堆積物が東南側に広がることで形成されたと考えられる。このように野市町の地形を特徴づける物部川は，その源を剣山山地の白髪山（1,770m）に発し山間部を仏像構造線に添って西南流し吉川村に至って土佐湾へ注ぐ。その流域は１市３町２村に及び，多くの河岸段丘を形成し，その河口に肥沃な香長平野を形成する。また物部川はその流域の多くの人々を養い，文化を育てた川でもある。その流域に添っては縄文時代の遺跡を始め弥生時代，古代，中世と連綿とつづく数多くの遺跡が見られる。その代表が河口の南国市田村に広がる田村遺跡群であろう。

もうひとつ野市町の地理的特徴付けをなしているものに，野市町のほぼ中央部に位置している山地がある。特に聞楽山（368.2m）を最高峰とし三宝山へと続く秋葉山系は同町の中央部に位置し，南に向かって多くの支谷を発達させている。この山系の斜面は全般に緩やかであるが基盤岩石であるチャート石灰石の分布により急峻な斜面をなす部分も見られる。三宝山は地質学的にも有名であり，秩父帯と四万十帯の境界をなす仏像境界線がその南麓を走り北側と南側の地質構造を分けている。

本村遺跡の所在する本村は秋葉山系南の丘陵地に位置する。この丘陵地は起伏が小さく約70mで定高性が見られ谷の開析が進み，谷状の地形が多く見られる。谷底平野は南に向かって高度を下げながら海岸に至る沖積平野へと続く，この沖積平野は，香宗川，山北川の堆積作用によって形成されたものと考えられる。香宗川は流域に多量の木器が出土し弥生前期の遺跡である下分遠崎遺跡が所在する。今回の調査によって本村遺跡は貴重な資料を提供すると共に本村周辺に弥生中期の丘陵地に立地する新たな遺跡の存在の可能性を推定させることになった。

参考　野市町教育委員会『野市町史』上巻



第３図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡分布表

No	遺　跡　名	時　代	No	遺　跡　名	時　代	No	遺　跡　名	時　代
1	稗地遺跡	弥生～古墳	10	笹ヶ峰遺跡	弥生	19	父養寺古墳	古墳
2	拝原遺跡	縄文～中世	11	竹ノ内古墳	古墳	20	原遺跡	弥生～古墳
3	十万遺跡	縄文～近世	12	大谷古墳	古墳	21	大領遺跡	奈良～平安
4	下分遠崎遺跡	弥生	13	林田遺跡	弥生～古墳	22	深渕遺跡	弥生～近世
5	曽我遺跡	縄文～中世	14	林田シタノヂ遺跡	縄文～近世	23	北地遺跡	弥生
6	龍河洞遺跡	弥生	15	ひびのき遺跡	弥生～古墳	24	下井遺跡	平安
7	富家城跡	中世	16	ひびのきサウジ遺跡	弥生～中世	25	金地遺跡	弥生～中世
8	大崎山古墳	古墳	17	伏原大塚古墳	古墳	26	平杭遺跡	弥生
9	鬼ヶ岩屋洞穴遺跡	弥生	18	亀山窯跡	平安	27	田村遺跡群	縄文～近世

Ⅲ章　歴史的環境

野市町本村遺跡は，香美郡野市町に所在する弥生時代中期の遺跡である。香美郡には縄文時以来の遺跡が数多く見られ，香美郡が高知県においても早くから開けた地域であることを物語っている。香美郡の遺跡の分布は大きく２つに分けられる。ひとつは高知県と徳島県の県境にその源を発する物部川の流域と，香我美町と野市町を分けて流れる香宗川の流域とに大別される。

特に物部川流域には多くの遺跡が見られるがその代表的なものが，河口右岸に広がる田村遺跡群であろう。田村遺跡群は縄文以来中世の環濠集落までの複合遺跡であり高知県下最大の遺跡である。この田村遺跡は物部川河口流域の弥生時代初期の母村と考えられ弥生文化，初期農耕の伝播を考えるうえで重要な遺跡である。また聞楽山地をはさんで野市町と隣り合う土佐山田町でも，高知県東部の弥生後期の土器型式，ひびのきⅠ式・ひびのきⅡ式の標準遺跡であるひびのき遺跡等多くの遺跡が所在する。特に弥生時代中期の洞穴遺跡である龍河洞遺跡は三宝山によって当野市本村遺跡につづく遺跡であり，時期的にも同一と考えられ，本遺跡の性格を解明するうえで重要な遺跡である。

香宗川流域では香我美町の下分遠崎遺跡，十万遺跡が縄文晩期の遺跡である。下分遠崎遺跡は弥生時代初期の土器が発見されるとともに，多量の木器が出土したことで知られ香宗川流域の弥生時代の集落の母村的役割を担っていたと考えられる。またすぐ隣の曽我遺跡では奈良時代～平安時代の遺物遺構中心であるが弥生時代の遺物も含まれており，地域的には下分遠崎遺跡と同一遺跡群と考えられる。この遺跡の他にも拝原遺跡，稗地遺跡等が弥生時代の遺跡として知られている。

野市町にも多くの遺跡が所在し，その歴史は深淵遺跡出土の遺物によって縄文時代まで遡ることができる。弥生時代では前の曽我遺跡等を挙げることが出来るが，本遺跡と同時期と考えられる弥生時代中期の遺跡は町内の平野部では現在調査されてない。しかし，三宝山では同時期の高地性集落と思われる遺跡が２つ報告されている。同町は古墳時代に入っても集落は営まれ続け地方豪族の萌芽がみられ，近年調査が行なわれ大きな成果を得ることが出来た大谷古墳や本村に所在し，この地区を考えるうえで見逃すことの出来ない大崎山古墳などの古墳が築かれた。また古代に入っても，深淵遺跡から二彩陶器，緑釉陶器，墨書土器等が出土しており，官衙関係の性格を持つ遺跡と言え，この地域が社会的にも経済的にも順調に発展した事をうかがわせる。

同町の遺跡の中でも特に本遺跡との関係が注目されるものとして，三宝山の上に営まれた鬼ケ岩屋洞穴遺跡と笹が峰遺跡がある。弥生時代中期は遺跡が低地から比較的高地である丘陵上や山頂部に上がってくる時期であり，これらの遺跡は比較的低い位置に営まれた遺跡の物見の役割を担うものと考えられ，低丘陵上に営まれた本遺跡との関係は同時期の社会的状況などを明らかにする上で重要である。

Ⅳ章　調査の概要

本村遺跡は，平成３年度に行われた３度の試掘調査，それに引き続いた本発掘調査が平成４年度に行われた。

１．調査区の概要

調査対象地は，香美郡野市町本村玉尾1241，ハブヤシキ744-1等の約10.5haである。北側は三宝山山系である。この山系の南斜面は開析の進んだ丘陵地になっている。当該工事対象区中央部にはこの山系より派生した標高約30ｍの低丘陵が位置し，同工事対象区を東西に２分している。平成３年度の試掘調査では工事区域内すべてを対象に任意のトレンチによる調査が行われ，平成４年度に行われた本調査ではこの丘陵を含む西側部分の馬蹄形状をした谷を調査区域とした。調査は前年度実施した試掘調査によって遺構の存在が確認された谷の東側斜面に約1,500㎡を調査区に設定して行われた。調査区の調査前の状況は段畑状に開墾され蜜柑畑となっていた。現況から削平が行われた部分が多く遺構の残存状態は良くないであろうと予想された。しかし，一部には緩やかな斜面となり平場をなしている部分がありここから試掘調査で遺構が確認されておりこの部分を中心に調査Ⅰ区を設定した。試掘調査でこの斜面に対面する谷の西側斜面から土器の集中出土地点が確認されており本調査では調査Ⅱ区を設定した。なお調査Ⅰ区は各段ごとにⅠ－Ａ～Ｆ区に分けられる。調査Ⅱ区はⅡ－Ａ～Ｂ区にわける。

２．調査の概要

(1)　試掘調査の概要

①　平成３年度に行われた第一次試掘調査は，９月９日から行った。調査は工事区域内がすべて対象であるが，道路，水路等埋蔵文化財に影響を与える部分に任意に２ｍ×４ｍのトレンチを設定して行った。中央部の丘陵は全体が削平の対象となるため確認調査が必要であったが蜜柑畑であったため第一次試掘調査では行えなかった。この試掘調査では県道山北線に接した標高約15ｍ程の所では地下水位が高く約１ｍ掘り下げると，水が出始める状況であった。18ヵ所のトレンチの内，遺物包含層が確認できたのは隣り合った２ヵ所のみであった。このうちＴＲ14では弥生土器が多量に出土し本発掘調査が必要と判断された。

②　第二次試掘調査は11月14日から前回の調査で残された丘陵の南半分を対象に行われ，丘陵西側斜面（馬蹄形の谷東側斜面）から２棟の住居址が検出された。この部分については当圃場整備工事のため今回の調査で記録を行い丘陵南半分の調査を完了した。

③　第三次試掘調査は，第二次試掘調査の結果を受け平成４年１月16日から丘陵の北半分の西側斜面の調査を行い，遺跡の広がりを確認するため実施した。結果，遺構の可能性のある遺物集中出土地点が確認される。段畑によって削平されている部分はあるが，遺物包含層が西側斜面に残っていることが判明し工事に先立つ本発掘調査を実施する必要があると判断された。

(2) 本調査の概要

本発掘調査は平成4年5月11日から7月31日まで行われた。Ⅰ－A区では，近世と考えられる土坑5基，溝2条が検出された。弥生時代と考えられる遺構は土坑1基のみで埋土からは弥生土器の細片と磨製石斧が出土している。Ⅰ－B区は柵列と考えられる遺構1条，方形の土坑が検出されこの土坑からは弥生時代中期の土器と伴に鉄鏃が2点出土している。Ⅰ－C区からは溝状遺構，土坑1基，竪穴住居址1棟が検出されており何れも弥生時代中期の土器が出土している。また，斜面を段状に整地した段状遺構と考えられる遺構が検出され埋土からは鉄鏃を含む多量の土器が出土している。Ⅰ－D区は溝状遺構，ピット群，竪穴住居址1棟が検出され埋土からガラス製勾玉，管玉が2点出土した。Ⅰ－E区は削平が著しく，遺構，遺物ともに確認できなかった。地形的に考えても遺構，遺物ともに存在の可能性は低いと思われる。Ⅰ－F区では竪穴住居址を1棟検出できたが，残存状況は不良でその他の遺構については確認できなかった。Ⅰ－D区では弥生時代の溝状遺構，古代と思われる溝状遺構が検出されている。

Ⅱ－A区は大きく2つに分けられる。ひとつは，試掘調査において弥生土器が多量に出土した地点である。ここは谷状地形が埋まったと考えられ，今回の調査においても多量の弥生土器が出土した。もうひとつは，旧谷をはさんだ南側と北側で検出されたピット群である。このピットからは土師質土器が出土している。Ⅱ－B区では竪穴住居址が1棟確認されている。

本遺跡の出土遺構，遺物ともに弥生時代中期のものが大半を占める。

3．基本層序

本村遺跡の調査区は大きく2つに分けることができる。基本層序も山側の調査Ⅰ区と，谷状地形が土砂によって埋没した調査Ⅱ－A区ではその堆積状況はまったく違う。

(1) 調査Ⅰ区

調査Ⅰ区は現況段畑であるが，丘陵の西側斜面であり，その現況段畑端部に堆積した土層が残存している状況であった。遺構が検出できたのは黄橙色粘質土と黒色粘質土である。黄橙色粘質土はこの丘陵を形成している洪積層と思われ無遺物層である。黒色粘質土層は基盤層である黄橙色粘質土が有機物によって土壌化したと考えられるが，この土層にも遺物は入っていない。遺物包含層は暗灰色粘質土と茶褐灰色粘質土であるが，暗灰色粘質土中には，古墳時代の遺物が若干ではあるが混じっており，純粋な弥生中期後半の包含層ではない。褐灰色粘質土は遺構の埋土であり，ほぼ弥生中期の包含層に相当すると考えられるが，残存状況は良くない。この上層については遺物をほとんど含まないが土壌化された土と黄橙色粘質土のブロックが混じった層がみられこの丘陵部が何度かの開墾によって段畑が広げられたときの物と考えられる。

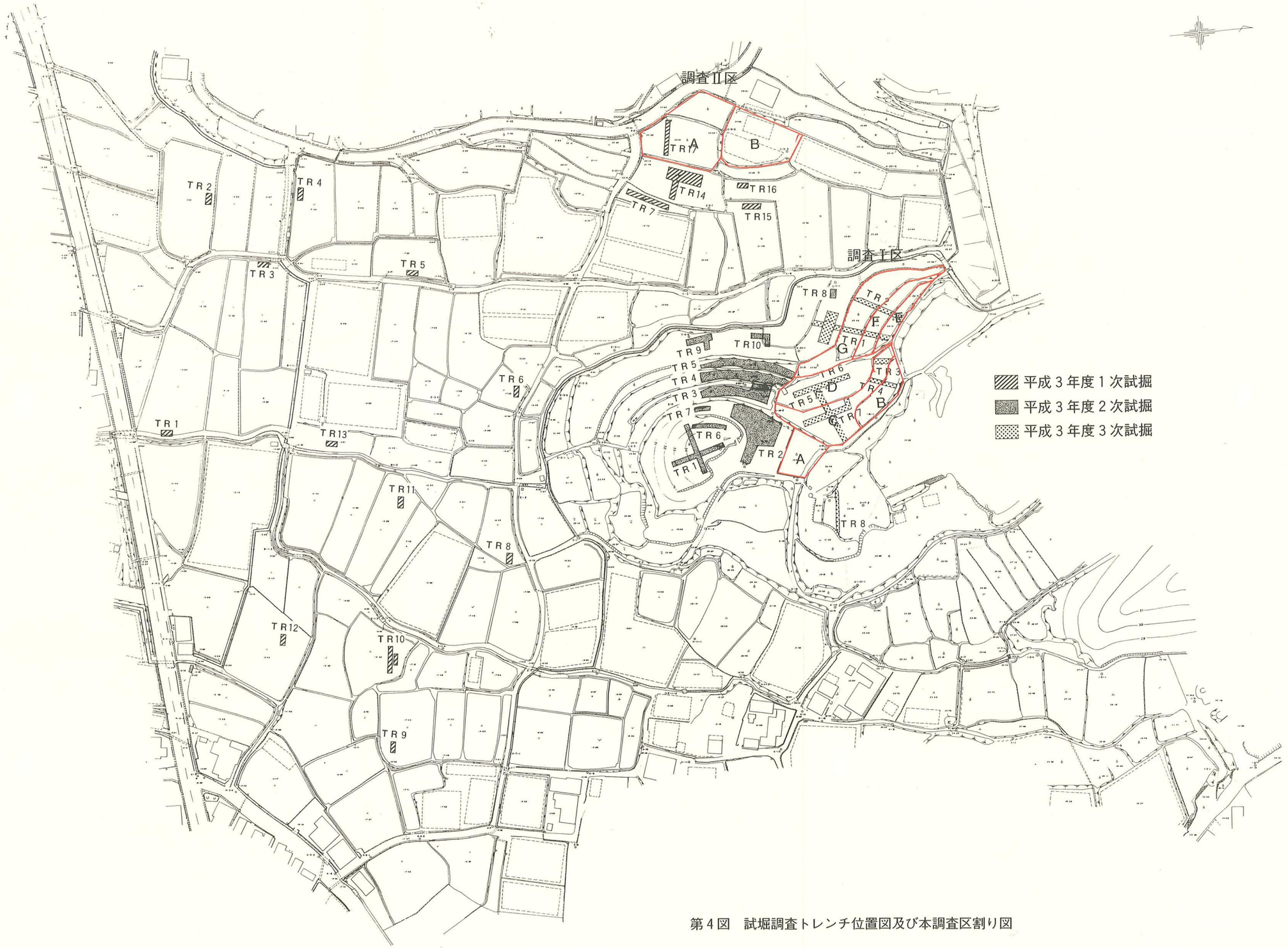
(2) 調査Ⅱ－A区旧谷状地形

調査Ⅱ区から検出された旧谷状地形の埋土中からは弥生土器が多量に出土した。埋土は粘土層と砂礫層が互層になっている。わずかに有機物を含み黒色化している層もみられるが，弥生

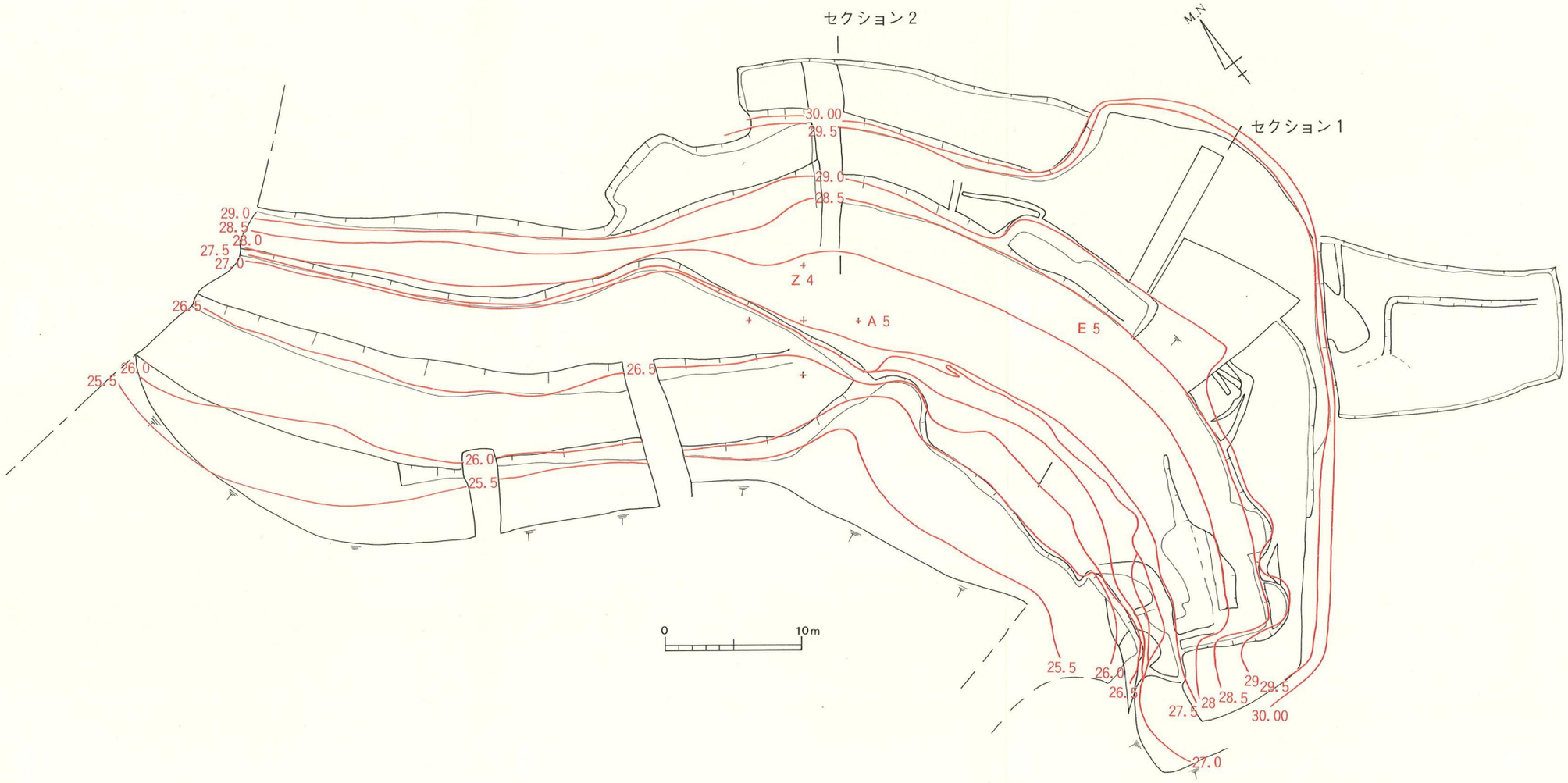
時代前期と後期初頭に起きたと考えられる斜面の崩壊によって埋没したと考えられる。現在もこの部分については地下水位が高く，旧谷状地形状を埋めた山土は土質粘土化している。地山は調査Ⅰ区と同じで黄橙色粘質土で，旧谷状地形の基底層も黄橙色粘質土だが粘土化しており黄白色粘土である。

(3) **調査Ⅱ－Ｂ区**

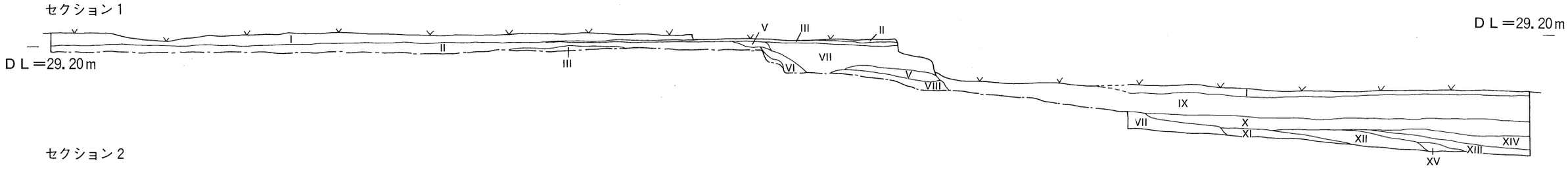
調査Ⅱ－Ｂ区は，Ⅱ－Ａ区の北隣で一段上の標高約23.3ｍである。Ⅱ－Ａ区と違い丘陵の張り出し部にあたり，住居址が検出されたように丘陵の緩斜面であったと考えられ，その層位は調査Ⅰ区とほぼ対応すると考えられる。基底層は黄橙色粘質土である。遺構の埋土は褐灰色粘質土で，淡褐灰色粘質土から掘り込まれており，遺構を平面プランで確認することは困難であった。Ⅱ－Ｂ区からはＳＴ６が一棟検出されているが，セクション図ではＳＴ６と同一の層位から掘り込まれ，同じ埋土の遺構が確認できる。住居址よりやや小さく掘り込みも浅いことから土坑であったと考えられる。包含層は，やはり段畑として造成された時に削平されたものと考えられる。

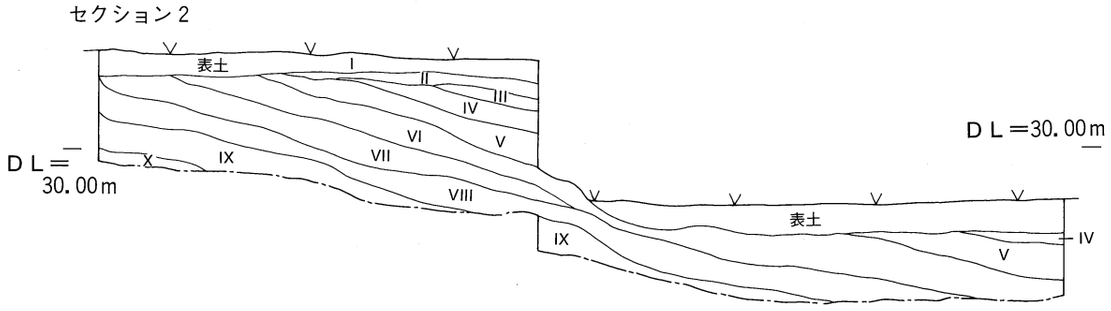


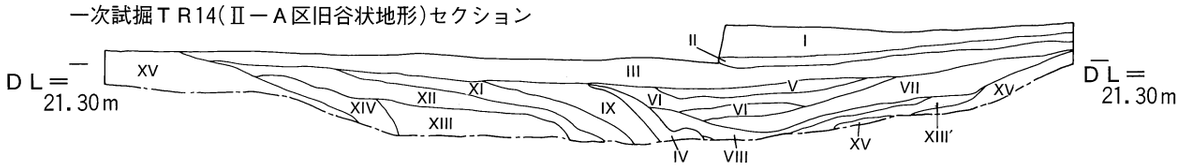
第４図　試堀調査トレンチ位置図及び本調査区割り図

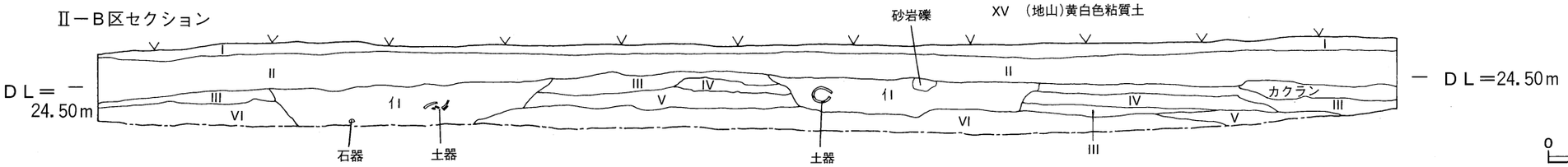

セクション2
M.N
セクション1
30.00
29.5
29.0
28.5
29.0
28.5
28.0
27.5
27.0
26.5
25.5
26.0
26.5
26.0
25.5
Z 4
A 5
E 5
0
10m
25.5
26.0
26.5
27.5
28
28.5
29
29.5
30.00
27.0

第５図　調査Ⅰ区地形図









I　表土
II　床土1
III　床土2
IV　赤黄褐色粘砂土レキ入る
V　黒褐色粘質土（小赤石入る）黒色土
VI　（黒）暗赤褐色粘質土
VII　黒灰褐色粘質土
VIII　暗灰褐色粘質土
IX　暗褐色粘質土(粘性強い)
X　地山

I　表土
II　床土
III　茶褐色粘質土
IV　赤褐色粘質土
V　明茶灰褐色粘質土
VI　黒褐色粘質土
VII　茶灰褐色粘質土
VIII　黒色粘質土

IX　淡灰色粘質土
X　暗灰色粘質土(黄色砂レキ土入る)
XI　地山
XII　黒褐色(黒色)粘質土
XIII　赤灰色粘質土
XIV　カクラン
XV　黒灰色粘質土，こげ茶に灰が入る

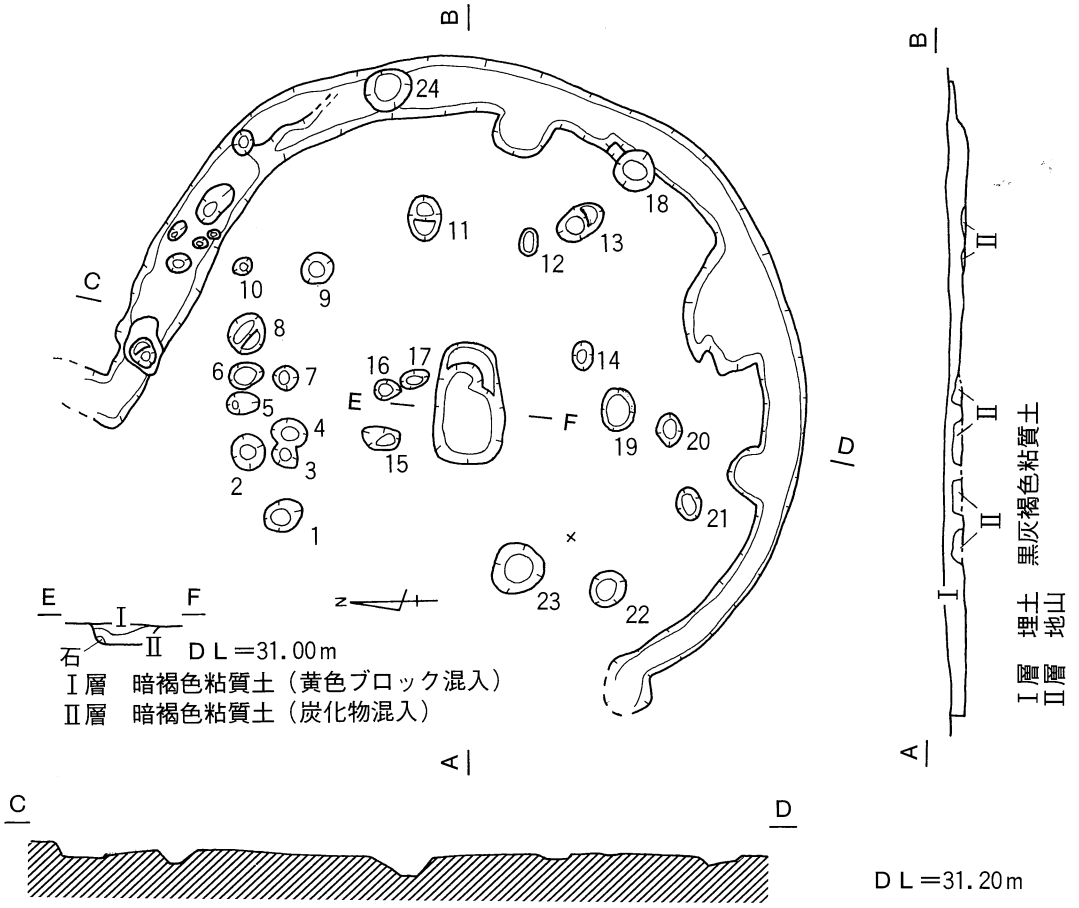
I　表土
II　暗褐色粘質土
III　暗灰色粘質土
IV　青緑色砂礫(黄色ブロック)
V　灰色粘質土
VI　黒灰色粘質土
VII　灰色粘質土
VIII　青緑色砂礫土(レキ大)
IX　〃　(レキ小)
X　灰色粘質土
XI　灰白色粘質土
XII　黒灰色粘質土
XIII　青緑色砂レキ土(レキ大)
XIV　黒灰褐色粘質土
XV　(地山)黄白色粘質土

II　褐灰色粘質土
I　表土
II　淡褐色粘質土
III　淡褐灰色粘質土
IV　淡黄灰褐色粘質土
V　褐灰色粘質土
VI　黄橙色粘質土

0　4m

第6図　基本層序

V章　遺　　構



第７図　ＳＴ１実測図　0　4m

調査Ⅰ区

ＳＴ１

ＳＴ１は丘陵頂上の下段(標高約31.0m)から検出された。近世に行われたと考えられる開墾によって，掘り方は削平され，壁は殆ど残存していない。平面プランは表土直下から検出され半円形状を呈し直径は約5.2mを測る。岩盤を掘り込んで作られている。床面からは，中央ピット，柱穴及び小ピット，壁溝を検出した。床面は平坦で標高30.8mを測る。

中央ピットは，ほぼ住居址の中央に位置し長軸100cm，短軸65cm深さ約15cmを測る角丸の長方形で底は２段になっていた。長

第２表　ＳＴ１ピット計測表

ピット番号	平面プラン	径(長×短cm)	深さ(cm)	遺　物	備　考
Ｐ 1	楕円形	44×30	15		
Ｐ 2	円形	30×30	26		
Ｐ 3	不整形な円形	25×20	17		
Ｐ 4	楕円形	30×22	4		
Ｐ 5	楕円形	26×18	3		
Ｐ 6	楕円形	30×20	3		
Ｐ 7	不整形な円形	22×20	28	弥生土器	
Ｐ 8	同上	30×32	10		底面が２段
Ｐ 9	同上	25×25	33		
Ｐ10	同上	15×15	4		
Ｐ11	楕円形	35×28	5，18		底面が２段
Ｐ12	不整形な楕円形	22×15	3	弥生土器	
Ｐ13	楕円形	40×25	7，50		底面が２段
Ｐ14	同上	23×17	3		
Ｐ15	不整形な楕円形	30×19	16		
Ｐ16	同上	23×15	6		
Ｐ17	同上	24×15	9		
Ｐ18	円形	32×32	32	弥生土器	
Ｐ19	楕円形	35×25	4		
Ｐ20	不整形な楕円形	30×20	6		
Ｐ21	楕円形	25×20	4		
Ｐ22	円形	30×30	17		
Ｐ23	不整形な円形	42×43	39		
Ｐ24	同上	38×33	24		

軸方向はN－83°－Wであった。埋土は暗褐色粘質土と炭化物の混じった暗褐色粘質土の二層に分層される。これらから中央ピットは炉として使用されたと考えられる。

ピットは概して浅く主柱穴になりうる径が20cm以上の比較的大きなピット，深さ30cm以上のピットから推測すると円形に住居址を巡るものであったと考えられる。

壁溝は住居址の壁に沿って巡っており幅約40cmを測り深さは深いところで約10cmで３ヵ所の張り出し部分がある。柱穴となりうるピット３個が壁溝中から検出されている。埋土中からは弥生土器片が出土しているが図示できたのは，No.１の平底の底部のみである。その他砥石，敲石が出土している。

住居址の埋土は単一層の暗褐色粘質土で削平によってほとんどなくなっていた。遺物の出土も少なかったが，大部分が床面上からの出土であった。弥生土器が約70点出土しているがいずれも細片で図示出来たのは，No.１，２の２点のみであった。また石製品もNo.441の石包丁の１点と，その他，砂岩の河原石，擦痕が若干みられる円礫が出土したのみで時代の特定が出来得る遺物の出土はなかった。ピット，中央ピット，壁溝の埋土は同一の暗褐色粘質土であった。ピットの埋土からの土器の出土も少なくＰ７，Ｐ12，Ｐ18のみである。中央ピットからは弥生土器片が４点出土している。いずれも細片で図示できなかった。

ＳＴ２

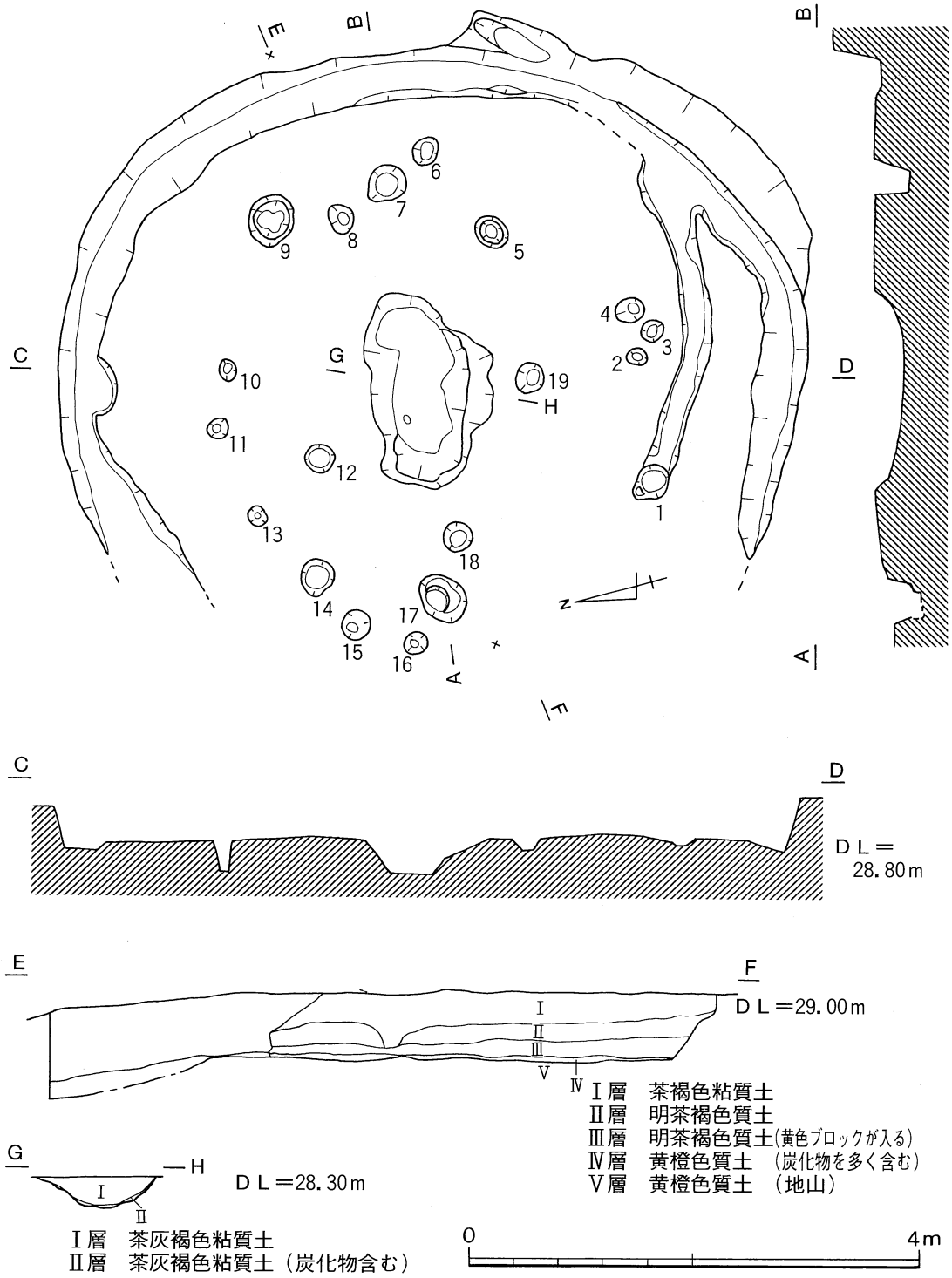
ＳＴ２はＳＴ１が検出された真下に位置する現況標高約29.2ｍの段畑から検出された。プランはやや楕円の半円形を呈し楕円の長軸は約6.7ｍを測る。残存の状況は比較的良好で斜面側では表土下からは，約80cmの壁高を測ることができる。開口側は後世の段畑による削平によって壁は残存してないが床面は削平をうけていないとみられる。岩盤を掘り込んで作られており，床面は平坦で標高約27.8ｍである。床面からは，中央ピット，ピット，壁溝が検出されている。壁高は途中で２条に分かれている。

第３表　ＳＴ２ピット計測表

ピット番号	平面プラン	径(長×短cm)	深さ(cm)	遺　物	備　考
Ｐ１	楕円形	40×35	25		
Ｐ２	円形	16×18	22		
Ｐ３	同上	21×20	17		
Ｐ４	楕円形	27×22	10		
Ｐ５	同上	33×26	25		
Ｐ６	同上	25×22	24		
Ｐ７	不整形な楕円形	40×30	33		
Ｐ８	同上	30×22	30		
Ｐ９	同上	50×40	60		
Ｐ10	円形	20×18	30		
Ｐ11	不整形な円形	20×18	23		
Ｐ12	円形	26×25	3		
Ｐ13	同上	18×18	20		
Ｐ14	不整形な楕円形	34×30	10	弥生土器片	
Ｐ15	円形	27×25	15		
Ｐ16	同上	18×18	27		
Ｐ17	不整形な楕円形	47×40	38	弥生土器片	
Ｐ18	円形	28×27	6		
Ｐ19	同上	27×25	28		

中央ピットは住居址のほぼ中央に位置し長軸180cm，短軸110cm，深さ約28cmを測る不整形な楕円形を呈し，底は２段になっている。長軸方向はN－87°－Wである。拡張の可能性も考えられるが，埋土的には区別できない。中央ピットの底は炭化物が堆積し１層を形成しており炉として使用されたと考えられる。

検出されたピットは，19個で埋土は全て同一であった。主柱穴となり得る柱穴はＰ１，Ｐ５，


E
B
B
C
D
G
H
A
A
E
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
N
C
D
DL＝
28.80m
E
F
DL＝29.00m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅰ層　茶褐色粘質土
Ⅱ層　明茶褐色質土
Ⅲ層　明茶褐色質土(黄色ブロックが入る)
Ⅳ層　黄橙色質土　(炭化物を多く含む)
Ⅴ層　黄橙色質土　(地山)
G
H
DL＝28.30m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅰ層　茶灰褐色粘質土
Ⅱ層　茶灰褐色粘質土（炭化物含む）
0
4m

第８図　ＳＴ２実測図

Ｐ７，Ｐ９，Ｐ14，Ｐ15，Ｐ17であるが，その他にピットの直径が20㎝以下だが深さが20㎝以上のＰ２，Ｐ６，Ｐ８，Ｐ10，Ｐ11，Ｐ13，Ｐ16が検出されている。

壁溝は住居址の壁際を巡るが途中２条に別れ，一方は，壁際に巡る壁溝に並行する様に端部で約65㎝内側を巡る。埋土中からはほとんど遺物は出土していない。二条に別れる壁溝はこの住居址の建て替え，拡張の可能性を推定させるが，他の遺構と同様に埋土の差異は認られず，確定は出来ない。

住居址の埋土は３層に分層される。表土下のⅠ層は整地層と思われ，ここから掘り込んだピットが検出されている。遺物は弥生土器，近世陶磁器が出土しており近世に整地されたと思われる。Ⅱ・Ⅲ層は明茶褐色粘質土層で弥生土器が入り上のほうのⅠ層との境には，わずかに近世淘磁器が混じるが下Ⅲ層の部分は弥生時代の純粋な包含層である。Ⅳ・Ⅴ層は黄橙色粘質土層である。床面上には炭化物を含んだⅣ層が約４㎝の厚さで堆積している。住居址の埋土中からは，弥生土器片が出土しているが残存状況は不良で図示出来る土器は少なく，No.３・４の底部，高坏脚，凹線の入った壺の口縁のみであった。石製品ではNo.424の凸基式有茎石鏃が出土している。石包丁は，No.442の形態的には打製であるが研磨によって仕上げられたものが出土している。床面からは炭化物が多く検出され，炭化物が検出される範囲からはサヌカイトの剝片が多く出土し住居址内において石器が製作されていたと考えられる。中央ピットからは壺と思われる土器片，砥石が出土している。ピットからの出土はＰ14，Ｐ17から土器の細片が出土している。いずれも図示できなかった。並行する２条の壁溝より，住居址の建て替えの可能性が考えられる。北側の壁は拡張されておらず，掘り方の弧は内側をめぐる壁溝の弧と一致する。建て替え前の住居址は元5.2ｍの直径を持つものであったと考えられ，ほぼ時期を経ずに拡張されたと考えられる。

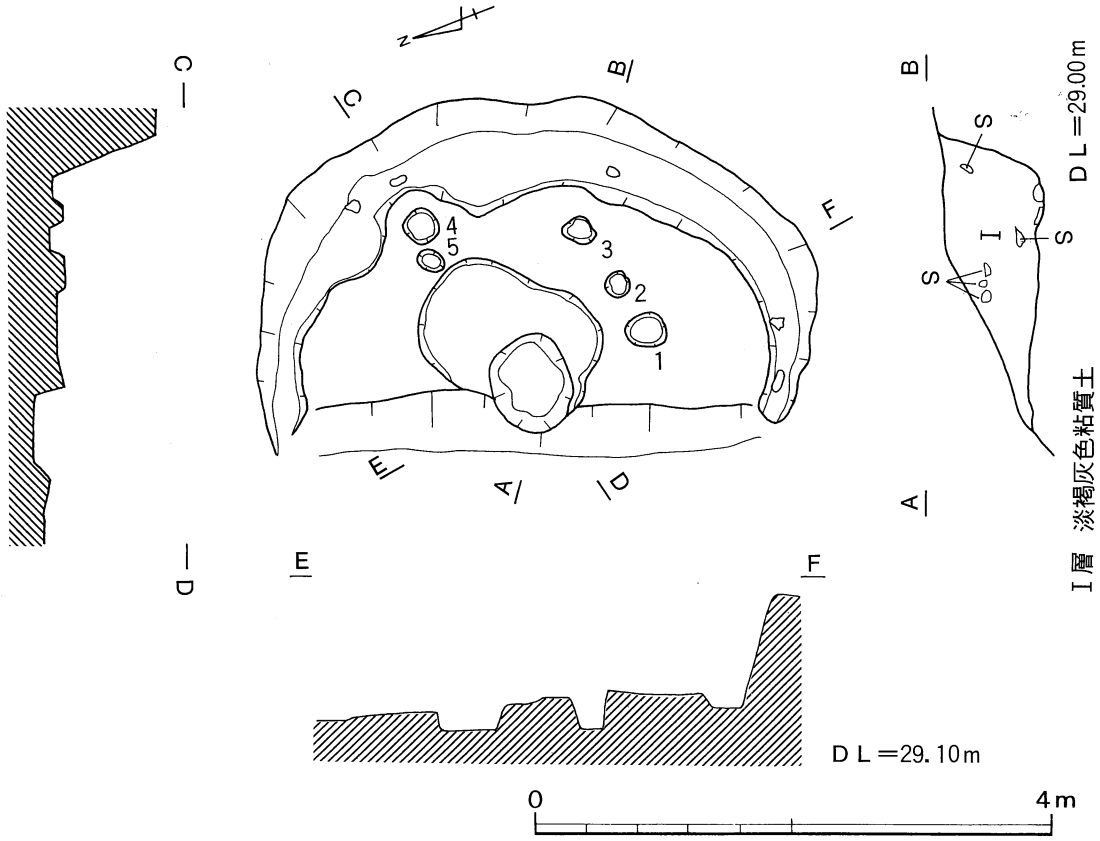
ＳＴ３

ＳＴ２と同じ段から検出されＳＫ３をはさんで北に並ぶ。標高は，ほぼ同じ28.9ｍを測り，岩盤を掘り込み作られる。プランは他の住居址と同じく半円形を呈して直径約4.5ｍである。残存の状況は斜面側半分が良好で，床面からの壁高は79㎝を測る。しかし，西半分，開口側は壁から約2.2ｍの所から後世の開墾によって，床面まで削平されている。床面からは中央ピット，ピット，壁溝が検出されている。

第４表　ＳＴ３ピット計測表

ピット番号	平面プラン	径(長×短㎝)	深さ(㎝)	遺　物	備　考
Ｐ１	不整形な楕円形	30×28	2		
Ｐ２	同上	20×17	29		
Ｐ３	同上	27×20	10		
Ｐ４	不整形な円形	28×25	9		
Ｐ５	不整形な楕円形	22×15	28		

中央ピットは住居址のほぼ中央部に位置する。ほぼ円形にちかい楕円形で直径0.8ｍ，深さは約21㎝であった。長軸方向はＮ－73°－Ｗである。底には炭化物が堆積し炉として使用されたと考えられる。この中央ピットを囲む形で楕円形状の約５㎝の浅い掘り込みが確認されている。この掘り込みの埋土は炭化物が混入しており，性格は不明だが何らかの機能を持ったもの

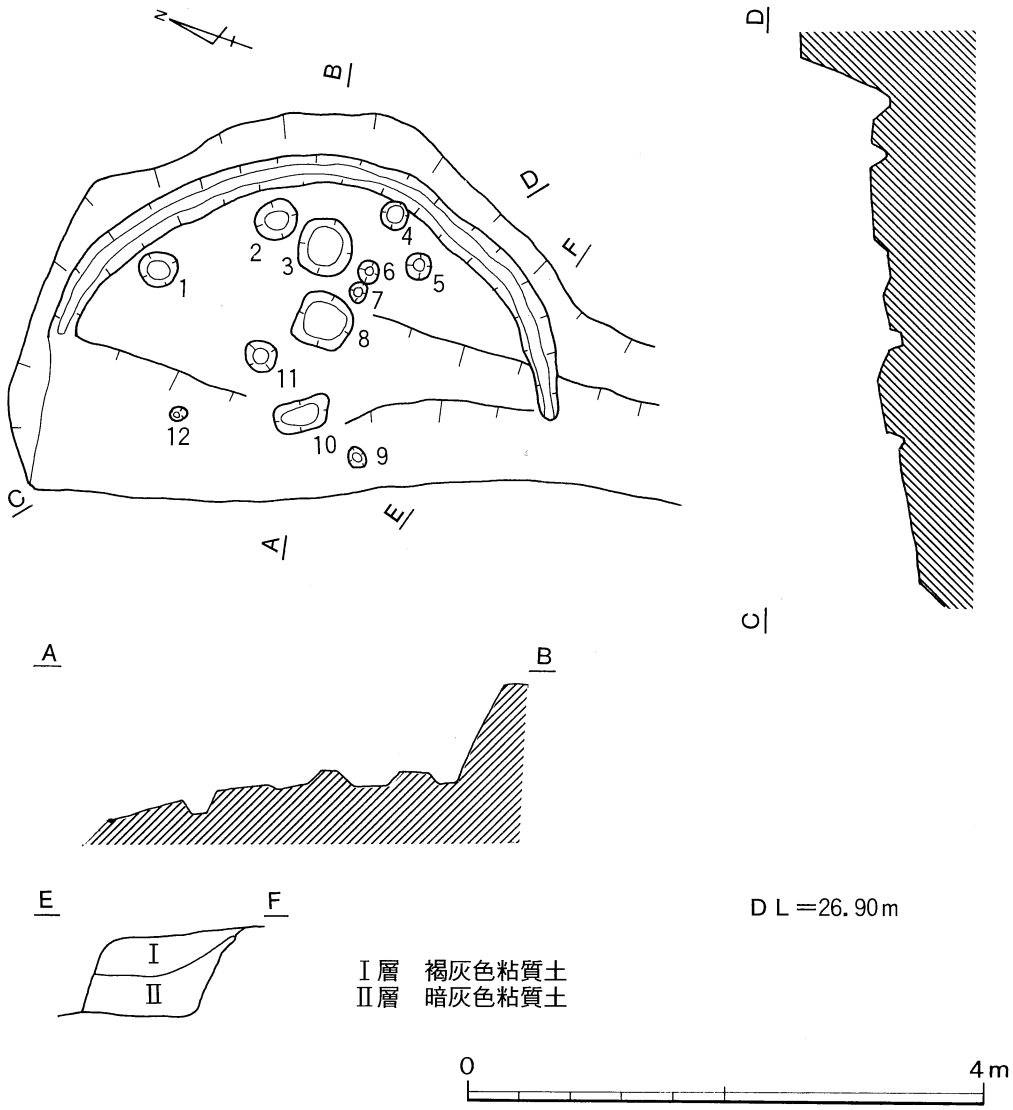


第９図　ＳＴ３実測図

とは考えにくい。ピットは５個検出されたが西半分の床面が削平されているため，西側部分では検出できなかった。主柱穴は確定できないがＰ２～Ｐ４の可能性が考えられる。

壁溝は，壁際を巡り，東側奥の幅は約35cmである。Ｐ４を避ける様に幅を狭くするが，Ｐ４を越えると半円状に張り出す。深さ12cmであった。その他の遺構と同様に西側半分は不明である。

住居址の埋土は淡褐灰色粘質土に黄色の砂岩のブロックが入る単一層色であるが，やや下半分の色調が濃い。土質は同一である。埋土中から遺物の出土は少ない。床面からの出土としてNo.７の長頸壺がある。口縁外面と口唇部には凹線文が施されている。その他図示できなかったが凹線文の口縁の壺，甕の底部等が出土している。その他検出されたピット，壁溝の埋土は単一で褐灰色粘質土であった。ピットからの遺物の出土はないが，壁溝からはミニチュアの壺（No.10）がほぼ完形で出土している。また，ほぼ同一地点から口唇下に刻み目をもつ貼り付け口縁の壺の口縁部も出土している。その他，凝灰岩製で両面から抉った砥石の可能性のある有孔石製品（No.504）が出土している。中央ピットからは炭化物の層から砂岩製のミニチュアの器台，粘土製のミニチュア器台が各１点出土している。



第10図　ＳＴ４実測図

ＳＴ４

調査Ｄ区端部から検出された住居址である。Ｄ区端部は後世の開墾によって，山側の斜面の土が盛り土されており調査前の標高は，28.4ｍで，下段とは調査前の比高差が約2.5ｍあった。この客土を除去した結果，住居址が検出された標高は，26.8ｍである。他の住居址が基底層を掘り込んでいるのと違い，黒色土層から掘り込まれてい

第５表　ＳＴ４ピット計測表

ピット番号	平面プラン	径(長×短ｍ)	深さ(cm)	遺物	備考
Ｐ１	円形	30×28	14		
Ｐ２	楕円形	30×35	8		
Ｐ３	同上	52×42	10		
Ｐ４	不整形な楕円形	25×20	4		
Ｐ５	不整形な円形	22×20	12		
Ｐ６	円形	18×18	4		
Ｐ７	同上	18×18			
Ｐ８	方形	44×45	4		中央ピットに比定
Ｐ９	不整形な円形	15×15	18		近世以降と考えられる
Ｐ10	不整形な長方形	44×25	15		
Ｐ11	楕円形	27×24	10		
Ｐ12	円形	12×12	10		

る。壁高は68cmであった。平面プランは西側半分が削平されたため，半円形状で検出され直径は4.25mであった。床面の標高26.0mで床面からは中央ピットと考えられる方形のピット，ピット，壁溝が検出されているが削平のため，西側では遺構は検出できなかった。中央ピットの主軸方向はN－89°－Wである。

検出できたピットは12個である。埋土は，暗灰色粘質土である。黄橙色のブロックが入るものと入らないものとに別れるが，基本的には同一のものと思われる。P1，P2が主柱穴と思われるが，構造形式は不明である。P3は円形のピットで42cm×52cm，深さ10cmと他のピットと比べると大きく炉及び貯蔵穴の可能性も考えられる。

P8が中央ピットになると考えられ，44cm×45cmの方形で深さは4cmであった。埋土中からは炭化物は検出されず，炉として使用された可能性は否定できないが用途は不明である。

住居址の埋土はⅠ層褐灰色粘質土とⅡ層黒灰色粘質土の2層に分層できる。Ⅰ層からはサヌカイト片がⅡ層に比べて多く出土している。土器は，凹線文を持つNo.13の広口壺，貼り付け口縁の壺，口縁を肥厚し沈線状の凹線文が施されたNo.14の甕，復元口径が33cmと25cmになる口縁外面に装飾が施された大型高坏（No.19・20）の口縁が2個体出土している。ミニチュアも2点が出土している。石製品は管玉が2点壁溝中より出土するのみである。その他住居址の埋土出土で，注目される遺物としてガラス製の勾玉が挙げられる。壁溝から出土した2点の碧玉製管玉がこれに伴うと考えられる。

ST5

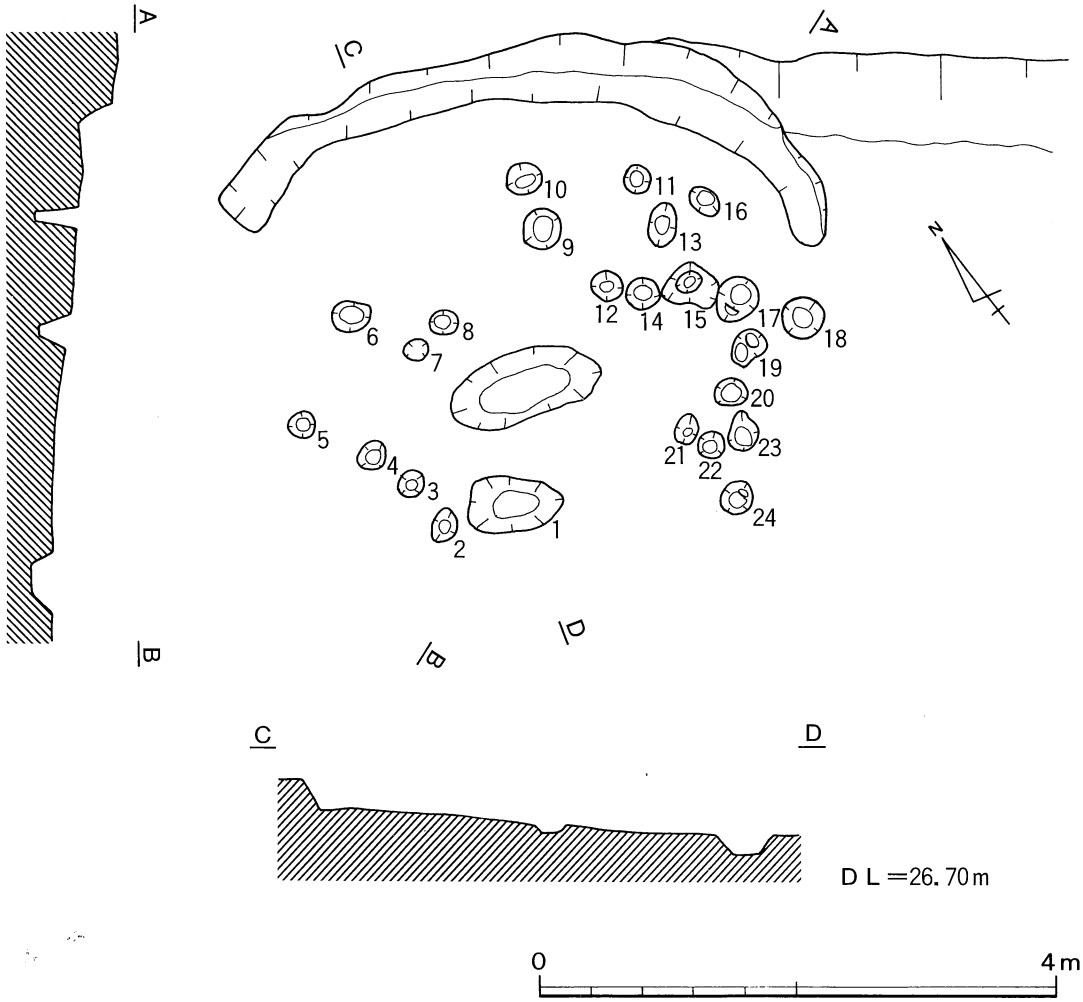
ST5は，調査G区の北側，調査区域のほぼ北端から検出され，他の住居址からはやや離れる。段畑によって削平されており，壁，壁溝は一部しか残存していない。復元した住居址の大きさは，直径約5.6mで，標高26.4mの平坦な段の中に収まっており，床面からは中央ピット，ピットを検出することが出来た。岩盤を掘り込み作られ，段畑造成による削平のため残存する壁高は24cmであった。中央ピットは住居址の中央に位置し長軸121cm，短軸53cmの楕円形を呈する。長軸方向はN－69°－Wで断面U字状である。埋土中からは炭化物は検出していないが，図示できない細片の土器とサヌカイト片が出土している。ピットは24個検出され埋土は全て同一であった。主柱穴と考えら

第6表　ST5ピット計測表

ピット番号	平面プラン	径(長×短cm)	深さ(cm)	遺　物	備　考
P 1	不整形な楕円形	74×43	14		
P 2	同上	21	21		
P 3	円形	22	9		
P 4	同上	22×23	7	弥生土器	
P 5	同上	20×20	11		
P 6	同上	30×28	20	弥生土器	
P 7	同上	18×18	8	同上	
P 8	同上	23×20	7		
P 9	同上	30×30	21		
P10	同上	30×27	30		
P11	同上	25×22	32		
P12	同上	25×23	4	弥生土器	
P13	楕円形	36×24			
P14	円形	27×27	26		
P15	不整形な楕円形	45×32	21		掘り方2段
P16	楕円形	28×20	34		
P17	楕円形	40×33	27	弥生土器	底面が2段
P18	円形	32×32	18		
P19	不整形な楕円形	30×25	9，39		底面が2段
P20	円形	25×22	10		
P21	楕円形	23×20	7		
P22	円形	21×21	18		
P23	不整形な楕円形	32×25	19		
P24	楕円形	27×27	7		

れるピットは，Ｐ１，Ｐ５，Ｐ６，Ｐ９，Ｐ14，Ｐ20，Ｐ24であり，５本柱の構造が推定される。Ｐ14は長軸74㎝短軸43㎝，深さは約14㎝を測る楕円形で他のピットと比べて大きく長軸方向もほぼ中央ピットと一致する。埋土中からは炭化物，焼土は検出されず，貯蔵穴の可能性も考えられるが，主柱穴となりうるピットが多いことから建て替えが行われた可能性もありその時期の炉跡とも考えられる。壁溝はほとんどが削平され，上段側に約⅓が残っており幅は広いところで約35㎝，深さ1.2㎝が残るのみであった。

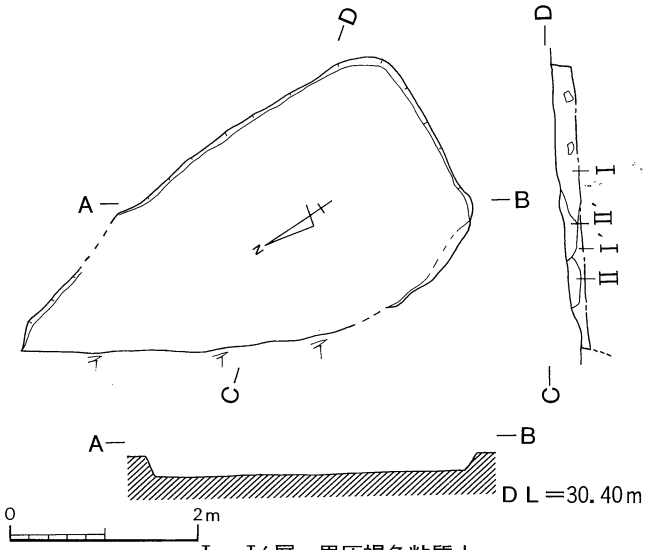
遺構の埋土は全て同一で黒褐色粘質土であった。　遺物は，住居址の埋土が削平されているためほとんどなく，わずかに中央ピット，ピット壁溝から土器，サヌカイト剝片が出土したにすぎない。この住居址から約５ｍ離れた所から，緑色変岩の局部磨製石斧が出土している。



第11図　ＳＴ５実測図

ＳＫ１

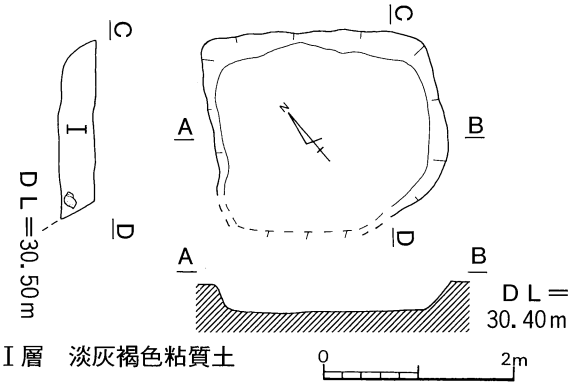
ＳＫ１は，調査Ａ区標高約30.7ｍの端部の表土直下から検出された。検出された平面プランは長軸方向がＮ－３°－Ｗの長方形であった。この土坑は後世の段畑造成，蜜柑畑に伴う溝によって一部切られており，検出された長軸は約5.0ｍ，短軸2.5ｍ，深さ約23㎝を測る。底面は，標高約30.0ｍで平坦な面をなす。埋土は黒灰褐色粘質土であった。埋土中からは，弥生土器片が出土しているが，図示できるものは少ない。No.30はしっかりした平底の底部である。石製品では御荷鉾緑色岩の磨製石斧No.451が出土している。調査Ａ区では，ＳＫ１の他には弥生時代の遺構と考えられるものは検出されていない。ＳＫ１は弥生時代中期の土坑と考えられる。



Ⅰ・Ⅰ′層　黒灰褐色粘質土
Ⅱ・Ⅱ′層　明褐色粘質土(近世以降溝埋土)
第12図　ＳＫ１実測図

ＳＫ２

標高約30.4ｍの調査Ｂ区から検出された。平面プラン方形を呈し，主軸方向はＮ－52°－Ｗで，南側が開墾によって削平されている。規模は2.5ｍ×2.2ｍで深さ約43㎝である。底面は標高30ｍで平坦な面をなす。岩盤を掘り込んでおり埋土は淡灰褐色粘質土の単一層であった。

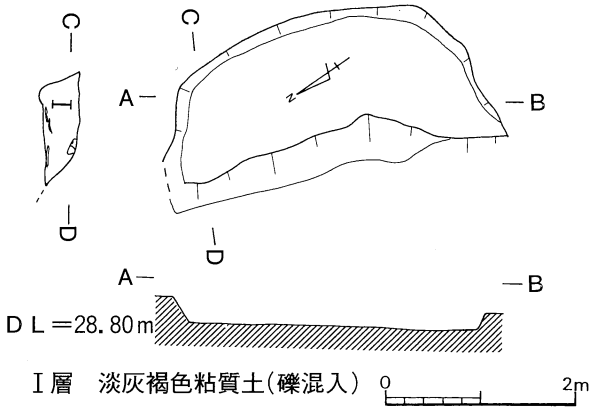


Ⅰ層　淡灰褐色粘質土
第13図　ＳＫ２実測図

埋土中からは，鉄鏃をはじめ多量の遺物が出土した。出土した土器は，大部分が弥生土器中期の土器だが後期の土器，土師器と考えられるNo.51も出土している。弥生中期の土器では壺で，口縁端部に凹線文が施された筒状の頸部を持つ広口壺，貼り付け口縁の口縁部，平底の底部，No.42の脚付き壺の底部等が出土している。甕では，くの字に強く屈曲した口縁で端部は拡張され凹線文が施されたものが出土している。また，台形土器や円盤充填法による高坏が出土し，ミニュアも３点出土しておりいずれも壺型である。No.421・422の鉄鏃２点が出土していることが注目される。サヌカイト剝片も出土している。また，東隅では，床面から炭化物が検出される。土坑の時期は不明であるが，弥生時代中期の可能性が考えられる。

ＳＫ３

ＳＫ３は，調査Ｃ区から検出された。ＳＴ２，ＳＴ３に，はさまれた標高29.0ｍから検出され，ほぼ，同じ標高で並ぶ。平面プランは不整形な角丸方形で後世の削平により，西側が切られた状態で検出された。長軸方向はＮ－21°－Ｅである。規模は2.8ｍ×1.7ｍで，深さは約38㎝である。



第14図　ＳＫ３実測図

平面プランが検出された時点では住居址と考えられたが，完掘してみると，住居址と比べると壁高はかなり浅く，ピット，壁溝は検出されず土坑と確認された。岩盤を掘り込みつくられ，底面は平坦な面をなす。埋土はＳＴ３とほぼ同一の淡灰褐色粘質土で礫が混入する。埋土中からは，土器が多く出土している。

出土土器は床面から出土しており弥生中期の土器に限定される。出土した土器は，甕，壺等で，壺は筒型の頚部を持ち口縁端部が拡張され凹線文が施されるものと貼付口縁のものに分けられる。No.52は上胴部のみの出土であるが上胴部に位置した最大径は約40㎝を計り，筒状の頚部には断面三角形の突帯が二条巡らされて波状文が施される。口縁は大きく開き端部は上下に拡張され四条の凹線文が施されている。装飾が著しい壺である。石製品では，方形で中央部には双孔が穿たれた石包丁No.443が出土している。時期は出土遺物から弥生時代中期後半から後期が考えられる。

ＳＤ１～ＳＤ５

ＳＤ１～ＳＤ５は調査Ｃ区から検出された。等高線に添うように密集した５条の溝状遺構である。ＳＤ４は２条に分かれ下段南方向に流れる。

ＳＤ１の規模は幅約40㎝，深さは13㎝で約1.5ｍしか残存していない。断面は台形状で北から南に向かって延びＳＤ４と合流すると考えられる。

ＳＤ２は幅約55㎝，深さ約11㎝で2.2ｍが残存しＳＤ１と同じく断面は台形状を呈し南に向かって延びＳＤ４に合流する。

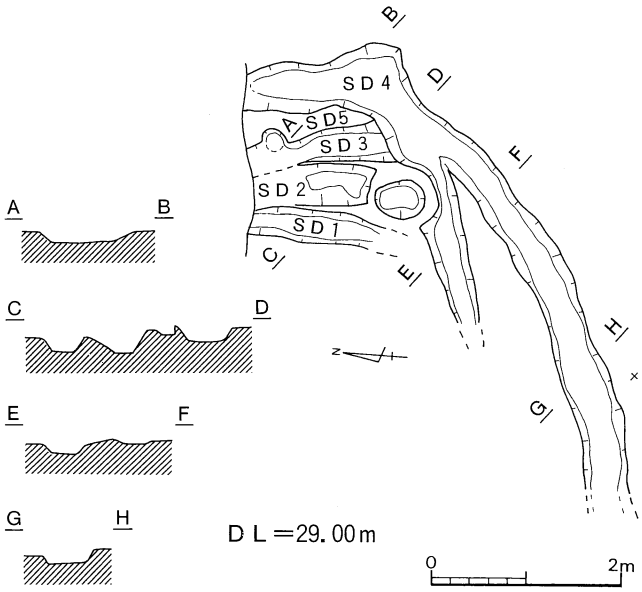
ＳＤ３もＳＤ１，ＳＤ２とほぼ同じ規模，方向で，幅35㎝，深さ約９㎝を測り，断面は台形を呈しＳＤ４と合流すると考えられる。

ＳＤ４は，北から南に向かって約1.7ｍ延びたところで２条に分かれ，どちらも西方向に向

かって平行して延びＳＤ４ＡにはＳＤ１～ＳＤ３が合流すると考えられる。規模はＳＤ４Ａが幅約35㎝深さ９㎝である。ＳＤ４Ｂは幅約55㎝，深さ約15㎝であり，断面形は台形を呈する。

ＳＤ５はわずかに1.4ｍ残存しＳＤ１～４と平行に並ぶ深さは約５㎝である。

埋土は，ＳＤ１，ＳＤ２が黒色粘質土に褐色粘質土が混ざった土である。ＳＤ３は黒色粘質土，ＳＤ４，５は黒灰色粘質土である。埋土中からは弥生土器片が出土している。ＳＤ１からはNo.59・60が出土しており２点とも筒状の頚部から大きくひらいた口縁部を持ち口縁端部下側には刻目が施された壺の口縁部である。出土土器の時期は弥生中期と考えられる。溝状遺構の時期も同様に弥生時代中期から後期にかけてと考えられる。



第15図　ＳＤ１～５実測図

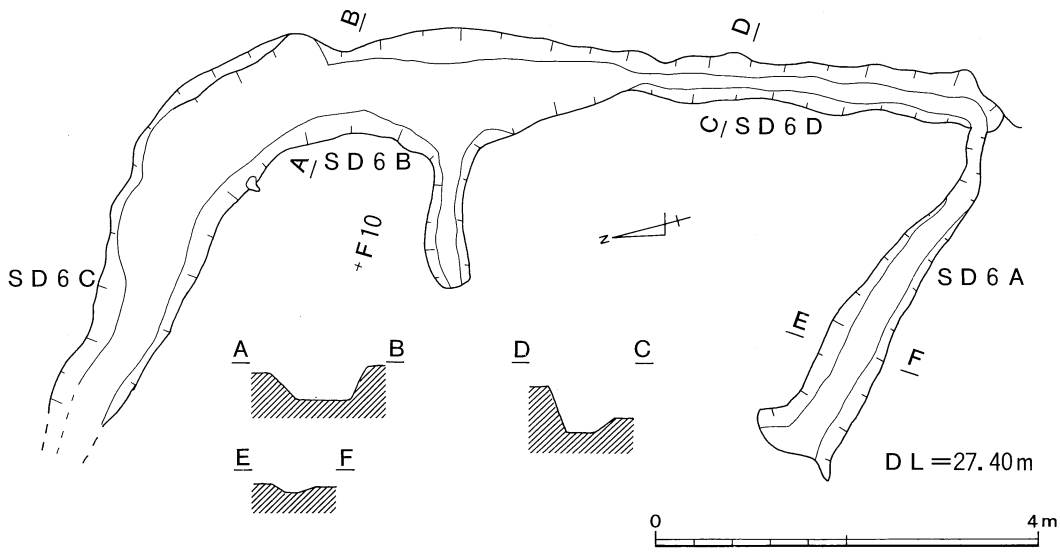
ＳＤ６

ＳＤ６が検出された位置は，調査Ｄ区で，ＳＫ３，ＳＴ２，ＳＴ３の下段にあたる。標高は27.4ｍを測り検出時の平面プランはコの字状で西方向に向かって開口する。等高線に添って斜面に掘り込まれ南東に延びるＳＤ６Ｂ，Ｄとその両端から西方向下段に延びる北側のＳＤ６Ｃ，南側のＳＤ６Ａ部分に分かれ，中央部よりやや北東に短いもう１条の溝状遺構が検出されている。ＳＤ６Ｂ，Ｄの規模は長さ約7.7ｍで幅は約40～90㎝でＳＤ６Ｄ側が狭くなっている。深さはＳＤ６Ｄは約16㎝を測りＳＤ６Ｂ側は約10㎝である。ＳＤ６Ｄは斜面下側の立ち上がりがしっかりしており断面形はＵ字型を呈する。ＳＤ６Ｂ側では立ち上がりがはっきりしなく断面形は台形状である。ＳＤ６Ｃは，幅約60～120㎝深さ約20㎝を測り約４ｍが残存している。ＳＤ６ＡはＳＤ６Ｄの屈曲部分でわずかに途切れるが約４ｍが残存しており幅約35～105㎝で深さは約10㎝であった。

埋土は，ＳＤ６Ｃを除いてほぼ同一の茶灰褐色粘質土で底面近くがやや濃い色調になっている。ＳＤ６Ｃは２層に分層でき上層は褐灰色粘質土で下層は黒灰褐色粘質土である。遺物は埋土中から多量に出土しており図示できるものも多いが完形品の出土はなかった。土器は壺，甕，高坏，ミニチュアが出土している。壺は，大部分のものが頚部が筒状で口縁部が大きく開くもので貼付口縁の器形が多く出土している。口縁端部に凹線文が施されたものでは，端部が拡張

されたものとそうでないものに分けられ，拡張されたものはNo.62・63でNo.63は頸部に断面三角形の突帯が１条巡る。またNo.67は口縁端部は拡張されず下部に刻目が施される。No.70は直線的に立ち上がりわずかに外反する装飾のない口縁部を持つ小型の壺である。甕は，くの字状に強く屈曲し短く外側に開く口縁部を持ち端部は凹線文を施された器形が出土する。凹線文を有する器形はさらに，端部が拡張されたものとそうでないものに細分できる。その他では貼付口縁で甕型土器と考えられるNo.72～75が出土している。壺，甕ともに平底の底部である。高坏は円盤充塡法でハの字状に開く脚をもち端部は拡張される。拡張された端部に凹線文は施されてないものも出土している。各部外面は直線文，鋸歯文，矢羽状文が鋭い原体で施されている。ミニチュアでは壺型のものが出土している。また土錘も１点出土している。石製品では，凸基式有茎石鏃１点，凹基式無茎石鏃１点が出土し合計２点の石鏃が出土している。その他では敲石，河原石が出土している。

コの字状に溝状遺構が巡り多くの遺物が出土していることから，溝状遺構を伴い斜面をテラス状に整形した段状遺構の可能性も考えられるがテラス部と考えられる部分が削平されているためその性格は不明である。時期は弥生時代中期末から後期と考えられる。



第16図　ＳＤ６実測図

ＳＤ７～10

調査Ｄ区から検出された。調査Ｃ区のＳＸ１の下段にあたり標高は約27.0ｍから26.0ｍにかけての緩やかな斜面から４条の溝状遺構が密集する形で検出された。これらの溝状遺構はほぼ等高線に添い北から南に延びる部分と，これから直角に屈曲し西方向に延びる部分に分けられる。

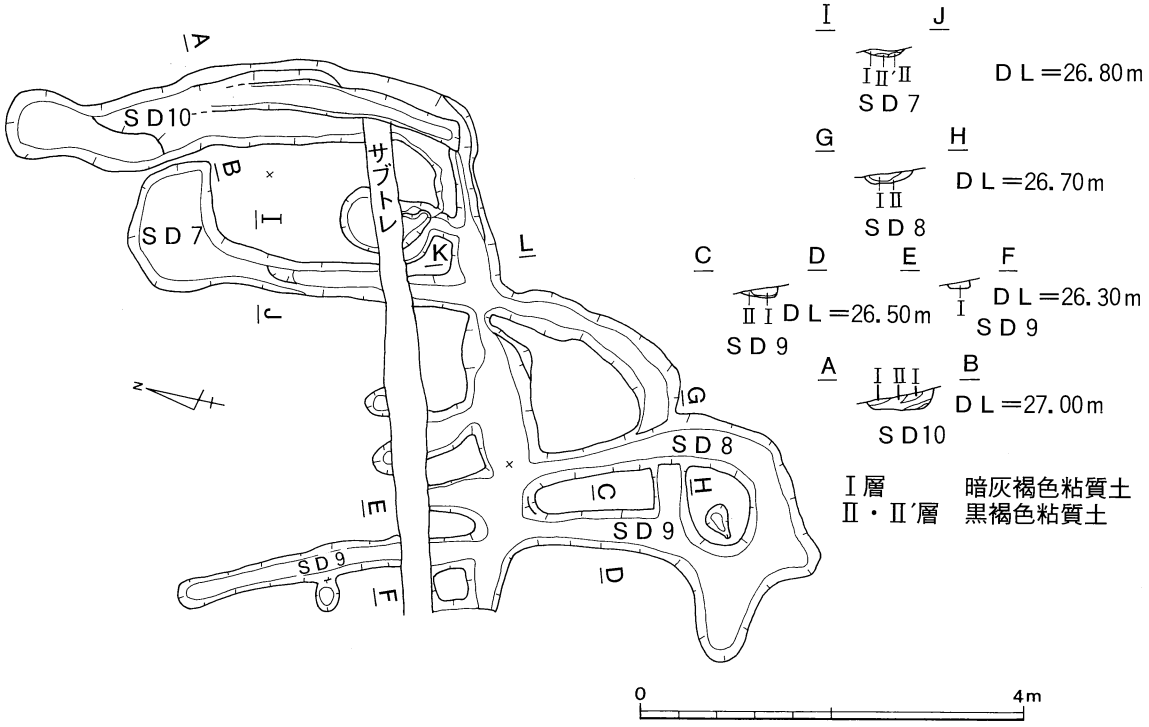
ＳＤ７は南方向に５ｍ延び屈曲し西方向に流れ４ｍが残存している。幅は約35～55㎝で深さは約10㎝で断面形はＵ字状である。

ＳＤ８は，約3.5ｍ南方向に延び屈曲し西方向に向きをかえＳＤ７と合流する。幅は約30～50㎝深さは約20㎝で断面形はＵ字状である。

ＳＤ９は南方向に約5.2ｍ残存し，ＳＤ７と合流する幅約30～40㎝で深さ約2～12㎝の規模である。断面形はＵ字状である。

ＳＤ10は検出された溝状遺構の中心的な溝と考えられ，ＳＤ７～ＳＤ９はこの溝状遺構を横切り合流する。規模は南方向に約4.5ｍ延び屈曲して西方向に向きをかえ約5.2ｍ残存する。幅は70～85㎝，深さは一部浅い部分と深い部分があるが約25㎝であり断面は台形状を呈する。

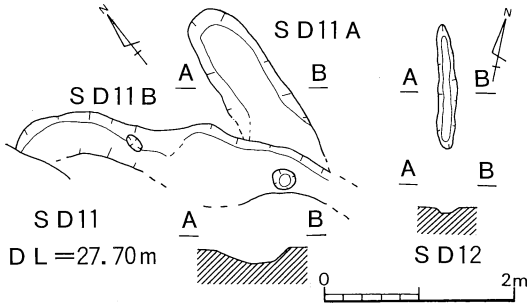
埋土は２層に分層でき上層が暗灰褐色粘質土で下層は黒褐色粘質土である。埋土中からは遺物の出土は少ない。溝状遺構が検出された調査Ｄ区端部の遺物の出土は少なく包含層出土の遺物がその大部分を占める。この溝状遺構の時期，性格とも不明であるがピット群が周りで検出されておりそれに伴う可能性も考えられる。



第17図　ＳＤ７～10実測図

ＳＤ11

ＳＤ11は，調査Ｄ区端部のＳＴ４の北側から検出された。ＳＤ11は等高線にほぼ添うＳＤ11Ａと斜面に添うＳＤ11Ｂに分けられる。この溝状遺構の規模はＳＤ11Ａが幅約50～90㎝で約3.3ｍが残存している。深さは，斜面下側の立ち上がりがはっきりしなく，斜面上側からの底面までの深さは約８～12㎝を測り断面形は舟底型である。ＳＤ11Ｂは南方向にのび約1.7ｍが残存し幅約65㎝で深さは約６～12㎝で断面形はレンズ状を呈する。埋土は同じで暗灰色粘質土である。埋土中からの遺物の出土は少ないが，甕の底部でしっかりした平底で底部近くの外面にはタタキ目が残る土器片が出土する。この溝状遺構の性格は不明で自然のものとも考えられる。時期は弥生時代中期末から後期と考えれる。



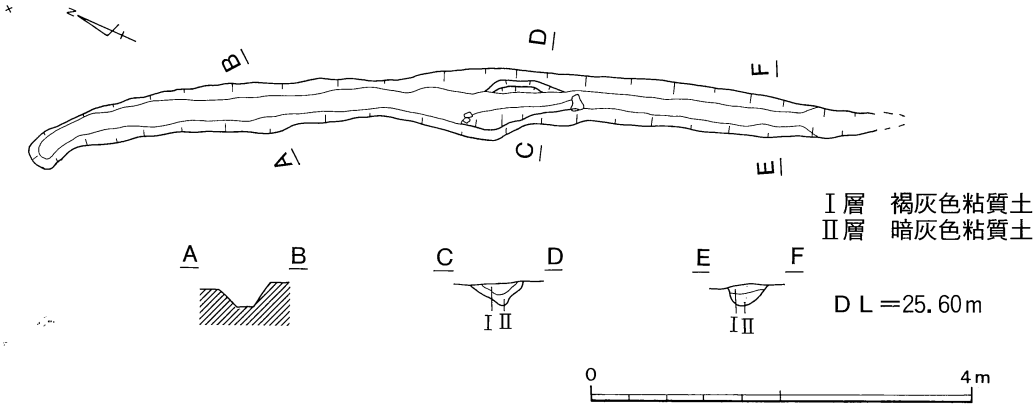
第18図　ＳＤ11，12実測図

ＳＤ12

ＳＤ12はＳＤ11のやや東から検出され，北方向から南方向に約1.3ｍが残存し幅約15㎝，深さ約４㎝の規模の小さな溝状遺構で埋土はＳＤ11と同じあった。埋土中から遺物は出土しなかった。

ＳＤ13

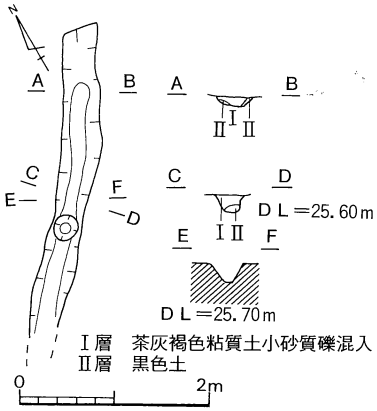
ＳＤ13は，ＳＤ14に隣接し等高線に添ったＮ－24°－Ｗ方向に延びる。約９ｍが残存し，幅は約40～80㎝を測り深さは18～22㎝を測る。断面形は台形を呈する。埋土は２層に分層でき上層は褐灰色粘質土で下層は黒灰色粘質土で遺物はこの層に入っている。遺物の出土は少ない。１点形態的に縄文時代の石斧と思われるものが出土しているのみだが，土器の口縁部では貼付口縁，凹線文が口縁端部に施されたもの，端部が拡張されず横ナデ調整されたものが出土している。



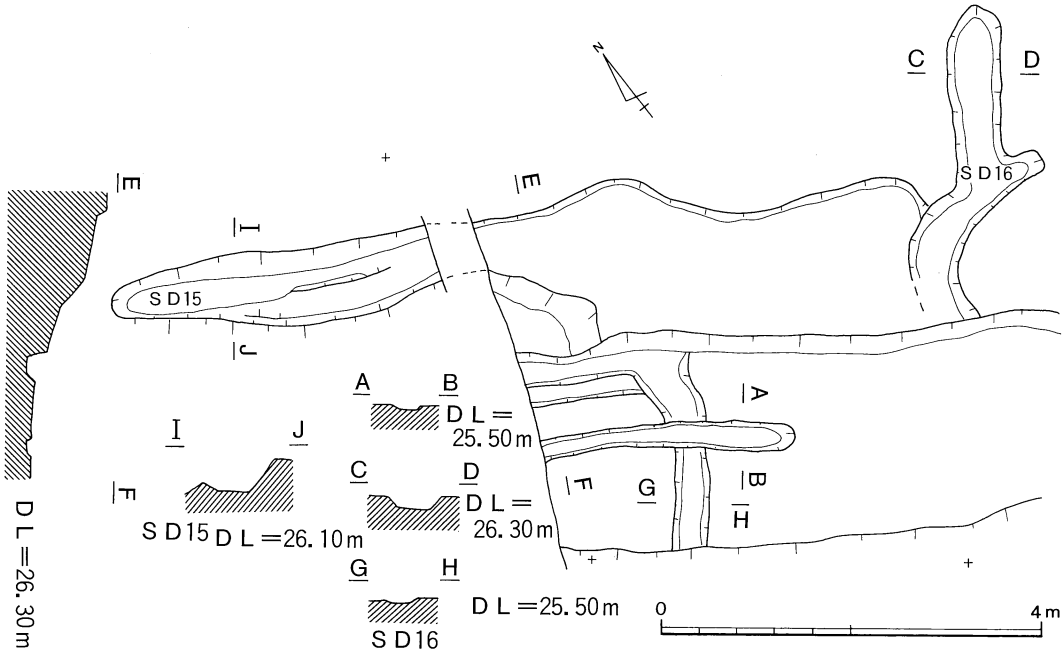
第19図　ＳＤ13実測図

ＳＤ14

ＳＤ14は調査Ｇ区南から検出された等高線に直行してＮ－47°－Ｅ方向に約2.2ｍが残存し幅約40㎝，深さは約16㎝であった。埋土は二層に分層でき上層が茶灰褐色粘質土に黄橙色砂礫が混入する。下層は底面近くにわずかに堆積する黒色土であった。遺物は少量しか出土していなく，完形品の出土遺物はない。端部が拡張された口縁部，平底の底部が出土している時期は弥生中期末から後期と考えられる。



第20図　ＳＤ14実測図



第21図　ＳＤ15，16実測図

ＳＤ15

ＳＤ15は調査Ｄ区北側，段状に削平された端部から検出され等高線に添っておおよそ東西に延びる部分と斜面に添って南北に延びる部分に分かれると思われ，規模は，東西に延びる部分が約3.5ｍ残存して途中試掘トレンチによって切られるが，その後１ｍ続き屈曲し南に方向をかえ約2.2ｍが残存する。深さは等高線に添って斜面に掘られた部分が比較的残存状況が良好で約25㎝を測り断面形は台形状を呈し，幅は約１ｍである。斜面に添った部分は断面形は台形で幅約35㎝，深さ約９㎝である。埋土は褐灰色粘質土と暗灰褐色に分かれるが遺物はどちらか

らも少量しか出土していなく図示できたのは，No.103のみである。時期的には他の遺構と同様の時期である弥生中期末から後期が考えられ，性格的にはＳＤ６と同様の性格を持つと考えられ，斜面をテラス状に整形した遺構の可能性が考えられる。

ＳＤ16

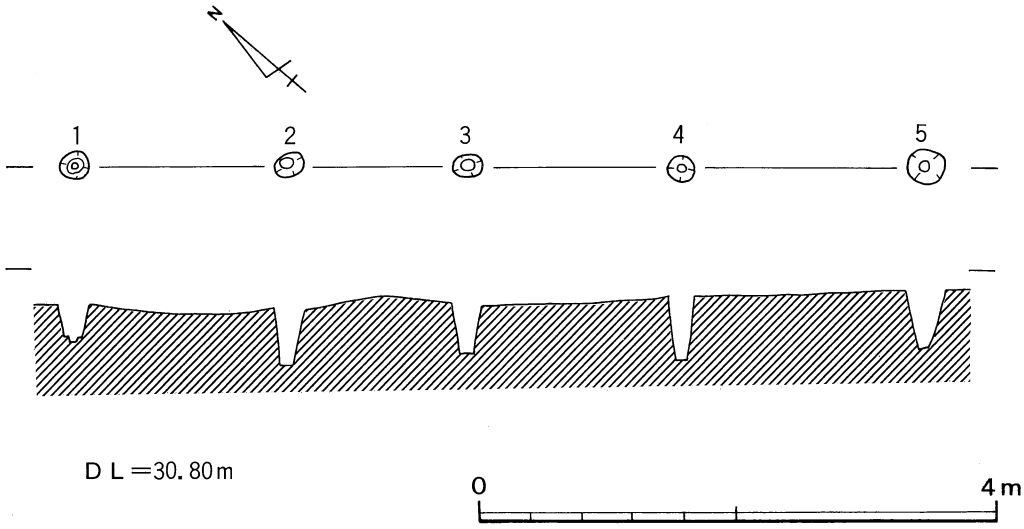
ＳＤ16はＳＤ15に隣接する溝状遺構で，ほぼ東西に約２ｍが残存し，幅約60cm，深さ約13cmの溝状遺構であり段畑によって南側が削平されている。断面形は浅い台形状を呈し埋土は黒灰褐色粘質土で，埋土中からは，当遺跡では唯一の古代末11Ｃ後半と考えられる土師器椀，No.106が出土している。時期は古代以降と考えられ，性格は不明だが自然の溝と考えられる。

ＳＡ１

ＳＡ１は調査Ｂ区から検出された。５個のピットが約1.6ｍ間隔のほぼ等間隔でＮ－41°－Ｗ方向に直列する。埋土は淡褐灰色粘質土でＰ１からのみ弥生土器が出土している。出土した遺物は少量で，細片であるため図示できなかった。柵列と考えられるが時期は遺物が少なく明らかでない。

第７表　ＳＡ１ピット計測表

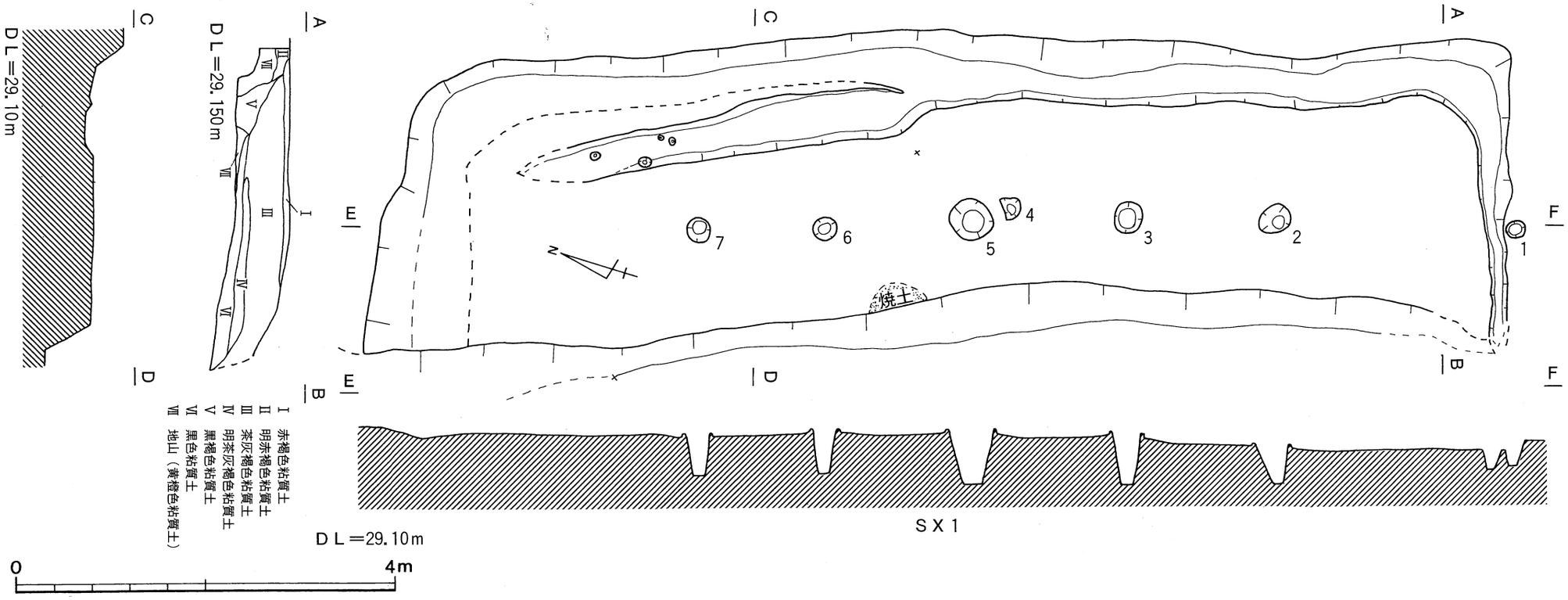
ピット番号	平面プラン	径(長×短cm)	深さ(cm)	遺　物	備　考
Ｐ１	不整形な円形	23×21	28	弥生土器	
Ｐ２	楕円形	25×20	44		
Ｐ３	同上	23×17	42		
Ｐ４	円形	22×22	49		
Ｐ５	楕円形	30×25	46		

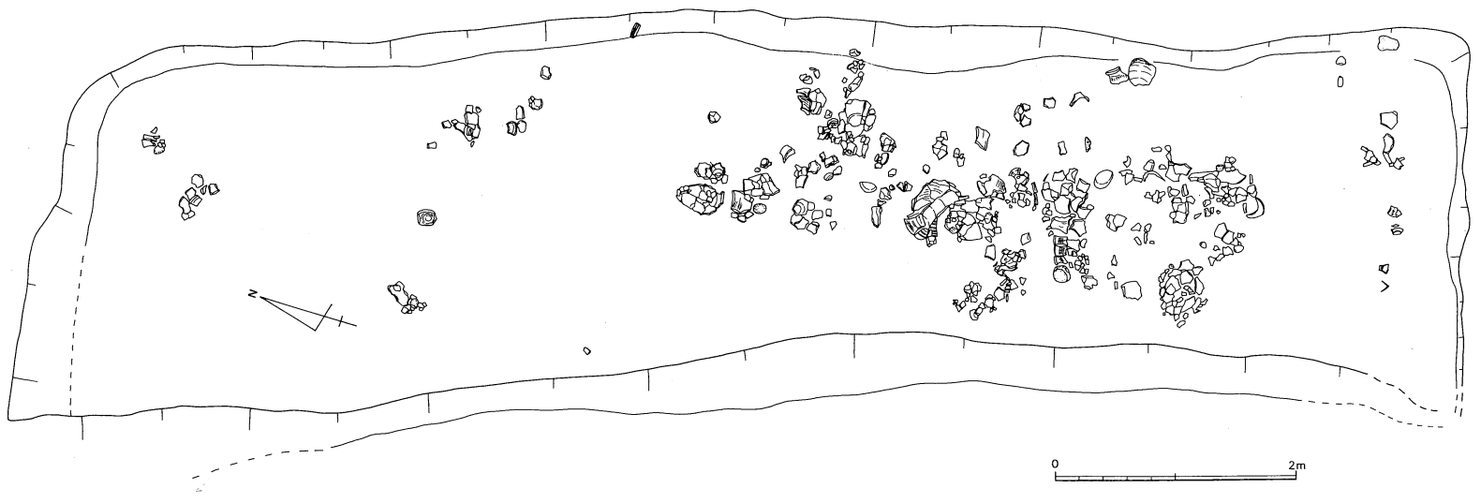


第22図　ＳＡ１実測図

ＳＸ１

調査Ｃ区から検出されたが，Ｃ区で検出された他の遺構から少し離れて検出された。Ｃ区は現況蜜柑畑で，比較的広い面積約570㎡の平場を持つ。検出された平面プランは長方形で長軸12ｍ，短軸2.9ｍを測り地山を長方形の段状に整形しており長軸方向はＮ－15°－Ｅである。残





第23図　ＳＸ１実測図及び遺物出土状況実測図

第８表　ＳＸピット計測表

ピット番号	平面プラン	径(長×短m)	深さ(cm)	遺　物	備　考
Ｐ　1	円形	20×20	8		
Ｐ　2	楕円形	37×28	39		
Ｐ　3	円形	32×30	55		
Ｐ　4	同上	25×25 (復元)			
Ｐ　5	同上	50×47	68	弥生土器, 石鏃	
Ｐ　6	同上	26×27	41		
Ｐ　7	同上	27×28	47	弥生土器	

存状況は比較的良好で壁高は約30㎝であるが南西側は削平されていた。床面は平坦で，２条に分かれる壁溝，直線的に並んだピット，焼土が検出されている。

床面は地山と考えられるが，地山の上には土器片が少量入る明茶灰褐色粘質土の土層がみられ，この層からピット，壁溝が掘り込まれている。この層が床面の可能性が高い。

壁溝は，住居址の壁際を巡るが，北側では２条に分かれ，一部壁溝は２条が平行して流れ両方とも途中で切れる。幅は，50～70㎝で深さは，深い部分で約16㎝である。埋土は両方ともに黒褐色粘質土で埋土的には差が認められない。埋土中からは土器片が出土しているが量的には出土量は少ない。

ピットは床面と考えられる地山の面から約10～15㎝浮いた状態で検出された。Ｐ１は直径深さともに他のピットに比べて小さく壁溝の外側から検出された。残りのピットは，Ｐ４を除き掘り方の直径約25～35㎝で深さは，約40～60㎝を測る。ほぼ1.6ｍの等間隔で直線的に並ぶ。Ｐ５は直列するピットの中心に位置し直径は約50㎝で，深さは68㎝を測り中心柱と考えられＰ４は添え柱と考えられる。埋土は茶褐色粘質土で，やや黄橙色の礫が混入する。埋土中からは，住居址の埋土出土の土器とほぼ同時期と思われる土器片が出土している。またＰ５からはサヌカイト製の凹基式無茎石鏃が出土している。

焼土は，端部から検出された。半円形状で半分切られた形で検出された。検出面の標高は28.6ｍで範囲は45㎝×40㎝である。焼土に伴う遺物は検出されなかった。

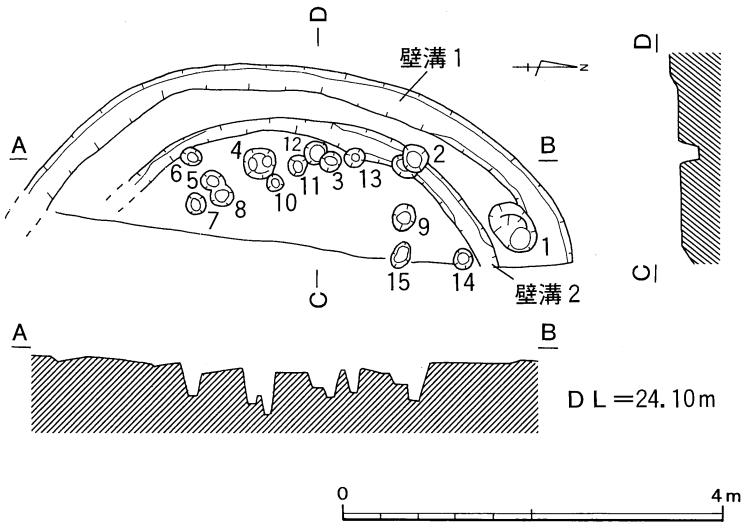
後世行なわれた開墾によって削平を受けている。また表土層下は客土がみられ，かなり人手が入っており表土層からは縄文時代と考えられる石鏃，須恵器片等が出土している。ＳＸ１の埋土は２層に分層できる。上層は明茶灰褐色粘質土でこの層で多量の遺物が出土する。投棄されたような状態で出土し，出土範囲は，やや偏りがみられ南半分に多い。出土土器の器種構成は壺，甕，高坏，鉢である。壺は，筒状の頚部から大きく開く口縁を持ち端部は拡張され凹線文が施されたもの，貼付口縁で刻目が施されたものと，そうでないものに分けられる。直口壺，長頚壺，把手付の水差し型土器も出土している。甕ではくの字状の強い屈曲を持つ口縁部で端部が拡張され凹線文が施されているものと，くの字状に屈曲した口縁部を持つが端部は拡張されず横ナデによって仕上げられたものが出土する。底部は壺，甕ともにしっかりした平底である。高坏では，円盤充塡法により製作される。脚端部は拡張され凹線が施されるものがほとんどで，脚部外面は金属器を使って施文されたと考えられる直線文，鋸歯文がみられ，矢羽状文も見られる。円孔が施されたものも出土するが透かしのあるものは１点も出土しない。坏部に凹線文を施されたもが大部分を占めるがわずかに凹線文が施されていなく端部も拡張されない浅い坏部を有する器形も出土している。器台では，大型の器台で口縁端部，外面全体に凹線文が施された鼓状の器形が出土している。この器台にも透かしはない。鉢では胴部球形のものが中心で，口縁は短く屈曲する。口縁端部は拡張されたものと貼付口縁のものに大別され，拡張されるものは凹線文が施されたものと，横ナデされたものにさらに分けられる。貼付口縁のも

のは２点出土している。No.199は平底の底部からやや内湾気味に立ち上がり中胴部よりやや上に最大径を有し，短くなめらかに開く口縁をもつ鉢である。ミニチュアは全部で９点出土している。鼓型をした器台状のものは４点出土していおり約半数をしめる。その他では壺型のもの，鉢型のものが出土している。石製品では，石鏃，石包丁，敲石，砥石，磨石が出土している。石鏃では，凹基式無茎石鏃１点，凸基式有茎石鏃が１点出土しており，ピット出土の石鏃と合計で３点出土している。石材は全てサヌカイトであった。石包丁は１点出土しており，直線刃半月形で中央部には双孔が穿たれるNo.445である。石材は粘板岩である。鉄器では，No.423の鉄鏃が１点出土している。時期的には，弥生中期末～後期の土器が埋土中から多量に出土するが，No.201・202は，古墳時代に入るものと考えられる。若干であるが古墳時代の遺物が混入するため遺構の時期は不明と言わざるを得ないが弥生時代中期後半の可能性が考えられる。

ピット

Ｉ区からは，103個が検出されており，Ａ～Ｆ区全てから検出されているがＤ区端部から30個が検出されピットが集中している。検出されたピットからは遺物の出土は少ないが出土した遺物はほとんどが弥生土器片であった。ピットは大部分が柱穴と考えられる。しかし，ピットが集中するＤ区端部では建物はたたなかった。Ｄ区端部のピット群は包含層から弥生土器が大半であるが，土師器，須恵器も出土しており，弥生の掘立柱建物，古代の掘立柱建物が存在した可能性も推定される。

調査Ⅱ区



第24図　ＳＴ６実測図

ＳＴ６

ＳＴ６は，ＳＴ１～ＳＴ５が調査Ⅰ区から検出されたのに対して，調査Ⅱ区から検出された住居址である。調査前標高約25ｍの谷部をはさんで調査Ⅰ区と向かい合った東向き斜面から検出した。

黄橙色の地山を掘り込み作られており，平面プランは段畑造成によって東側が削平されているため，約⅓程しか残存していなく，長径，短径とも不明な楕円形を呈する。この住居址は建て替え，拡張が行われており，先に検出されたのは建て替えられた後の住居址で床面は，標高約23.9ｍで，この住居址に伴い検出されたのは壁溝１と，Ｐ１～Ｐ６である。建て替え前に営まれていた住居址は，床面を約２～５㎝掘り下げると壁溝２とＰ６～Ｐ15が検出できた。中央ピットは検出されていない。

第９表　ＳＴ６ピット計測表

ピット番号	平面プラン	径(長×短㎝)	深さ(㎝)	遺　物	備　考
Ｐ　1	楕円形	118×85	29	弥生土器	黒灰色粘質土
Ｐ　2	同上	76×54	37，20		同上
Ｐ　3	円形	24×22	30		同上
Ｐ　4	同上	70×67 (10×20,12×12)	38，46	弥生土器	同上，２個の柱穴になる
Ｐ　5	同上	25×25	26		同上
Ｐ　6	同上	20×20	27		同上
Ｐ　7	同上	22×22	20	弥生土器	黒灰褐色粘質土
Ｐ　8	同上	23×23	40		同上
Ｐ　9	楕円形	28×22	28		同上
Ｐ 10	円形	19×19	39	弥生土器	同上
Ｐ 11	同上	23×21	26		同上
Ｐ 12	同上	26×26	19		同上
Ｐ 13	同上	22×22	25		同上
Ｐ 14	同上	20×20	15		同上
Ｐ 15	楕円形	30×20	15		同上

壁溝２は壁溝１とほぼ同心円で内側約30㎝から検出されている。壁溝１は幅約28㎝～33㎝で深さは約６㎝である。壁溝２は幅約25㎝～30㎝で深さは，深いところで約７㎝であった。

ピットは総計15個検出されている。ピットの残存状況はいずれも良好で，直径はほとんどが20㎝以上で深さも20㎝以上のものが大半である。建て替えられた後の住居址に伴うＰ２～Ｐ６は柱間が約90㎝で直列する。

住居址の埋土は単一の褐灰色粘質土で，埋土中からの土器の出土は多くない。図示できたNo.25の壺の胴部から底部にかけては，しっかりした平底の底部を持ち，最大径は胴部中央下位に位置する外面はハケメ調整で内面には指ナデがのこる。No.27は蓋である。床面は二時期のものに別れ，先に検出された建て替え後の床面は黄橙色に黒灰褐色が混じった土層でこの張り床を除去すると拡張前の黄橙色の地山の床面が検出される。床面からの遺物の出土はほとんどみられなった。

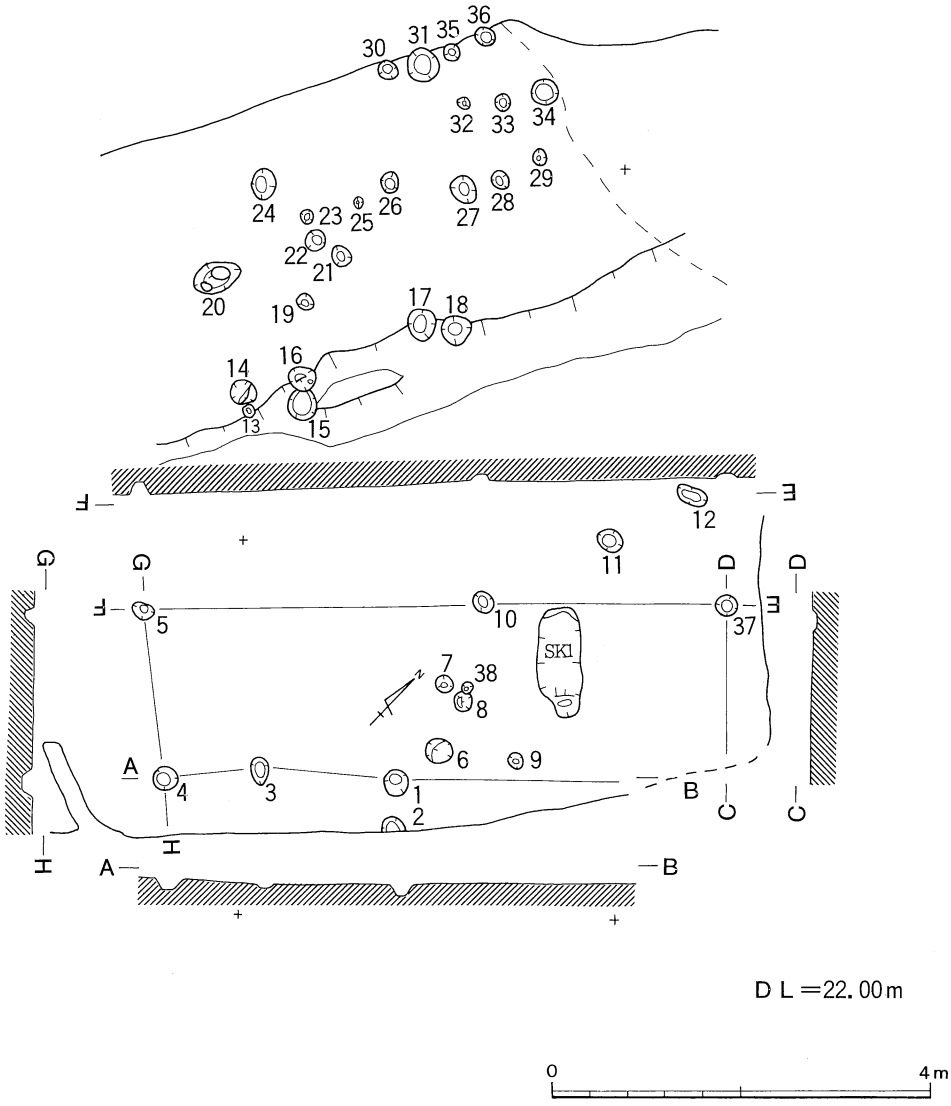
ＳＢ１

調査Ⅱ－Ａ区から検出された。桁行３間，梁間１間の規模で棟持ち柱は検出されなく上部構造は不明である。ピットの埋土は黒灰色粘土で埋土中からの遺物の出土はなく，ピットの深さは2～12㎝で浅く，表土直下で検出され後世の削平のためかなり削られていると

第10表　ＳＢ１ピット計測表

ピット番号	平面プラン	径(長×短㎝)	深さ(㎝)	遺　物	備　考
Ｐ　1	円形	29×28	18		
Ｐ　3	不整形な楕円形	26×21	2		
Ｐ　4	円形	26×26	4		
Ｐ　5	同上	20×20	12		
Ｐ 37	同上	21×21	3		

思われる。時期はピットの伴う遺物が出土していないため不明だが，調査Ⅱ－Ａ区から検出されたピットから瓦質土器，土師質土器が出土しており，古代末から中世にかけての時期と考えられる。



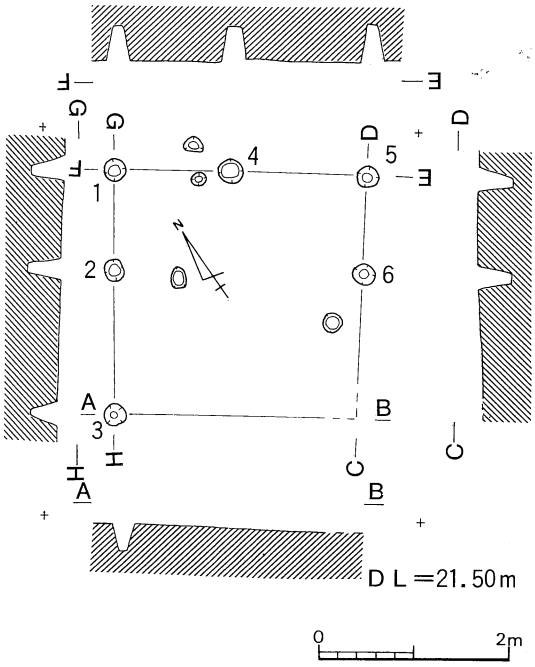
第25図　ＳＢ１調査Ⅱ－Ａ区 Pit 実測図

ＳＢ２

ＳＢ２はＳＢ１が検出された部分と旧谷状地を挟んだ地点から検出された２間×２間の掘立の総柱建物と考えられる。１間の長さは約1.3ｍとやや短い。ピットの埋土は黒褐色粘質土でピット中からの遺物の出土はなく時期の特定は困難だが，ＳＢ１と関係すると考えられ古代末から中世と考えられるが，その性格は不明である。

第11表　ＳＢ２ピット計測表

ピット番号	平面プラン	径(長×短cm)	深さ(cm)	遺　物	備　考
Ｐ　1	円形	24×24	36		
Ｐ　2	楕円形	24×21	35		
Ｐ　3	円形	25×25	29		
Ｐ　4	同上	26×26	8		
Ｐ　5	同上	25×25	38		
Ｐ　6	同上	25×25	36		



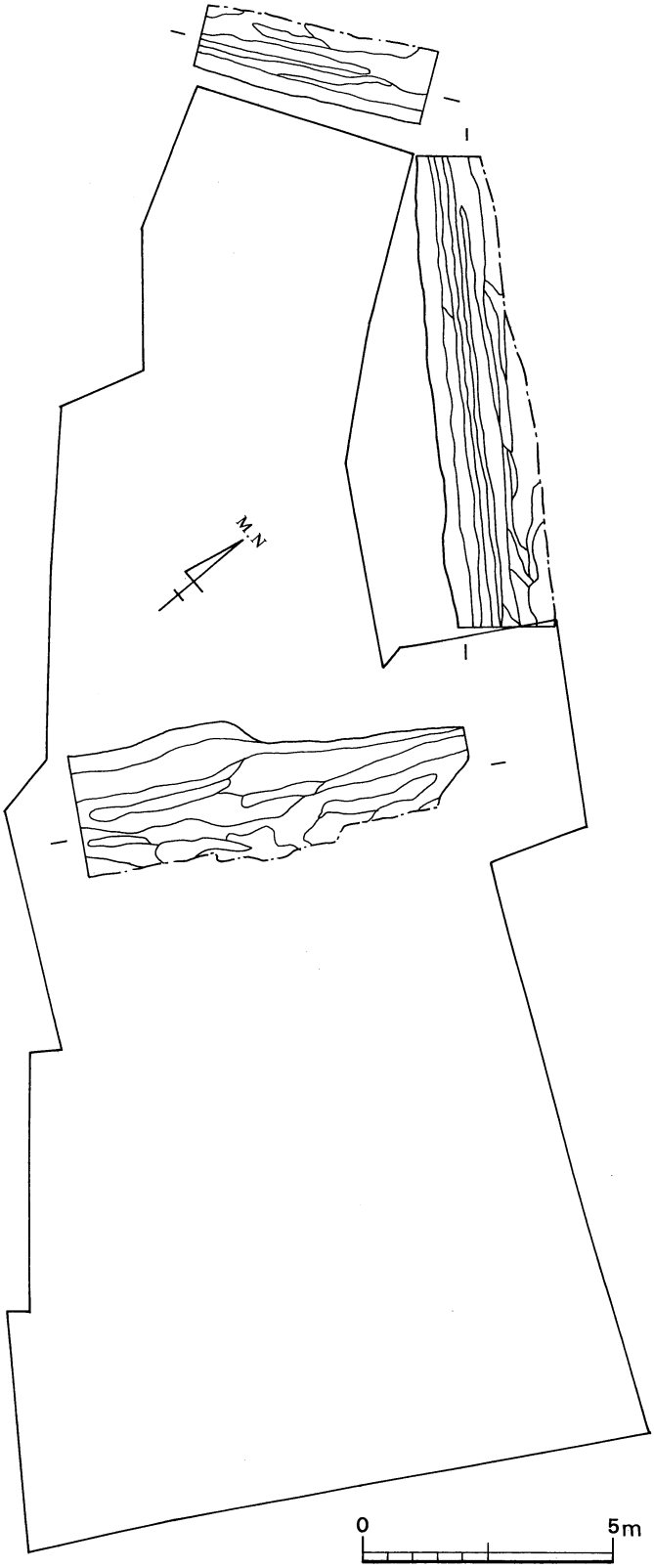
第26図　ＳＢ２実測図

ピット

Ⅱ区からは，Ⅱ－Ａからピットが38個検出され掘立柱建物が一棟検出された。また試掘調査では，旧谷状地形を挟んで総柱の掘立柱建物が検出されている。ピット中からは須恵器，瓦質土器，土師質土器が出土している。現在住宅が存在している丘陵斜面に古代以降集落が営まれていたことが推定される。

旧谷状地形

調査Ⅱ区から検出され，埋土中からはコンテナケース30箱の多量の弥生土器が出土した。出土した土器は中期末～後期の土器が大半を占め，前期と考えられる土器も出土しているがわずかに数点にすぎない。またこの埋土中からは弥生時代以降の土器の出土が認められない。埋土は砂礫層と粘土層が互層に堆積している。谷状地形は弥生時代に何度か土砂崩れによって埋没したと考えられる。



第27図　発掘調査区実測図

調査Ⅰ区ピット計測表

ピット番号	平面プラン	径(長×短cm)	深さ(cm)	遺　物	備　考
P 1	不整形な円形	21×19			試掘
P 2	円形	23×21			
P 3	同上	15×15			
P 4	楕円形	24×22			
P 5	同上	26×23			
P 6	同上	26×23			
P 7	楕円形	24×22	15		Ⅰ－A
P 8	不整形な円形	32×28	—		Ⅰ－B
P 9	楕円形	22×26	25		〃
P 10	同上	22×14	20		〃
P 11	円形	34×34	32		〃
P 12	同上	20×18	27		〃
P 13	同上	35×32	51	弥生土器	〃
P 14	不整形な円形	26×24	26		〃
P 15	円形	18×18	31	弥生土器	〃
P 16	不整形な楕円形	35×30	20		〃
P 17	不整形な円形	40×32	46		〃
P 18	不整形な楕円形	44×35	33		〃
P 19	円形	48×45	19		〃
P 20	楕円形	52×40	19		Ⅰ－C　溝中から検出
P 21	同上	27×22	5		〃
P 22	同上	24×20	31		〃
P 23	同上	20×14	27		〃
P 24	同上	22×19	29		〃
P 25	円形	25×25	29		〃
P 26	不整形な円形	21×20	16		〃
P 27	楕円形	23×20	34		〃
P 28	同上	25×20	3		〃
P 29	円形	20×20	25		〃
P 30	同上	18×18	22		〃
P 31	同上	25×25	16		〃
P 32	不整形な円形	20×20	24		〃
P 33	同上	22×21	23		〃
P 34	円形	18×17	19		〃
P 35	同上	15×15	36		〃
P 36	同上	20×19	3		〃
P 37	同上	23×22	30		Ⅰ－D

第12表　調査Ⅰ区ピット計測表1

ピット番号	平面プラン	径(長×短cm)	深さ(cm)	遺　物	備　考
P 38	楕円形	33×22	35		I－D
P 39	同上	67×57	9		
P 40	同上	45×30	8		
P 41	同上	42×34	9		
P 42	円形	20×20	30		
P 43	同上	26×26	28		
P 44	同上	21×21	40		
P 45	方形	42×41	2		
P 46	同上	39×36	20	弥生土器	
P 47	長方形		12，15	弥生土器	
P 48	円形	46×44	16	弥生土器	
P 49	三角形	35×28	9	弥生土器	
P 50	楕円形	35×24	13		
P 51	円形	30×30	13	弥生土器	
P 52	楕円形	28×24	12	弥生土器	
P 53				弥生土器	
P 54	楕円形	38×28	16	弥生土器	
P 55	同上	30×27	—	弥生土器	
P 56	長方形	100×70			土坑
P 57	楕円形	35×28	6	弥生土器	
P 58	円形	26×26	24		
P 59	楕円形	31×26	8		
P 60	同上	29×20	11		
P 61	不整形な楕円形	32×29	14		
P 62	不整形な円形	26×25	8		
P 63	円形	24×23	11		
P 64	楕円形	23×19	20	弥生土器	
P 65	不整形な円形	27×27	24		
P 66	楕円形	23×17	11		
P 67	不整形な円形	21×20	19		
P 68	——	—	—	—	消滅，シミか？
P 69	不整形な楕円形	43×24	9		
P 70	楕円形	58×58	78	弥生土器	柱痕らしきもの有
P 71	円形	22×21	12	弥生土器	
P 72	同上	25×23	13		
P 73	楕円形	27×21	12		
P 74	同上	25×20	14		
P 75	円形	27×27	12		
P 76	楕円形	42×38	29		

第13表　調査Ｉ区ピット計測表２

ピット番号	平面プラン	径(長×短cm)	深さ(cm)	遺　物	備　考
P 77	楕円形	36×18	11		
P 78	同上	20×10			Ⅰ－G
P 79	円形	25×25	21		
P 80	同上	20×20	11		
P 81	円形	18×18	12	弥生土器	
P 82	楕円形	35×30	9	弥生土器	
P 83	円形	22×20	14		
P 84	楕円形	25×18	12		
P 85	方形に近い円形	29×29	6		
P 86	同上	23×22	22		
P 87	楕円形	38×30	14		
P 88	方形に近い円形	32×27			
P 89	楕円形	20×17	11		
P 90	円形	16×16	15		
P 91	同上	19×19	6	弥生土器	
P 92	楕円形	29×25	4		
P 93	同上	35×32			
P 94	円形	26×26	20		
P 95	不整形な楕円形	65×55	8		土坑の可能性あり
P 96	円形	26×26	17		
P 97	同上	22×22	18		
P 98	楕円形	24×22	5		
P 99	円形	25×25	14		
P 100	楕円形	25×23	24		
P 101	同上	25×23	19		
P 102	円形	33×27	25	弥生土器	
P 103	同上	22×22	15		ＳＸ１に伴う可能性
P 104	同上	30×30	21		同上

第14表　調査Ⅰ区ピット計測表３

調査Ⅱ－Ａ区ピット計測表

ピット番号	平面プラン	径(長×短cm)	深さ(cm)	遺　物	備　考
P 1	円形	29×28	18		
P 2	楕円形	25×22(復元)	10		
P 3	不整形な楕円形	26×21	2		
P 4	円形	26×26	4		
P 5	円形	20×20	12		
P 6	不整形な円形	27×27	3		
P 7	円形	17×17	10		
P 8	不整形な方形	22×20	1		
P 9	円形	16×16	5		
P 10	楕円形	24×20	6		
P 11	円形	24×23	13		
P 12	楕円形	32×20	13，10		2個の柱穴
P 13	円形	10×10	10		
P 14	不整形な方形	28×28	16		
P 15	楕円形	35×28	14		
P 16	楕円形	30×24	8	土師質坏	
P 17	円形	32×30	15		
P 18	円形	30×30	18	瓦質土器	
P 19	同上	18×18	6		
P 20	楕円形	50×44	26，26	須恵器，土師器	2個の柱穴
P 21	円形	22×22	18		
P 22	同上	25×25	12		
P 23	楕円形	14×11	14		
P 24	同上	34×27	22		
P 25	円形	11×11	5		
P 26	同上	20×20	12		
P 27	同上	30×30	21		
P 28	楕円形	20×23	17		
P 29	円形	15×15	3		
P 30	同上	20×20	13		
P 31	同上	36×36	16		
P 32	同上	16×16	5		
P 33	同上	18×18	6		
P 34	円形	30×30	13		
P 35	同上	20×20	12		
P 36	楕円形	24×21	20		
P 37	円形	21×21	3		
P 38	同上	12×12	4		

第15表　調査Ⅱ－Ａ区ピット計測表

Ⅵ章　遺　　物

Ⅵ章　遺　　物

(1) 土器

弥生時代の土器

本村遺跡からは多量の土器が出土している。そのほとんどが弥生時代中期後半から後期初頭にかけてのものと考えられる。その他には調査Ⅰ区から古式土師器，須恵器片，11世紀後半と考えられる土師器椀が出土しているがわずかに数点を数えるのみである。

調査Ⅰ区から出土した遺物は，遺跡が丘陵地に立地しているため包含層の残存状況不良であり，その出土のほとんどが遺構中からであった。特にＳＸの埋土中からは多量の土器が出土しており，弥生中期末から後期初頭にかけての好資料となるだろう。また調査Ⅱ区の旧谷状地形と考えられる自然遺構の埋土中からは弥生時代前期と考えられる土器片数点出土しているほかは，弥生中期後半から後期初頭にかけての土器が約コンテナケース50箱出土している。

本遺跡から最も多量に出土した弥生中期後半から後期前半にかけての土器の器種構成は，壺，甕，高坏，鉢，器台である。器種ごとの土器構成にしめる比率はこの時期になると壺型土器が減少し中期前半には，比較的少数しかみられなかった甕型土器の比率が上昇する傾向がみらる。またこの時期の大きな特徴のひとつとして凹線文を持つ土器の出現が挙げられる。凹線文はその起源を瀬戸内地域に求めることができる土器であり比較的短期間の間に広がり盛行期を迎える土器である。高知県においても凹線文をもつ土器は田村遺跡のLoc34をはじめ，龍河洞遺跡等から出土しており，龍河洞遺跡において出土した凹線文を伴う土器によって，岡本健児氏は南四国東部における中期末葉の龍河洞Ａ式を設定した。

今回出土した中期末から後期にかけての土器は大きく２つに分けることができる。一方は凹線文が施された土器で龍河洞Ａ式と同型式と考えられ，瀬戸内地方の影響の強い定型化された土器といえる。器種構成は，広口壺，長頸壺，無頸壺，直口壺，台付き壺，水差し型土器，甕，大型甕，高坏，鉢，大型鉢，台付き鉢，器台等である。いずれも口縁端部ないし外面には凹線文が施されている。

もう一方は，在地の土器の系譜を引くものと考えてよいだろう。そのひとつは，壺型土器に特徴的にみられる口縁部に粘土帯を貼り付けた貼付口縁である。この貼付口縁は，その他に鉢型土器にもみられる。しかし，この時期の在地の流れを引く土器の中には明瞭な甕型土器がみられない。当遺跡出土の土器中にも凹線文を有する甕型土器以外には明確に甕型土器と判断し得るものはないが，外面を炭化物の付着が覆い煮沸具として使用されていたことをうかがわせる土器が出土している。当該期以前における在地の甕型土器については，出原恵三氏が「土佐型甕の提唱とその意義」で述べられているように，一般的な甕型土器はきわめて少なく土器構成比率におけるアンバランス状態が存在する。この状態を解決するものとして出原氏は在地の

系譜をひくと考えらえれる土佐型甕を提唱されている。この土佐型甕は中期後半には凹線文系の甕に置き変わると考えられるが，今回の調査で出土した土器中からは土佐型甕の系譜を引くと考えられる。一見すると壺型土器であるが外面を炭化物の付着が覆う土器が出土しており，凹線文盛行期においても，在地系の土器も併存していた可能性が強いことが明らかとなった。また，在地の土器の中にも貼付口縁端部に凹線文を意識したと考えられる沈線が施された壺型土器が出土しており在地系の土器にも凹線文が強く影響を与えたことがうかがえる。

個別に土器の形態を見てゆくと，壺型土器は口縁部の形態によって分類することができ，大別すると広口壺，長頸壺，無頸壺，直口壺に分けられる。また台付き壺，水差し型壺も存在する。広口壺はさらに口縁部の開き方や頸部の形態によって細分され，タイプＡは口縁が水平に近く大きく外反し頸部は直立する。タイプＢはなめらかに斜め上方に開く口縁部をもち口縁の長さによってさらに分けられ，口縁の長いものは大きく外反するタイプＢ１がある。口縁が短いものには，外反の度合いが弱いタイプＢ２ａと，直立した頸部を持ち短くなめらかに外反する口縁部をもつタイプＢ２ｂが存在する。長頸壺は６点出土しているが凹線文を持つものと薄手式土器の系譜を引くものに分けられる。無頸壺はNo.299，１点のみが出土しており凹線文が外面に施された最大径が11cmの小さなものであった。直口壺は図示できたものが17個出土している。口縁部外面に凹線を施されたものとそうでないものに分けられ，凹線文がないタイプのものは後期に入ると考えられる。凹線文を有する口縁については水差し型土器の口縁と類似するため判然としないものも含まれる。水差し型土器は凹線文を有するものしか出土していなく本県においては凹線文受容とともに出現するといえよう。No.142の水差し型土器の胴部は算盤玉型をしているものと思われる。

甕は，中期後半においてはその過半数を凹線文を有する土器がしめる。前述のごとく当該期以前において甕型土器の存在は明確ではなかったが，「土佐型甕」の提唱によって従来壺型土器としていた貼付口縁をもち頸部に装飾が施されたものの一部を「土佐型甕」として位置づけることが可能となると，中期後半においても壺型土器の範疇に入れざるえなかった一見して煮沸具と考えられる土器も甕型土器として位置付けることが可能となるだろう。凹線文系の甕は斜め上方にハの字状の短い口縁が付き口縁端部は，上下，上，下に拡張され凹線文が施される。後期と考えられるものは凹線文は退化しわずかに横ナデに伴う一条の凹がみられる。全体のプロポーションは両方とも上胴部に最大径を有するいちじく型を呈する。中期と後期の大きな相違点は，中期に出現した甕の内面ヘラ削りの技法が後期になると下胴部から口縁下まで拡大される。また外面の調整では中期の甕ではヘラ磨きが主に下胴部にみられるが後期に入るとヘラ磨きは減少する。全体的なプロポーションにおいても中期のものは規格性が強く回転速度の速い回転台の上で整形を行なったことを推定させるような稜線の明瞭な土器になっている。土佐型甕の系譜をひくものははっきりとした様相を呈してないが，直立気味の頸部からなめらかに開く口縁部をもち上胴部に最大径をもった小さい平底の体部をもつと思われる。

高坏については，完形品の出土が一点しかなく全体の様相が明確になっていないが，大型のものと，小型のものに分けられ，小型のものは口縁によってさらに３分類できる。大型の高坏については口縁部のみの出土であるため全体像がつかめなく，この時期にみられる大型の鉢と渾然となっている可能性もある。わずか口縁部３点のみの出土であるが，本県においては今回の出土が初めてであり，その外面を櫛描波状文，円形浮文で装飾された特殊な土器といえよう。

小型の高坏は口縁のタイプによって分類できる。タイプＡは比較的小さなもので直線的に開く坏部をもち口縁は稜をもって屈曲，内傾し外面には凹線文が施される。完形品ではＳＸ１出土のNo.184がある。脚部外面に多条沈線や鋸歯文を施された高坏はこのタイプになると考えられる。タイプＢはNo.346で，わずかに内湾して立ち上がる坏部を持ち口縁部は坏部から強く屈曲し稜をなして直立し，やや内傾する。口縁端部は拡張され上方を向く面をなし，わずかに凹んだ口縁外面を呈する。タイプＣは図示できたものはNo.185の口縁部のみである。直線的に開く浅い坏部からやや外傾し拡張されず凹線文も施されない口縁をもつものである。このタイプは田村遺跡からも出土しており中期後半に位置付けられているが，後期初頭の可能性も考えられる。この他に水平口縁をもつ高坏が出土している。このタイプの高坏は瀬戸内地方では中期後半には多くみられるが本県では初めての出土である。瀬戸内地方の水平口縁のものにはさらに口縁端部が垂下するものも出土するが今回の発掘調査では出土していない。この高坏はNo.350の様に比較的大きな内湾して立ち上がる坏部を持つと考えられる。今回の調査では多くの高坏の脚が出土したが，すべて円盤充塡法によって作製され中空の脚を持つが外面の文様の有無と裾部端部の拡張の有無がある。外面の文様は多くが金属器によると考えられる鋭い原体で，多条沈線，鋸歯文，羽状文，矢羽状文が施される。透かしが入るものは一点も出土しないが刺突による円孔は多くみらる。透かしは大型の器台にもみられず，高知県出土の高坏脚のひとつの特徴となっている。作製技法は先に述べたように坏部と脚部が一体成形によって作製される円盤充塡法である。中期の高坏脚の内面は横方向のヘラ削りがみられることが特徴となっている。

鉢の出土点数は少なく，出土した鉢は，胴部が球形に近いものがその大部分をしめるが口縁部に凹線文が施されたものはわずかに２点のみの出土でありNo.368は水平口縁の高坏の可能性も考えられるが台付きの小型の鉢の可能性が高い。No.199は貼付口縁をもった鉢が出土している。瀬戸内地方の中期の大型の鉢では，脚が付きほぼ高坏と同じ形態を持つものがみられるが，大型高坏としているものと渾然としている可能性もあるが全体のプロポーションがわかるものは出土していない。

器台は凹線文が施される器台とそうでないものに大別される。凹線文の有る器台については，ＳＸの埋土中からほぼ完形に近いNo.200が出土しておりその全体の形態を明らかにしている。今回出土した凹線文を有する器台は，すべてが大きく開き拡張された口縁部を持ちその外面全体には幅の広い凹線が巡るものであった。全体のプロポーションは瀬戸内地方の同時期の器台

と比べると器高が低く，畿内出土の大型器台に近いプロポーションを持つ。口径の大きさに比して器高が低いことが特徴となっている。ＳＴ２から出土したNo.２は小型の器台と考えられる。器台ではその他で筒型の器台と考えられるものが２点出土している。本県では初出土であるがこの器型についても瀬戸内地方では出土しており，中期後半から後期初頭にかけてと考えられる。

ミニチュア

本村遺跡ではミニチュア土器も多く37点出土している。ここで注目されることは，粘土を鼓状に手づくねによって成形した器台状のミニチュアが11点出土しておりミニチュア全体の1/3をしめるほど出土していることである。器台型のミニチュアでは砂岩と考えられる石製品がＳＴ３の中央ピット埋土中から出土している。その他では，台付きの鉢型土器になると思われる土器が出土している。またNo.409は壺型のミニチュアであるが，丁寧な仕上げを行なっており胎土，焼成ともに良好で，他のミニチュア土器と性格が違うことが窺える。

弥生時代以外の土器

弥生時代以外の土器では土師器，須恵器が出土しているが，わずかに４点のみである。４世紀代と思われる古式土師器の甕がＳＸ１とＳＫ２から出土している。また同時代のものと考えられる高坏も出土している。土師器では，この他に古代末12世紀と考えられる貼りつけの輪高台をもつ碗が出土している。調査Ⅱ区では中世瓦質皿，土師質小坏が出土している。また調査Ⅰ区，Ⅱ区ともに須恵器片も出土しているが図示できなかった。

その他

その他では１点ＳＤ７埋土中から土錘が出土している。時期については不明である。

鉄製品

鉄製品は全部で３点出土しておりいずれも，鉄鏃であった。No.421・422はＳＫ２より出土する。No.422は比較的大型の柳葉式で木葉型を呈する鉄鏃である。No.423はＳＸ１より出土した。No.422をのぞく２点は無茎三角式で基部が平基式である。重さはいずれも約10ｇで本遺跡出土のサヌカイト製打製石鏃が約2.0ｇに比べるとその重量は際立っている。

石製品

石製品も比較的まとまって出土しており，石鏃，石包丁，石斧，砥石，敲石が出土している。その大部分は砥石，敲石である。また用途は不明で使用痕もみられないが遺跡周辺では自然産出しない河原石が多く出土している。その他，用途不明の石製品が出土している。またサヌカイトやチャートの剝片も出土している。

個別に石製品を見てゆくと，石鏃は17点出土している。石材によって２種類に分けることができる。チャート製の石鏃は４点出土しており，いずれも遺構中，包含層中からの出土ではなく層位的にも後世の攪乱層であり，明確に時代はわからないが，その抉りの深い形態，重量の

平均が約0.7ｇサヌカイト製の石鏃に比べて約半分と軽いことから縄文時代の石鏃の可能性が高い。サヌカイト製のものについては，その基部の形態，茎の有無によって分類することができる。いずれも弥生時代中期の石鏃と考えられる。重量の平均は約2.0ｇである。

石包丁は全部で９点出土しており，磨製と局部磨製の石包丁に分けられる。磨製の石包丁は４点出土しており刃部はいずれも直線状を呈する。２点は直線刃半月形，後の２点は長方形である。１点を除いて中央部には双孔が穿たれており，石材は粘板岩と頁岩と思われる。磨製石包丁についてその形態は弥生時代中期の畿内の影響下にあるものと考えられる。ＳＴ１から出土した磨製石包丁は直線刃を持つ長方形になると考えられるが幅が薄く中央には双孔が穿っていない。瀬戸内地域で出土するサヌカイト製の打製石包丁の影響を受けると考えられる局部磨製の石包丁は２点出土しているが，石材はサヌカイトではなく磨製石包丁と同質のものが使用される。形態的には双孔は穿たれず，両端に抉りが入っている。刃部は研磨によって丁寧に仕上げられ，全体も粗割りの後研磨して仕上げられる。石包丁の未製品と思われる物は，２点出土している。あとの１点は河原石を石材とし自然面を一方に残して，もう一方を大きく剝離させ刃部を作り出していることが注目されるが作りが粗製で粗製剝片石器の可能性がある。

石斧は５点が出土しており，柱状の両刃石斧，丸鑿状の石斧が弥生の磨製石斧と考えられ石材は緑色片岩である。No.455は打製の扁平な両刃の石斧であるが粗製で土掘具として使用されたと考えられる。またNo.456は完形品でなく全体の形態が判然としない。一見すると石剣の先端部と見えるが，側面の刃部状をなす部分がだんだんと面を持ち出すのでやはり石剣とは考えがたく，石斧の基部になると考えられる。No.452は扁平な粘板岩で擦痕がみられ磨製の扁平な石斧になると考えられる。

その他石製品では，砥石が８点と，敲石，敲台とみられる河原石が多量に出土している。砥石は，鉄器用と考えられる物は出土していない。また用途不明の擦痕がみられる磨いた石も出土している。

ガラス製品

１点のみ勾玉がＳＴ４の埋土中から出土している。青色（ターコイズブルー）の発色をしており，透明感がある。分析していないので，はっきりしないがアルカリソーダガラスの可能性が考えられ，銅（Cu）が発色剤になったと考えられる。ガラス中には多くの細かな気泡が入っている。研磨して丁寧に仕上げられており，孔は直径が約１㎜である。

玉類

管玉が２点ＳＴ４の壁溝中から出土する。碧玉製である。ガラス製勾玉が同じＳＴ４から出土することから，なんらかの関係があると思われる。

Ⅶ章　まとめ

野市町本村遺跡は，その出土する土器から第Ⅳ様式の凹線文が盛行する時期を中心に第Ⅴ様式前半の時期，すなわち弥生時代中期末から後期前半までの時期に営まれた集落と考えられる。

この地域では香宗川の右岸に所在する下分遠崎遺跡が弥生時代前期の集落として知られ，第Ⅱ様式の土器が出土している。また物部川河口の田村遺跡群は高知県中央部の前期の拠点集落として知られているほか，高知県を代表する弥生時代の集落の複合遺跡である。田村遺跡群からはLoc. 34の自然流路から，凹線文の盛行時期の土器が出土しており本遺跡出土の土器とほぼ同一の形式の壺などが出土しており本遺跡との関係が注目される。

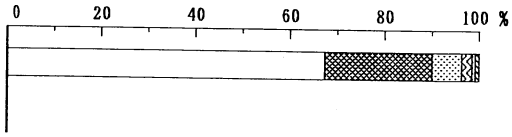
弥生時代中期後半については，遺跡の数の増加が顕著になる時期で遺跡も沖積平野の微高地に立地した拠点的な大集落が，小規模な集団に別れ新たな生産，居住の適地を求めて移動し谷間深くまで進出する時期である。また，瀬戸内地方ではこの時期には急峻な山上に遺跡が所在することも多くこのような集落を高地性集落と呼ぶが，高知県の太平洋を望む眺望の良い山上でも多くの高地性集落と考えられる遺跡が確認されている。

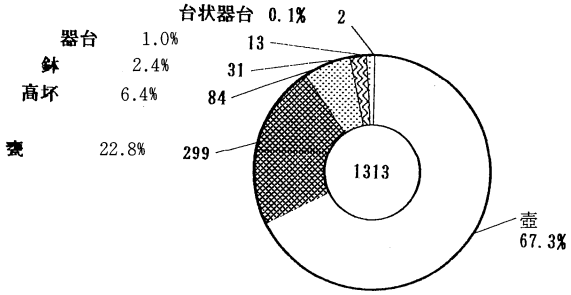
高地性集落については，諸先学が様々な観点からの高地性集落論を展開されており，その定義については概ね高地性集落を２つに分類し述べている。狭義の高地性集落は，生産の場として不適当な高い場所に営まれた集落で，弥生時代の軍事的抗争との関係で論じられることが多くこのタイプの高地性集落の代表的な例として，香川県の紫雲出遺跡を挙げることができる。広義の高地性集落の定義では，その比高差がもっぱら問題となり比高差によって高地性集落と分類される。本遺跡は比高差が約20ｍ，標高約30ｍの丘陵上に営まれており，先に述べた典型的な高地性集落には分類できない。本遺跡からは農耕具である石包丁や籾圧痕の残る甕が出土し，集落が営まれたと考えられる丘陵と丘陵の谷部では豊富な湧水を利用した谷水田が営まれていたことが解り，ある特定の目的のみのための遺跡とは考えられない。むしろ前期の拠点集落である下分遠崎遺跡や田村遺跡から分村した集団が河川を上流に上った地点で耕作に適当な場所を得たと考えられる。しかし，一方では，本村遺跡は低丘陵ながら比較的眺望が良く遠くは太平洋まで見渡せるという軍事的緊張から論じられる高地性集落的な要素も持っている。瀬戸内地方の影響をつよく受けた土器が多量に出土することからも，本遺跡は弥生時代中期末の瀬戸内地方の時代背景を受けて成立したことが窺える。

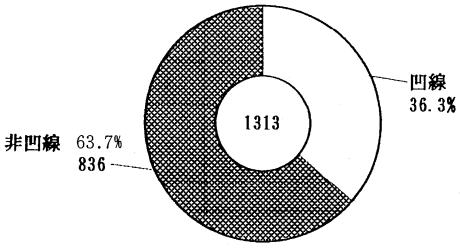
参考文献　森岡秀人　「高地性集落性格論」（『論争・学説　日本の考古学』第４巻　弥生時代）
〃　「高地性集落」（『弥生文化の研究』第７巻）
小野忠熙編　『高地性集落の研究』資料篇

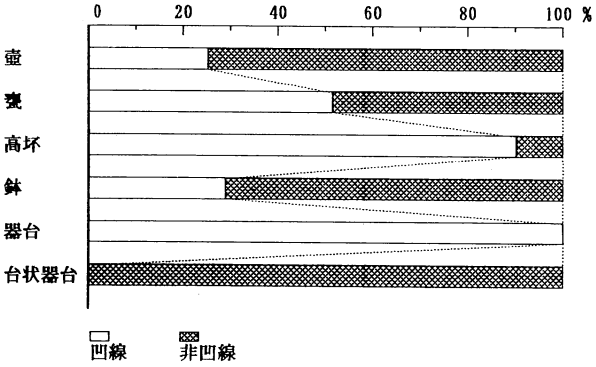
各器種における凹線と非凹線の割合１

	土器点数	組成比率	凹線文		非凹線文	
					素口縁	貼付口縁
壺	884	(67.3%)	225	(25.5%)	331 (37.4%)	328 (37.1%)
					659	(74.5%)
甕	299	(22.8%)	154	(51.5%)	145	(48.5%)
高坏	84	(6.4%)	76	(90.5%)	8	(9.5%)
鉢	31	(2.4%)	9	(29.0%)	22	(71.0%)
器台	13	(1.0%)	13	(100%)	0	(0%)
台状器台	2	(0.1%)	0	(0%)	2	(100%)
合計	1313		477	(36.3%)	836	(67.3%)



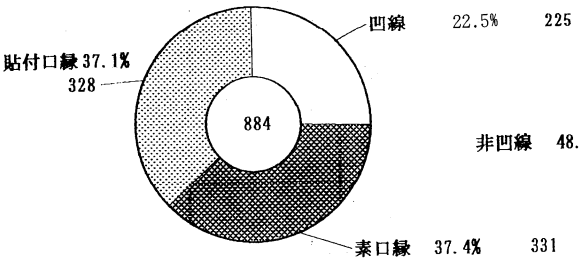




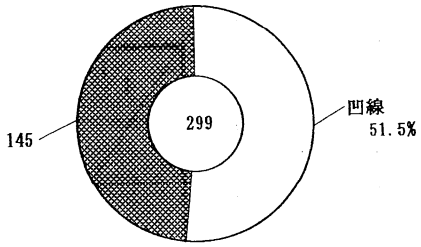


各器種における凹線と非凹線の割合２

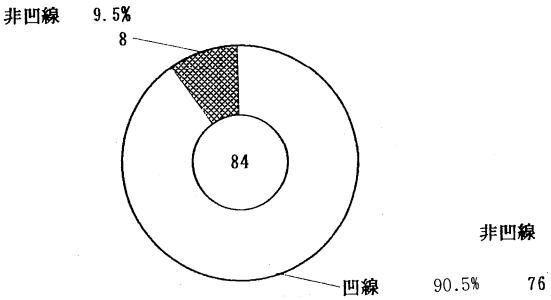
壺



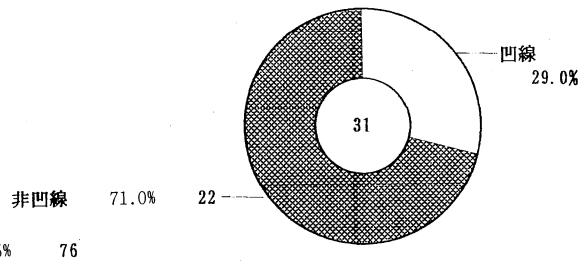
甕



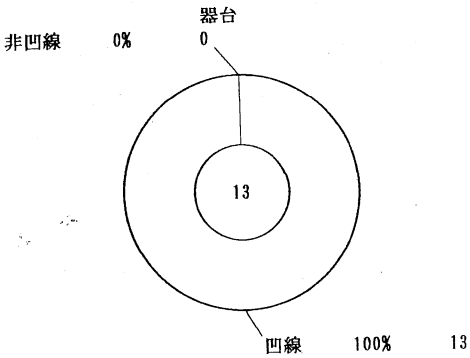
高坏



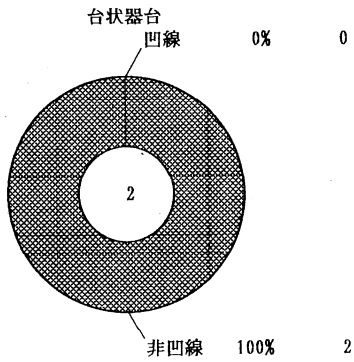
鉢



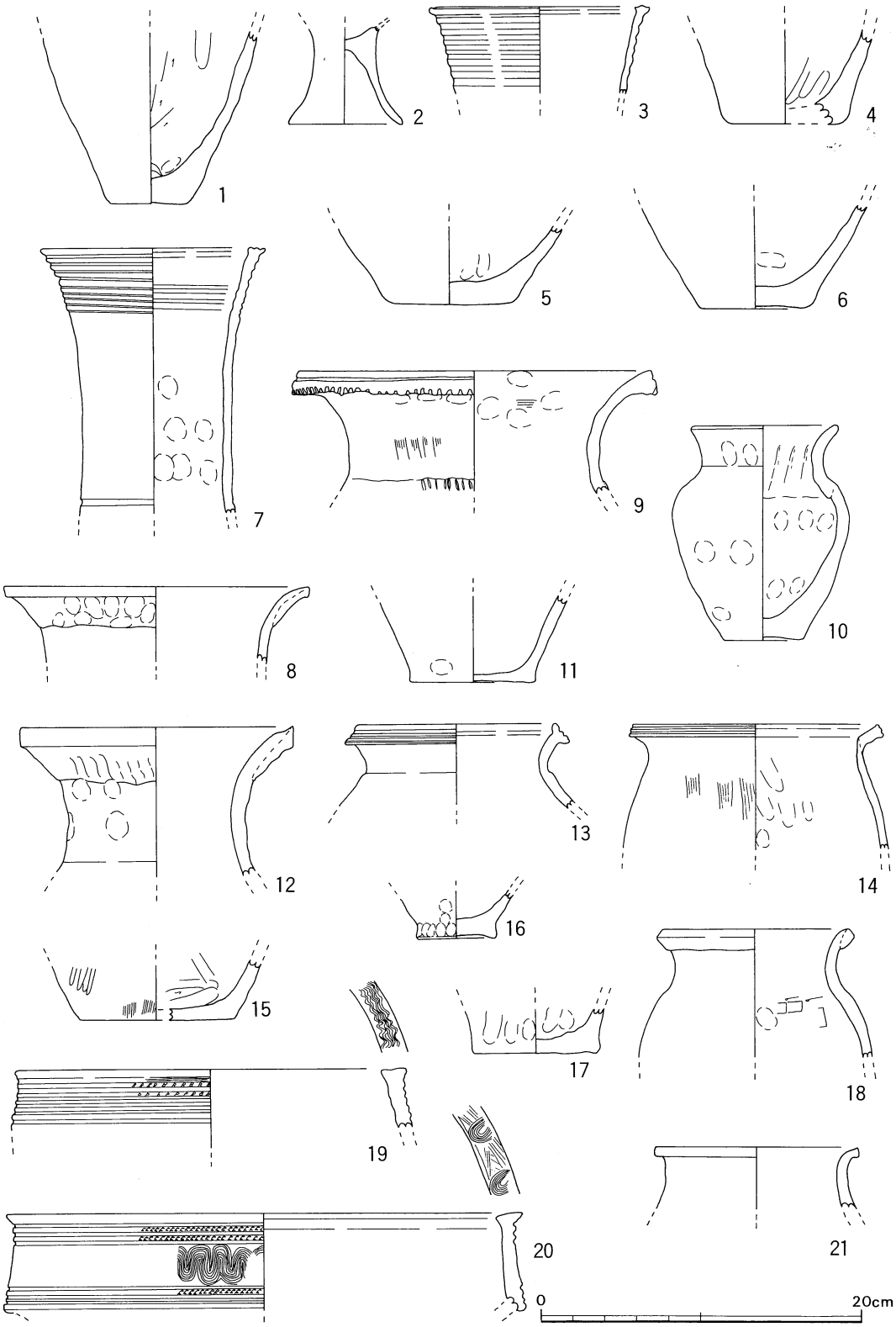
器台



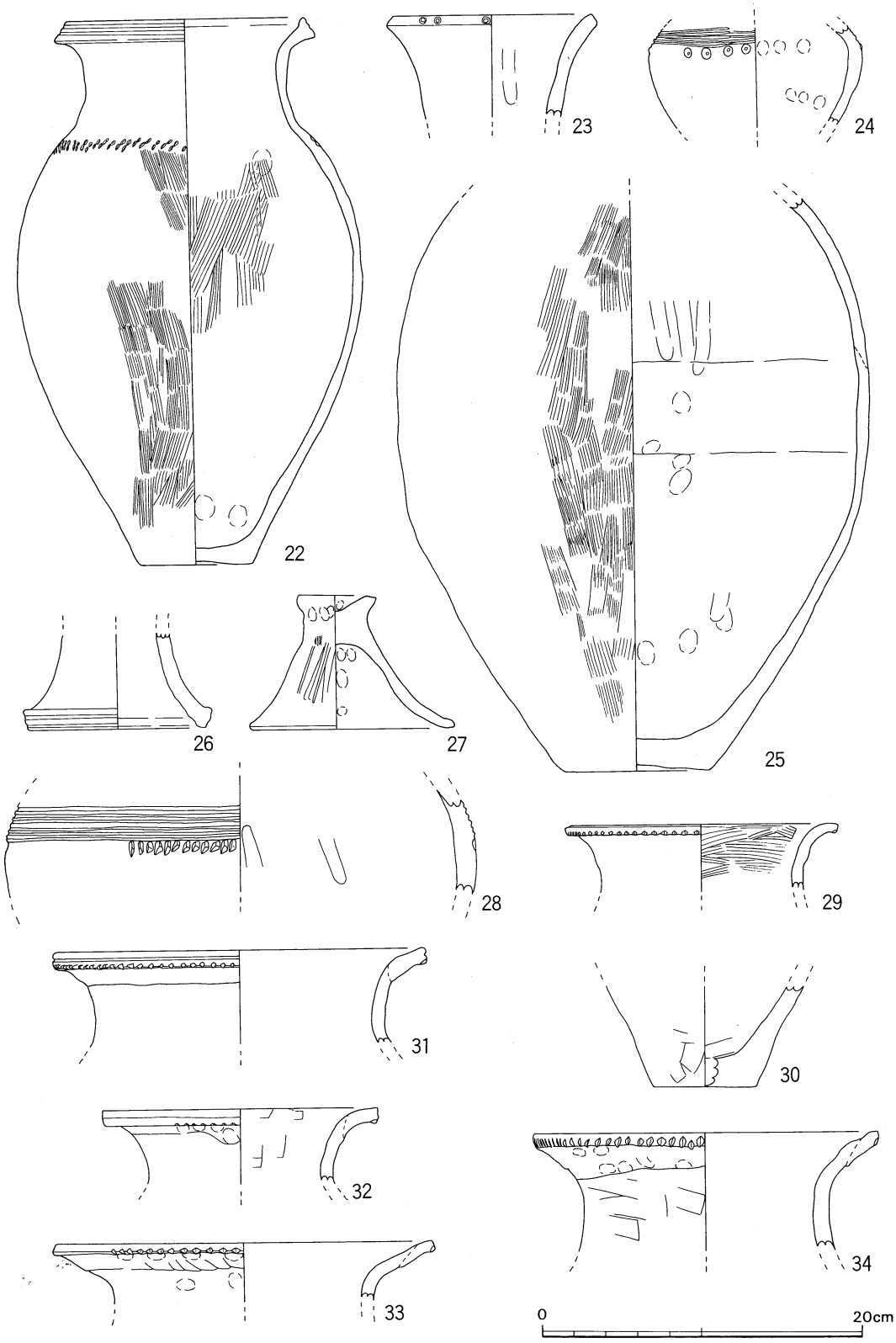
台状器台



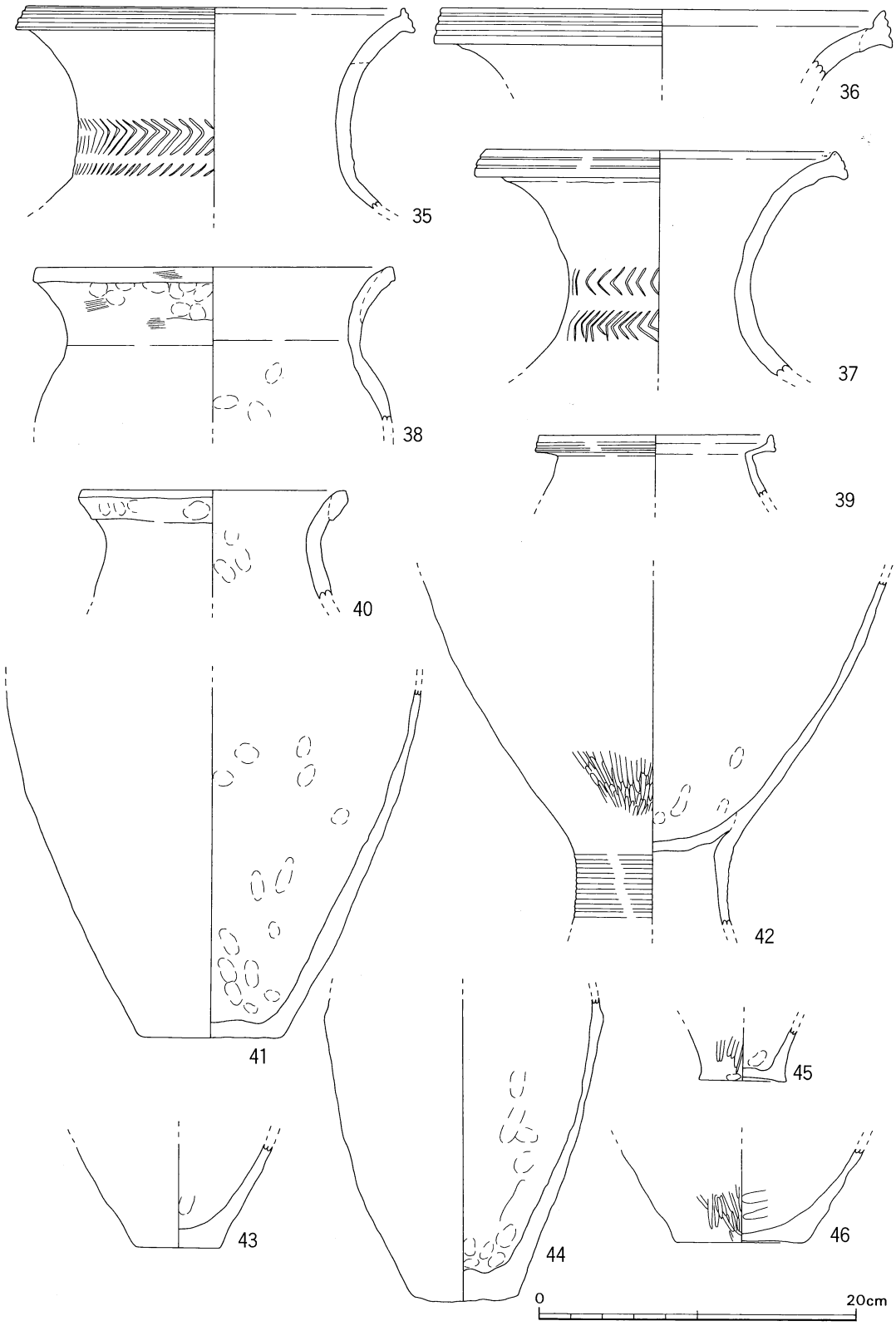
遺物実測図及び遺物観察表



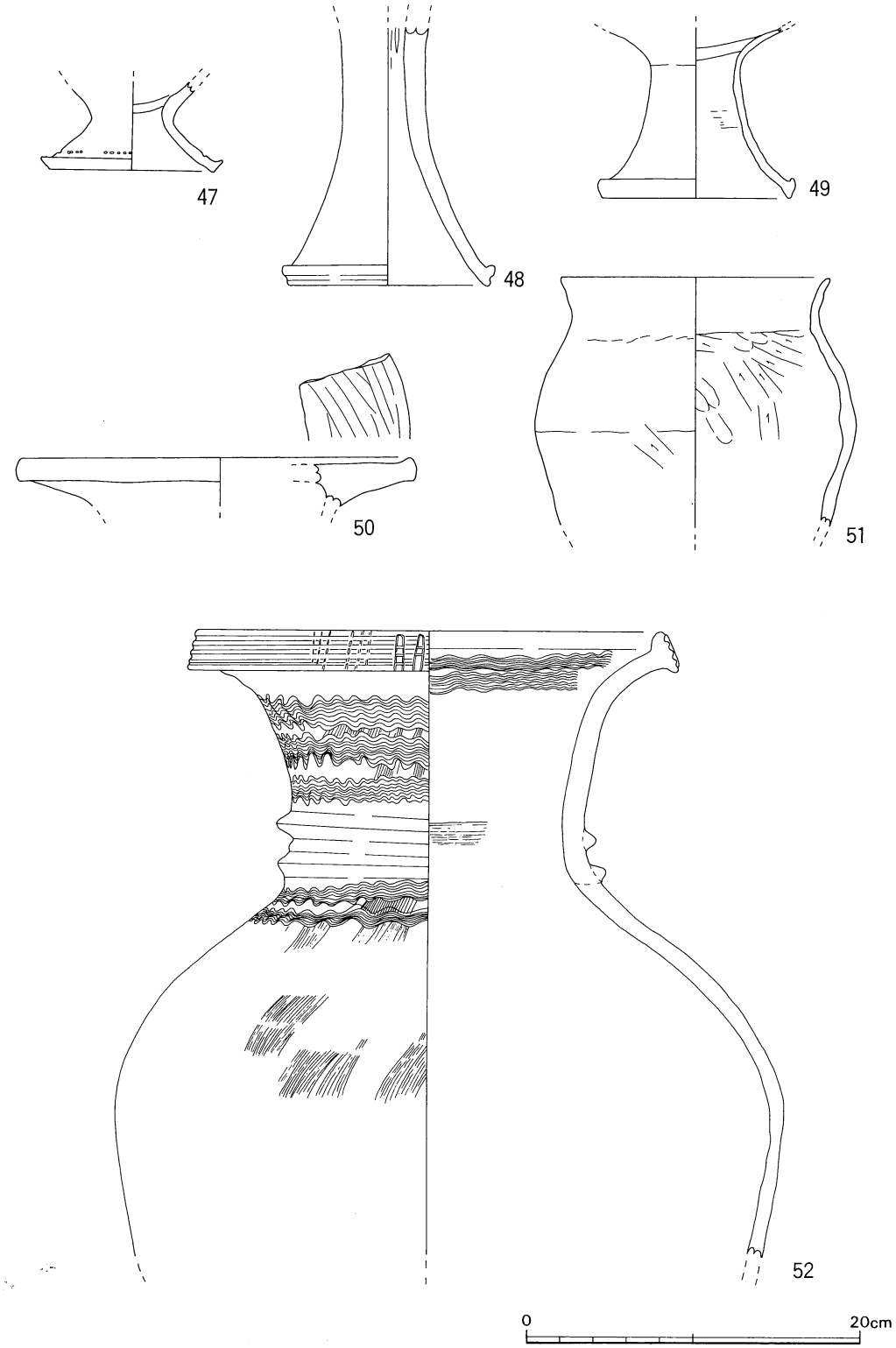
第28図　ＳＴ１～５出土土器実測図



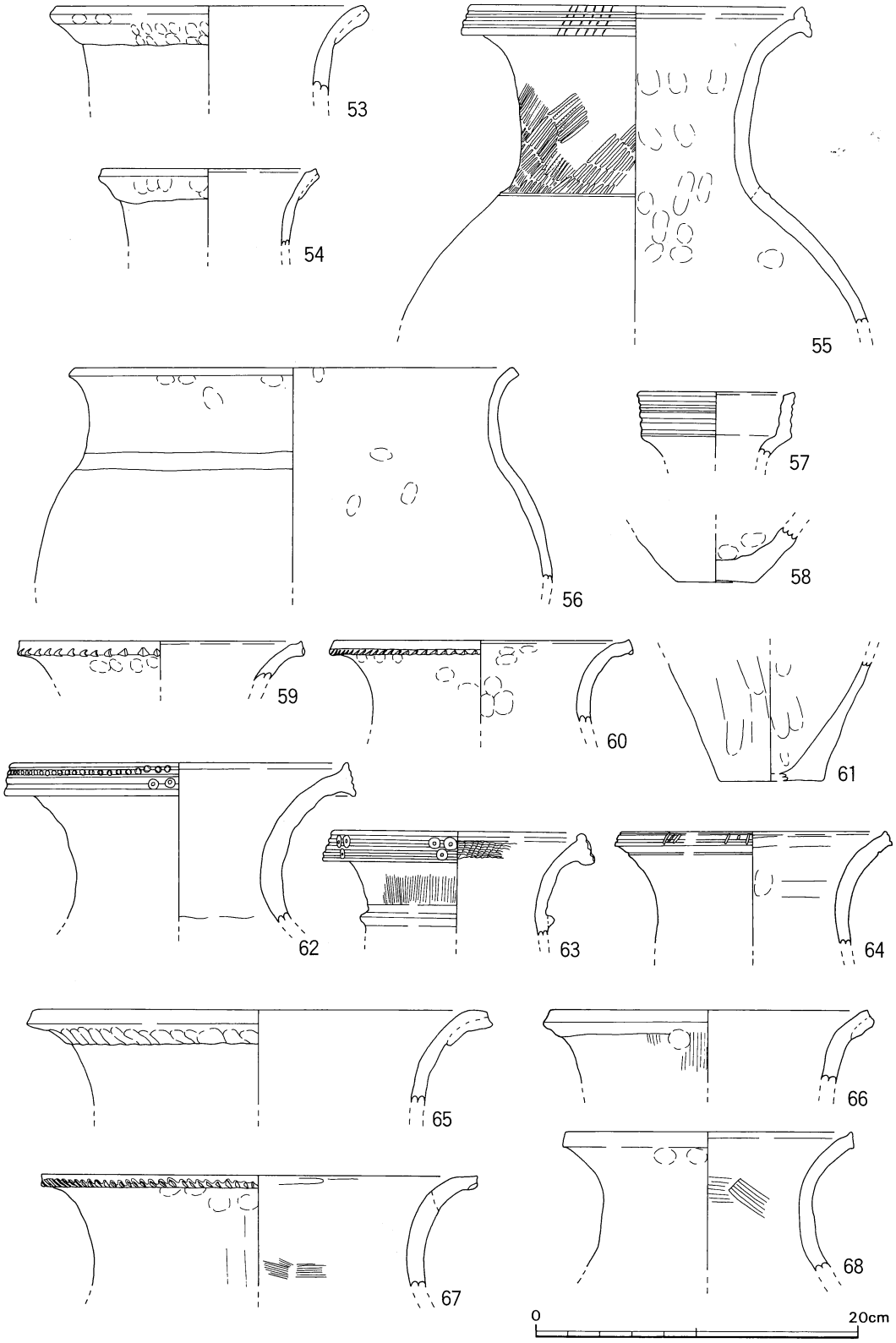
第29図　ＳＴ６，ＳＫ１・２出土土器実測図



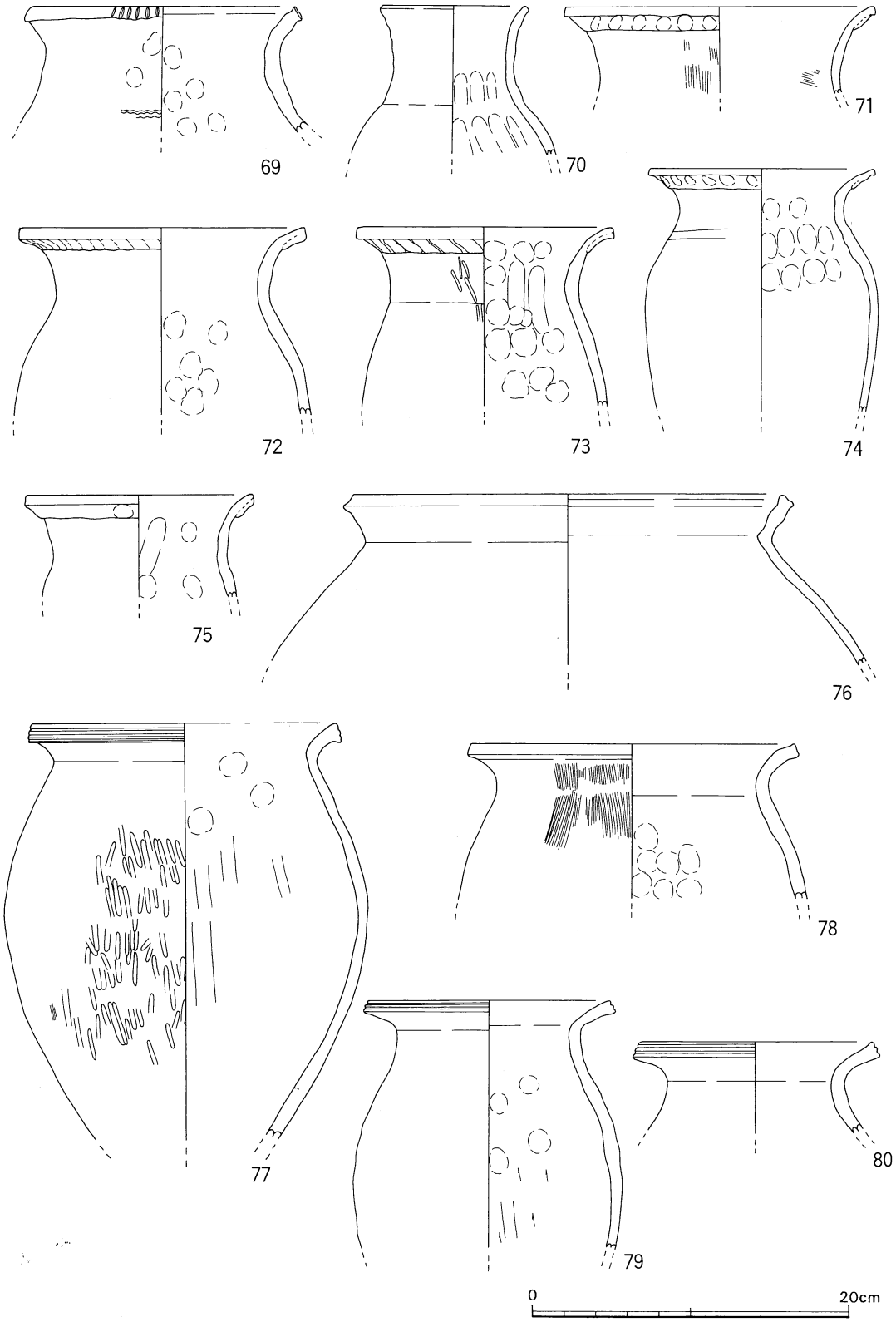
第30図　ＳＫ２出土土器実測図



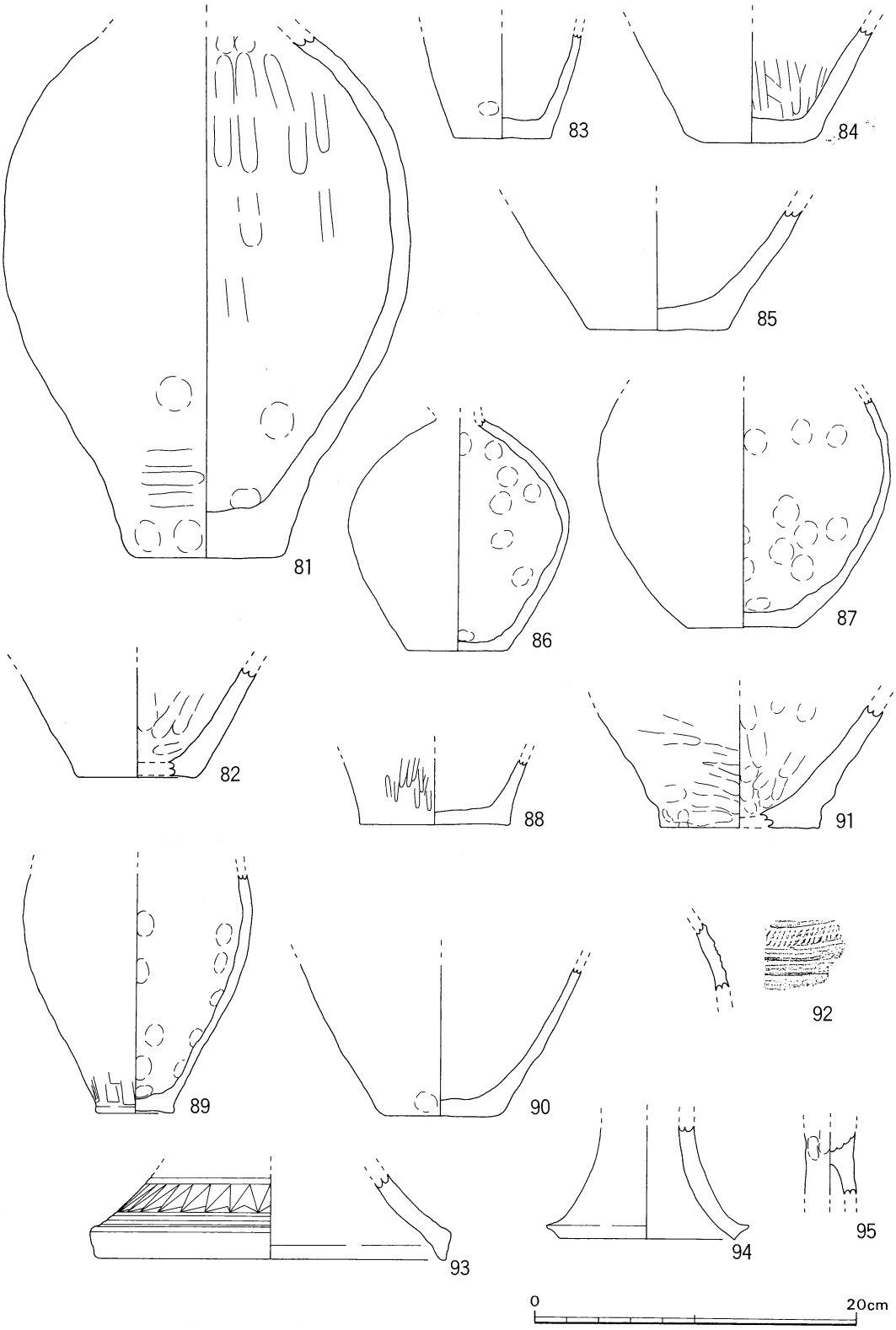
第31図　ＳＫ２・３出土土器実測図



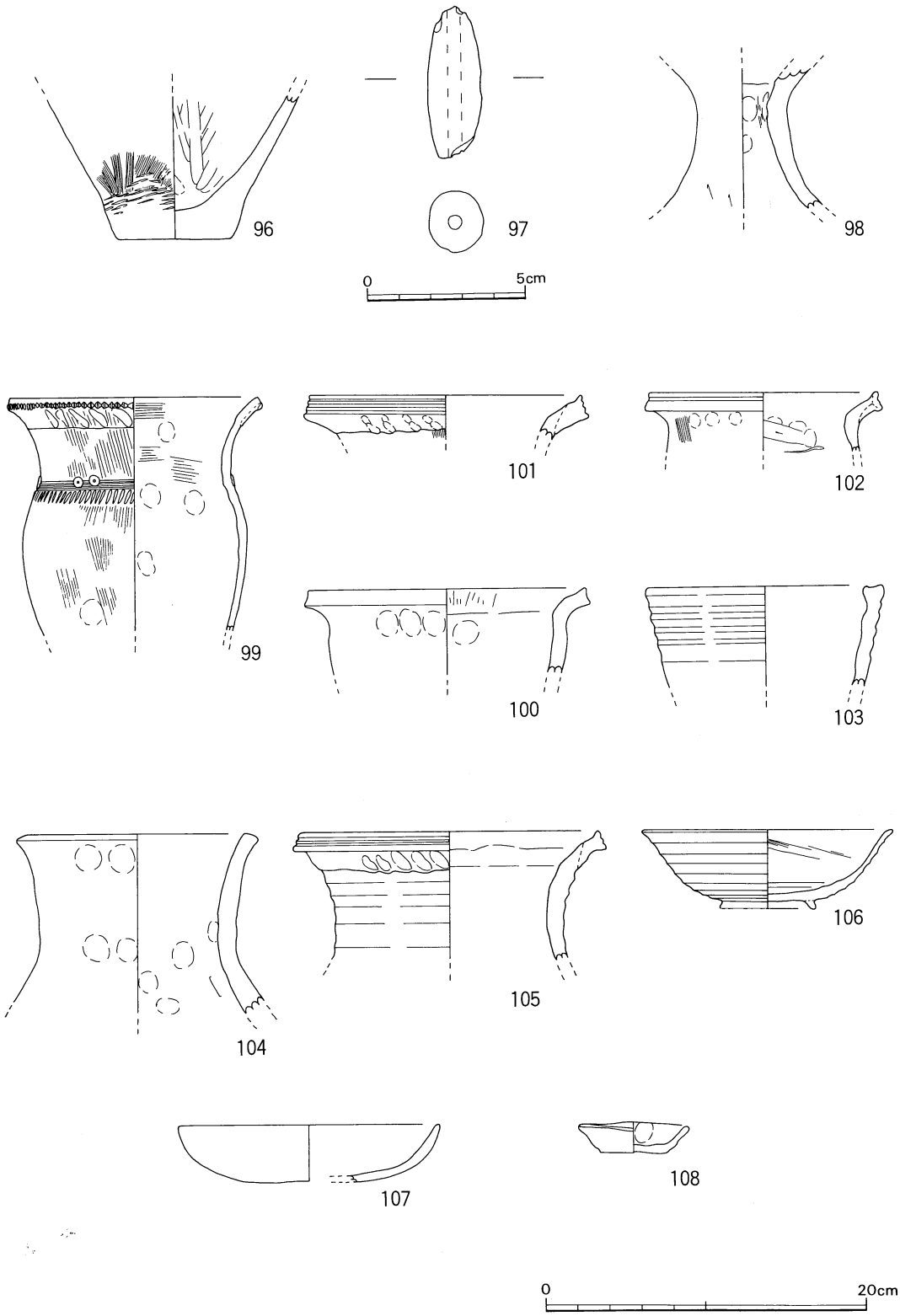
第32図　ＳＫ３・ＳＤ１・５・６，Ｄ区包含層出土土器実測図



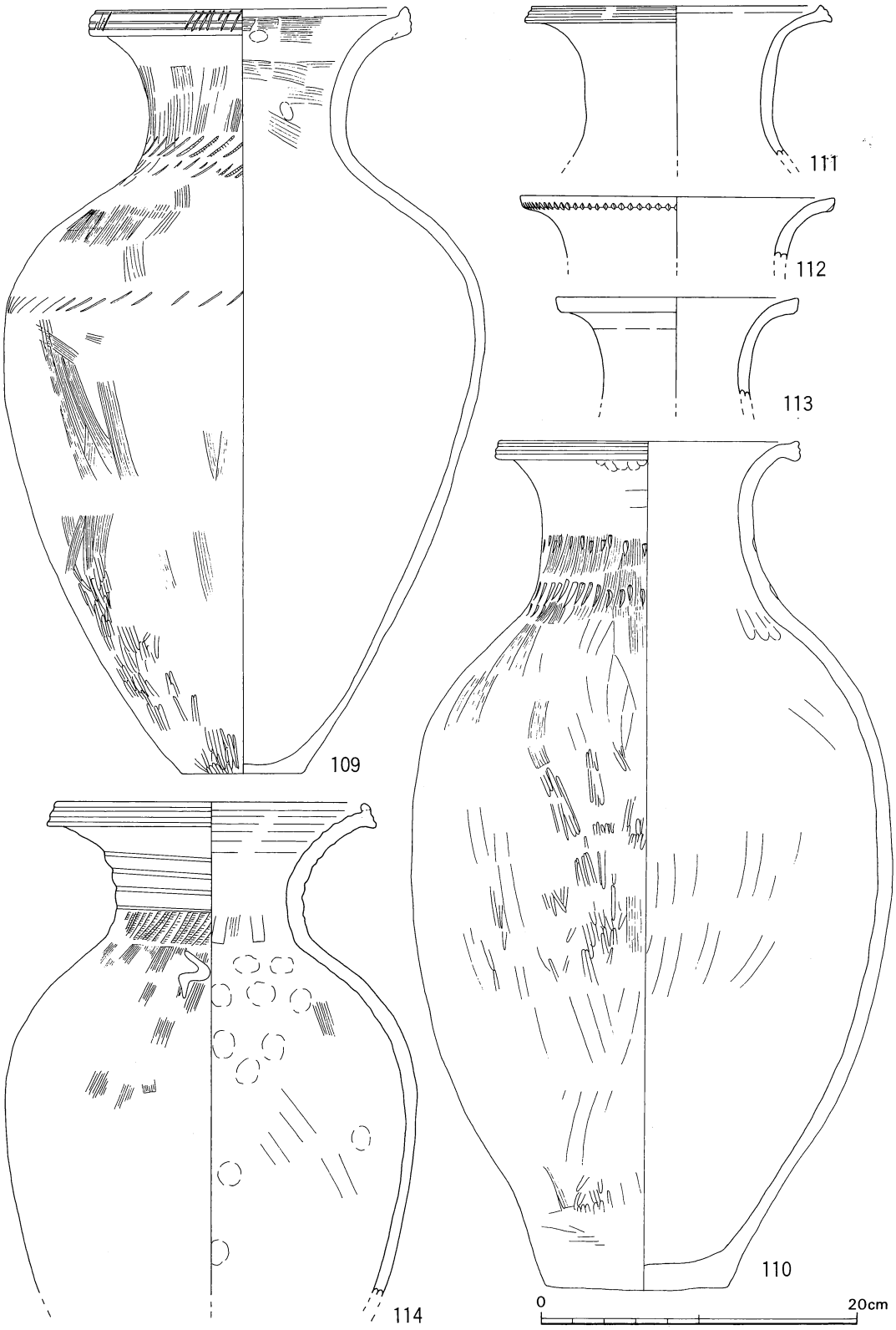
第33図　ＳＤ６出土土器実測図



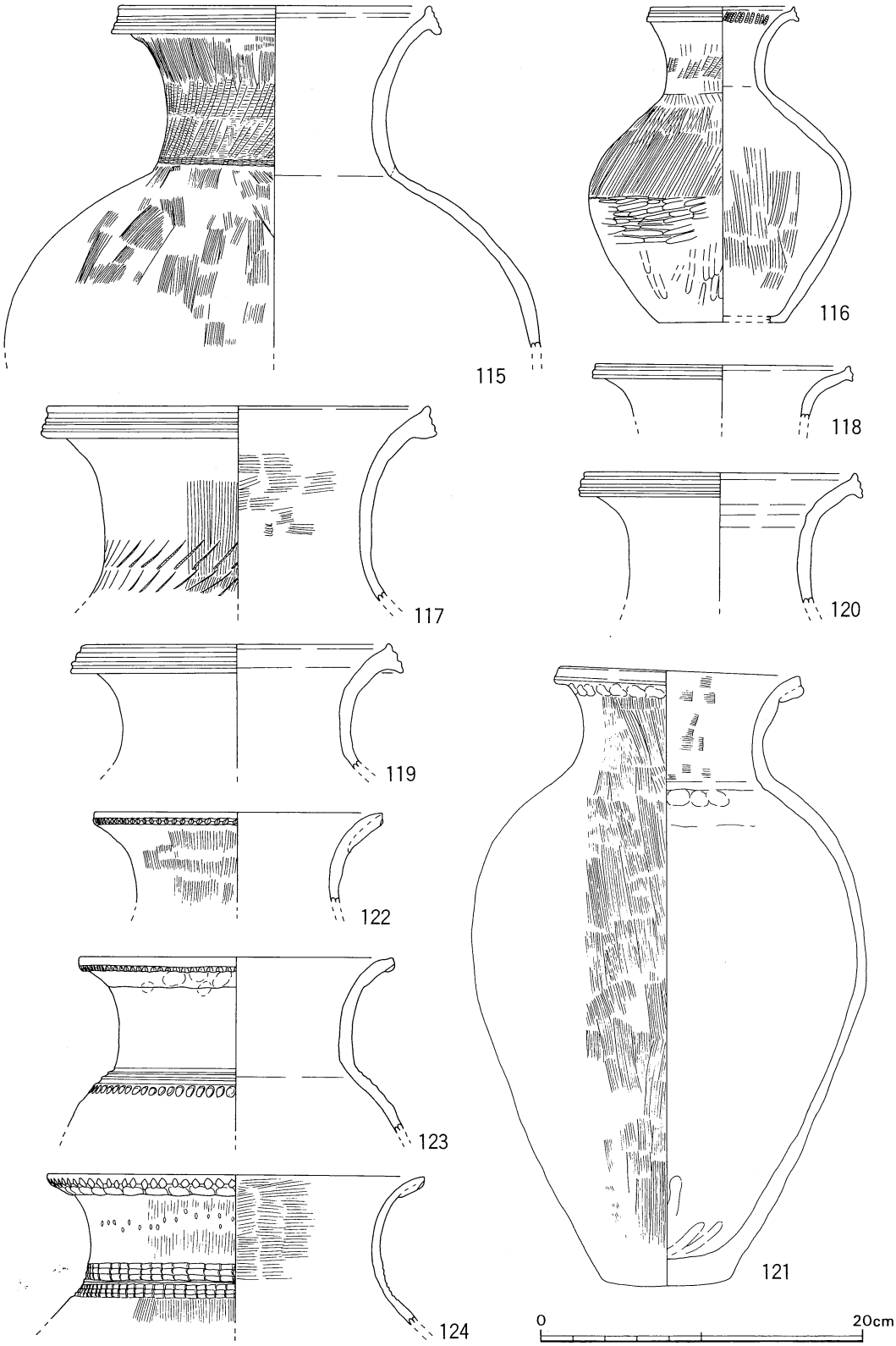
第34図　ＳＤ６出土土器実測図



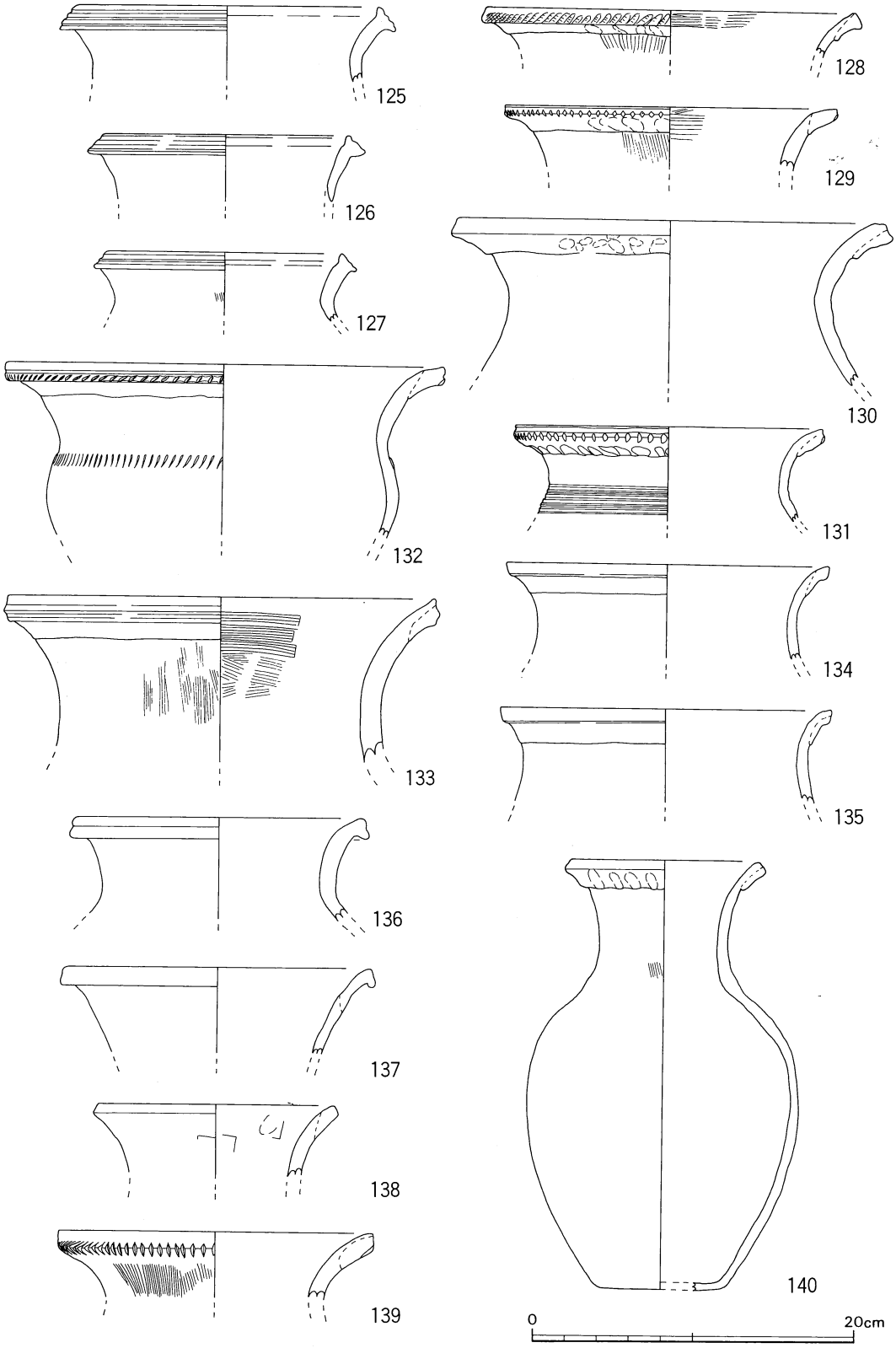
第35図　ＳＤ７，８，10，13～16，Ⅱ－Ａ区 Pit 出土土器実測図



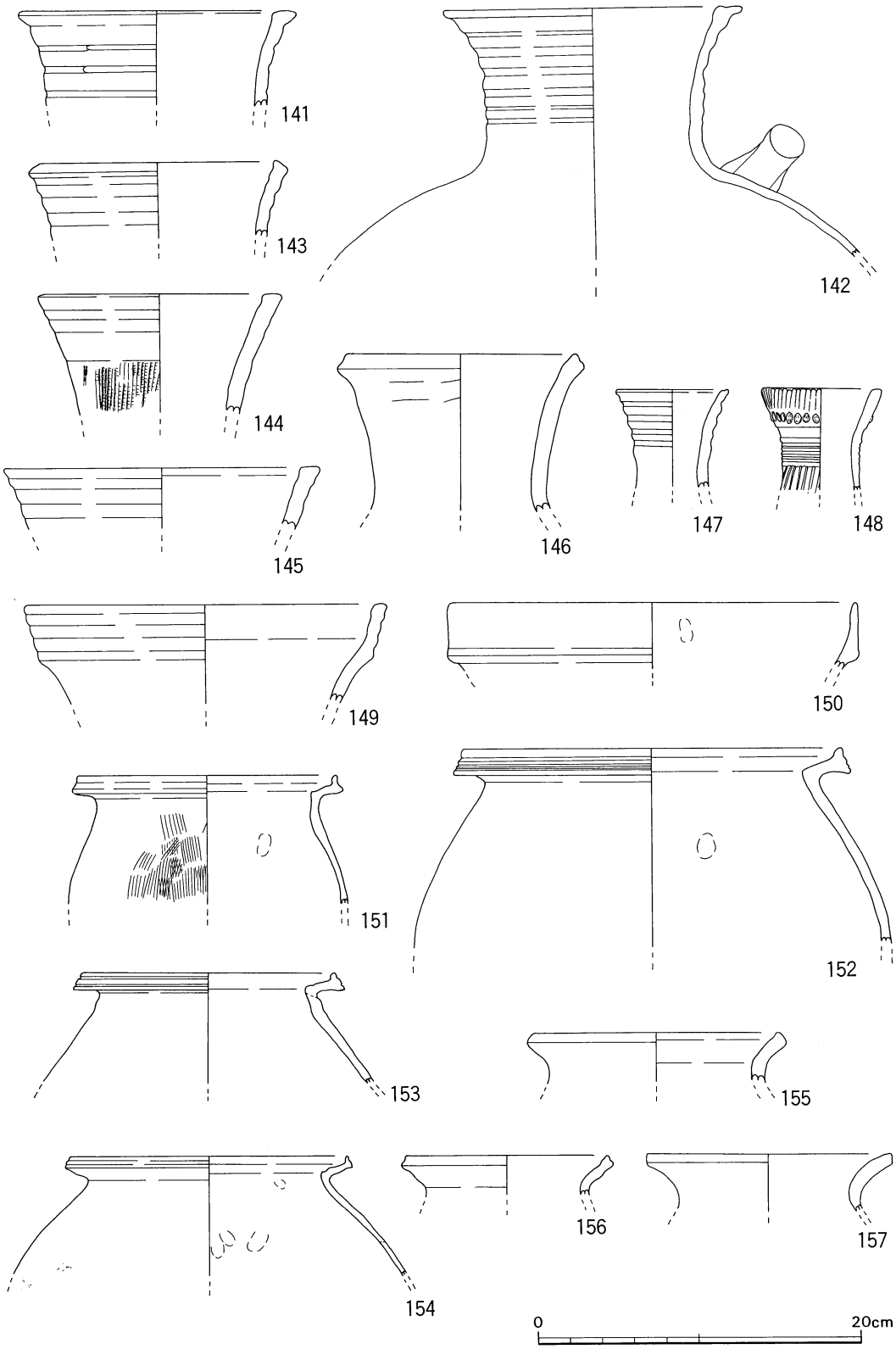
第36図　ＳＸ１出土土器実測図



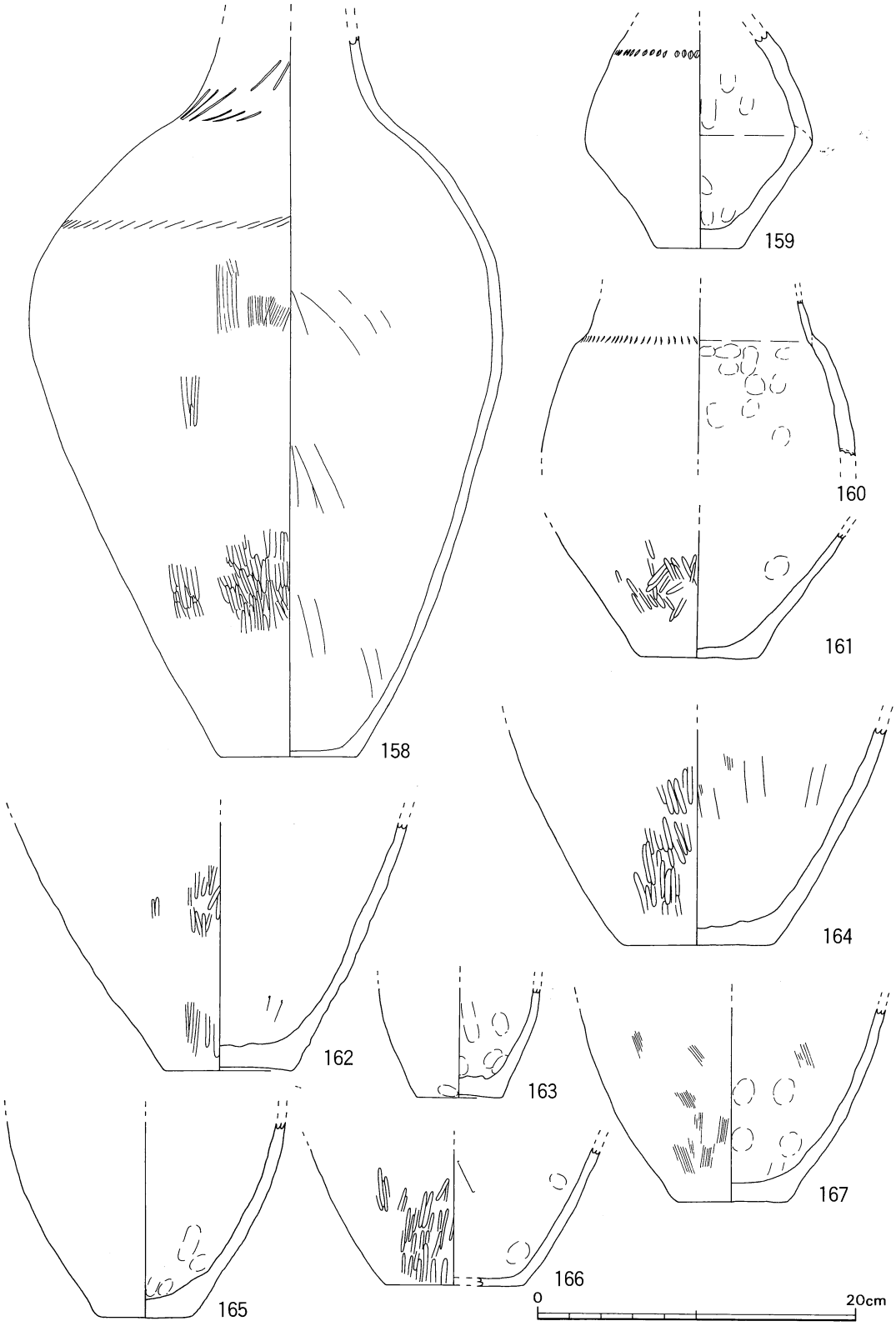
第37図　ＳＸ１出土土器実測図



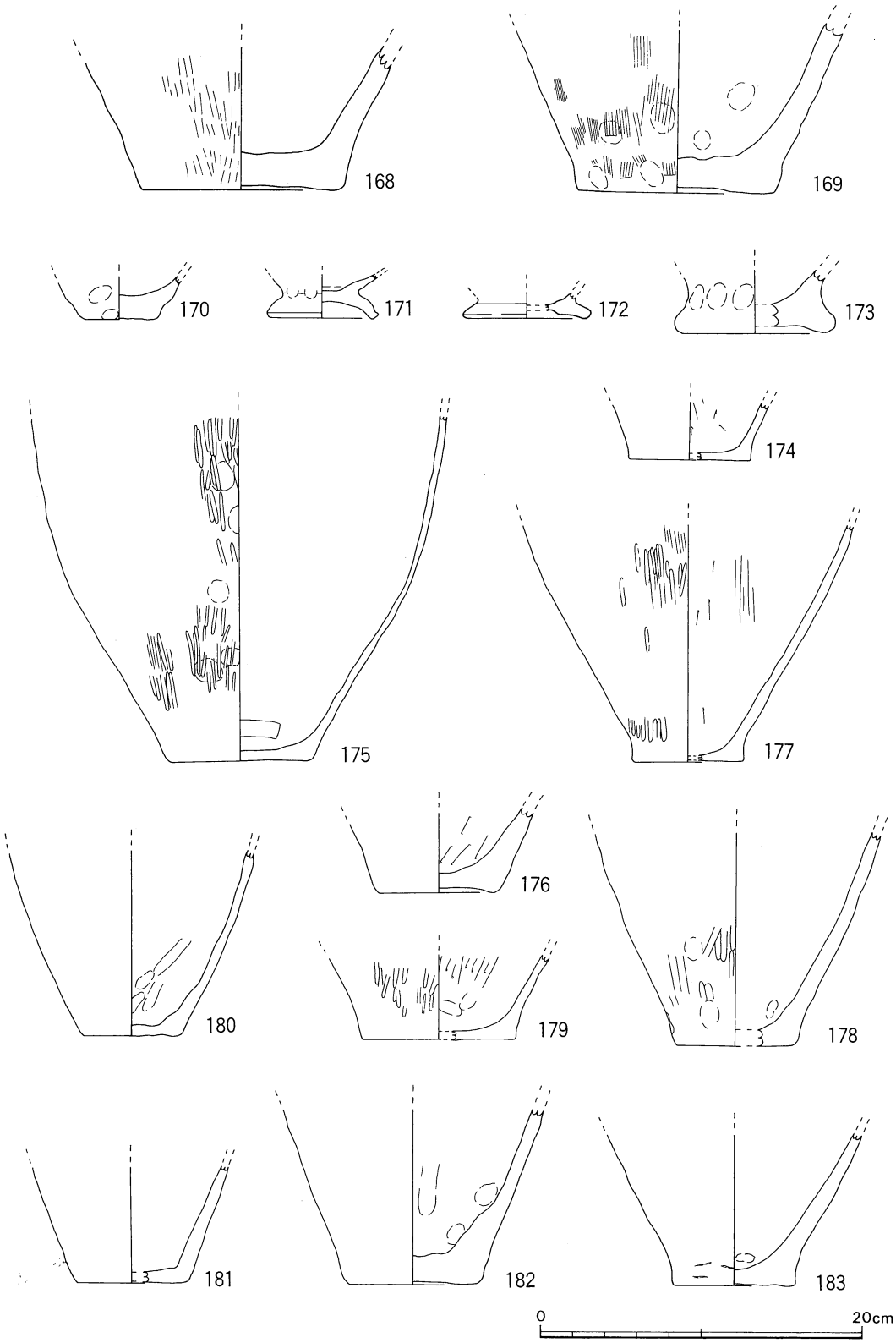
第38図　ＳＸ１出土土器実測図



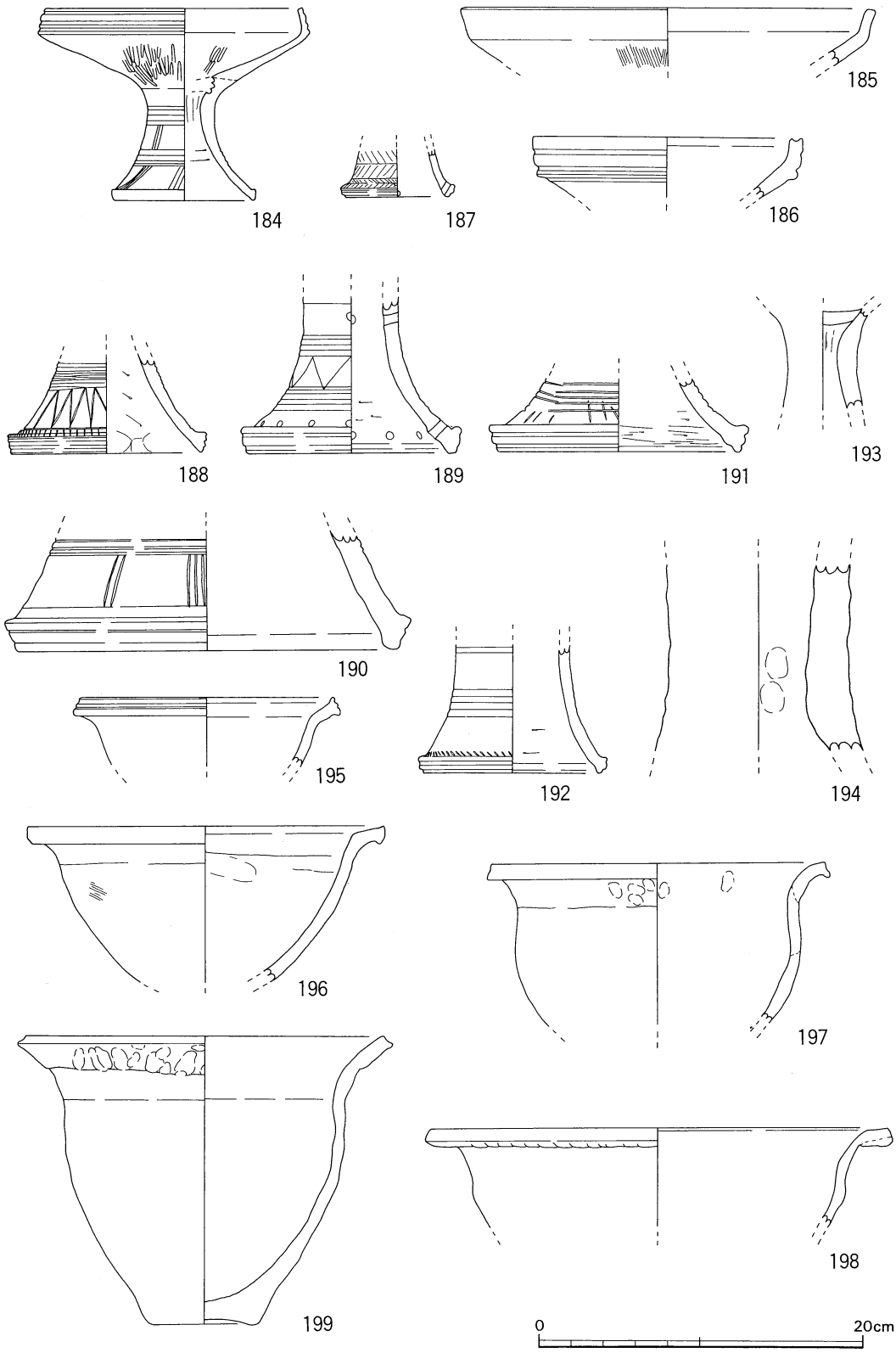
第39図　ＳＸ１出土土器実測図



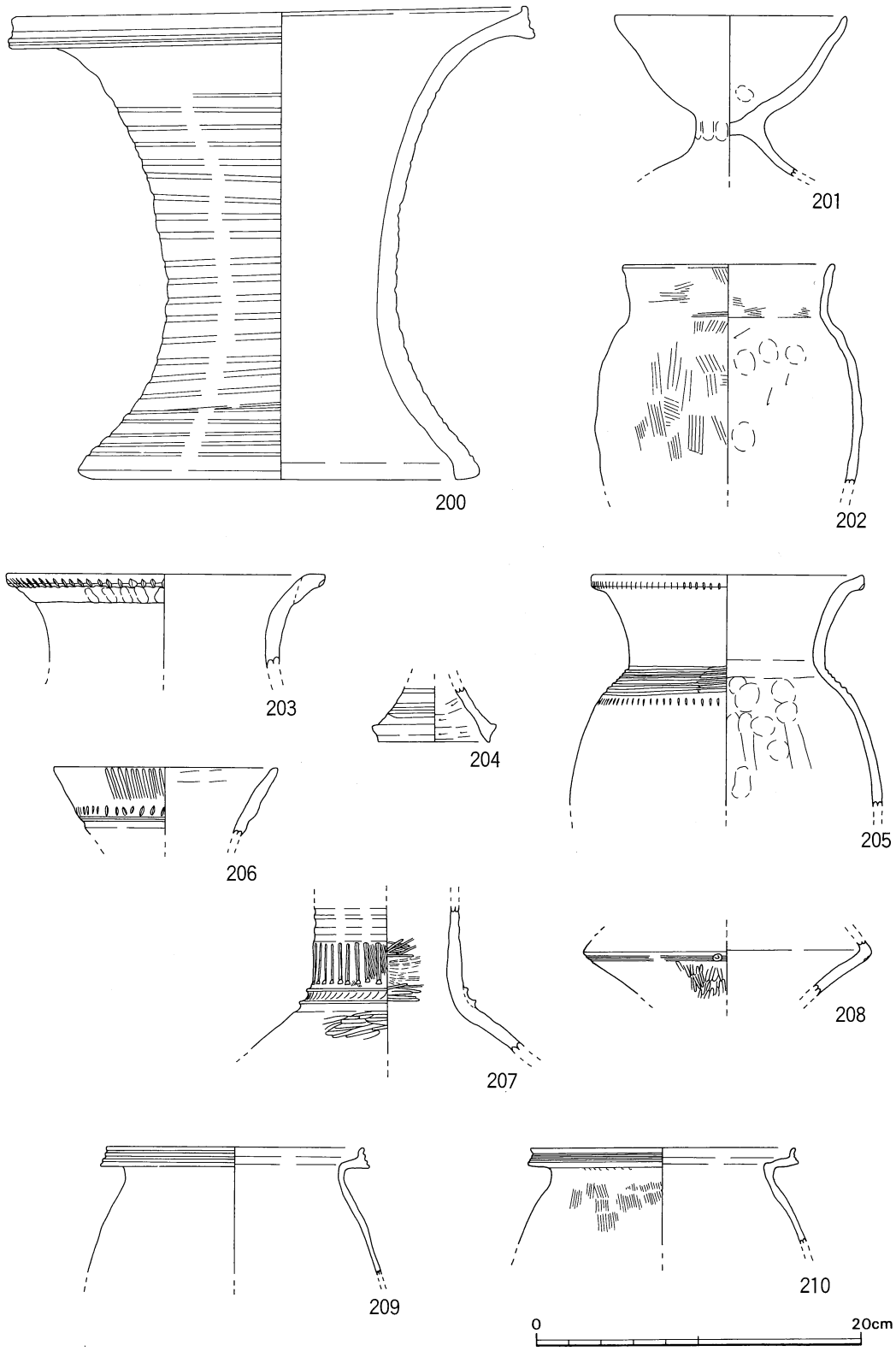
第40図　ＳＸ１出土土器実測図



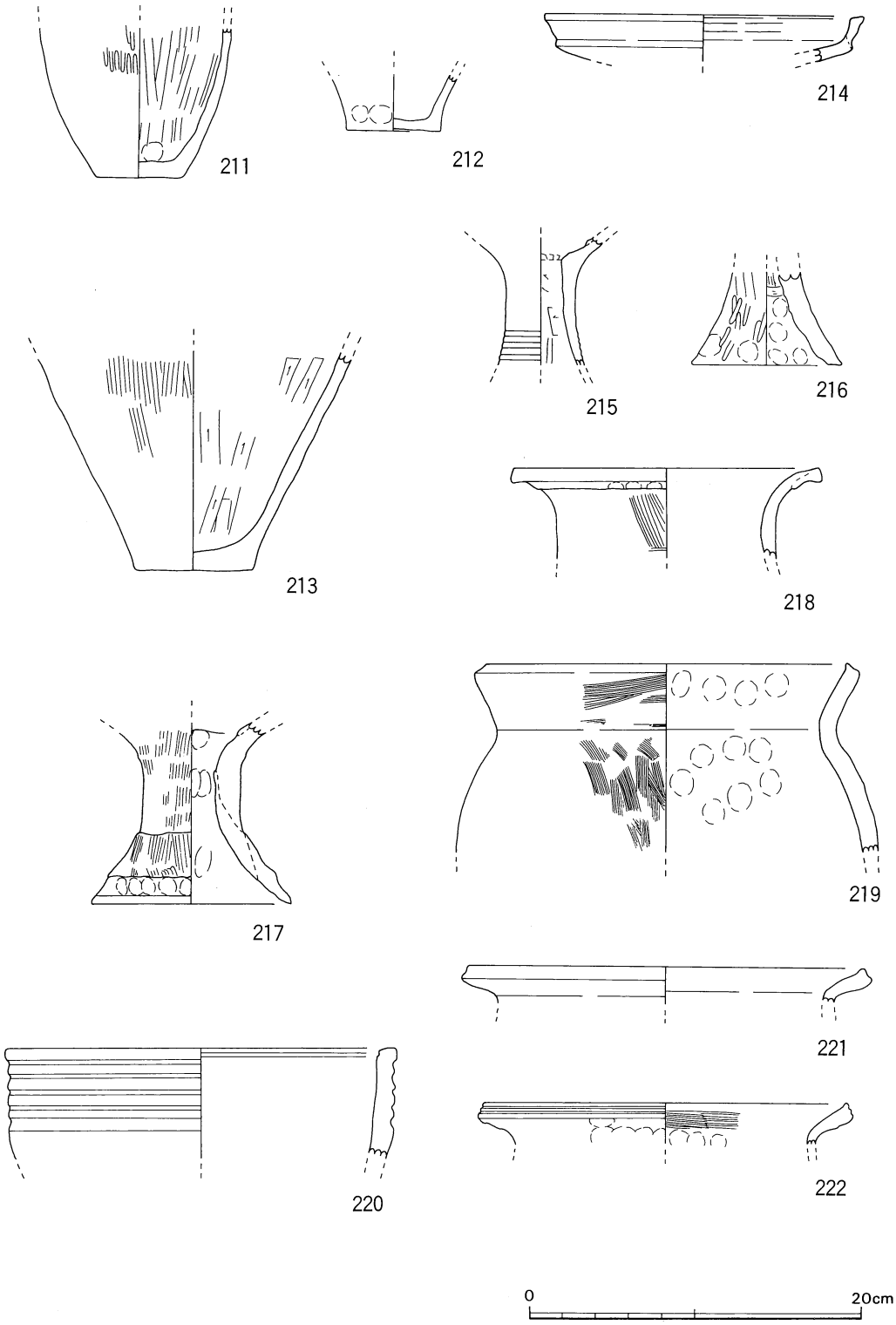
第41図　ＳＸ１出土土器実測図



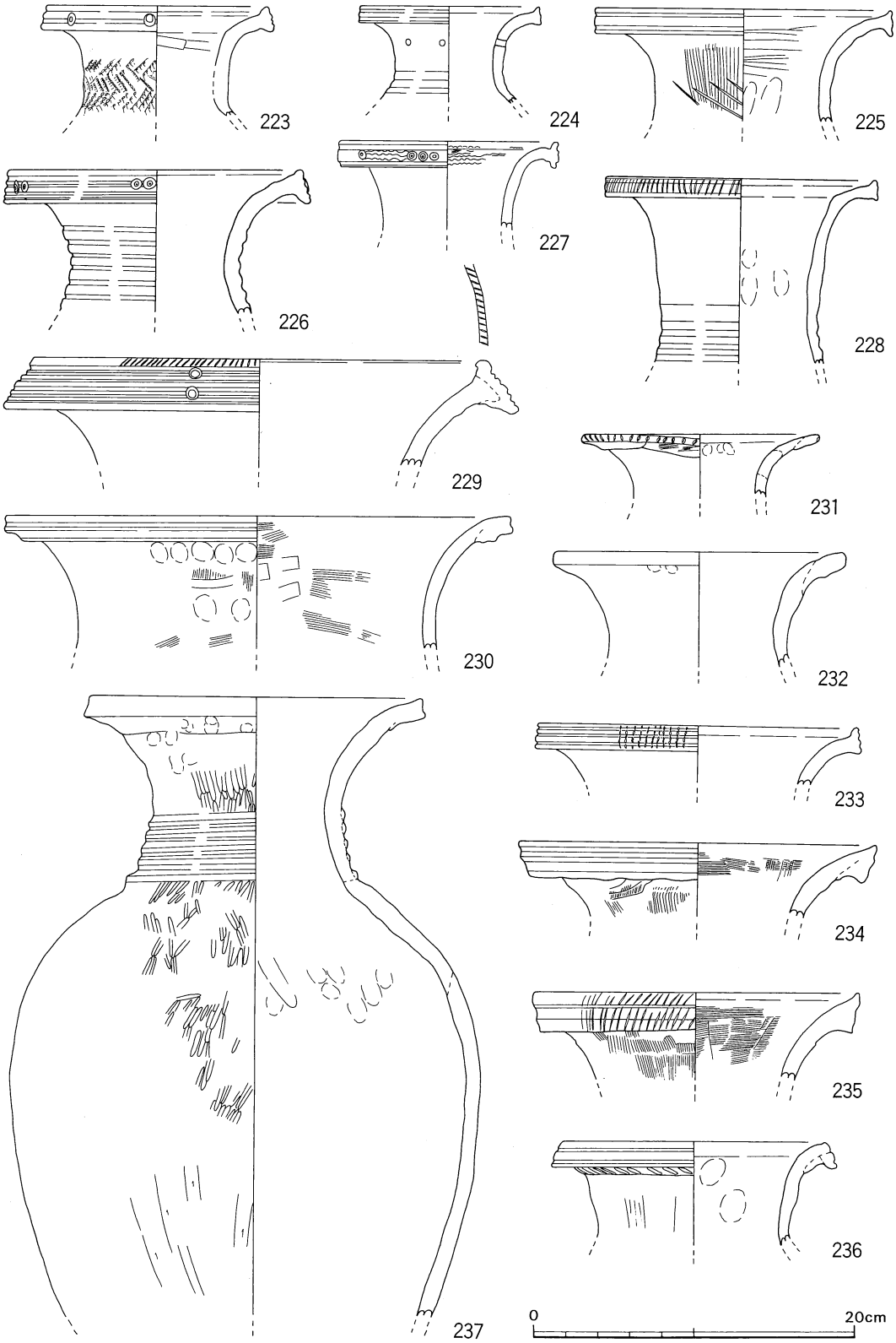
第42図　ＳＸ１出土土器実測図



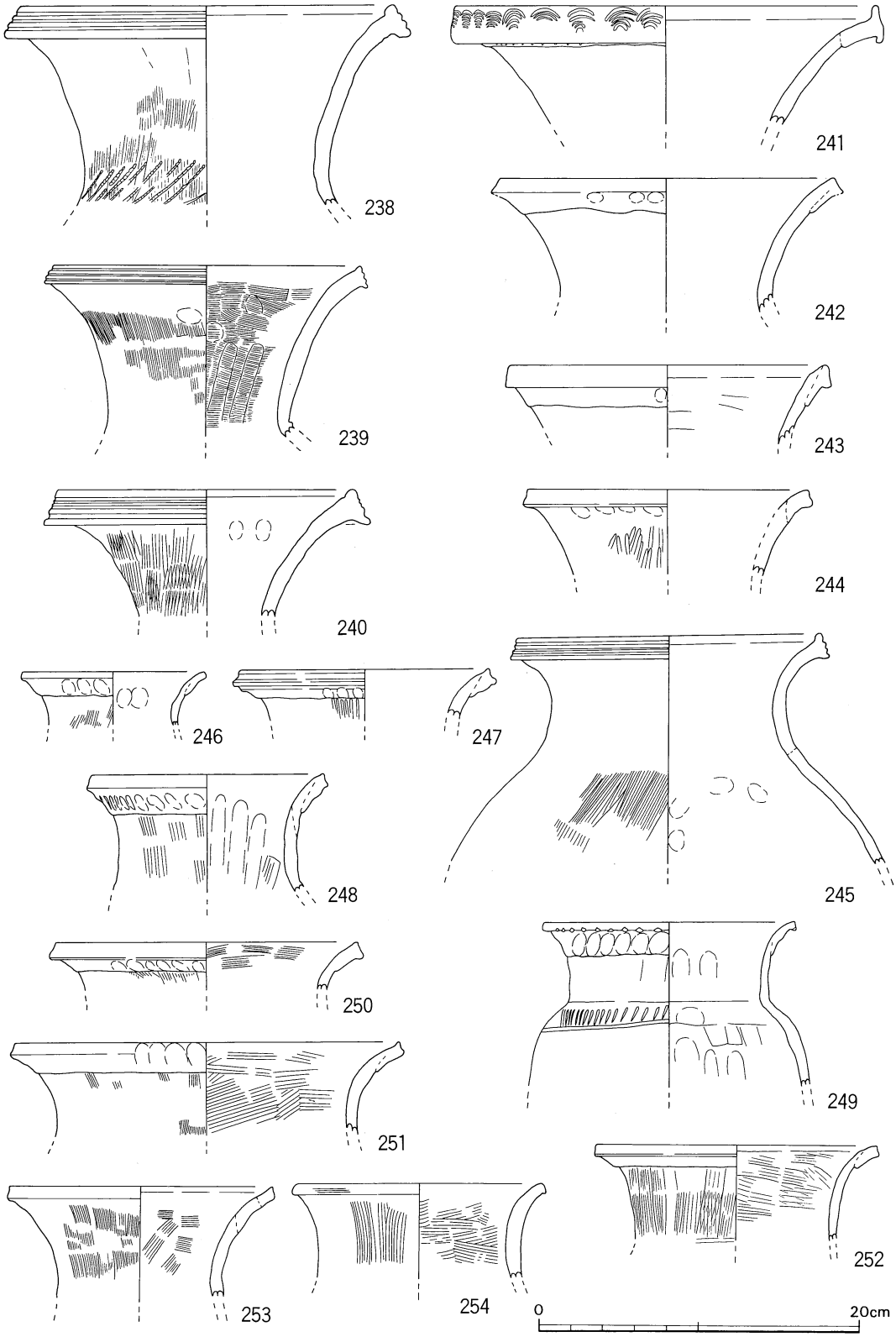
第43図　ＳＸ１，包含層出土土器実測図



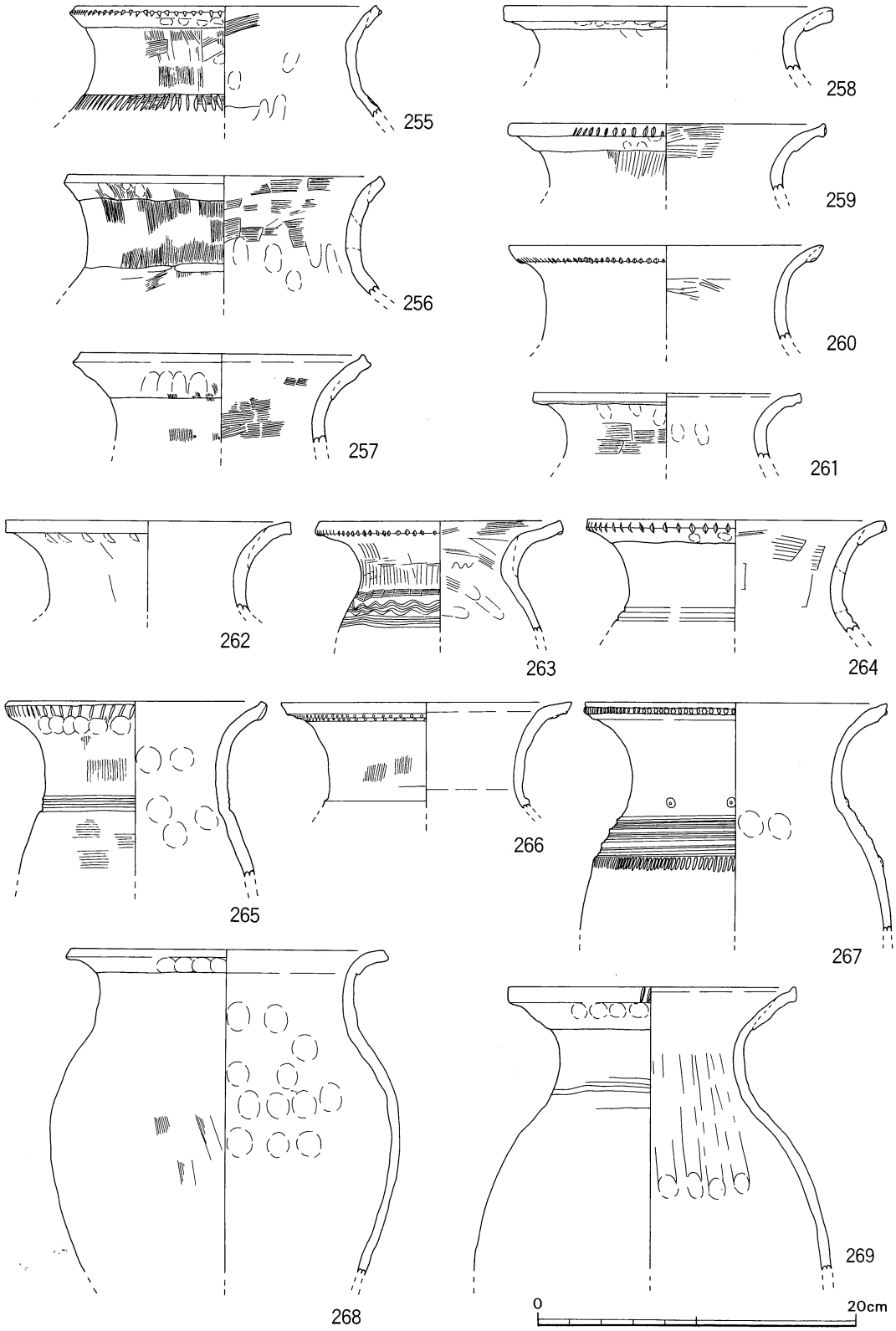
第44図　包含層出土土器実測図



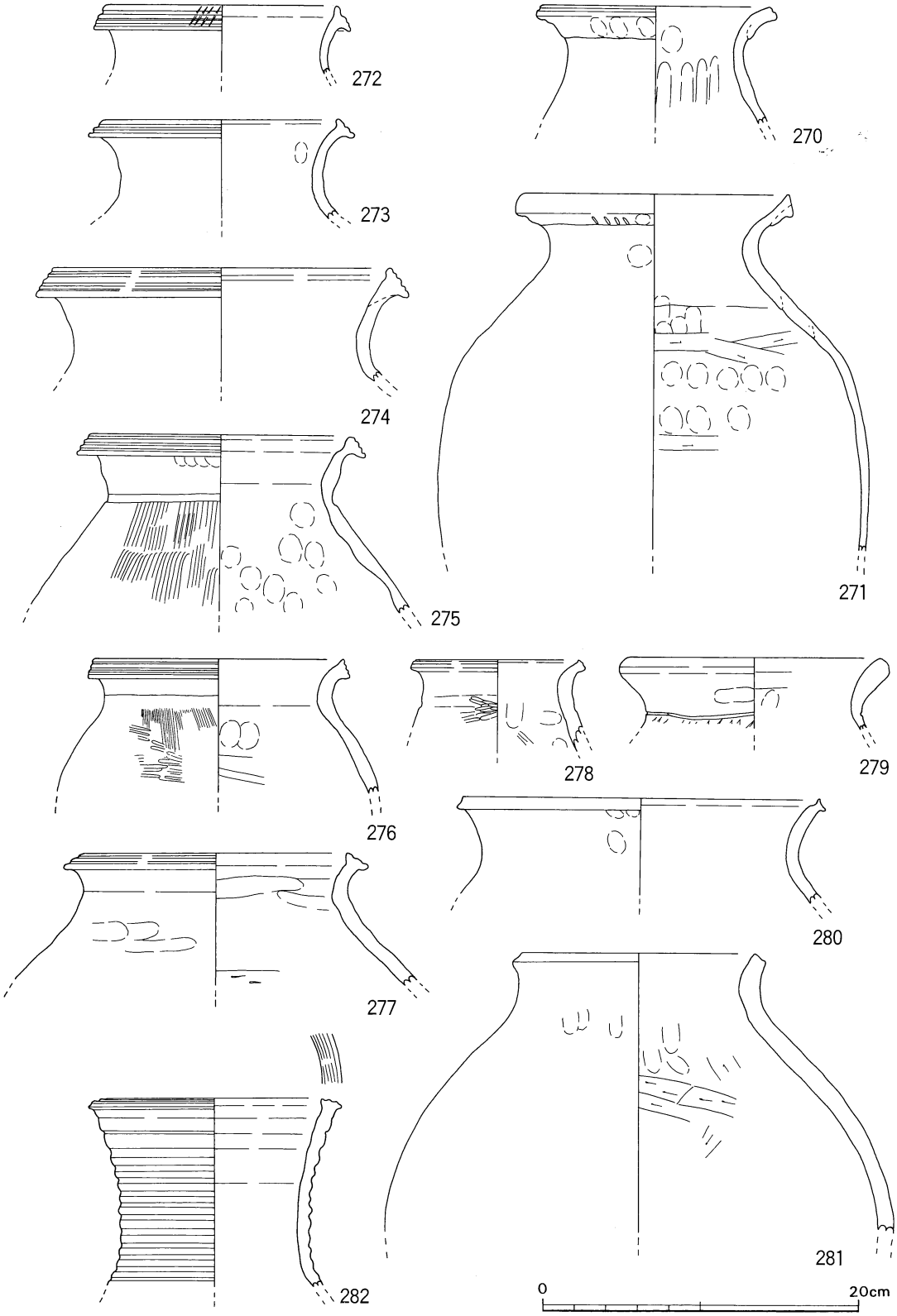
第45図　Ⅱ－Ａ区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



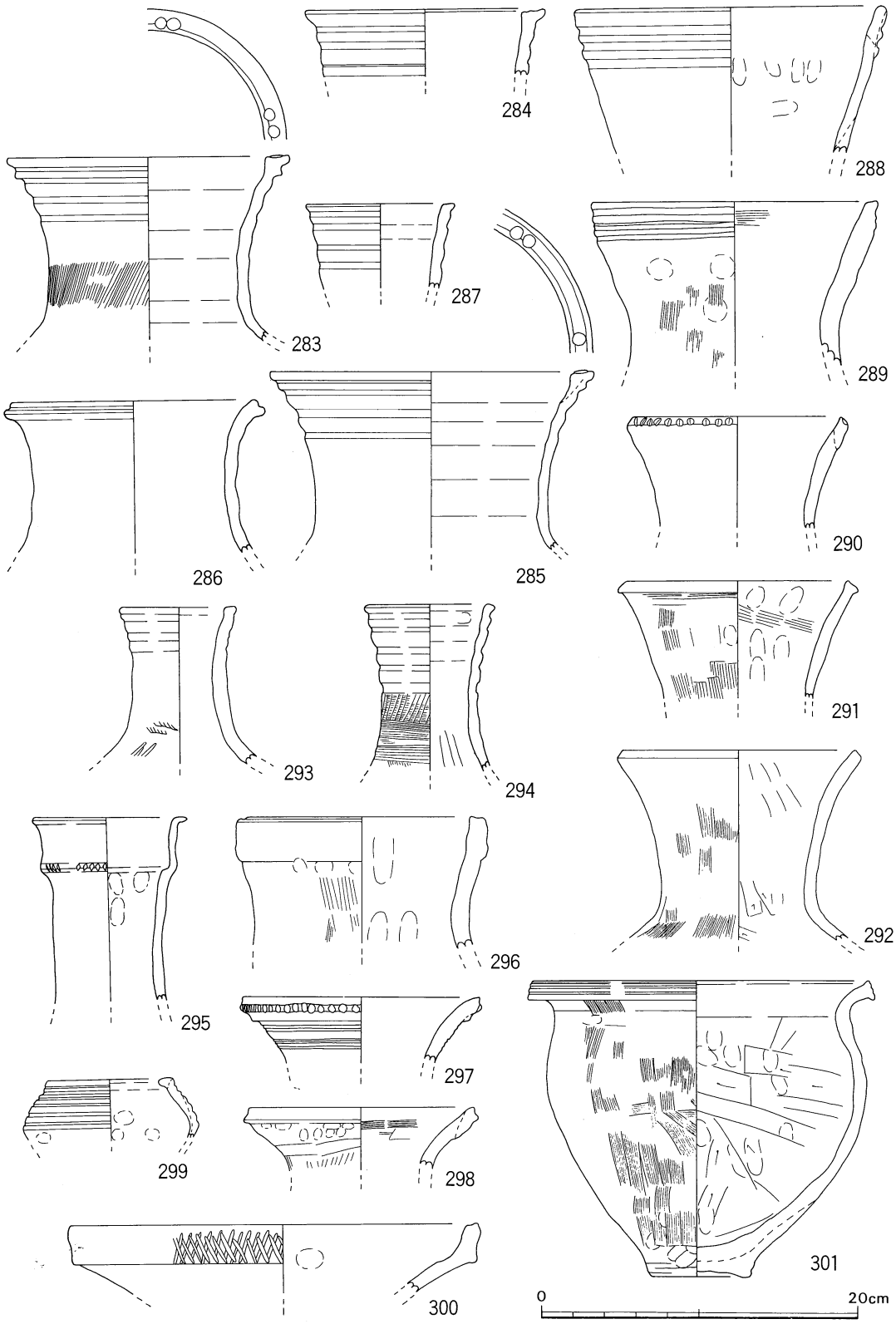
第46図　Ⅱ－A区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



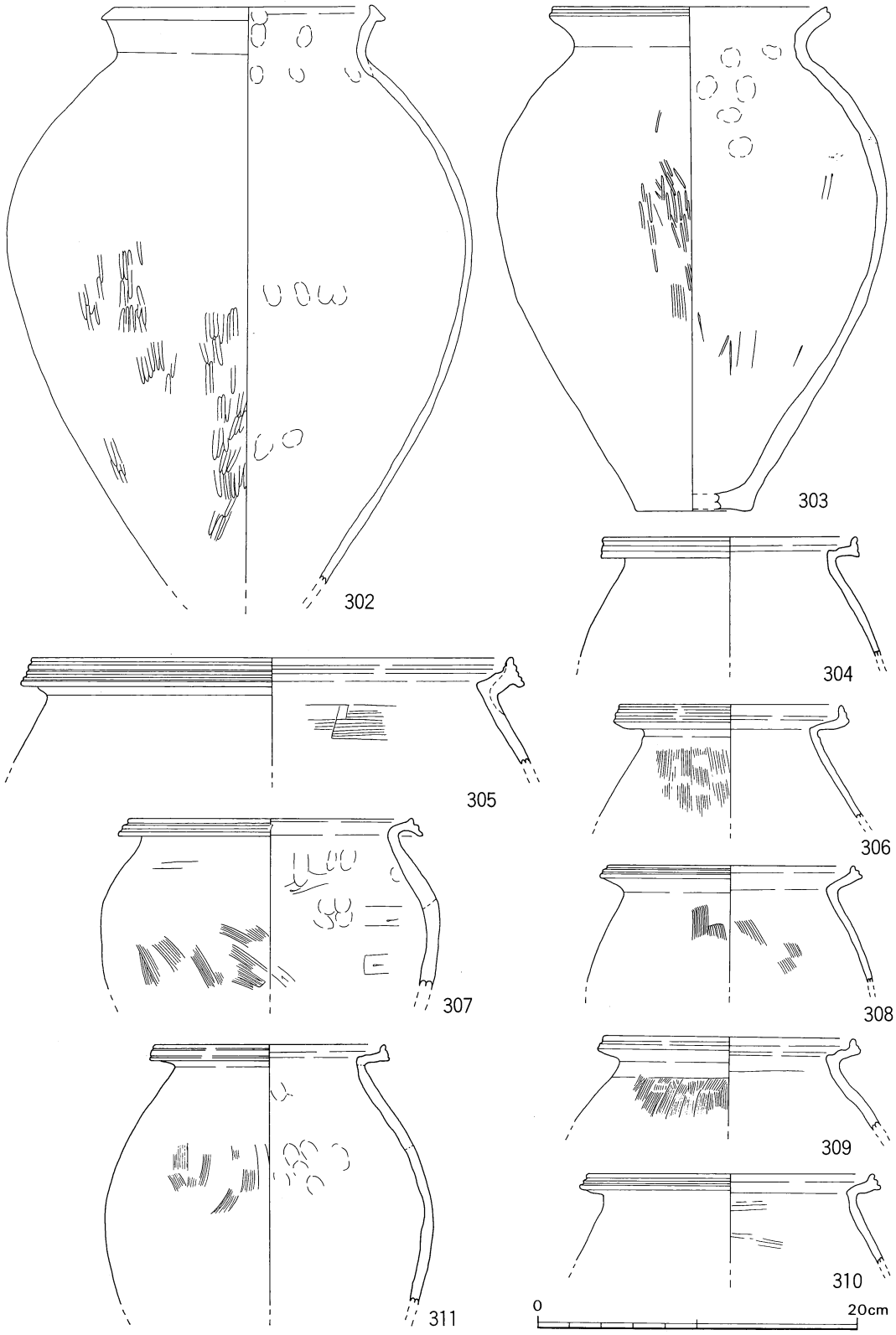
第47図　Ⅱ－Ａ区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



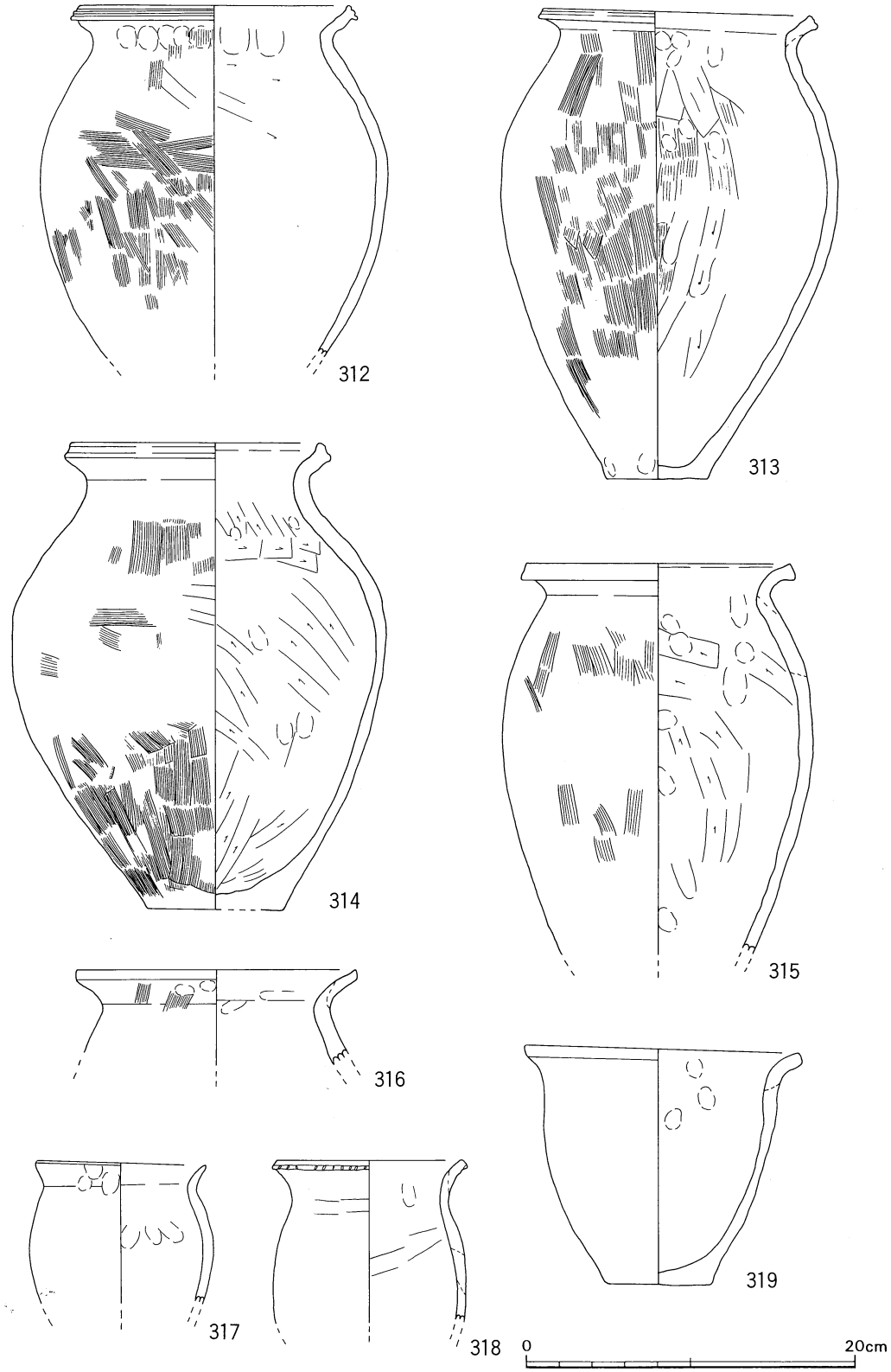
第48図　Ⅱ－Ａ区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



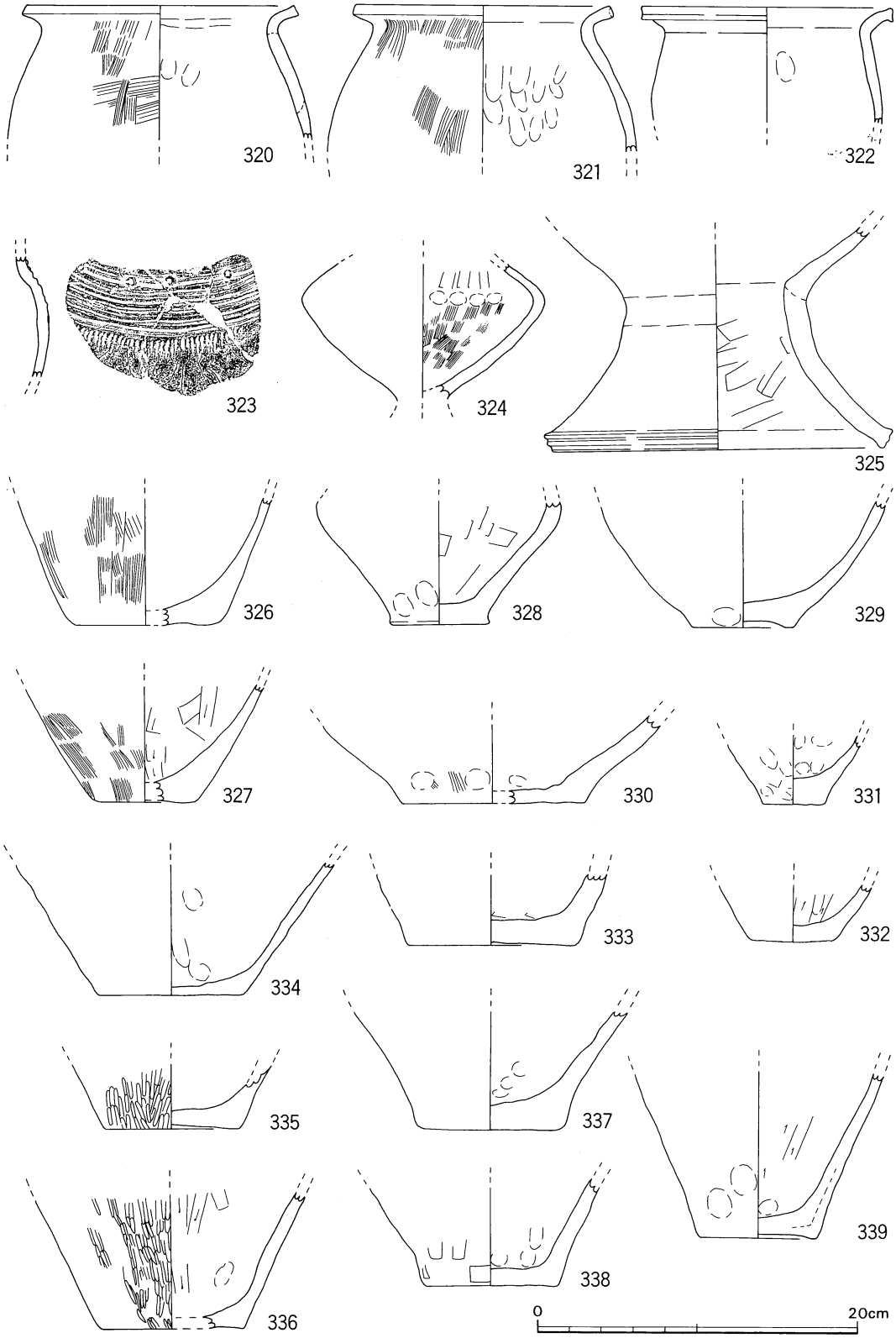
第49図　Ⅱ－Ａ区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



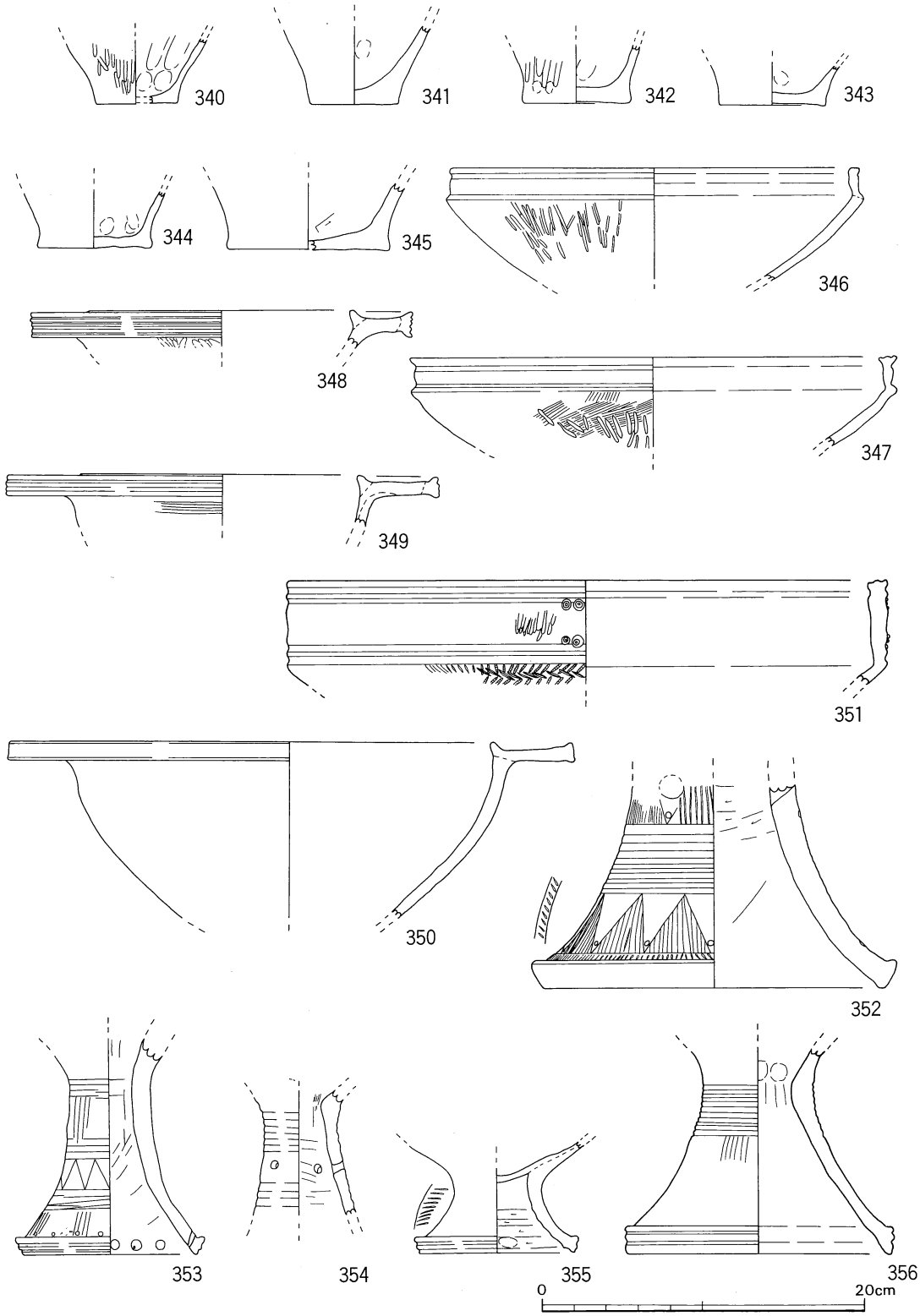
第50図　Ⅱ－Ａ区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



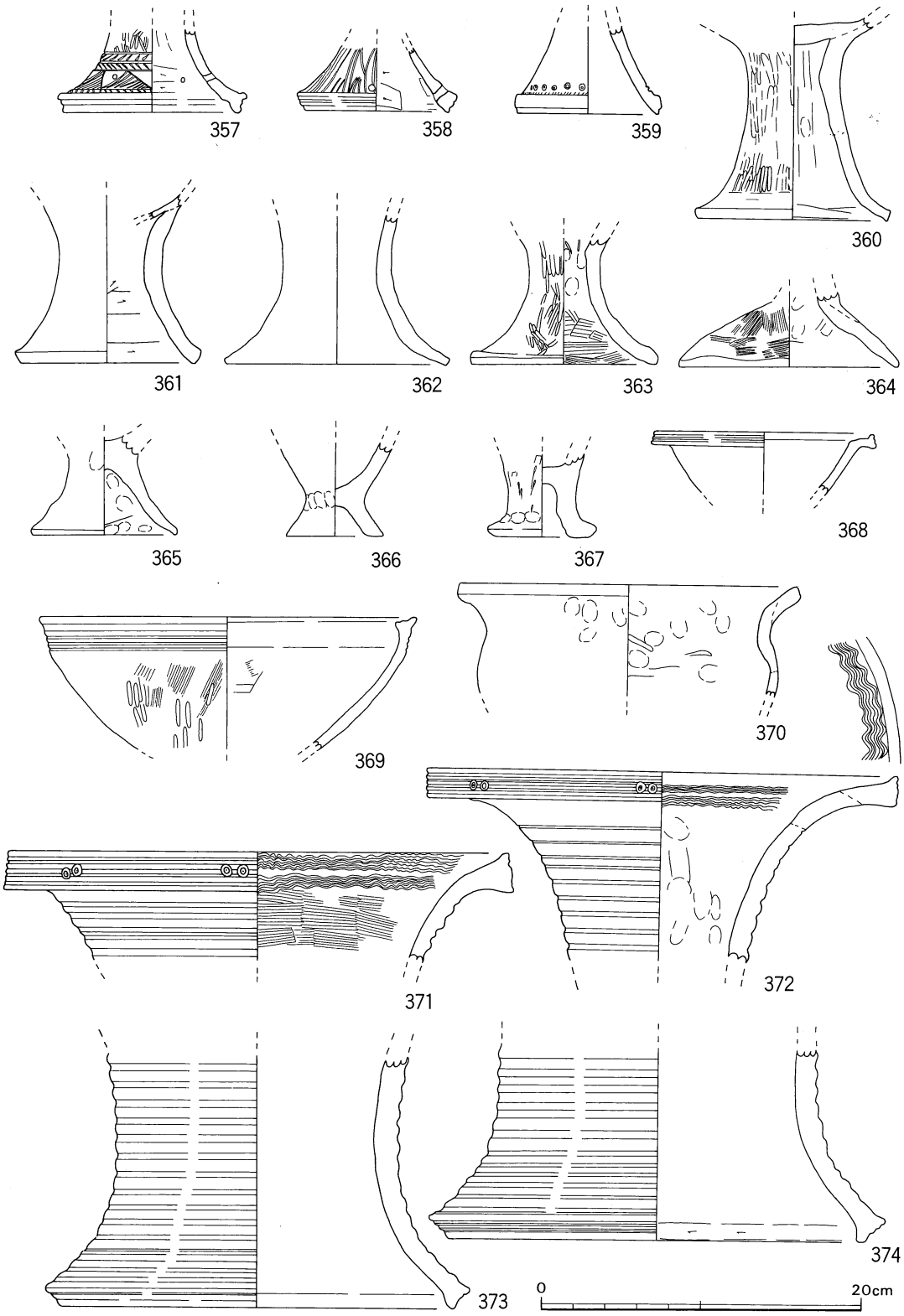
第51図　Ⅱ－Ａ区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



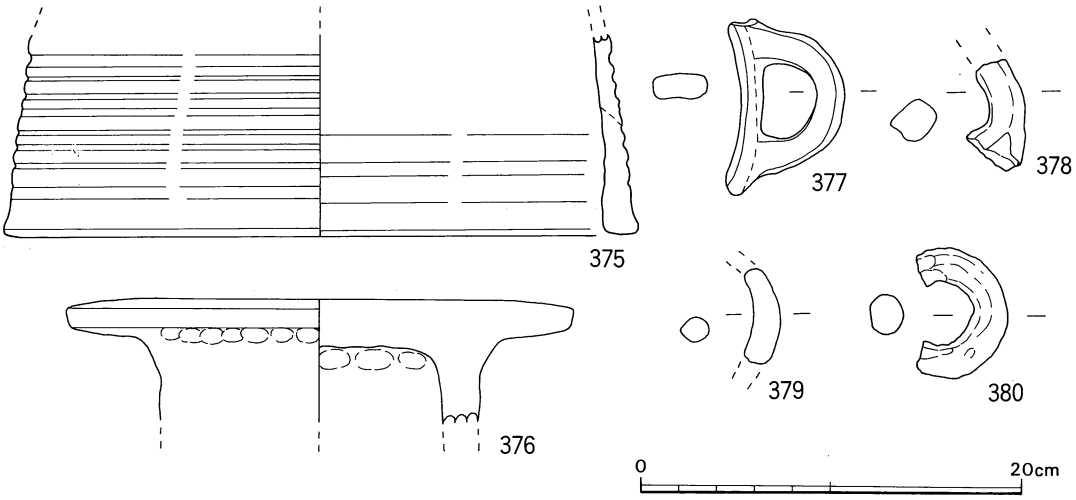
第52図　Ⅱ－Ａ区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



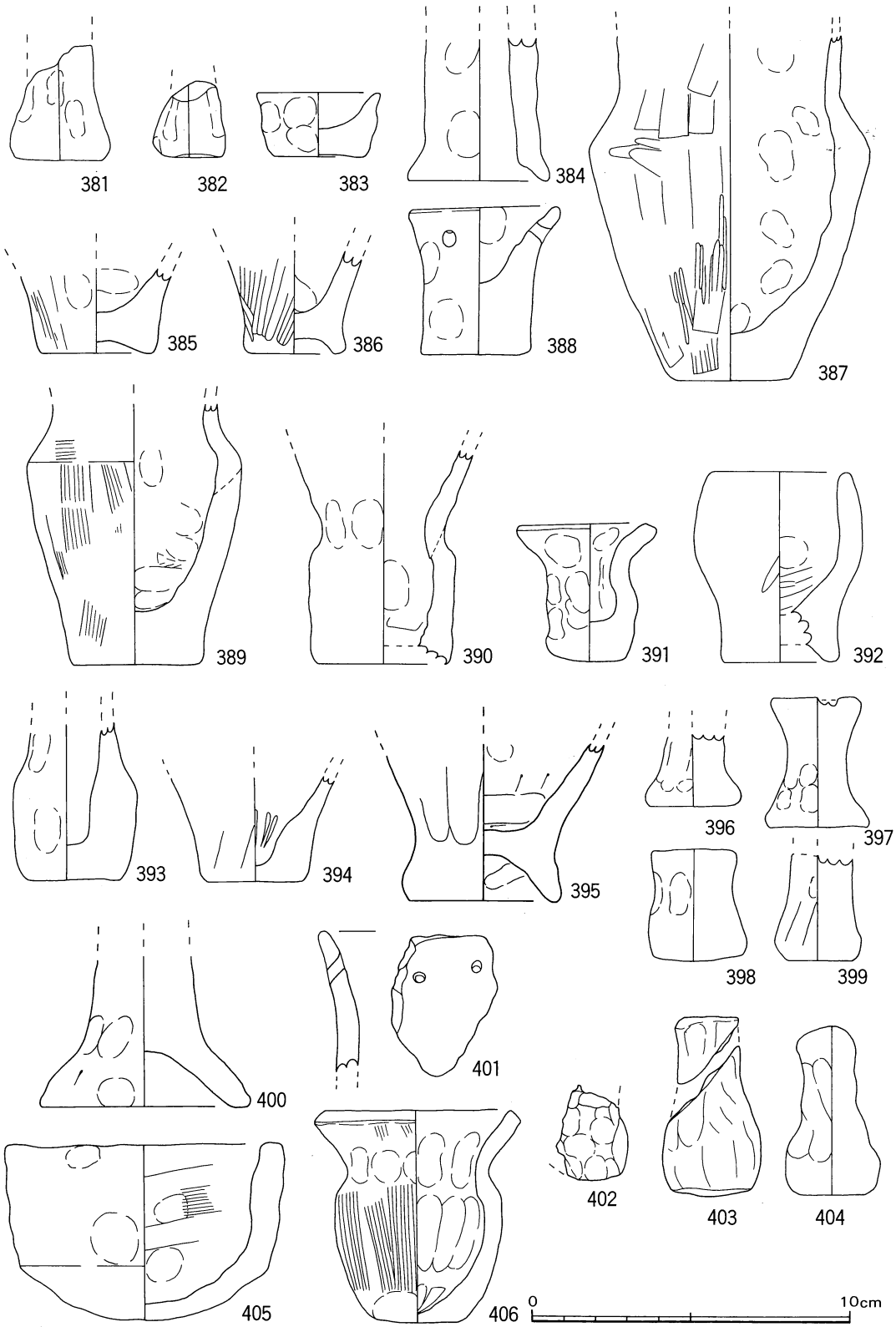
第53図　Ⅱ－Ａ区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



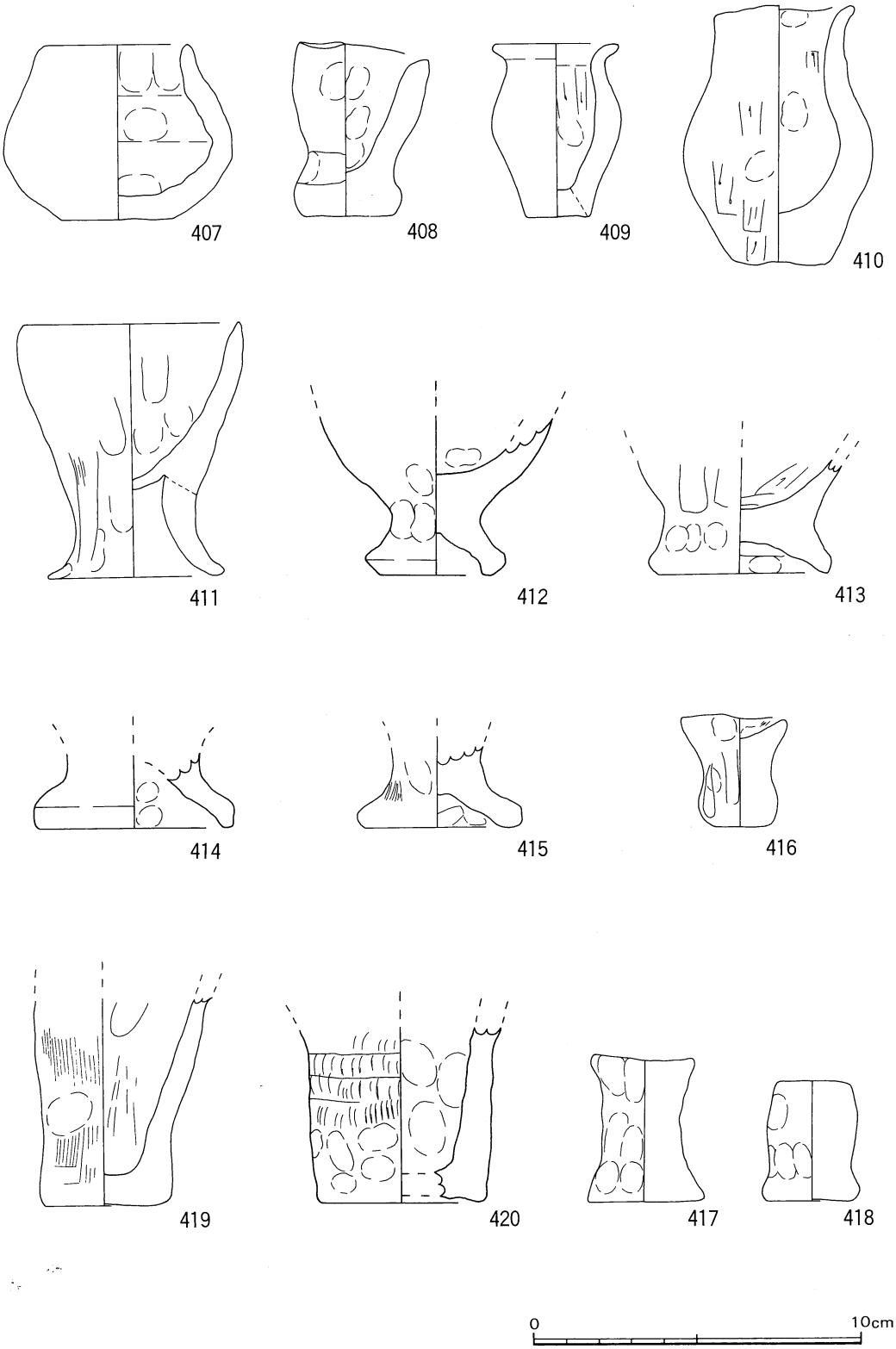
第54図　Ⅱ－Ａ区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



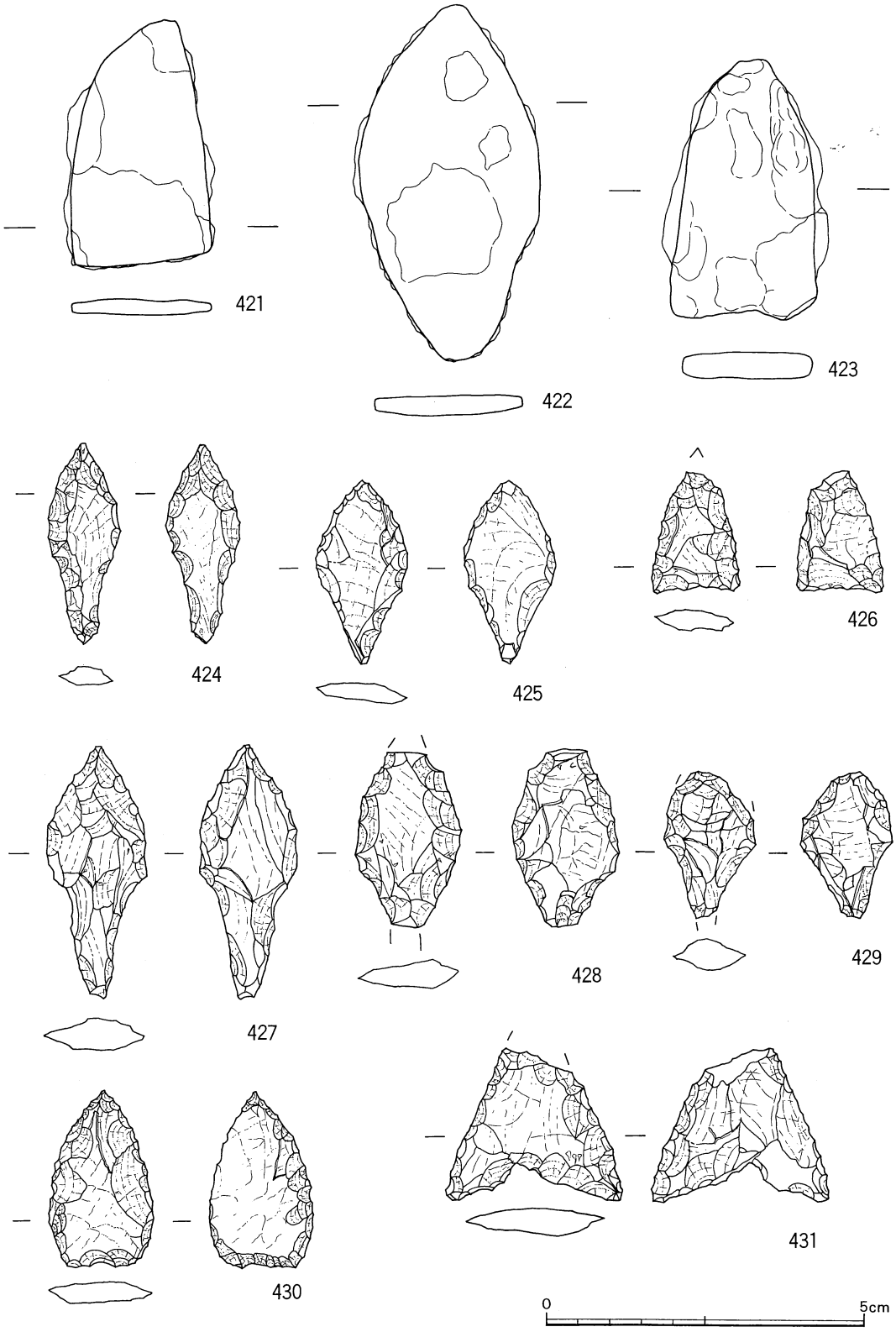
第55図　Ⅱ－Ａ区旧谷状地形埋土中出土土器実測図



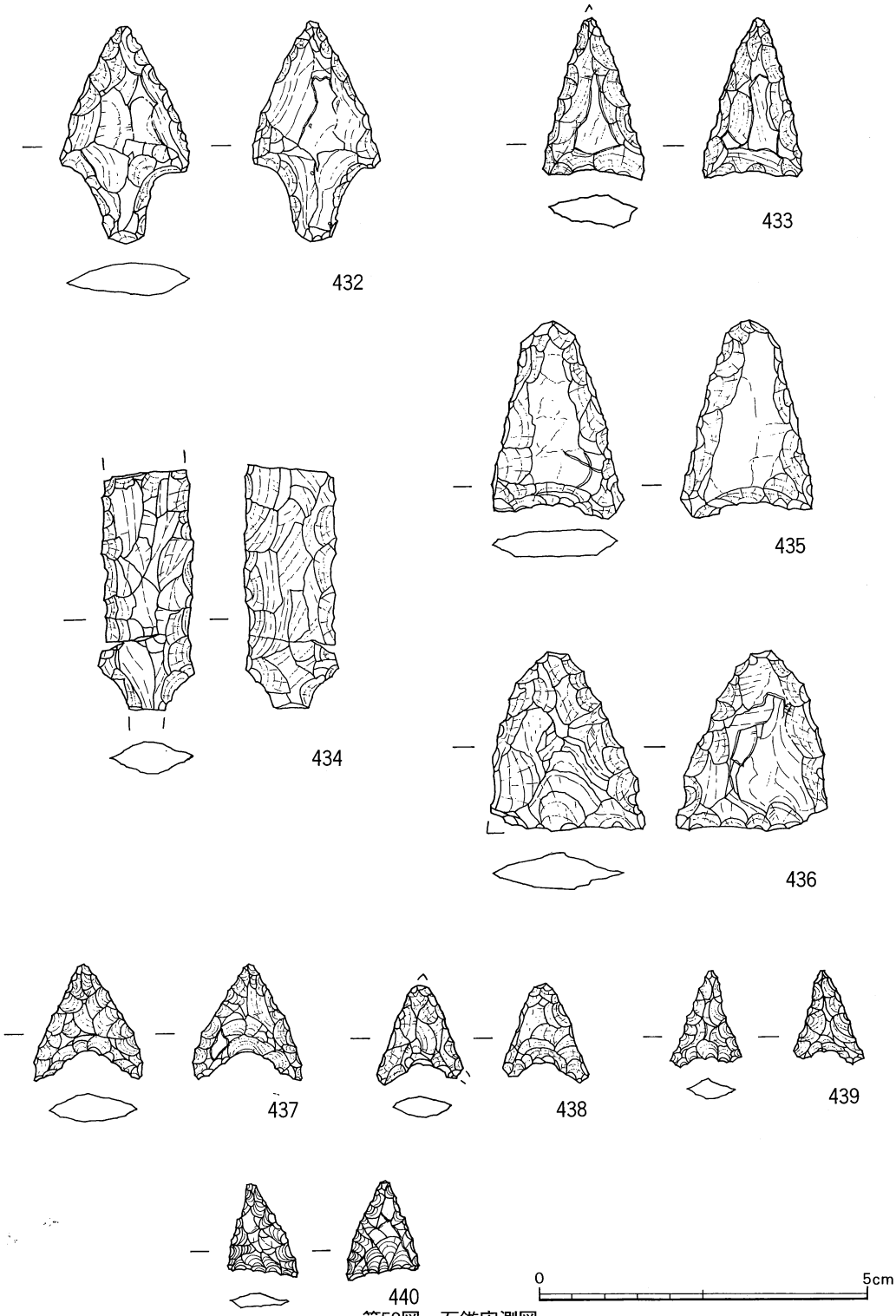
第56図　ミニチュア土器実測図



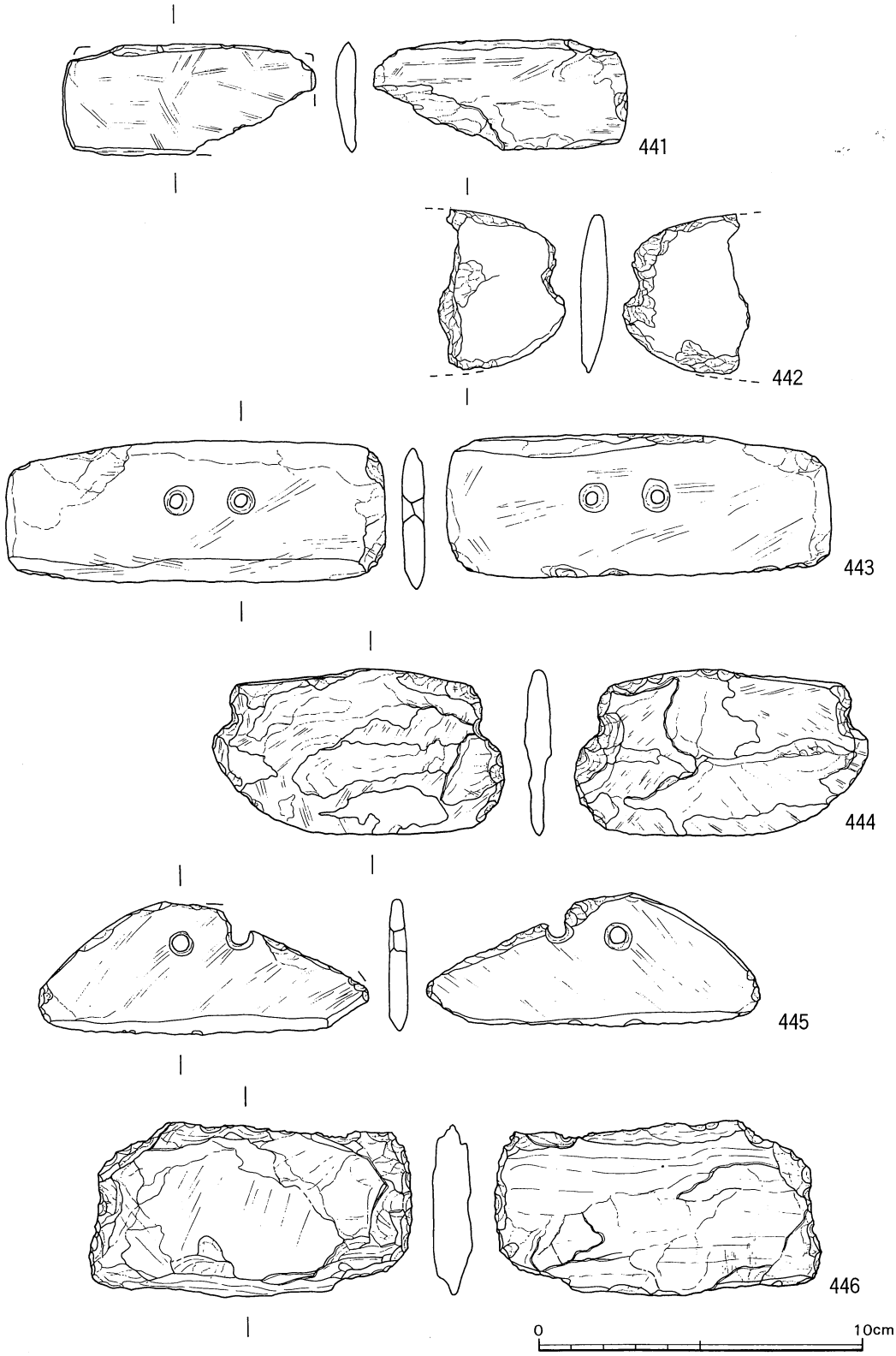
第57図　ミニチュア土器実測図



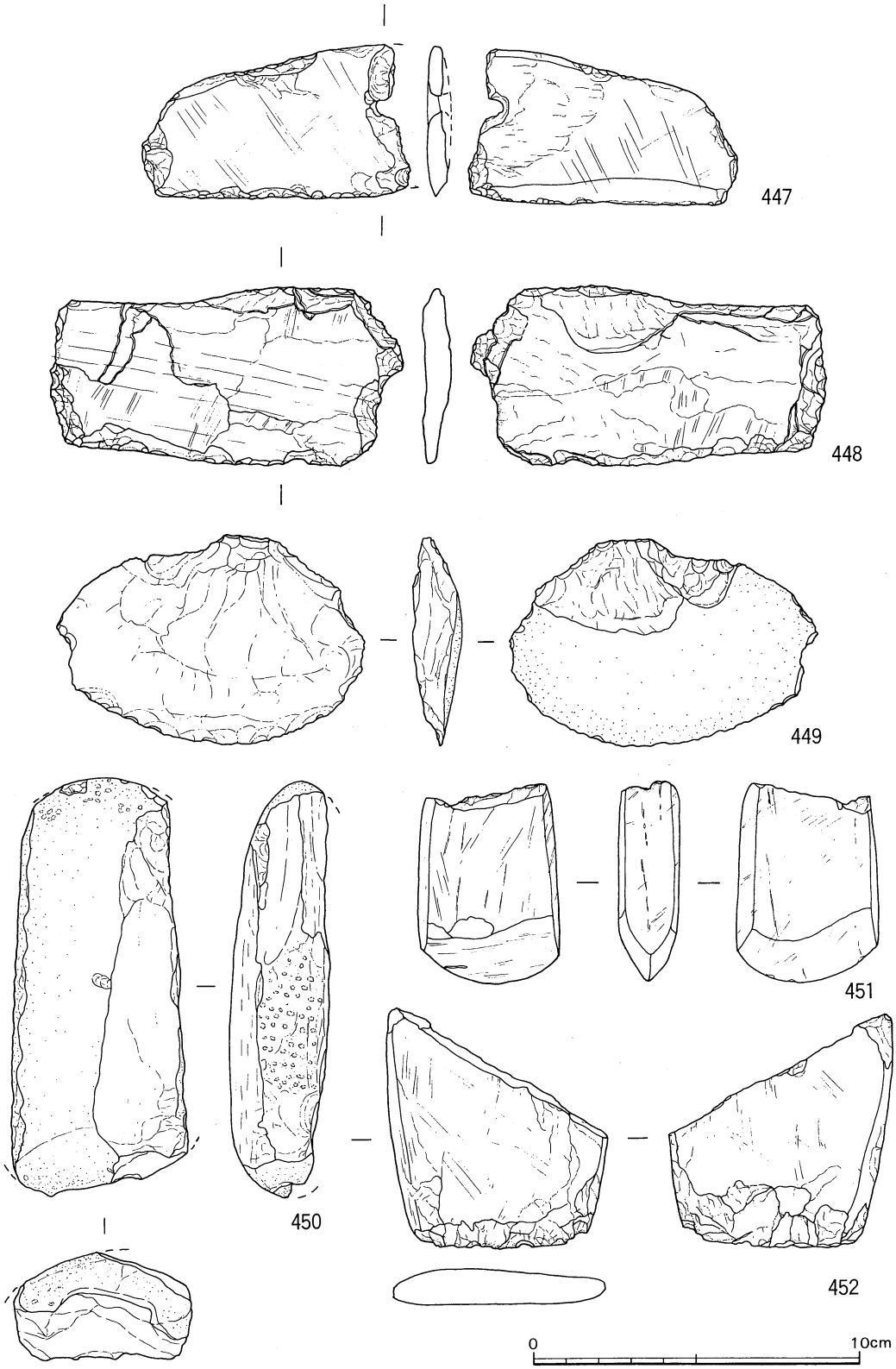
第58図　鉄鏃，石鏃実測図



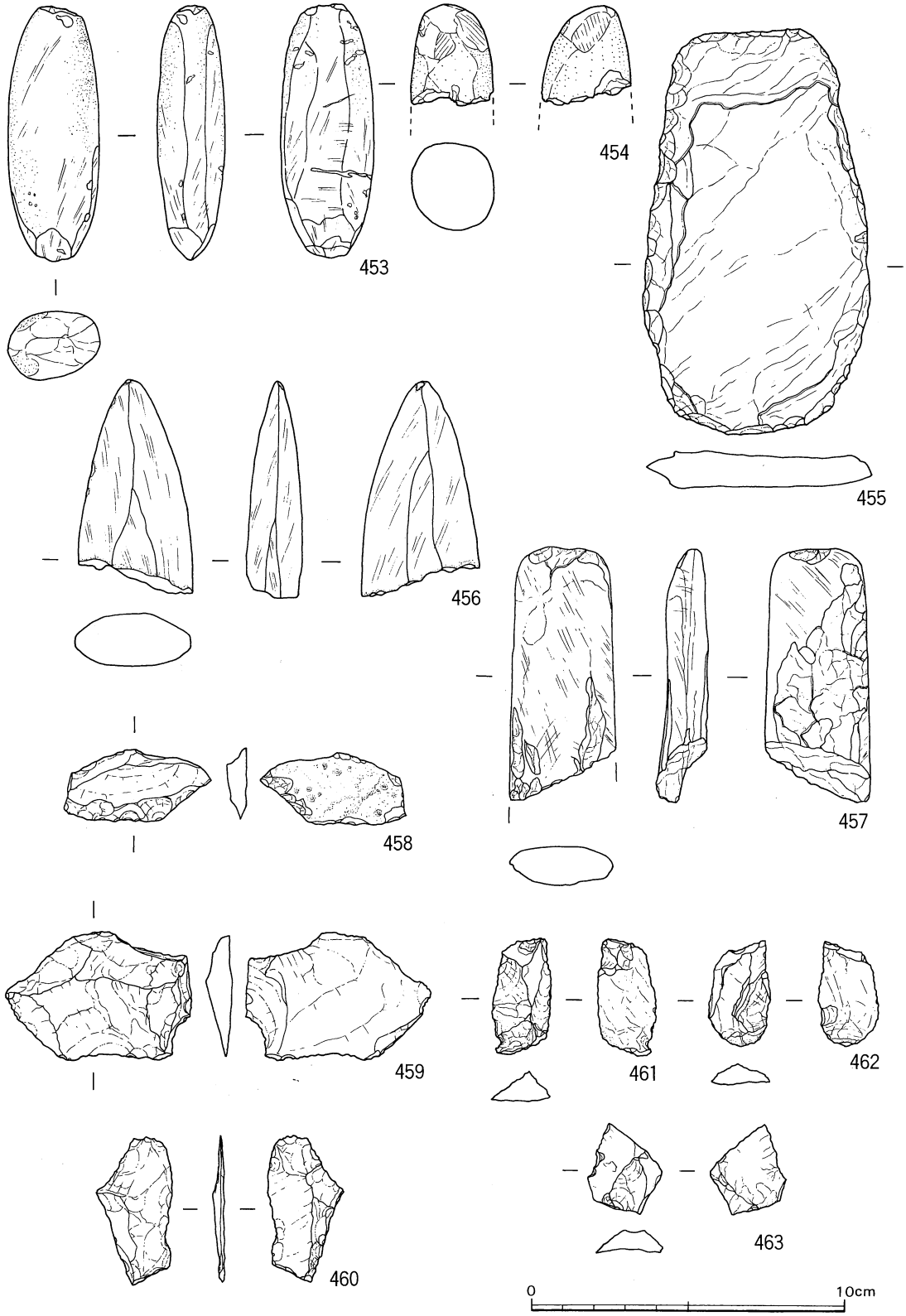
第59図　石鏃実測図



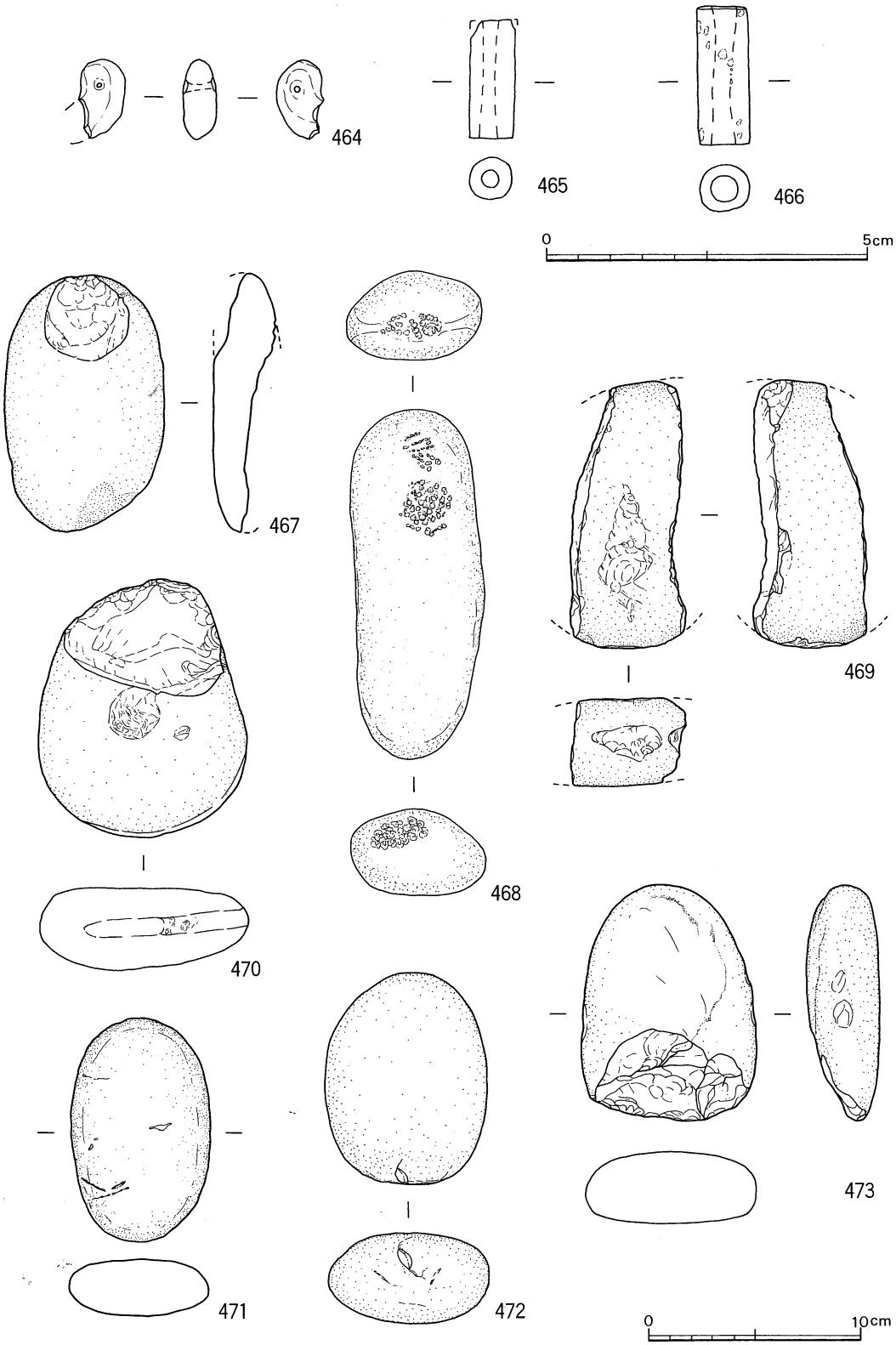
第60図　石包丁実測図



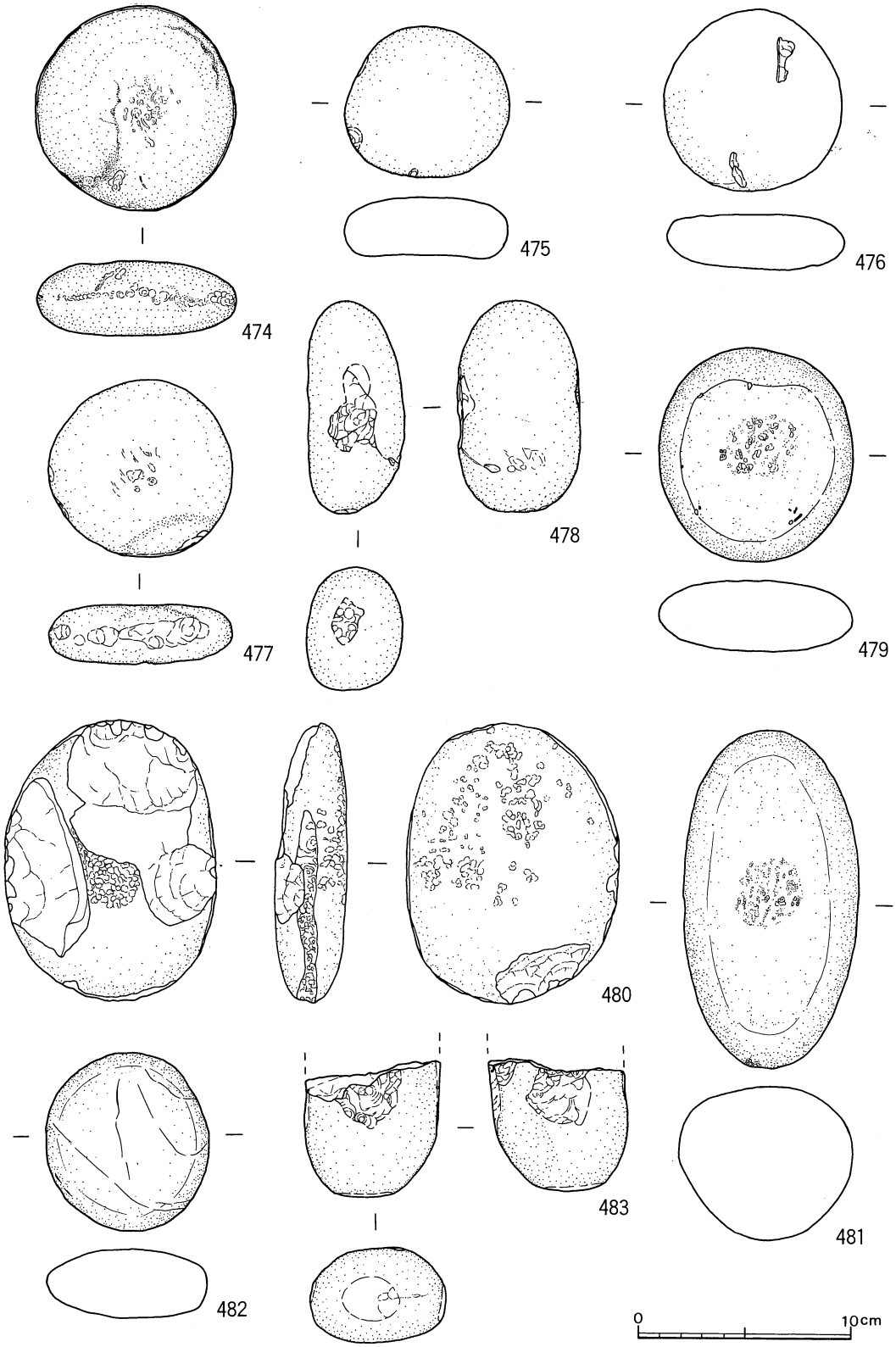
第61図　石包丁，石斧実測図



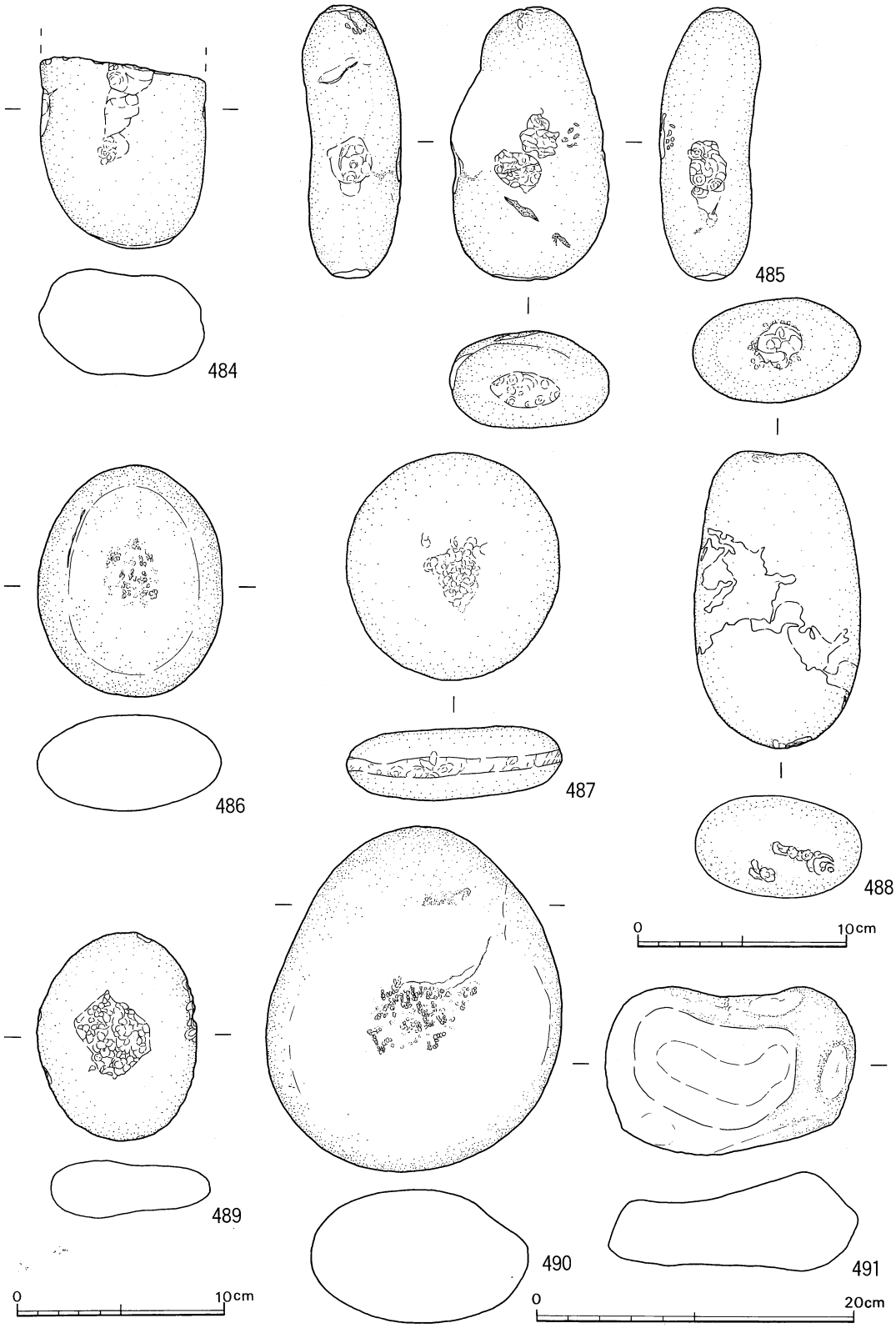
第62図　石斧，石剣，剥片実測図



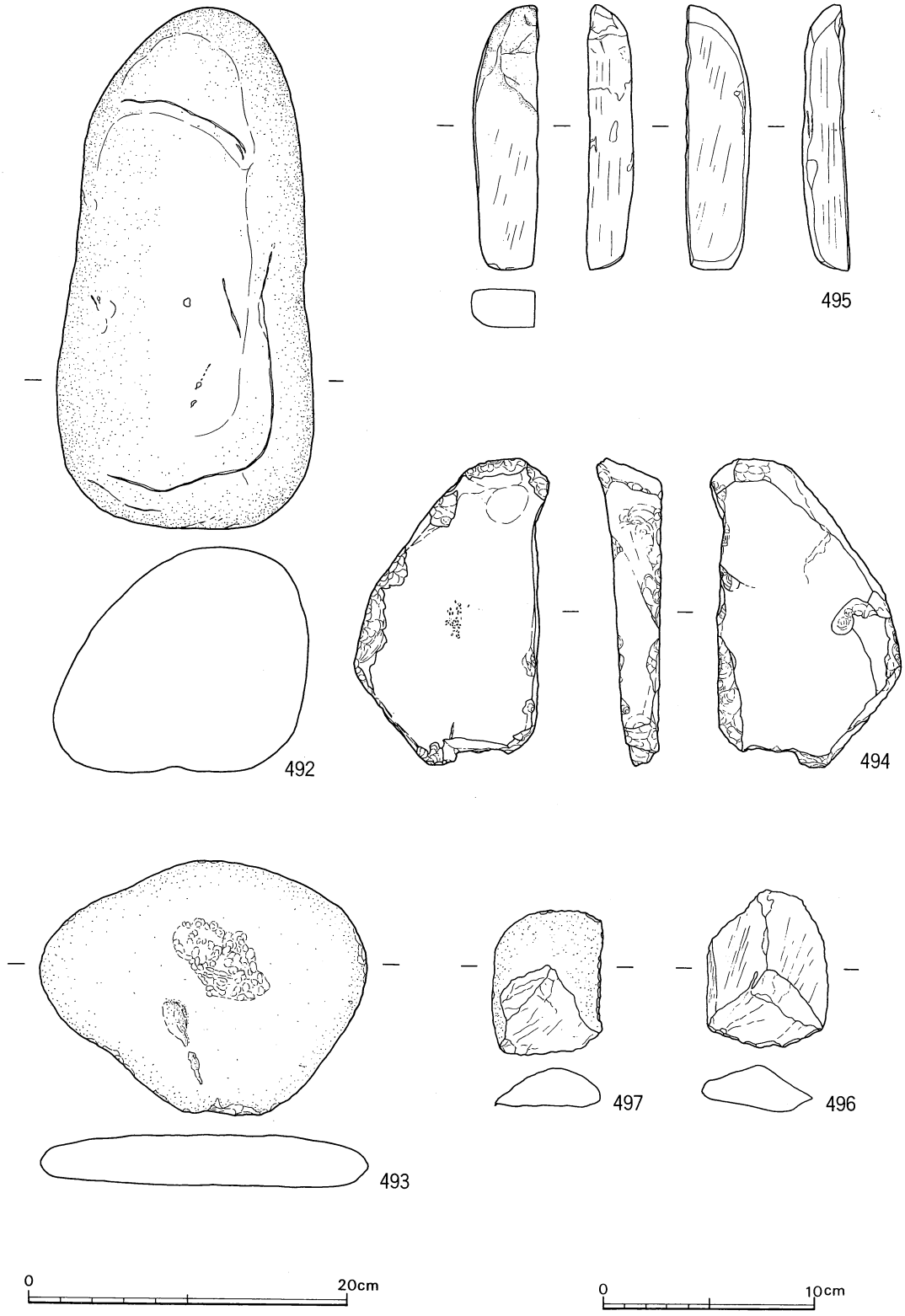
第63図　ガラス製勾玉，管玉，敲石実測図



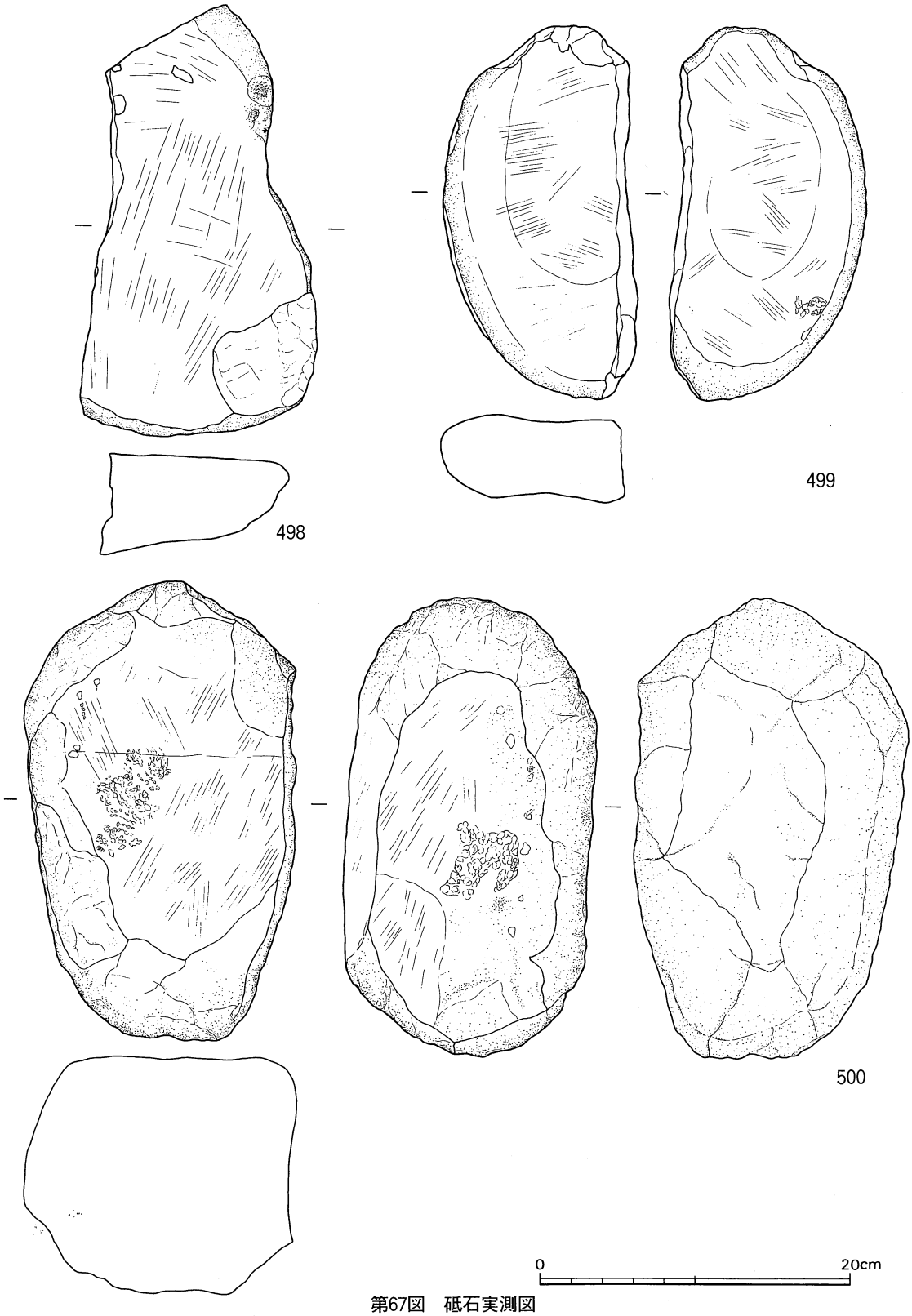
第64図　敲石実測図



第65図　敲石，叩台実測図

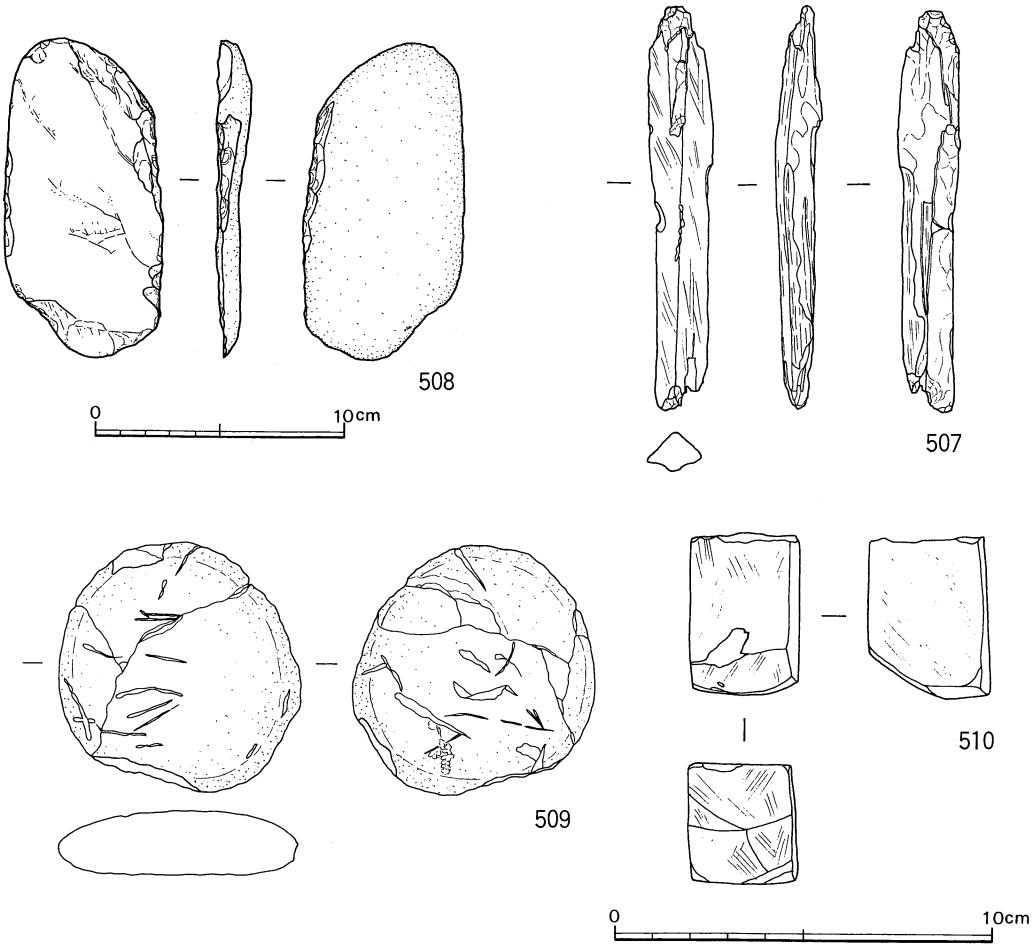


第66図　叩台，砥石実測図



第67図　砥石実測図

第68図　砥石，性格不明石器実測図



第69図　性格不明石器実測図

遺物観察表１

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
1	ＳＴ１	甕	—— (10.8) —— ——	平底の底部から立ち上がる。	わずかにヘラ削りが残るが，内外面とも不明。	
2	〃	高坏	—— (6.1) —— 7.2	短い脚部から八の字状に開く。裾部，端部は丸くおさめる。	〃	
3	ＳＴ２	壺	14.0 (5.5) —— ——	やや外傾して立つ口縁部，端部は平面をなし，上方を向き凹線が施される。外面にも凹線が入る。	内外面とも磨耗のため不明。	
4	〃	甕	—— (6.6) —— 9.4	平底の底部から直線的に立ち上がる。	内面指ナデ。	
5	〃	壺	—— (5.0) —— 8.4	平底の底部から立ち上がる。	内面にわずかに指頭圧痕が残る。	
6	〃	〃	—— (6.5) —— 7.0	わずかにあげ底の底部。	内外面とも不明。	
7	ＳＴ３	壺	14.4 (16.9) —— ——	ほぼ直立する長い頸部から，外反ぎみに開く口縁部，口縁端部は，平面をなし，上方を向き凹線が施される。口縁部は外面にも，凹線文が施される。頸部と胴部は１条の沈線で分けられる。	内面には指頭圧痕が残る。	
8	〃	甕	19.6 (4.8) —— ——	直立する頸部から大きく開く口縁。	口縁部外面に指頭圧痕が残る。	
9	〃	壺	22.6 (7.7) —— ——	ほぼ直立する頸部から，大きく外反する口縁，口縁端部は下に拡張され、外傾して面をなす，中央部には横ナデによる沈線が，１条入る。	頸部外面にハケ目調整，口縁内外面とも横ナデ。	
10	〃	〃	9.0 13.5 11.2 5.0	短く外反する口縁，端部は丸くおさめる，最大径は上胴部にくる。底部は平底。	手づくね，頸部にはしぼり目が残る。	
11	〃	甕	—— (5.5) —— 8.0	あげ底気味の底部から直線的にたち上がる。体部よりはり出した底部。	内外面とも不明。	
12	ＳＴ４	壺	17.4 (8.1) —— ——	わずかに外反する頸部から大きく外反する口縁，口縁端部は面をなす。	口縁端部横ナデ，貼付口縁，口縁部内外面とも横ナデ。	
13	〃	〃	12.6 (5.1) —— ——	短く直立する頸部から，斜め上に短く開く口縁部，口縁端部は上下に拡張され，３条の凹線を施す。	口縁部，内外面横ナデ。	
14	〃	甕	17.4 (8.0) —— ——	くの字状に強く屈曲する口縁，口縁端部は，上に拡張され，２条の凹線を施す。	〃	
15	〃	壺	—— (3.5) —— 9.8	平底の底部から立ち上がる。	外面ハケ調整，内面指ナデ。	
16	〃	〃	—— (3.0) —— 5.0	高台状の底部を，指頭による押圧で作り出す。	外面指頭圧痕。	
17	〃	〃	—— (2.8) —— 8.2	平底の底部から外反気味に立ち上がる。	内外面ともわずかに指頭圧痕が残る。	内面煤付着。
18	〃	〃	11.8 (8.1) —— ——	ゆるやかに外反する口縁部，口縁端部は面をなし内傾する。最大径は胴部中央部に位置する。	貼付口縁，内面ヘラ削り。	

遺物観察表 2

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
19	ＳＴ４	大型高坏	25.0 (3.7) —— ——	直線的に内傾する口縁，端部は平面をなし，口縁部に垂直に拡張される。外面には沈線が巡る。	内外面とも不明。	
20	〃	〃	33.0 (6.2) —— ——	口縁部は，わずかに内傾し，端部は平面をなし，口縁部に垂直に拡張される。外面には櫛先を中心に回転させた波状文を施し，その上下に沈線をめぐらせる。沈線の間の凸部には，櫛先による刻目，口縁端部には，櫛先をコンパス状に使用した扇状文が施文される。	〃	
21	ＳＴ５	甕	12.8 (4.0) —— ——	ゆるやかに外反する頸部から短く外に開く口縁，端部は垂直な面をなし，わずかに拡張される。		
22	ＳＴ６	壺	15.0 34.5 21.8 7.0	外反して開く口縁部，口縁端部は凹線文が施される。頸部下には上下二列の列点が施される。最大径は上胴部に位置する。	内外面にハケ目が残る。	
23	〃	〃	12.6 (6.5) —— ——	わずかに外反気味にのびる口縁部，口縁端部は，外傾する面をなし竹管文が施される。	内面にわずかに指ナデが残る。	
24	〃	〃	—— (6.3) (13.5) ——	胴部中央に最大径が位置し，算盤玉状の形を呈する。胴部中央外面には，円形浮文に刺突を施した浮文が貼り付され，櫛描沈線が巡る。	内面に指頭圧痕が残る。	
25	〃	〃	—— (31.4) (29.8) 9.0	厚いややあげ底気味の平底の底部から立ち上がる。最大径は中胴部に位置する。	外面タテ方向のハケ調整。内面指ナデ。	
26	〃	高坏	—— (6.0) —— 11.1	ハの字状に開く裾部，端部は拡張され，２条の凹線文が施される。	内外面とも不明。	
27	〃	蓋	—— (8.5) —— 13.0	外反りのつまみ部から，外反しながら下に向かって開く。端部は丸くおさめる。	外面ヘラ磨き，内面指頭圧痕が残る。	
28	ＳＫ１	壺	—— (7.3) —— ——	上胴部に最大径を有する。胴部には３条一組の櫛描き沈線が２組巡りその下には，ヘラ先による刺突が施される。	内外面とも不明。	
29	〃	〃	17.4 (4.2) —— ——	直立する頸部から大きく外反する。口縁は，わずかに下にたれる。端部面をなし，下部に刻目。	内面に横方向のハケ目。外面不明。	
30	〃	〃	—— (6.4) —— 6.4	平底の底部。	内外面とも不明。	
31	ＳＫ２	〃	23.6 (6.0) —— ——	頸部はゆるやかに外反し，口縁部で大きく外反する。端部は面をなし，１条の沈線が入り，下部に刻目を施す。	内外面とも不明。貼付口縁。	
32	〃	〃	17.6 (4.8) —— ——	口縁は大きく外反し，端部は面をなす。横ナデにより中央部に沈線状のものが入る。端部下には刻目を施す。	外面口縁端部に横ナデ。内面ヘラ削り後指ナデ。貼付口縁。	
33	〃	〃	24.0 (3.8) —— ——	口縁は直立する，頸部より大きく外へ開く，端部下には刻目を施す。	外面にわずかに指頭圧痕が残るが他は不明。	
34	〃	〃	22.0 (7.5) —— ——	直立する頸部から大きく外反する口縁，端部は面をなし，刻目を施す。	外面横方向のヘラケズリ，内面不明。貼付口縁。	
35	〃	〃	24.4 (12.8) —— ——	口縁部は直立する頸部より，なめらかに外反し，端部を上下に拡張し，３条の凹線を施す。端部には羽状文を施す。	内外面とも磨耗のため不明。	

遺物観察表 3

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
36	ＳＫ２	壺	28.5 (4.5) —— ——	口縁部で大きく外反する。端部は上下に大きく拡張し，３条の凹線を施す。	内外面ともに不明。	
37	〃	〃	22.4 (14.3) —— ——	ゆるやかに外反する頸部から，口縁部で大きく外反し，端部は上下に拡張，２条の疑凹線を施す。頸部には羽状文。	外面，口縁端部下横ナデ，内外面とも不明。	
38	〃	〃	23.0 (10.0) —— ——	わずかに外反する口縁，口縁端部は横ナデにより面をなし，わずかに下に拡張。	外面は，貼付部分を消すように指ナデ，内面は指頭圧痕が残るものの磨耗が著しい。貼付口縁。	
39	〃	甕	15.0 (4.0) —— ——	強く屈曲し，くの字状をなす口縁部，端部は上下に拡張し，２条の凹線を施す。	内外面とも横ナデ。	
40	〃	壺	17.0 (6.9) —— ——	ゆるやかに外反する口縁，口縁端部は内傾する面をなす。	内外面は指頭圧痕が残るものの他は磨耗により不明。	
41	〃	〃	—— (22.3) —— 9.4	平底の底部から直線的に立ち上がる。	内面底部より下胴部に指頭圧痕が多くみられる。(爪の痕あり) 外面は不明。	
42	〃	台付壺	—— (22.0) —— ——	筒状の脚を持ち，脚裾部広がる，脚部表面には沈線を施す。	底部近くに指頭圧痕が残る。外面は（ヘラ状）のものでナデ。底部は円盤充填法による。	
43	〃	壺	—— (6.7) —— 4.5	平底の底部，やや内湾気味に直線的に立ち上がる。	内面底部にわずかに指頭圧痕が残るが，他は外面とも不明。	
44	〃	〃	—— (19.3) —— 6.8	平底の底部より直線的に立ち上がり，最大径が上胴部に位置。	内面底部に指頭圧痕。胴部中位に指ナデ。	
45	〃	甕	—— (3.5) —— 5.6	あげ底気味の底部。	外面幅の広いハケ目が残る。内面底部指頭押圧。	
46	〃	壺	—— (6.0) —— 8.4	平底の底部より立ち上がる。	内面指ナデ。	
47	〃	台付壺	—— (5.4) —— 10.2	短く八の字状に開く脚，脚端は拡張される。脚部には刺突文が施される。	底部は円盤充填法による。他は内外面とも不明。	
48	〃	高坏	—— (15.7) —— 12.2	長い脚を持ち，裾部で八の字状に開く。裾端部は拡張し，内傾する面をなす。１条の凹線を施す。	内面は坏部近くで，しぼられる。外面不明。	
49	〃	台付鉢	—— (10.3) —— 11.4	ハの字状に開く脚部。裾端部は，肥厚する。	杯部の底は円盤充填。内面ヘラ削り。	
50	〃	器台	23.4 (2.9) —— ——	平坦な上面を持ち，端部はわずかに上方に向う。	上面は丁寧にヘラミガキされる。他は不明。	
51	〃	甕	26.2 (15.1) —— ——	短かく外反する口縁，最大径は胴部上位に位置する。不整形でいびつな形。	外面口縁部横ナデ，口縁下棒（ヘラ）状工具で押圧，ヘラ削り。内面頸部下まで，ヘラ削り，指ナデ。	土師器
52	ＳＫ３	壺	28.2 (38.0) 40.8 ——	直立する頸部から大きく外反する口縁，口縁端部は上下に拡張され４条の凹線を施し，２つ１組の棒状浮文，刻目を施文する。(回線を入れる前に浮文，刻目）頸部には，櫛描波状文が，断面三角形の突帯を狭んで施文される。櫛描波状文は口縁内面にも施される。最大径は胴部上位に位置する。	外面ハケ調整。内面磨耗のため不明。	

遺物観察表 4

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
53	ＳＫ３	壺	19.6 (5.7) —— ——	直立する頸部から短く外側に開く口縁。口縁端部は内傾し，面をなす。	口縁部ヨコナデ。貼付口縁。外面磨耗のため不明。	
54	〃	〃	13.6 (4.8) —— ——	ほぼ直立する頸部から，外側へ開く口縁，口縁端部は内傾する凹面をなす。	内外面とも不明。貼付口縁。	
55	〃	〃	21.0 (20.0) —— ——	直立する頸部から大きく外反する口縁部口縁端部は３条の凹線，ヘラ状原体による刻目。頸部外面下部にはヘラ状原体押圧，１条の沈線が入る。内面に１条の凹線。	内面指頭圧痕が残る。	
56	〃	甕	28.0 (13.5) —— ——	なめらかに外反する口縁部，口縁端部は，内傾して面をなす。	口縁外面には指頭圧痕が残る。下部は横方向の指ナデ調整。内面指頭圧痕が残る。	
57	ＳＫ４	壺	9.8 (4.2) —— ——	わずかに外反してのびる頸部から，ほぼ直立する口縁部，口縁端部は面をなす。口縁外面は凹線が施される。	内外面とも不明。	二重口縁状
58	〃	〃	—— (3.0) —— 5.0	ややあげ底に底部から，ゆるやかに立ち上がる。	わずかに指頭圧痕が残る。	
59	ＳＤ１	〃	18.0 (2.4) —— ——	大きく開く口縁部，口縁端部はわずかに上に拡張気味で内傾した面をなす。下部には棒状原体による刻目を施す。	口縁端部は内外面とも横ナデ調整。外面に指頭圧痕が残る。	
60	〃	〃	18.8 (5.3) —— ——	大きく外反する口縁部，口縁端部は内傾して面をなす。外面には刻目を施す。	内面横ナデ。内外面指頭圧痕が残る。	
61	ＳＤ５	〃	—— (7.5) —— 6.6	平底の底部から直線的に立ち上がる。	内外面とも指ナデ。	
62	ＳＤ６	〃	21.2 (10.0) —— ——	わずかに外反ぎみの頸部から大きく外反する口縁部，口縁端部は上下に拡張され，凹線文竹管文が施され，円形浮文に指突したものが貼り付けられる。	内外面とも不明。	
63	〃	〃	15.8 (6.4) —— ——	直立する頸部から大きく外反する口縁部，口縁端部は上下に拡張され４条の凹線，３個１組の円形浮文に刺突したものを貼付。頸部には断面三角形の粘土帯を貼付る。口縁内面には，クシ描き波状文を施した後に直線的に刻目が入る。	外面ハケ調整。	
64	〃	〃	16.6 (7.2) —— ——	ほぼ直立する頸部から大きく開く口縁部，口縁端部は上下にわずかに拡張気味で，内傾し凹線文に，３つ１組のヘラ先による圧痕文が施される。	口縁部内外面とも横ナデ。	
65	〃	甕	28.8 (6.0) —— ——	直立する頸部から大きく外反する口縁部，口縁端部は外傾して凹面状を呈する。	貼付口縁，内外面とも不明。	
66	〃	壺	20.0 (4.6) —— ——	外傾ぎみの頸部から，斜め上へ開く口縁部，口縁端部は内傾し面をなす。	外面タテ方向のハケ。貼付口縁。	
67	〃	〃	17.6 (7.0) —— ——	大きく外反する口縁部，口縁端部は垂直な面をなし，刻目を施す。	口縁部内外面横ナデ。	
68	〃	〃	18.0 (8.8) —— ——	ほぼ直立する頸部から，なめらかに外反する。口縁部，口縁端部は内面横ナデによりやや拡張し，面をなす。	内面ハケ目調整。	
69	〃	〃	17.0 (8.1) —— ——	なめらかに開く口縁部端部は内傾し，面をなす。刻目が施され，頸部には波状文が施される。	内面指頭圧痕。	

遺物観察表５

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
70	ＳＤ６	壺	9.0 (9.5) —— ——	わずかに外反してのびる頸部，口縁部はわずかに開く。端部は内傾し，面をなす。	内面頸部下より指ナデ。	
71	〃	甕	19.8 (5.5) —— ——	なめらかに外反する頸部から外へ開く口縁部，口縁端部は面をなす。	内外面ハケ調整。貼付口縁。	
72	〃	〃	18.4 (10.2) —— ——	なめらかに外反する頸部から大きく開く口縁部，口縁端部は面をなす。胴部中位に最大径を有する。	内面指頭圧痕。	
73	〃	〃	16.4 (11.5) —— ——	なめらかに外反する口縁部，口縁端部は面をなす。最大径は胴部中位に位置する。	内面指頭圧痕，貼付口縁。	
74	〃	〃	14.4 (15.5) 15.0 ——	頸部は短く，大きく開く口縁部．口縁端部は面をなす。最大径は胴部中央に位置する。	口縁部内外面とも横ナデ。内面指頭圧痕。	
75	〃	〃	14.6 (6.6) —— ——	なめらかに外反する頸部から，わずかに開く口縁部，口縁端部は面をなす。	内面指頭圧痕。貼付口縁。	
76	〃	〃	27.4 (10.9) —— ——	くの字状に強く屈曲し，斜め上に短く開く口縁部端部は内傾し，面をなす。	内外面とも不明。	
77	〃	〃	19.4 (26.9) 23.2 ——	くの字状に屈曲する口縁端部は下にわずかに拡張され，面をなす。	外面頸部強い横ナデ，ヘラ磨き。内面上胴部ヘラ削り。	
78	〃	〃	20.8 (9.9) —— ——	短く外へ開く口縁部，口縁端部は内傾し，面をなす。	外面横ナデ，ハケ調整。内面指頭圧痕。	
79	〃	〃	15.6 (15.9) —— ——	短く直線的に外へ開く口縁部，口縁端部は内傾し，面をなし凹線が施される。最大径は胴部中位に位置する。	内面上胴部指頭圧痕，下胴部ヘラ削り。	
80	〃	〃	14.8 (5.9) —— ——	短く直線的に外へ開く口縁部，口縁端部は内傾して２条の凹線が施される。	内面横ナデ。	
81	〃	壺	—— (33.2) 25.5 8.0	厚い平底の底部から立ち上がり，中胴部に最大径を持つ。	内面に強い指ナデ。	
82	〃	〃	—— (6.9) —— 7.5	平底の底部から直線的に立ち上がる。	内面指ナデ。	
83	〃	〃	—— (6.6) —— 6.2	平底の底部から立ち上がる。	外面指頭圧痕わずかに残る。内面不明。	
84	〃	〃	—— (7.0) —— 8.0	平底の底部から直線的に立ち上がる。	内面指ナデ。	
85	〃	〃	—— (7.5) —— 8.8	平底の底部。	磨耗のため内外面不明。	
86	〃	〃	—— (14.6) 14.0 6.4	平底の底部から立ち上がり，最大径は胴部中央に位置する。	内面指頭圧痕が残る。	
87	〃	〃	—— (14.4) —— 7.0	平底の底部から立ち上がり，最大径は胴部中央に位置する。	外面わずかにヘラ磨き，内面指頭圧痕。	

遺物観察表 6

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
88	ＳＤ６	甕	—— (4.2) —— 9.6	平底の底部。	外面ヘラ磨き。	
89	〃	〃	—— (15.0) 14.6 5.0	あげ底の底部から立ち上がり，上胴部に最大径を有す。	外面ヘラ削り。内面指頭押圧。	
90	〃	〃	—— (9.5) —— 7.4	平底の底部。	外面下部指頭押圧，その他不明。	
91	〃	〃	—— (7.8) —— 10.0	平底で不整形な底部。	外面下部棒状の原体で押圧。内面指頭押圧，指ナデ。	
92	〃	〃	—— (4.4) —— ——	微隆起帯の間にヘラ先による列点文，櫛描沈線が巡る。	内外面とも不明。	
93	〃	高坏	—— (5.4) —— 22.0	八の字状に開く裾部，端部は拡張される。外面には鋭い原体により矢羽状の文様を狭んで沈線が巡る。	〃	
94	〃	〃	—— (7.2) —— 11.0	八の字状に開く裾部，端部は拡張される。無文。	内外面とも不明。	
95	〃	器台	—— (4.0) —— ——	————		
96	ＳＤ７	甕	—— (9.0) —— 7.2	平底の底部。	外面叩目の後，ハケ調整。内面指ナデ。	外面黒斑点あり。
97	〃	土錘	全長　4.8cm 全幅　1.7cm 重量 12.9ｇ	紡錘形を呈す。		
98	ＳＤ８	高坏	—— (8.7) —— ——	八の字状に開く裾部。	円盤充填。内面指頭圧痕，しぼり目。	
99	ＳＤ10	甕	15.8 (14.7) —— ——	なめらかに外反する頸部から，わずかに開く口縁部端部は内傾し面をなす。下端は刻目が施され，頸部と胴部に２条のヘラ描き沈線によって分けられ，沈線の上に２個の円形浮文を貼り付，その下に列点文が入る。	外面，口縁端部横ナデ，縦方向のハケ調整，内面横方向のハケ調整，指頭圧痕。	
100	ＳＤ13	鉢	17.6 (5.4) —— ——	短く外へ開く口縁部，口縁端部内傾する凹面をなす。	わずかに指頭圧痕が残る。	
101	〃	壺	17.0 (2.8) —— ——	直立する頸部から外反して開く口縁部，口縁端部から外傾する面をなし３条の凹線が入る。	内外面とも口縁端部横ナデ。	
102	〃	〃	14.2 (3.7) —— ——	くの字状に屈曲し斜め上に開く口縁，口縁端部は強い横ナデにより凹面状をなす。	外面にわずかにハケ目，指頭圧痕，横ナデ。内面口縁端部横ナデ。	
103	ＳＤ15	〃	15.0 (6.3) —— ——	わずかに外傾して開く口縁部端部は上方を向き凹面をなす。外面に幅の広い凹線文が施される。	内面横ナデ。	
104	ＳＤ16	〃	13.8 (11.4) —— ——	外反してわずかに開く口縁，口縁端部は内傾する面をなす。	内外面とも指頭圧痕が残る。	
105	〃	〃	18.8 (8.0) —— ——	頸部からわずかに外反する口縁部，口縁端部は外傾し，上下に拡張され凹線が施される。口縁部は強いナデによりわずかに凹線状をなす。	内外面口縁部横ナデ。貼付口縁。	

遺物観察表 7

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
106	ＳＤ16	土師器 埦	15.6 5.0 —— 6.0	内湾して立ち上がる体部から口縁部は，わずかに外反する。口縁端部は丸くおさめる。輪高を貼り付ける。	外面ロクロ調整。底部糸切り。	土師器。
107	Ｐ20	瓦質 〃	16.4 (4.6) —— ——	体部は内湾して立ち上がる。口辰部は丸くおさめる。	内面回転ナデ。	瓦質土器。
108	Ｐ26	土師質 小坏	6.7 2.0 —— 4.2	円盤状の底部から直線的に立ち上がる。口辰部は丸くおさめる。	ロクロ，回転糸切り。	土師器。
109	ＳＸ１	壺	19.8 48.1 30.4 7.5	直立する頸部から大きく開く口縁，口縁端部は上に拡張され，３条の凹線を施し刻目が入る。肩部には列点文が施される。胴部は卵型を呈し，最大径は上胴部に位置する。底部は平底。	外面ハケ調整，頸部下はヘラ圧痕，胴部下部はヘラ磨き，内面口縁部横ハケ調整，ヘラ削り。	
110	〃	〃	19.2 59.0 30.8 11.8	直立する頸部から大きく外反する口縁部，口縁端部は下に拡張され，ほぼ垂直な面をなし２条の凹線が施される。最大径は胴部中央に位置する。	外面頸部ハケ調整。胴部ヘラ磨き，内面ヘラ削り。	
111	〃	〃	18.5 (9.5) —— ——	直立する頸部から大きく外反する口縁，口縁端部は上下拡張され２条の凹線が施される。	磨耗のため内外面とも不明。	
112	〃	〃	20.2 (3.9) —— ——	ほぼ直立する頸部から大きく外反する口縁部，口縁端部は面をなし，下端に刻目を施す。	外面にわずかに横ナデが残るが磨耗が著しくその他不明。	
113	〃	〃	15.6 (6.5) —— ——	直立する頸部から大きく外反する口縁，口縁端部は面をなす。	磨耗のため内外面とも不明。	貼付口縁をなで消す。
114	〃	〃	19.8 (31.7) 26.0 ——	直立する頸部から大きく開く口縁，口縁端部は上下に拡張され，２条の凹線を施す。頸部には幅の広い凹線が施され頸部下にヘラ圧痕文が入り，棒状浮文を貼り付ける。	外面ハケ調整。内面指頭圧痕，ヘラ削りがわずかに残る。	
115	〃	〃	19.6 (21.5) —— ——	直立する頸部から大きく開く口縁，口縁端部は上下に拡張し，３条の凹線を施す。頸部外面にはハケ状原体を押し施す。(ハケ調整後施文)	外面ハケ調整，横ナデ。	
116	〃	〃	9.0 19.0 16.6 8.0	直立する頸部からなめらかに外反する口縁部，口縁端部は上下に拡張し，２条の凹線を施す。口縁内面，頸部外面ヘラ圧痕文，最大径は胴部中央に位置する。	外面上胴部はハケ調整，胴部中央横方向，下胴部は縦方向のヘラ磨きを施す。内面ハケ調整。	
117	〃	〃	24.0 (12.1) —— ——	直立する頸部からなめらかに外反する口縁部，口縁端部は下に拡張され，３凹条の凹線を施す。頸部下には２列のヘラ圧痕文を施す。	外面縦方向のハケ調整。内面横方向のハケ調整。	
118	〃	〃	16.0 (3.3) —— ——	直立する頸部から大きく外反する口縁，口縁端部は上下に拡張され，２条の凹線を施す。	内外面とも不明。	
119	〃	〃	19.2 (7.9) —— ——	直立する頸部から大きく外反する口縁部，口縁端部は上下に拡張され，３条の凹線が施される。	〃	
120	〃	〃	16.8 (8.1) —— ——	直立する頸部から大きく開く口縁，口縁端部は上下に拡張され，３条の凹線を施す。	口縁部横ナデ調整。	
121	〃	〃	14.7 39.1 24.6 7.8	直立する頸部から外反する口縁部，口縁端部は外傾し凹面をなす。胴部は卵形を呈し，底部は平底。	外面ハケ調整，内面指ナデ。貼付口縁。	
122	〃	〃	18.2 (5.7) —— ——	直立する頸部から大きく開く口縁，口縁端部は面をなし，下端に刻目を施す。	外面ハケ調整。	
123	〃	〃	19.8 (10.1) —— ——	直立する頸部から大きく開く口縁，口縁端部は面をなし，下端には刻目を施す。頸部下に３条の櫛描き直線文が入り，その下に列点文を施す。	内外面不明。貼付口縁。	

遺物観察表 8

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
124	ＳＸ１	壺	24.0 (9.2) —— ——	直立する頸部から大きく外反する口縁部，口縁端部は面をなし，下端に刻目を施す。頸部には不規則に列点文を配し，頸部下には微隆起によって区画された簾状文が施される。	内面横方向のハケ調整。外面ハケ調整。	
125	〃	〃	19.4 (4.6) —— ——	直立する短い頸部から外反する口縁部，口縁端部は拡張され，３条の凹線が施される。	内外面とも不明。	
126	〃	〃	15.4 (4.2) —— ——	短く直立する頸部から，直線的に開く口縁，口縁端部は上下に拡張される。	〃	
127	〃	〃	15.0 (4.0) —— ——	短く外反する口縁部，口縁端部は内傾し，上下に拡張され２条の凹線を施す。	〃	
128	〃	〃	22.0 (2.8) —— ——	大きく開く口縁部，口縁端部は下に拡張され，ヘラを押圧し刻目を施す。	内面横方向のハケ調整。外面縦方向のハケ調整。貼付口縁。	
129	〃	〃	21.0 (4.0) —— ——	直立する頸部から大きく外反する口縁部，口縁端部は面をなし，下端には刻目を施す。	外面頸部に縦方向のハケ調整。内面横ハケ調整。貼付口縁。	
130	〃	〃	27.0 (10.2) —— ——	大きく外反する口縁，口縁端部は内傾した面をなす。	磨耗が著しく内外面とも不明。貼付口縁。	
131	〃	〃	19.4 (6.0) —— ——	外反する口縁部端部は内傾し中央が凹む下端には刻目を施す，頸部には６条の凹線を施す。	外面口縁，頸部横ナデ，櫛描沈線，その他不明。貼付口縁。	
132	〃	〃	27.8 (10.8) —— ——	大きく外反する口縁部，口縁端部は面をなし，一条の沈線が施され，下端には刻目が入る。頸部下には列点文が施される。	口縁部横ナデ，その他磨耗のため不明。	
133	〃	〃	27.2 (10.4) —— ——	ほぼ直立する頸部からなめらかに外反する口縁部，口縁端部は上部が内傾し，下部が外傾し凹面をなす。	外面口縁部下ナデ，頸部ハケ調整。内面横方向のハケ調整。貼付口縁。	
134	〃	〃	20.8 (5.9) —— ——	なめらかに外反する口縁部，口縁端部は面をなし，わずかに下に拡張される。	内外面とも不明。貼付口縁。	
135	〃	〃	20.6 (6.0) —— ——	なめらかに外反する口縁,口縁端部は面をなす。	内外面とも不明。貼付口縁。	
136	〃	〃	18.4 (6.5) —— ——	ゆるやかに外反する頸部，口縁端部は下に拡張され，凹面状をなす。	内外面とも不明。	
137	〃	〃	18.8 (6.0) —— ——	外傾して直線的に開く口縁部端部は下に拡張され，内傾して面をなす。	〃	
138	〃	〃	15.0 (4.6) —— ——	ゆるやかに外反する長い頸部，口縁は外反し，端部は外傾する面をなす。	〃	
139	〃	〃	20.0 (4.2) —— ——	直立する頸部から大きく外反する口縁部，口縁端部は面をなし，ヘラ状工具による刻目を施される。	外面ハケ調整。	
140	〃	〃	11.8 27.3 17.0 7.2	ほぼ直立する頸部からなめらかに外反する口縁部，口縁端部は内傾し面をなす。最大径は胴部中央に位置する。	内外面とも不明。貼付口縁。	
141	〃	〃	17.6 (6.0) —— ——	直線的に外傾する頸部，口縁端部は面をなし，上方を向き横方向に拡張される。外面には幅の広い凹線が３条施される。	〃	

遺物観察表 9

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
142	ＳＸ１	壺	18.8 (15.8) —— ——	直立した頸部からわずかに開く口縁部。口縁端部は面をなし上方を向く。頸部には，幅の広い凹線文が施される。肩部には，把手が付く。	内外面とも不明。貼付口縁。	
143	〃	〃	14.8 (4.8) —— ——	ほぼ直立する口縁部端部は内傾し面をなす。外面には４条の凹線を施す。	内外面とも不明。	
144	〃	〃	15.2 (7.5) —— ——	直線的に外傾してのびる口縁部，口縁端部は面をなす。外面には幅が広く浅い凹線文が施される。	〃	
145	〃	〃	17.6 (3.8) —— ——	直線的に外傾してのびる口縁部，口縁端部は上方を向き平面をなす。外面に４条の凹線が施される。	〃	
146	〃	〃	14.6 (10.0) —— ——	なめらかに外反してのびる頸部，口縁端部は外傾し，中央部が凹む。	口縁部内外面とも横ナデ調整。	
147	〃	〃	7.0 (6.1) —— ——	わずかに外反しながらのびる頸部，外面には４条の凹線を施す。	内外面とも横ナデ調整。	
148	〃	〃	7.4 (6.3) —— ——	細くのびる頸部，口縁端部は平面をなし，上方を向く。口縁下にはヘラ状工具による直線的な列点文。円形浮文の下に微隆起帯にはさまれた櫛描直線文，棒状浮文。	内外面とも不明。	浮文は粘土が違う。
149	〃	〃	23.0 (6.3) —— ——	ゆるやかに外反してのびる頸部から直立する口縁，口縁端部は面をなし上方を向く。	〃	
150	〃	〃	25.4 (4.2) —— ——	外反してのびる頸部から，垂直に立ち上がる口縁部，口縁端部は丸くおさめる。	外面ハケ，内面指頭圧痕がわずかに残るが磨耗が著しく不明。	
151	〃	甕	16.2 (8.0) —— ——	くの字状に屈曲する口縁部，口縁端部は上に拡張され凹面をなす。	外面口縁部横ナデ，胴部ハケ調整,内面指頭圧痕。	
152	〃	〃	23.6 (12.5) —— ——	くの字状に屈曲した口縁部端部は上下に拡張し，３条の凹線が施される。	外面頸部横ナデ調整。	
153	〃	〃	16.0 (7.0) —— ——	口縁は，くの字状に強く屈曲する。端部は上に拡張し，２条の凹線を施す。	内面口縁にわずかに横ナデが残る。その他内外面とも不明。	
154	〃	〃	17.4 (7.5) —— ——	くの字状に強く屈曲する口縁部，口縁端部は上に拡張し２条の凹線を施す。	内外面とも磨耗が著しく不明。	
155	〃	〃	15.0 (3.2) —— ——	短く外へ開く口縁端部は内傾して面をなす。	内外面強い横ナデ調整。	
156	〃	〃	12.8 (2.5) —— ——	くの字状に屈曲する口縁部，口縁端部はわずかに凹面をなす。	外面口縁部横ナデ調整。	
157	〃	〃	15.4 (3.6) —— ——	くの字状をなす口縁部，口縁端部は面をなす。	内外面とも不明。	
158	〃	壺	—— (46.5) 25.3 8.6	最大径は上胴部に位置する。卵形の胴部から直立する頸部，底部は平底，頸部外面にはヘラ状圧痕文を施し，肩部に鋭い原体による列点文。	外面上胴部ハケ調整。下胴部ヘラ磨き。内面磨耗により不明。	
159	〃	〃	5.6 13.8 14.6 5.4	平底の底部から直線的に外方向きに立ち上がる。最大径が胴部中央部下にあり，頸部に向かって内傾する。上胴部に刻目を施す。	内面指ナデ，頸部にしぼり目が残る。外面不明。	

遺物観察表10

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
160	ＳＸ１	壺	—— (10.0) —— ——	胴部中位に最大径が位置し，内傾しながら，頸部でくびれ，頸部下に金属器で列点文を施す。	内面に指頭圧痕が残る。	
161	〃	〃	—— (8.2) —— 7.4	平底の底部から直線的に外上方に立ち上がる。	外面にわずかにヘラ磨きが残る。	
162	〃	〃	—— (15.8) —— 8.2	あげ底気味の底部から直線的に立ち上がる。	外面にわずかにヘラ磨きが残る。その他は不明。	
163	〃	〃	—— (7.0) —— 5.6	〃	内面には指頭圧痕が残る。	
164	〃	〃	—— (13.8) —— 9.6	平底の底部。	外面にわずかにヘラ磨きが残る。	
165	〃	〃	—— (12.5) —— 6.2	平底の底部からやや内湾気味に立ち上がる。	内面にわずかに指ナデ調整その他は不明。	
166	〃	〃	—— (8.6) —— 8.8	平底の底部からわずかに内湾気味に立ち上がる。	内面にわずかに指頭圧痕が残る。外面ヘラ磨き。	
167	〃	〃	—— (12.4) —— 7.0	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	外面ハケ調整。内面不明。	
168	〃	〃	—— (9.0) —— 12.8	ややあげ底気味の底部から立ち上がる。	外面ヘラ磨き。	
169	〃	〃	—— (10.2) —— 12.2	あげ底気味の底部から直線的に立ち上がる。	内面指頭圧痕。外面ハケ調整。	
170	〃	〃	—— (2.8) —— 4.6	平底の底部，指頭押圧され，やや弱い段をなし，たち上がる。	外面底部下部に指頭圧痕。	
171	〃	台付壺	—— (2.8) —— 6.6	短く内湾気味の脚がついた底部。	脚台の内面はヘラ削り。外面指頭圧痕が残る。	
172	〃	〃	—— (1.6) —— 7.8	八の字状に開いた短い脚台。	内外面とも不明。	
173	〃	〃	—— (4.0) —— 9.2	脚状を呈する底部。	磨耗のため不明。	
174	〃	甕	—— (3.6) —— 7.7	わずかにあげ底の底部から直線的に立ち上がる。胴は張り出す。	内面ヘラ削り。	
175	〃	〃	—— (21.6) —— 9.0	平底の底部。	外面ヘラ磨きが残る。	
176	〃	〃	—— (5.0) —— 7.4	あげ底の底部から直線的に立ち上がる。	内外面とも磨耗のため不明。	
177	〃	〃	—— (14.9) —— 7.0	あげ底気味の底部で，胴が張り出す。	内面ヘラ削り，外面はハケ調整のあとヘラ磨き。	

遺物観察表11

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
178	ＳＸ１	甕	—— (13.4) —— 7.4	平底の底部から直線的に立ち上がる。	内外面とも不明。	
179	〃	〃	—— (5.4) —— 9.6	〃	〃	
180	〃	〃	—— (11.8) —— 6.4	平底の底部から直線的に立ち上がる。	内面指ナデ，ヘラ削り。	外面に黒斑あり。
181	〃	〃	—— (7.3) —— 7.0	ややあげ底気味の底部から直線的に立ち上がる。	内外面とも不明。	
182	〃	〃	—— (11.0) —— 8.0	〃	内面指頭圧痕が残る。	
183	〃	壺	—— (9.6) —— 7.8	平底の底部，くびれた底部から直線的に立ち上がる。	内外面とも磨耗のため不明。	
184	〃	高坏	14.8 12.0 —— 8.8	坏部より内傾する口縁部端部は面をなし上方を向く。１条の沈線が入る。口縁外面には３条の凹線が施される。八の字状に開く裾部，端部は拡張される。脚部外面には鋭い原体による５条の沈線と縦の直線文が２組施される。	脚部内面はヘラ削り。坏外面はヘラ磨き，円盤充填法。	
185	〃	〃	25.0 (3.5) —— ——	坏部から口縁部は屈曲し外傾してのびる。口縁端部は面をなす。	口縁横ナデ調整。外面ハケ調整。	
186	〃	〃	15.6 (3.8) —— ——	直線的に開く坏部から直立する口縁部，口縁端部は上方を向いた凹面をなし，外面には２条の凹線文が入る。	口縁部には内外面ともわずかに横ナデ痕が残る。	
187	〃	〃	—— (3.0) —— 6.0	八の字状に開く裾部，端部はやや拡張され，２条の凹線を施す。刺突文による円孔。	外面は金属器によって施文される。内面不明。	
188	〃	〃	—— (6.2) —— 12.0	八の字状に開く裾部，端部は拡張され，内傾する面は３条の凹線が入る。脚部外面には金属器による11条の沈線が施され，鋸歯文が脚部下端から裾端部にかけて施文される。刻目が端部に施される。	内面ヘラ削り。	
189	〃	〃	—— (9.8) —— 12.4	八の字状に開く裾部，端部は拡張され，２条の凹線を施す。外面には鋸歯文をはさんで５条と６条の沈線が施され，脚部中央に２つの円孔，裾端部円周に円孔を穿つ。	〃	
190	〃	〃	—— (7.5) —— 24.2	八の字状に開く裾部，拡張した端部に２条の凹線を施す。脚部外面３条の沈線，縦方向に３条の沈線が施される。	内外面不明。	
191	〃	〃	—— (4.6) —— 15.0	八の字状に開く裾部，端部は拡張され２条の凹線が入る。脚部外面には６条の沈線，縦方向に３条の沈線が施される。	内面横方向のヘラ削り。	
192	〃	〃	—— (8.0) —— 11.2	八の字状に開く裾部，端部は拡張され，凹線が施される。外面脚部は金属器による５条の沈線，裾部に刻目が施される。	〃	
193	〃	〃	—— (6.4) —— ——	坏底部は円盤充填法による。	内外面とも不明。	
194	〃	器台	—— (11.8) —— ——	肉の厚い円筒状を呈す。形態的には，ふいごの羽口，地引き網の土錘の可能性もある。	〃	胎土には，１cm大の小礫が入る。

遺物観察表12

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
195	ＳＸ１	鉢	16.0 (4.3) —— ——	内湾気味にのびる体部から屈曲する口縁，口縁端部は上下に拡張され，２条の凹線が施される。	口縁部内外面ナデ調整。	
196	〃	〃	22.6 (8.8) —— ——	内湾気味にのび体部から短く屈曲する口縁，口縁端部は面をなす。	内面指ナデ。外面口縁部横ナデ。体部にハケ調整。	
197	〃	〃	21.0 (10.2) —— ——	内湾して立ち上がる体部から短く外反する口縁，口縁端部は内傾し凹面をなす。	内外面にわずかに指頭圧痕が残る。その他は不明。	
198	〃	〃	18.8 (6.2) —— ——	体部からわずかに外反する頸部，口縁部はほぼ水平に屈曲する。口縁端部は外傾して面をなす。	内外面とも不明。貼付口縁。	
199	〃	〃	22.6 18.1 17.2 7.0	あげ底の底部から立ち上がり，最大径は口縁部，口縁部下に位置する。口縁は大きく外反し，端部は内傾し，凹面を有する。	〃	
200	〃	器台	32.4 24.5 —— 23.0	筒状の胴部から大きく開く口縁部，口縁端部は拡張され，凹線文が施される。裾部はなめらかに開く。外面全体に凹線文が施される。	〃	
201	〃	高坏	14.6 (10.0) —— ——	茶碗形の坏部，脚は短く裾は大きく広がる。	内面坏底部指頭圧痕。外面脚部指頭圧痕。	土師器。
202	〃	甕	13.3 (13.7) —— ——	直立気味に開く短い口縁，最大径は胴部中央に位置する。	外面にハケ目が残る。	器壁は薄く焼成良好。土師器。
203	表採	壺	20.0 (5.8) —— ——	ほぼ直立する頸部から大きく外反する口縁，端部下に刻目。	内外面とも不明。	
204	〃	高坏	—— (3.5) —— 6.8	八の字状に開く裾部，裾端部は拡張され，凹線をなす。外面脚部に２条と６条の沈線を施す。不連続で金属器によると見られる。	内面ヘラ削り。	
205	包含層	壺	16.8 (14.4) —— ——	なめらかに外反する頸部から大きく開く口縁部，端部は面をなす。口縁端部下にヘラ状原体による刻目。頸部下には櫛描き直線文を施し列点文を施す。	内面指頭圧痕，指ナデ。	
206	〃	〃	14.0 (4.2) —— ——	八の字状に開く口縁部，口縁端部からヘラによる圧痕文，米粒状の粘土貼付が見られる。	内面口縁指ナデ。	
207	〃	〃	—— (9.3) —— ——	直立する頸部，頸部外面上部は横ナデにより凹線状になる。下部は貼付突帯，突帯間に金属器のヘラ先による列点文が施される。	内外面ヘラ磨き。	
208	〃	〃	—— (3.5) —— ——	算盤玉状の胴部，最大径は胴部中央に位置する。	外面ヘラ磨き。	
209	〃	甕	16.0 (7.8) —— ——	強く屈曲し外へ開く口縁部，口縁端部は上に拡張され，３条の凹線を施す。	磨耗のため内外面不明。	薄い器壁。
210	〃	〃	16.6 (6.0) —— ——	強く屈曲し外へ開く口縁部，口縁端部は上へ拡張され，ほぼ垂直に立ち，凹面を呈し，３条の擬凹線を施される。	外面ハケ調整，口縁横ナデ。	煤付着。
211	〃	壺	—— (9.1) 10.8 5.2	平底の底部から立ち上がり，最大径は胴部中央に位置する。	内面指ナデ，外面ヘラ磨き。	
212	〃	甕	—— (3.4) —— 5.8	あげ底の底部から外反気味に立ち上がる。底部はわずかに張り出す。	内外面とも不明。	内面煤付着。

遺物観察表13

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
213	包含層	甕	—— (13.4) —— 7.4	平底の底部から直線的に立ち上がる。	外面荒い原体によるハケ調整。内面ヘラ削り。	
214	〃	高坏	19.4 (2.8) —— ——	浅い坏部から外傾してのびる口縁部。	口縁部内外面横ナデ。	
215	〃	〃	—— (7.7) —— ——	円筒状の脚，坏部は直線的に立ち上がる。外面には鋭い原体による多条の沈線が巡る。	内面ヘラ削り。円盤充填法。	
216	〃	〃	—— (5.7) —— 9.2	八の字状に開く裾部，端部は下方を向き面をなす。脚外面は無文。	内面指頭押圧，絞り目，ヘラ削り，外面ヘラ磨き，端部横ナデ。	
217	〃	〃	—— (11.0) —— 12.2	筒状の脚から八の字状に開く裾部，端部は丸くおさめる。裾端部上を指頭押圧によって凹ませる。	内面指頭圧痕，外面ハケ調整，裾部指頭押圧，裾端部横ナデ。	
218	〃	壺	18.8 (5.6) —— ——	直立する頸部から大きく外反して開く口縁部，口縁端部は内傾して面をなす。	内面口縁部横ナデ，外面頸部縦方向のハケ調整。貼付口縁。	外面煤付着。
219	〃	〃	22.0 (11.5) —— ——	屈曲して短く斜め上に開く口縁部，口縁端部は内傾して面をなす。	内面指頭圧痕，外面ハケ調整。	
220	〃	〃	23.8 (6.8) —— ——	直立する口縁部，口縁端部は上方を向き面をなす。外面に幅の広い凹線文を施す。	内外面とも不明。	鉢の可能性もある。
221	〃	甕	24.0 (2.3) —— ——	くの字状に外反する口縁部，口縁端部は横ナデにより凹面状をなす。	〃	
222	〃	〃	22.0 (2.5) —— ——	くの字状に屈曲し斜め上に開く口縁部，口縁端部は外傾し面をなす。２条の凹線文が入る。	内面横方向のハケ調整。外面口縁部横ナデ。	
223	Ⅱ－Ａ区 旧谷状地形	壺	14.0 (7.0) —— ——	ほぼ直立する頸部から大きく外反して開く口縁部，口縁端部は外傾し２条の凹線文が施され，円形浮文に刺突を施した浮文が貼付。頸部外面ヘラ押圧による綾杉状の文様が施される。	内外面とも横ナデ。	
224	〃	〃	11.4 (6.0) —— ——	直立する頸部から大きく外反する口縁，口縁端部は上下に拡張されほぼ垂直な面をなし，２条の凹線文が施される。頸部には２個の円孔が穿たれ，凹線が施される。	内外面とも不明。	
225	〃	〃	18.6 (7.1) —— ——	ほぼ直立する頸部から大きく外反して開く口縁部，口縁端部はほぼ垂直な面をなし，２条の凹線文が施される。頸部外面にヘラ先による圧痕が入る。	口縁部内外面とも横ナデ調整。内面横方向のハケ，外面頸部縦方向のハケ調整。	
226	〃	〃	18.4 (9.0) —— ——	外反気味の頸部から大きく外反する口縁部，口縁端部は３条の凹線が施され，円形浮文が貼つけられた後に竹管を押す。頸部外面は幅の広い凹線文が施される。	口縁部内外面横ナデ調整。	
227	〃	〃	13.6 (5.6) —— ——	直立した頸部から，口縁部で大きく外反し，端部は上下に拡張し，垂直な面をなし凹線，円形浮文を貼りつけ浮文間は波状文でつなぐ。口縁内面に波状文。	内面縦方向のナデ，外面頸部ナデ。	
228	〃	〃	16.8 (11.6) —— ——	直立する頸部から大きく開く口縁部，端部は拡張され，２条の凹線と刻目が施される。頸部下にわずかに凹線が残る。	内外面とも不明。	
229	〃	〃	28.8 (6.7) —— ——	大きく外反する口縁。	内面横ナデ。	
230	〃	〃	31.7 (8.4) —— ——	直立気味の頸部から大きく外反する口縁部，口縁端部は外傾し凹面をなす。口縁外面には，横ナデにより２条の隆起をつくる。	内外面ともハケ調整。	

遺物観察表14

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
231	Ⅱ－A区 旧谷状地形	壺	15.0 (4.0) —— ——	直立気味の頸部から大きく開く口縁，口縁端部は丸くおさめる。下端には刻目を施す。	内外面とも不明。貼付口縁。	
232	〃	〃	18.2 (7.2) —— ——	外反して開く口縁部,口縁端部は丸くおさめる。	内外面とも横ナデ調整。	
233	〃	〃	21.0 (3.6) —— ——	大きく外反して開く口縁部，口縁端部は上下に拡張され３条の凹線文が施され，垂直な刻目が入る。	内面横ナデ。	
234	〃	〃	22.4 (4.7) —— ——	大きく外反して開く口縁部，口縁端部は下に拡張され,外傾し横ナデによる２条の凹線が入る。	内外面ハケ調整。貼付口縁。	
235	〃	〃	20.4 (5.5) —— ——	外反して開く口縁部，口縁端部は内傾して面をなし２条の凹線，金属器の先によると見られる刻目が施される。	内面横方向のハケ調整。外面縦方向のハケ調整。	
236	〃	〃	16.6 (6.5) —— ——	直線的に開く頸部から短く外反する口縁，端部は下に拡張され外傾し凸面状をなす。	内面不明。外面ハケ調整。貼付口縁。	
237	〃	〃	20.8 (39.3) —— ——	ほぼ直立する頸部から大きく外反し開く口縁部，口縁端部はほぼ垂直な凹面をなす。頸部５条の突帯貼付。	外面にわずかにヘラ磨き痕が残る。貼付口縁はすり消される。	
238	〃	〃	23.6 (12.5) —— ——	外反してのびる頸部から外へ開く口縁部，口縁端部は上下に拡張され３条の凹線を施す。頸部下に櫛描き列点文を施す。	口縁部内外面横ナデ，頸部外面ハケ調整。	
239	〃	〃	19.6 (10.8) —— ——	直線的に開きながらのびる頸部，口縁は大きく開く，端部は下に拡張され内傾する面をなし，３条の凹線文が施される。頸部下には凹線文が施され頸部と胴部を分ける。	内面横方向のハケ調整。外面縦方向のハケ調整。	
240	〃	〃	18.8 (8.0) —— ——	外反してのびる頸部からわずかに開く口縁，口縁端部は外傾し４条の凹線文が施される。	口縁部内外面とも横ナデ。外面縦方向のハケ調整。	
241	〃	器台	27.0 (7.5) —— ——	大きく開く口縁部，端部は上下に拡張され扇状文が施される。口縁下部には棒状原体をおし引きする。	内外面とも不明。貼付口縁。	
242	〃	壺	21.2 (8.5) —— ——	外反して開く口縁部,端部は内傾して面をなす。	〃	
243	〃	〃	20.0 (5.0) —— ——	わずかに外反して開く口縁部，端部は下に拡張され，内傾する面をなす。	内面横ナデ。	
244	〃	〃	17.8 (5.4) —— ——	わずかに外反して開く口縁部，端部は外傾し凹面状をなす。	内面横ナデ，外面口縁端部横ナデ，端部下指頭押圧，ヘラ磨き。	
245	〃	〃	19.0 (14.5) —— ——	直立する頸部からなめらかに開く口縁端部は上下に拡張され，内傾し３条の凹線が施される。	外面ハケ調整。	
246	〃	〃	11.6 (3.4) —— ——	外反して開く口縁部，口縁端部は面をなし外傾する。	外面頸部縦方向ハケ調整。	外面煤付着。
247	〃	〃	15.8 (3.2) —— ——	外反して開く口縁部，口縁端部は強い横ナデにより凹面状を呈する。	頸部外面ヘラ磨き。貼付口縁。	
248	〃	〃	14.8 (7.5) —— ——	直立する頸部から短く外反し開く口縁，端部は内傾し面をなす。	内面指ナデ。外面端部下押圧，頸部縦方向のハケ調整。貼付口縁。	

遺物観察表15

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
249	Ⅱ－A区 旧谷状地形	壺	15.8 (10.4) ―― ――	直立する頸部から外反して開く口縁，口縁端部は内傾し下端に刻目を施す。頸部下には列点文が施される。	内面口縁端部横ナデ調整。指頭圧痕が残る。	
250	〃	〃	19.0 (3.0) ―― ――	外反して開く口縁部，端部は内傾し面をなす。	内面横方向ハケ調整。外面頸部縦方向のハケ調整。	
251	〃	〃	24.6 (5.9) ―― ――	直立する頸部から外反して開く口縁部，端部は内傾し面をなす。	内面横ハケ調整。外面ハケ調整。貼付口縁。	
252	〃	〃	17.8 (6.0) ―― ――	直立気味の頸部から外反して開く口縁部，端部は内傾し凹面状をなす。頸部下には沈線？が入る。	内面横方向のハケ調整。外面縦方向のハケ調整。貼付口縁。	
253	〃	〃	16.8 (7.0) ―― ――	外反する頸部からなめらかに外へ開く口縁部，口縁端部は内傾し面をなす。	内外面ともハケ調整。	
254	〃	〃	15.6 (6.0) ―― ――	ほぼ直立する頸部からゆるやかに外反して開く口縁部，口縁端部は内傾する面をなし，わずかに下に拡張する。	内面横方向のハケ調整。外面縦方向のハケ調整。	
255	〃	〃	19.0 (7.1) ―― ――	ゆるやかに外反する口縁部，端部は外傾して面をなす。下端には刻目が施される。頸部外面に刻目が施され，頸部と胴部を分ける。	外面頸部縦方向のハケ調整。	外面煤付着。
256	〃	〃	20.0 (7.5) ―― ――	直立気味の頸部から外反して開く口縁部，口縁端部は外傾し面をなす。	内面横方向のハケ調整，指ナデ。外面頸部縦方向のハケ調整。	
257	〃	〃	18.2 (5.6) ―― ――	直立気味の頸部から外反して開く口縁，口縁端部は内傾し面をなす。	内外面ハケ調整。貼付部をハケですり消す。貼付口縁。	
258	〃	〃	26.6 (4.0) ―― ――	強く屈曲し開く口縁，口縁端部は内傾し面をなす。	内外面とも不明。貼付口縁。	
259	〃	〃	20.0 (4.1) ―― ――	外反して開く口縁部，端部は内傾する面をなし刻目を施す。	内面横方向のハケ。頸部外面縦方向のハケ調整。貼付口縁。	
260	〃	〃	20.0 (6.0) ―― ――	ほぼ直立する頸部から外反する口縁，口縁端部は外傾する面をなし下部には刻目が施される。	内面横方向のハケ調整。	外面煤付着。
261	〃	〃	16.8 (4.0) ―― ――	短く外反して開く口縁部，口縁端部は内傾する面をなす。	口縁端部内外面とも横ナデがわずかに残る。外面口縁部指頭押圧。	
262	〃	〃	18.2 (5.8) ―― ――	外反して大きく開く口縁部，端部は面をなし，わずかに下にたれる。	内外面とも口縁部横ナデ。	
263	〃	〃	15.2 (7.2) ―― ――	短く外反する頸部から，やや斜め上に大きく開く口縁部，端部は外傾し面をなす。端部下には刻目が施される。頸部下から胴部にかけては，簾状部，波状文，櫛描沈線文が施される。	内面口縁部横方向のハケ調整。胴部指ナデ。外面縦方向のハケ調整。	
264	〃	〃	19.0 (7.0) ―― ――	なめらかに外反する口縁部，口縁端部は内傾し面をなし，下端には刻目を施す。頸部下には2条の沈線が入り，頸部と胴部を分ける。	内面指ナデハケ調整。	
265	〃	〃	16.2 (11.1) ―― ――	短く直立する頸部からなめらかに開く口縁，端部下には刻目が施される。3条の凹線が入り，頸部と胴部を分ける。	内面指頭圧痕。外面ハケ調整。	
266	〃	〃	18.5 (6.7) ―― ――	直立気味の頸部から外反して開く口縁，口縁端部は外傾して面をなす。口縁部外面には2本の微隆起帯が巡り，その上下には刺突文が施される。	内面磨耗のため不明。外面頸部縦方向のハケ調整。	

遺物観察表16

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
267	Ⅱ－Ａ区 旧谷状地形	壺	19.0 (14.5) ―― ――	直立する頸部から大きく開く口縁部，端部はわずかに内傾する面をなし，下部に刻目が施される。頸部下部は円形浮文に刺突を施しその下には４条の微隆起帯で区画された中に，櫛描沈線が巡る。その下にはヘラ先による圧痕文が入る。	内外面とも不明。	
268	〃	甕	20.0 (20.6) 22.3 ――	なめらかに開く口縁，口縁端部は内傾し面をなす。最大径は上胴部に位置する。	内面とも不明。外面ハケ調整。貼付口縁。	
269	〃	壺	18.2 (18.0) ―― ――	大きく外反する口縁部，端部は内傾し面をなし，刻目が施される。頸部下には櫛描沈線が入る。	内面指ナデ。貼付口縁。	
270	〃	〃	14.6 (7.5) ―― ――	ゆるやかに外反して開く口縁部，口縁端部は内傾し凹面をなす。	〃	
271	〃	〃	16.8 (23.1) 27.5 ――	短く直立する頸部から斜め上に大きく開く口縁部，端部は内傾し面をなす。口縁下部には刻目が施される。最大径は上胴部に位置する。	内面ヘラ削り。貼付口縁。	
272	〃	〃	15.0 (4.3) ―― ――	短くゆるやかに外反する口縁部，口縁端部は内傾し，３条の凹線文が施され，その上にヘラ先による刻目が入る。	内外面とも不明。	
273	〃	〃	15.2 (6.3) ―― ――	ゆるやかに外反して開く口縁部，口縁端部は内傾し面をなし２条の凹線が施される。	〃	
274	〃	〃	21.8 (7.4) ―― ――	ゆるやかに外反する口縁部，端部は内傾し，４条の凹線が施される。	外面横ナデ調整。	
275	〃	〃	16.8 (11.3) ―― ――	短く外反する頸部から斜め上外へ開く口縁部，口縁端部は外傾し，３条凹線文が施される。	口縁部内外面とも横ナデ。内面指頭圧痕が残る。外面胴部横ナデ，荒い縦方向のハケ調整。	
276	〃	〃	16.0 (8.6) ―― ――	短く外反し斜め上に開く口縁部，口縁端部は下に拡張され，外傾する面をなし，３条の凹線文が施される。	口縁部内外面とも横ナデ。外面胴部ハケ調整。	外面煤付着。
277	〃	〃	17.0 (8.5) ―― ――	短く外反し斜め上に開く口縁部，口縁端部は内傾し２条の凹線が施される。	内面ヘラ削り，横ナデ調整。外面横ナデ調整。	
278	〃	〃	10.4 (6.1) ―― ――	ほぼ直立する頸部から短く開く口縁部，口縁端部は内傾し２条の凹線状の横ナデ痕が入る。	内面指頭圧痕が残る。外面口縁部横ナデ。	
279	〃	〃	16.2 (4.6) ―― ――	短く斜め上に開く口縁部は端部に向かって肥厚する。	内外面とも不明。	
280	〃	〃	23.0 (6.2) ―― ――	ゆるやかに外反して開く口縁部，端部は横ナデによって上下にわずかに拡張される。	内外面口縁端部横ナデ。	
281	〃	〃	14.8 (17.8) ―― ――	ほぼ直立し，わずかに開く短い口縁部，端部は内傾し面をなす。	内面ヘラ削り。	全体に厚いつくり。
282	〃	〃	13.8 (12.0) ―― ――	直立してのびる頸部。わずかに開く口縁部，端部は面をなし，上方を向き凹線文が３条施される。頸部外面には幅の広い凹線文。	内外面とも不明。	
283	〃	〃	18.0 (11.7) ―― ――	直立する頸部からわずかに直線的に開く口縁部，端部は上方を向く面をなしわずかに凹面状を呈し，２個１組の円形浮文が貼りつけられる。口縁部外面には幅の広い４条の凹線文が施され，頸部には金属器と見られる原体で直線文が施される。	〃	

遺物観察表17

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
284	Ⅱ－A区 旧谷状地形	壺	15.2 (4.3) —— ——	直線的にのびる頸部から口縁，口縁端部は上方を向く面をなし２条の凹線文が施される。口縁部外面には幅の広い凹線文が施される。	内面横ナデ調整。	
285	〃	〃	20.8 (11.3) —— ——	直線的にのびる頸部から，わずかに開く口縁部，端部は拡張され上方を向く凹面をなし，円形浮文が貼り付けられる。頸部外面には４条の凹線文が施される。	内外面とも不明。	
286	〃	〃	15.4 (9.7) —— ——	ほぼ直立する頸部からわずかに外反して開く口縁部，端部は下に拡張され１条の凹線文が入る。	内外面とも磨耗のため不明。	
287	〃	〃	9.4 (5.4) —— ——	ほぼ直線的にのびる頸部からわずかに開く口縁部，口縁端部は上方を向く面をなす。外面には幅の広い凹線文が施される。	内面横ナデ。	
288	〃	〃	19.8 (9.4) —— ——	直線的にのび，外傾して開く口縁部，口縁端部は上方を向き丸くおさめる。口縁外面には３条の幅の広い凹線文が施される。	外面ナデ調整。	
289	〃	〃	18.2 (10.5) —— ——	直線的にのびわずかに開く口縁，口縁端部は上方を向き平面をなす。口縁には４条の沈線が巡る。	内外面ともハケ調整。	
290	〃	〃	13.2 (7.0) —— ——	外傾し直線的にのびる口縁部，端部は内傾し面をなし，棒状原体で刻目が施される。	内外面とも不明。	
291	〃	〃	14.0 (7.5) —— ——	外傾し直線的に開く口縁部，口縁端部はわずかに下に拡張され，内傾する面をなす。	内面指ナデ。外面口縁端部横ナデ。縦方向のハケ調整。	
292	〃	〃	15.4 (12.0) —— ——	外傾してのびる口縁部，口縁端部は面をなす。	内外面とも不明。	
293	〃	〃	7.3 (10.0) —— ——	直立してのびる頸部よりわずかに外反する口縁，端部はわずかに拡張され上方を向き平面をなす。口縁部外面には凹線が施される。胴部中位に最大径。	内面にしぼり目が残る。外面頸部下にナデがわずかに残る。	
294	〃	〃	8.4 (10.6) —— ——	わずかに外反してのびる頸部，口縁端部は上方を向く面をなす。口縁上部は５条の凹線文が施され，下部にはヘラ圧痕文。	内面しぼり目，外面横方向のハケ調整。	
295	〃	〃	9.9 (12.0) —— ——	直立する頸部，二重口縁，端部は拡張され，上方を向く面をなす。口縁部下に刻目。	内外面とも不明。	
296	〃	〃	14.0 (8.2) —— ——	わずかに外反する頸部から，直立する肥厚した口縁部，口縁端部は上方を向く凹面をなす。	外面頸部ハケ調整。	
297	〃	〃	15.2 (4.3) —— ——	なめらかに外反して開く口縁部，口縁端部は凹面状をなす。口縁部外面には，２条の微隆起帯が巡り，棒状原体による刻目が施される。	内外面とも不明。	
298	〃	〃	14.4 (5.0) —— ——	直立気味の頸部から外反して開く口縁部，口縁端部は外傾し凹面をなす。口縁部は肥厚する。	内面横方向のハケ調整。外面指頭圧痕，横ナデ調整。	
299	〃	〃	6.8 (3.9) —— ——	無頸壺，算盤玉形に張った胴部。内傾した上胴部に凹線を施す。口縁端部は上方を向き平面をなす。	内面には指頭圧痕が残る。	無頸壺
300	〃	〃	29.0 (4.4) —— ——	外反し大きく開く頸部，口縁部は直線的に立ち上がり，口縁端部は上方を向く凹面をなす。口縁部外面には斜格子状を施文される。	内外面とも不明。	
301	〃	甕	21.6 20.0 20.4 6.6	短く斜め上に開く口縁，口縁端部は拡張され内傾し，４条の凹線が施される。最大径は胴部中央よりやや上に位置する。ややあげ底の底部。	内面ヘラ削り。外面ハケ調整。	

遺物観察表18

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
302	Ⅱ－A区 旧谷状地形	甕	16.2 (37.2) 29.5 ――	わずかに外反して，斜め上に開く口縁部，口縁端部は上下に拡張され面をなす。最大径は，胴部中央よりやや上に位置する。	内面には指頭圧痕が残る。	
303	〃	〃	17.2 32.3 24.5 7.2	ななめ上に開く短い口縁部，端部は内傾し，横ナデによって凹む上胴部に最大径をもつ。	内面は上胴までヘラ削り，下胴部はヘラ削りが著しい。上胴部から頸部に指頭圧痕が残る。外面上胴部より中央ヘラ磨き。	
304	〃	〃	18.0 (7.6) ―― ――	くの字状に強く屈曲し，水平気味に開く，口縁端部は上下に拡張され外傾する面をなし，２条の凹線文が施される。	内面口縁部横ナデ調整。	
305	〃	〃	30.4 (6.8) ―― ――	くの字状に強く屈曲し，斜め上に開く口縁部，口縁端部は外傾し４条の凹線文が施される。	内面上胴部横方向のハケ調整。	
306	〃	〃	14.0 (7.2) ―― ――	くの字状に強く屈曲し，やや斜め上に開く口縁部，口縁端部は上に拡張され３条の凹線文が施される。	外面口縁部横ナデ，胴部縦方向のハケ調整。	
307	〃	〃	18.0 (10.8) ―― ――	くの字状に強く屈曲し，短くほぼ水平に開く口縁部，口縁端部は上下に拡張され，２条の凹線文が施される。最大径は肩部。	内面ヘラ削り，指頭圧痕が残る。外面胴部ハケ調整。	
308	〃	〃	15.4 (7.4) ―― ――	くの字状に強く屈曲し，斜め上に開く口縁部，口縁端部は上下に拡張され，外傾し２条の凹線文が施される。	内外面にわずかにハケ目が残る。	外面煤付着。
309	〃	〃	15.6 (5.8) ―― ――	くの字状に強く屈曲し，斜め上に開く口縁部，口縁端部は上に拡張され，内傾する面をなし２条の凹線文が施される。	内面口縁部強い横ナデ調整。外面口縁部横ナデ，胴部縦方向ハケ調整。	
310	〃	〃	17.9 (5.7) ―― ――	くの字状に強く屈曲し，水平気味に開く口縁部，口縁端部は上下に拡張され，内傾し２条の凹線文が施される。	内面口縁横ナデ調整。	
311	〃	〃	14.6 (17.5) ―― ――	くの字状に強く屈曲し，短く外側へ開く口縁部，端部は上に拡張され２条の凹線が施される。最大径は上胴部に位置する。	内外面とも不明。	
312	〃	〃	16.6 (21.7) 21.3 ――	くの字状に屈曲し，斜め上に開く口縁，口縁端部は上下に拡張され，外傾し２条の凹線が施される。最大径は胴部中央よりやや上に位置する。	内面ヘラ削り。外面ハケ調整。	
313	〃	〃	16.3 29.2 20.5 6.2	くの字状に屈曲し，短く斜め上に開く口縁部，口縁端部はわずかに拡張され内傾する面をなし，凹線文が施される。最大径は胴部中央よりやや上に位置する。	内面頸部下までヘラ削り。外面ハケ調整。	
314	〃	〃	15.1 28.8 23.0 8.4	短く斜め上に開く口縁，口縁端部は上に拡張され凹面をなす。最大径は胴部中央に位置する。	内面ヘラ削り。外面ハケ調整。	
315	〃	〃	16.0 (24.2) 19.0 ――	くの字状に屈曲し，短く斜め上に伸びる口縁部，端部は上下にわずかに拡張し，内傾する面をなし横ナデによって仕上げる。最大径は胴部上位に位置する。	内面頸部下までヘラ削り。外面ハケ調整。	
316	〃	〃	17.6 (5.8) ―― ――	くの字状に屈曲し，斜め上に開く口縁，口縁端部はほぼ垂直な面をなす。	内面口縁部横ナデ調整。	外面煤付着。
317	〃	〃	10.5 (8.7) 11.4 ――	短く斜め上に開く口縁部，端部は丸くおさめる。最大径は胴部中央よりやや上に位置する。	磨耗のため内外面とも不明。	
318	〃	〃	11.4 (10.0) 11.8 ――	短くゆるやかなくの字状を呈する口縁部，口縁端部は面をなし，わずかに下に拡張し，下部に刻目が施される。胴部中央に最大径をもつ。	内外面とも口縁部横ナデ。	外面煤付着。二次焼成を受ける。

遺物観察表19

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
319	Ⅱ－A区 旧谷状地形	甕	16.8 14.8 14.2 6.6	短く斜め上に開く口縁部，口縁端部は内傾し面をなす。最大径は口縁部下に位置し，内湾して平底の底部に到る。	内外面とも不明。	
320	〃	〃	17.0 (8.5) —— ——	くの字状に強く屈曲し斜め上に開く口縁。口縁端部は面をなす。	外面縦方向のハケ調整。	
321	〃	〃	16.2 (9.3) —— ——	くの字状に強く屈曲し斜め上に開く口縁，端部は面をなす。	内面指頭圧痕が残る。外面縦方向のハケ調整。	
322	〃	〃	16.0 (7.2) —— ——	くの字状に強く屈曲し，斜め上に開く口縁部，端部は凹面状をなしわずかに下に拡張される。	外面横ナデ。	外面煤付着。
323	〃	壺	—— (7.6) —— ——	上胴部には3条の微隆起帯が巡りその間に櫛描沈線が施される。上部には円形浮文に刺突を施した浮文が貼りつけられる。	内外面とも不明。	薄手式土器
324	〃	台付壺	—— (8.6) 15.4 ——	算盤玉状の胴部をもつ。台付壺と思われる。	内面ハケ調整	
325	〃	〃	—— (13.0) —— 21.0	台付壺，八の字状に開く裾部，端部は拡張され，2条の凹線が施される。	内面ヘラ削り。円盤充填法。	
326	〃	壺	—— (8.0) —— 9.8	平底の底部から直線的に立ち上がる。	外面にハケ目が残る。	
327	〃	〃	—— (7.4) —— 6.8	〃	内面ヘラ削り。外面ハケ調整。	
328	〃	〃	—— (7.8) —— 6.4	平底の底部から立ち上がり，張り出した胴部，胴部中央に最大径を有する。	内外にヘラ削り痕がわずかに残る。	
329	〃	〃	—— (8.0) —— 6.4	あげ底の底部から内湾気味に立ち上がる。	内外面とも不明。	
330	〃	〃	—— (5.0) —— 11.4	平底の底部から立ち上がる。	〃	
331	〃	〃	—— (4.4) —— 4.0	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	〃	
332	〃	〃	—— (3.6) —— 5.2	〃	〃	外面煤付着。
333	〃	〃	—— (4.5) —— 10.8	平底の底部から立ち上がる。	〃	
334	〃	〃	—— (8.3) —— 9.3	平底の底部から直線的に立ち上がる。	内面にわずかに指頭圧痕。	
335	〃	〃	—— (4.1) —— 8.6	〃	外面ヘラ磨き。	
336	〃	〃	—— (8.5) —— 9.2	〃	内面ヘラ削り。外面ヘラ磨き。	

遺物観察表20

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
337	Ⅱ－A区 旧谷状地形	壺	—— (7.5) —— 9.4	平底の底部からやや外反気味に立ち上がる。	内外面とも不明。	
338	〃	〃	—— (6.7) —— 8.5	平底の底部。	内面底部近くに指頭圧痕。外面ナデ。	外面黒斑
339	〃	甕	—— (10.5) —— 7.4	あげ底の底部から直線的に立ち上がる。	内面ヘラ削り。	
340	〃	〃	—— (4.0) —— 5.2	平底の底部から立ち上がる。	内面ヘラ削り。外面ヘラ磨き。	
341	〃	〃	—— (4.9) —— 5.4	平底の底部。	内面わずかに指頭が残る。外面不明。	
342	〃	〃	—— (3.7) —— 6.6	あげ底気味の体部より張り出した底部。	内外面とも不明。	
343	〃	〃	—— (2.5) —— 6.6	〃	〃	全体にうすい。
344	〃	〃	—— (3.5) —— 7.3	平底の底部から直線的に立ち上がる。体部より張り出した底部。	〃	
345	〃	〃	—— (4.3) —— 10.2	体部から張り出した平底の底部。	〃	
346	〃	高坏	25.6 (7.1) —— ——	口縁はほぼ直立し，口縁端部は上方を向き面をなす。口縁部と体部の屈曲部は口縁部の外側へ張り出し稜をなす。口縁外面は凹面状を呈し，口縁端部下には浅い凹線が入る。	内面ハケがわずかに残る。外面ヘラ磨き。	
347	〃	〃	30.8 (5.6) —— ——	坏部より直立する口縁部，口縁端部は拡張され，上方を向く面をなし，2条の凹線文が施される。口縁部と体部の屈曲部は，口縁部の外側へ張り出し稜をなす。口縁部外面は凹面状を呈し，端部下に浅い凹線が入る。	外面ハケ，ヘラ磨き。	
348	〃	〃	24.0 (2.3) —— ——	水平口縁をもつ高坏，口縁端部は拡張され，垂直な面をなし4条の凹線文が施される。	外面ヘラ磨き。	
349	〃	〃	17.6 (3.2) —— ——	水平口縁をもつ高坏，端部は拡張され垂直な面をなし，3条の凹線文が施される。	内外面とも不明。	
350	〃	〃	25.8 (11.1) —— ——	水平口縁をもつ高坏，口縁端部には，2条の凹線が施される。坏部は椀状を呈する。	〃	
351	〃	〃	26.0 (6.4) —— ——	————	〃	大型高坏
352	〃	〃	—— (12.8) —— 21.6	八の字に開く裾部，端部は拡張され，凹線文がわずかに残る。脚部外面には金属器と考えられる原体で2条の横方向の直線が巡り，その上下に鋸歯文の中に縦方向の直線文が入ったものが描かれる。竹管文が施され，裾部外面にはヘラ先による羽状の列点文が施される。	内外面とも不明。	
353	〃	〃	—— (13.1) —— 10.8	八の字状に開く裾部，端部は拡張され2定の凹線が施される。脚外面には金属器と思われる鋭い原体によって直線文，鋸歯文が施される。裾部には刺突文が施される。	内面ヘラ削り。	

遺物観察表21

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
354	Ⅱ－Ａ区 旧谷状地形	高坏	—— (7.9) —— ——	八の字状に開く脚部，脚部外面には，７条と４条の櫛描文，円孔が施される。	内面ヘラ削り。円盤充填法。	
355	〃	〃	—— (6.9) —— 10.0	短く八の字状に開く脚，端部は拡張され２条の凹線文が施される。裾部外面には金属器の先による刻目が入る。	脚内面ヘラ削り。円盤充填法。	
356	〃	〃	—— (13.1) —— 16.4	八の字状に開く裾部，端部は拡張され２条の凹線が施される。脚部外面には12条の直線文が巡り，縦の直線文が施される。円盤充填法。	内面横方向のヘラ削り。	
357	〃	〃	—— (5.3) —— 11.4	八の字状に開く裾部，端部は拡張され２条の凹線文が施される。脚部外面には３条の沈線の間に羽状に列点文が施され、鋸歯文の中に斜め直線文が入り，円孔，列点文が施されている。	内面ヘラ削り痕がわずかに残る。	
358	〃	〃	—— (3.0) —— 9.2	八の字状に開く裾部，端部は拡張され，３条の凹線が施される。裾部外面には，不規則に縦方向のヘラ先と見られる直線文,円孔が施される。	内面ヘラ削り。	
359	〃	〃	—— (5.6) —— 9.0	八の字状に開く裾部，端部は肥厚され２段になる。裾部外面には竹管文，列点文が施される。	内外面とも磨耗のため不明。	
360	〃	〃	—— (12.8) —— 12.0	八の字状に開く裾部，端部は外傾し面をなす。	内面脚上部はしぼり痕が見られ裾部横ナデ。外面ヘラ磨き。円盤充填法。	
361	〃	〃	—— (10.7) —— 11.0	八の字状に短く開く裾部，端部は内傾する面をなす。	内外面とも不明。	
362	〃	〃	—— (9.4) —— 14.0	八の字状に開く裾部，端部は拡張されない。	〃	
363	〃	〃	—— (8.0) —— 11.8	八の字状に大きく開く裾部。	内面横ハケ調整。外面ヘラ磨き。	
364	〃	〃	—— (4.8) —— 13.7	内湾気味に円盤状に開く裾部。	外面ハケ調整。	
365	〃	〃	—— (6.3) —— 13.2	短い脚部から八の字状に開く裾部。	内面に指頭圧痕が残る。	
366	〃	〃	—— (6.0) —— 6.0	短く八の字状に開く脚。	内外面とも不明。	
367	〃	〃	—— (5.3) —— 6.0	短く柱状の脚部に幅のせまい水平の端部。	外面ヘラ削り痕が残る。	
368	〃	鉢	13.8 (3.9) —— ——	内湾して立ち上がる体部から水平口縁がのびる。口縁端部は外傾し２条の凹線文が施される。	内外面とも不明。	
369	〃	〃	23.8 (8.4) —— ——	口縁端部は拡張されやや内傾し面をなし，横ナデにより２条の凹が入る。外面は４条の凹線文が施される。	内面口縁部横ナデ。外面ハケ，ヘラ磨き。	
370	〃	甕	21.2 (7.0) —— ——	内湾して立ち上がる胴部から，短く斜め上に開く口縁部，端部は外傾し面をなす。最大径は肩部。	内面指頭圧痕が残る。外面口縁部指頭圧痕。口縁部下横ナデ調整。貼付口縁。	

遺物観察表22

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
371	Ⅱ－A区 旧谷状地形	器台	32.0 (6.9) —— ——	大きく開く口縁，口縁端部は拡張され，不規則な凹線文が入り，円形浮文に刺突を施した浮文が２個１組で貼り付けられる。頸部外面に凹線文が施される。口縁内面には，櫛描き波状文が描かれる。	内面ハケ調整。	
372	〃	〃	30.0 (12.0) —— ——	大きく開く口縁，口縁端部には４条の凹線文が施され，円形浮文に刺突された浮文が貼り付けられる。頸部外面に幅の広い凹線文。口縁内面には櫛描き波状文が描かれる。	内面にわずかに指頭圧痕が残る。	
373	〃	〃	—— (15.6) —— 25.0	筒状の胴部には凹線文が施され，脚部は八の字に開く，脚端部は拡張され，外傾する面をなす。２条の凹線文が施される。	端部内面横ナデ調整。	
374	〃	〃	—— (12.2) —— 25.4	八の字に開く裾部，端部は拡張され３条の凹線文が施され，外面には幅の広い凹線文が施される。	内外面とも不明。	
375	〃	〃	—— (10.7) —— 33.8	脚部外面には幅の広い凹線文が施される。	〃	
376	〃	〃	27.2 (6.5) —— ——	平坦な上面を持ち，筒状の脚がつく。	内外面指頭圧痕が残る。	
377	〃	把手		断面長方形のへん平な把手。	内外面とも不明。	
378	〃	〃		断面長方形の把手。	〃	
379	〃	〃		断面円形の把手。	〃	
380	〃	〃		断面楕円形の把手。	〃	
381	ＳＴ３	手捏 土器	—— (3.6) —— 2.8	円筒形の中央がくびれ，鼓形を呈する。	手捏ね。	
382	〃	〃	—— (2.4) —— 2.2	円筒形を呈する。	〃	
383	ＳＴ４	〃	4.0 2.0 —— 2.8	小さな坏状。	〃	
384	〃	小型 土器	—— (4.5) —— 4.4	わずかに端部が開く円筒形で，管状を呈する。	内外面とも不明。	
385	ＳＫ２	〃	—— (2.7) —— 3.6	あげ底気味の底部から直立し立ち上がる。	内面指頭押圧。外面指頭圧痕がわずかに残る。	
386	〃	〃	—— (3.3) —— 3.2	〃	内面不明。外面指頭押圧後ヘラナデ調整。	
387	〃	〃	—— (11.0) —— 5.8	頸部から張り出した肩，最大径を持つ肩から平底の底部に直線的に下る。	内面指頭圧痕が残る。外面はヘラ削り。下胴部はヘラ磨き。	
388	ＳＤ６	〃	4.6 4.7 —— 3.6	円筒形でわずかに口縁部が開き，刺突文が施される。	指頭圧痕がわずかに残る。	

遺物観察表23

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
389	ＳＤ６	小型 土器	—— (8.3) —— 4.0	平底の底部から直線的に立ち上がり最大径は上胴部に位置する。	内面指ナデ。外面ハケ調整。	
390	〃	〃	—— (6.7) —— 4.0	円筒形の胴部より直線的に外傾する口縁部。	内外面とも不明。	
391	ＳＤ８	手捏 土器	4.0 4.4 —— 1.0	筒状の胴部から斜め上へ直線的に開く口縁部。	指頭圧痕が残る。	
392	ＳＸ１	小型 土器	4.2 6.1 —— 3.6	あげ底の底部，胴部ほぼ中位で最大径をなす。端部は上方を向き丸くおさめる。外面はていねいにつくられる。	〃	
393	〃	〃	—— (5.1) —— 3.0	上胴部に最大径を持ち，平底の底から直線的に立ち上がる。	外面に指頭圧痕が残る。	
394	〃	〃	—— (3.3) —— 3.6	平底の底部。	内面棒状のもので押圧。外面ヘラ削り。	
395	〃	〃	—— (5.0) —— 4.8	短い脚がついた底部，胴はやや内湾気味に上方に上がる。	内面ヘラ削り。外面わずかに指ナデ痕が残る。	
396	〃	〃 (器台)	—— (2.3) —— 3.0	円筒形の中央部がくびれた鼓形を呈す。	内外面とも不明。	
397	〃	〃 〃	—— 4.1 —— 3.2	円筒形の中央部がくびれた鼓形をなし，上面が平面をなす。	〃	
398	〃	〃 〃	—— 3.6 —— 3.8	円筒形の中央部を押圧し，鼓形に成形，上面は平面をなす。	〃	
399	〃	〃	—— 3.4 —— 2.0	円筒形で中央部がくびれ，鼓形を呈す。	〃	
400	〃	〃	—— (4.8) —— 6.6	短く八の字に開く裾部から，粘土充実の脚へ直線的に立ち上がる。	外面指頭圧痕。わずかにヘラ削りが残る。	
401	包含層	〃 (無頸壺)	—— (4.5) —— ——	丸くおさめる口縁端部，円孔があく。	内外面とも不明。	
402	〃	〃 (器台)	—— (3.0) —— ——	円筒形を呈す。	手捏ね。	
403	〃	〃 〃	—— (5.8) —— 2.4	円筒状の粘土を中央部からしぼり上部を細くする。上面は平面をなす。	〃	
404	〃	〃 〃	—— 5.4 —— 2.4	円筒状の粘土をつまみあげ，鼓形をなす。平坦な上面をなす。	〃	
405	〃	〃	8.8 5.6 —— ——	丸底の底部から立ち上がり，口縁部は直立し，口縁端部は丸くさおめ上方を向く。	内面横ナデ。	
406	〃	〃	5.8 6.8 —— 2.8	平底の底部から内湾気味に立ち上がり，胴部上位に最大径を有す。口縁部は斜め上に向かって大きく開く。	内面指ナデ。外面指頭押圧後ハケ調整。	

遺物観察表24

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形　態　・　文　様	手　　法	備　考
407	Ⅱ－A区 旧谷状地形	小型 土器	4.4 5.4 — 3.4	算盤玉型をした胴部を持つ。無頸壺。	内外面とも不明。	
408	〃	〃	4.1 5.4 — 2.3	平底でくびれた底部よりほぼ直線的に立ち上がる。手づくねで底部を指頭によりつまむ。	内面底部は棒状のもので押圧。	
409	〃	〃	3.8 5.3 — 2.0	くの字状に短く斜め上に開く口縁端部は丸くおさめる。最大径は胴部中央より上位に位置。	内面ヘラ削り。	
410	〃	〃	4.3 8.0 — 3.0	口縁部はわずかに外反し,端部は丸くおさめる。ほぼ胴部中央に最大径。底部は平底。	内面にわずかに指頭圧痕が残り，口縁部はヘラ削り，しぼり目が残る。外面は胴部中央にヘラ削り。	
411	〃	〃	6.8 7.8 — 5.5	茶碗形の鉢に短い脚がつく，脚部裾は指でつまみ出し，円盤状を呈する。	内外面ともナデ。	
412	〃	〃	— (4.9) — 3.4	短い八の字状に開く脚台をもつ。	外面にわずかに指頭圧痕が残る。	
413	〃	〃	— (3.7) — 5.2	短く八の字状に開く脚台を持つ,あげ底の底部。	外面指頭圧痕が残る。	
414	〃	〃	— (2.3) — 6.0	ほぼ水平の脚台，端部は面をなす。	内外面とも不明。	
415	〃	〃	— (2.5) — 4.8	柱状の脚から幅が狭く，ほぼ水平に開く裾部を持つ。あげ底の底部。	外面ハケ，指ナデ。	
416	〃	〃 (器台)	3.3 3.5 — 1.8	筒状の器台で，口縁部をつまみ，わずかにくぼんだ，坏部をつくる。	内面指ナデ。外面はヘラ状の工具でナデる。口縁部はつまみ。	
417	〃	〃 〃	3.1 4.4 — 3.6	鼓状の器台と考えられる。	内外面とも不明。	
418	〃	〃 〃	2.2 3.7 — 3.0	鼓状の器台。	〃	
419	〃	〃	— (6.4) — 3.6	筒状の胴部。	内面しぼり。外面ハケ調整。	
420	〃	〃	— (5.4) — 5.0	平底の底部から立ち上がり，筒状の体部，体部外面には4列の瓜圧痕文が施される。	内面指頭圧痕。外面下胴部指頭圧痕が残る。	

遺物観察表25

図版番号	出土地点	器　種	材　質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	備　　考
421	ＳＫ２	鉄鏃	鉄	3.9	2.2	0.2	11.1	先端はやや中心より右側にあり，細長い三角形状を呈する。茎部は欠損してている。平基式，扁平。
422	〃	〃	〃	5.5	2.8	0.3	12.6	最大幅が中央部にあり，基部に行くに従って細くなる木の葉型を呈する。厚さは扁平で薄い。
423	ＳＸ１	〃	〃	4.0	2.3	0.4	——	先端部で屈曲する五角形状を呈する。右側脚部，茎部が欠損する。
424	ＳＴ２	石鏃	サヌカイト	3.2	1.2	0.3	1.2	凸基式有茎石鏃，縁辺部に細かな調整を施す。
425	Ｄ区 包含層	〃	〃	2.9	1.5	0.2	1.2	凸基式無茎石鏃と考えられる。最大幅は中央部にくる。縁辺部に細かな調整を施す。扁平で薄い。
426	ＳＤ６	〃	〃	1.9	1.4	0.4	0.8	先端部が欠損する。基部はわずかに凹む凹基式無茎石鏃。扁平で薄い。
427	ＳＸ１	〃	〃	4.0	1.6	0.6	3.1	凸基式有茎石鏃，縁辺部には細かな調整が施される。
428	〃	〃	〃	2.8	1.6	0.4	2.2	先端部が欠損する。木の葉型を呈する凸基式有茎石鏃。縁辺部には細かな調整が施される。
429	〃	〃	〃	2.3	1.5	0.5	1.6	先端部が欠損する。凸基式有茎石鏃と考えられるが石錐の可能性もある。中央部に最大厚がくる。
430	〃 Ｐ５	〃	〃	2.7	1.7	0.3	1.5	凹基式無茎石鏃，縁辺部には細かな調整を施す。扁平で薄い。
431	Ｃ区 包含層	〃	〃	2.4	2.8	2.2	2.3	先端部が欠損する。凹基式無茎石鏃，二等辺三角形状を呈する。大型石鏃であるが扁平で薄い。
432	Ｄ区 包含層	〃	〃	3.4	2.0	0.5	2.9	先端部がわずかに欠損する。凸基式有茎石鏃，刃部には細かな調整が施される。
433	〃 〃	〃	〃	2.4	2.1	0.5	1.5	先端部が欠損する。凹基式無茎石鏃，二等辺三角形状を呈する。縁辺部には細かな調整が施される。
434	〃 〃	〃	〃	3.7	1.5	0.5	3.4	先端部が欠損する。凸基式有茎石鏃，柳葉状を呈し直線状の長い刃部を有する。縁辺部は細かな調整が施される。
435	〃 〃	〃	〃	2.8	2.0	0.4	2.5	左側脚部が欠損する。先端は鈍角で二等辺三角形状を呈する。凹基式無茎石鏃縁辺部に調整を施し扁平で薄い。
436	表採	〃	〃	2.7	2.3	0.6	3.0	先端部，左側脚部が欠損する。凹基式無茎石鏃。表採のため表面の風化が著しい。
437	Ｃ区 客土層	〃	チャート	1.8	1.7	0.4	0.8	凹基式無茎石鏃，正三角形状を呈し抉りは深い。全体に細かな調整がみられる。縄文時代の石鏃と考えられる。
438	〃 〃	〃	〃	1.5	1.3	0.3	0.5	先端部，右側脚部が欠損する凹基式無茎石鏃，二等辺三角形状を呈する。細かな調整が施され縄文時代の石鏃か。
439	〃 〃	〃	〃	1.5	1.1	0.3	0.4	先端部，両脚部が欠損する凹基式無茎石鏃。縄文時代の石鏃と考えられる。
440	Ｄ区	〃	〃	1.5	1.1	0.2	0.3	先端部，左側脚部欠損。凹基式無茎石鏃。細かな調整が施され全体に扁平で薄い。縄文時代の石鏃と考えられる。
441	ＳＴ２	石包丁	頁岩	7.8	3.4	0.6	31.0	直線的な両刃の刃部を持つ。表面は研磨によって仕上げられ，裏面は自然面が残る。

遺物観察表26

図版番号	出土地点	器　種	材　質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	備　　考
442	ＳＴ２	石包丁	頁岩	4.1	4.9	0.9	17.2	刃部は欠損し残存しない。両面とも研磨によって仕上げられる。端部には抉りを有する。
443	ＳＴ３	〃	粘板岩	11.9	4.4	0.7	66.2	直線的な両刃を有し長方形を呈する。全体を丁寧な研磨によって仕上げる。双孔が穿たれる。
444	ＳＤ15	〃	頁岩	9.0	5.2	0.8	56.0	湾曲部と直線部を持つ両刃石包丁。縁辺部表面，裏面ともに研磨されるが大剝離痕は残る。両端に抉りを有する。
445	ＳＸ１	〃	粘板岩	12.0	4.1	0.6	38.0	直線的な両刃を有する。全体を丁寧な研磨によって仕上げる。中央部よりやや上に双孔が穿たれる。
446	〃	〃 未製品	〃	9.8	5.1	1.2	101	剝離によって形が整えられる。わずかに擦痕が残る。
447	Ⅱ－Ａ区 旧谷状地	〃	頁岩	8.2	4.7	0.7	47.8	ほぼ半分が欠損する。直線的な両刃の刃部を持つと考えられる。全体を研磨によって仕上げる。
448	Ⅱ－Ａ区 旧谷状地	〃 未製品	頁岩 黒色頁岩	10.9	5.5	0.8	91.8	剝離によって形が整えられる。表面にわずかに擦痕が残る。
449	Ⅱ－Ａ区 旧谷状地	〃 〃	硬砂岩	9.5	6.4	1.5	81.7	河原石を大きく剝離させ刃部とし片面は自然面が残る。端部は一方に抉りが確認できる。
450	ＳＴ６	石斧 未製品	頁岩	12.5	5.7	2.5	320	荒整形され，側面が敲打によって整えられる段階の未製品と考えられる。
451	ＳＫ１	石斧	緑色片岩	6.2	4.2	1.9	90.0	基部が欠損する。断面形が長方形の両刃石斧。全体を丁寧に研磨して仕上げる。
452	Ｄ区 包含層	石斧 未製品	粘板岩	6.6	7.0	1.1	76.0	半分欠損。側面も丁寧に研磨し面取りされている。扁平片刃になると考えられる。
453	Ｇ区北 包含層	石斧	緑色片岩	8.0	2.9	2.2	98.0	断面形は楕円を呈する両刃石斧。全体を研磨して仕上げる。鑿状の工具と考えられる。
454	Ⅱ－Ａ区 旧谷状地	石斧 未製品	〃	4.6	3.9	4.1	181	残存する部分が少ないが柱状の石斧の未製品と考えられる。
455	表採	石斧	礫岩	7.1	13.2	1.0	152	打製の土掘具と考えられ，鍬の役割をしたと考えられる。
456	ＳＤ13	〃	緑色片岩	6.4	3.7	1.7	52.3	刃部が欠損する。尖った基部を持ち側面は基部近くでは稜をなすが体部中央からは面をなす。全体が研磨され丁寧に仕上げられる。形態的には縄文時代の石斧の可能性も考えられるが，ＳＤ13の埋土中からは他には弥生時代の遺物しか出土しない。
457	Ⅱ－Ａ区 旧谷状地	磨製石剣	頁岩	7.7	3.4	1.4	54.9	柄の部分しか残存していない。全体に擦痕が残る。鉄剣型石剣と考えられる。
458	Ｄ区 包含層	剝片	サヌカイト	4.5	2.3	0.6	6.9	刃部を調整しており，刃器として使用された可能性がある。
459	〃 〃	〃	〃	6.1	3.9	0.9	19.6	――――
460	Ⅱ－Ａ区 旧谷状地	〃	〃	5.2	2.5	0.4	3.0	――――
461	Ｄ区	〃	チャート	3.4	1.8	0.9	6.6	――――

遺物観察表27

図版番号	出土地点	器　種	材　質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	備　　考
462	D区	剝片	チャート	3.3	1.9	0.7	4.6	――――
463	〃	〃	〃	2.6	2.1	0.6	4.1	――――
464	ST4	勾玉	ガラス	1.2	0.8	0.5	0.1	青色（ターコイズブルー）の発色をしている。厚みのある体部はC字状をなし頭部の円孔は丁寧に両側から穿孔されている。研磨で仕上げられる
465	ST4 壁溝	管玉	緑色凝灰岩	1.9	0.7	0.2	1.1	――――
466	ST4 壁溝	〃	碧玉	2.2	0.8	0.3	1.8	――――
467	ST1 壁溝	敲石	砂岩	11.9	7.4	2.4	275	河原石を利用した敲石，両端に敲打による剝離がみられる。表面は磨いたようになめらか。
468	ST2	〃	〃	16.2	6.1	4.1	530	河原石を利用した敲石，両端と表面に敲打痕が残る。側面には敲打による整形の痕跡が残る。なめらかな表面。
469	〃	〃	〃	12.4	4.6	4.0	430	河原石を利用した敲石。中央の一部しか残存しない。中央部，端部に敲打痕が残る。
470	ST3	〃	〃	12.0	9.8	3.8	580	河原石を利用した敲石。両面の中央部には敲打による凹がみられる。端部，側面にもわずかに敲打痕がみられる。
471	〃	〃	〃	10.4	6.5	2.6	285	河原石を利用した敲石。端部にわずかに敲打痕が残る。なめらかな表面。
472	〃	〃	〃	9.8	7.7	4.2	470	河原石を利用した敲石。端部に敲打痕が残る。なめらかな表面。
473	〃	〃	〃	18.0	8.2	3.4	440	河原石を利用した敲石。側面に敲打痕が残る。表面はなめらか。
474	SK2	〃	〃	9.6	9.4	3.6	450	河原石を利用した敲石。縁辺部，中央部に敲打痕が残る。
475	SK3	〃	〃	7.0	7.9	2.5	220	河原石を利用した敲石。
476	D区 ピット	〃	〃	8.4	8.3	2.5	280	河原石を利用した敲石。縁辺部にわずかに敲打痕が残る。
477	SD6	〃	〃	8.2	8.6	2.7	285	河原石を利用した敲石。中央部，縁辺部に敲打痕が残る。
478	〃	〃	〃	9.9	4.5	5.7	400	河原石を利用した敲石。側面に敲打による凹がみられ，端部にも敲打痕が残る。
479	〃	〃	〃	10.0	9.1	3.3	440	河原石を利用した敲石。中央部と端部に敲打痕が残る。
480	SD7	〃	〃	13.0	9.9	3.1	560	河原石を利用した敲石。表面には広範囲に敲打痕が残る。縁辺部も敲打され剝離が起きている。
481	SD15	〃	〃	15.7	8.1	7.1	1280	河原石を利用した敲石。中央部と両端部に敲打痕が残る。
482	SD16	〃	〃	8.3	7.6	3.2	300	河原石を利用した敲石。

遺物観察表28

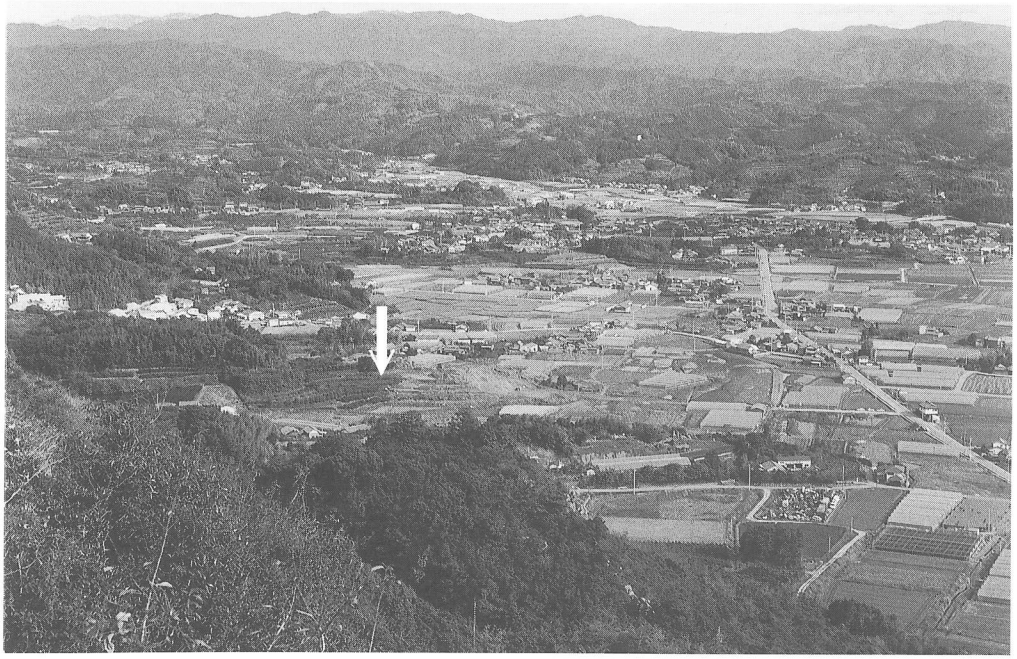
図版番号	出土地点	器　種	材　質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	備　　考
483	ＳＸ１	敲石	砂岩	5.8	6.1	4.4	252	河原石を利用した敲石。半分が欠損する。両面中央部とも敲打による凹がみられる。側面と端部は平らになるくらい敲打する。
484	〃	〃	〃	8.4	7.9	5.0	465	河原石を利用した敲石。半分が欠損する。中央部と側面に敲打による凹がみられる。
485	〃	〃	硬砂岩	13.0	7.3	4.6	665	いびつな形の河原石を敲石とする。側面，中央部，端部に敲打による凹がみられる。なめらかな表面。
486	〃	〃	砂岩	11.1	8.8	4.5	665	河原石を利用した敲石。中央部に敲打痕が残る。なめらかな表面。
487	Ⅱ－Ａ区 旧谷状地	〃	〃	10.8	11.1	3.4	580	河原石を利用した敲石。中央部に敲打による凹がみられる。側面は敲打によってつぶれ平面をなす。
488	Ⅱ－Ａ区 旧谷状地	〃	〃	14.0	7.8	4.8	875	河原石を利用した敲石。端部が凹む。
489	Ⅱ－Ａ区 旧谷状地	〃	〃	10.0	7.6	2.7	285	河原石を利用した敲石。粒子の荒い砂岩で風化が進む。両面中央部とも敲打により凹む。側面にも敲打痕が残る。
490	ＳＸ１	叩台	〃	22.1	18.7	8.5	4300	河原石を利用した叩台。断面形は厚みのある楕円形。中央部に敲打痕が残る。表面はなめらか。
491	〃	〃	〃	15.8	10.7	6.3	1300	粒子の荒い砂岩。中央部がくぼみ石皿状を呈する。中央部に敲打痕が残る。
492	〃	〃	〃	32.8	16.0	14.2	10.3 Kg	河原石を利用した叩台。表面の２ヶ所に敲打による凹が残る。
493	Ⅱ－Ａ区 旧谷状地	〃	〃	15.8	20.8	3.1	1415	河原石を利用した叩台。扁平で薄い。中央部に敲打痕が残る。
494	ＳＴ１	砥石	硬砂岩	13.6	8.6	1.7	435	表面，裏面に擦痕が残る。
495	ＳＴ２	〃	砂岩	12.3	3.0	2.1	130	粒子の細かな砂岩，表面，両側面に擦痕が残る。
496	ＳＫ２	〃	〃	7.5	5.4	2.1	70.0	粒子の細かな砂岩，大きな砥石の一部が剝離したものと考えられる。
497	ＳＸ１	〃	〃	6.7	4.4	1.8	62.5	粒子の細かな砂岩，大きな砥石の一部が剝離したものと考えられる。
498	ＳＴ２ 中央Ｐ	〃	砂質泥岩	27.9	15.0	6.8	3000	粒子が細かく軟質の泥岩。表面のみ使用される。据え置きで使用されたと考えられる。
499	ＳＴ３	〃	砂岩	24.4	12.0	6.3	2500	表面，裏面の両面が使用され擦痕が残る。
500	〃	〃	泥質砂岩	30.2	17.4	15.3	11.6 Kg	軟質で粒子が比較的荒い砂質泥岩。表面と側面が使用される。据え置きで使用されたと考えられる。表面，側面中央部には敲打痕がわずかに残り，叩台に転用されたと考えられる。
501	Ⅱ－Ａ区 旧谷状地	〃	砂岩	10.2	9.3	3.7	420	粒子の細かな砂岩。表，裏両面が使用されている。側面にもわずかに使用痕が残る。
502	Ⅱ－Ａ区 旧谷状地	〃	〃	14.3	12.0	5.7	1520	粒子の細かな砂岩。表，裏両面と側面にも擦痕が残る。

遺物観察表29

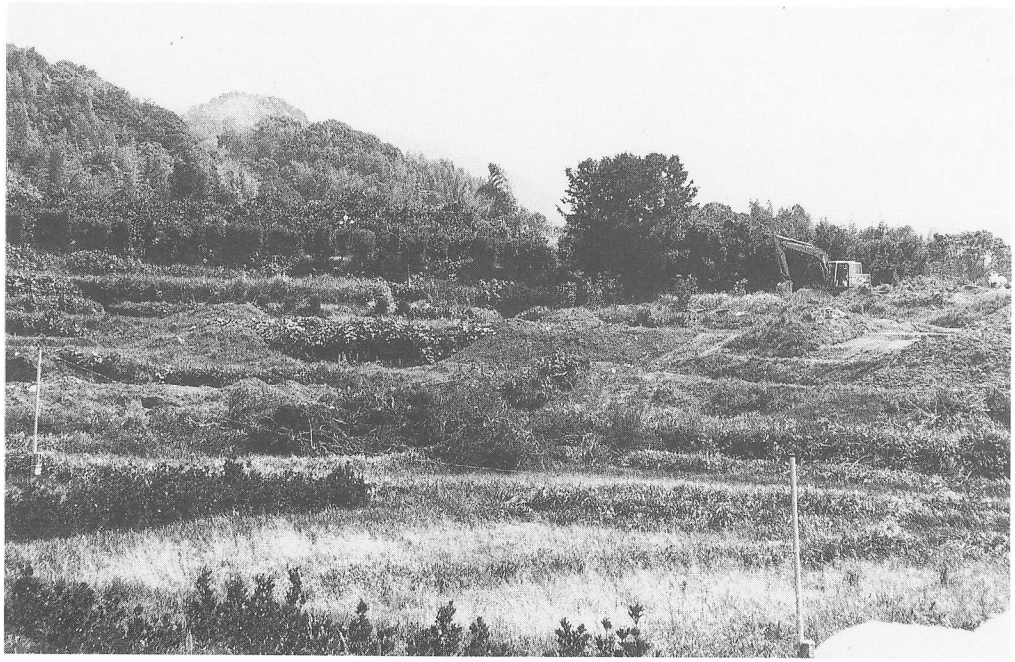
図版番号	出土地点	器　種	材　質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	備　　考
503	ＳＸ１	不明	頁岩	11.9	3.4	2.1	120	先端に敲打痕，表面には擦痕が残り研磨されている。
504	ＳＴ３	〃	凝灰岩	4.1	3.6	1.1	16.8	非常に軟質である。両面から穿孔されるが，砥石として利用された結果，穿孔したのか穿孔が目的であったのか不明。
505	〃	〃	頁岩	10.9	2.6	2.6	210	全体が非常になめらかに研磨されている。
506	ＳＸ１	〃	〃	11.6	9.8	2.0	360	荒整形の段階の石斧の未製品でないかと考えられる。
507	Ｄ区 包含層	〃	〃	10.7	1.8	1.0	18.9	２面を非常になめらかになるまで研磨している。
508	ＳＴ６	〃	砂岩	12.0	6.3	1.1	145	片面は自然面を残し，大きく剝離されている。辺部にはわずかに調整の痕跡があり刃器と考えられる。
509	Ⅱ－Ａ区 旧谷状地	小円礫	〃	6.5	6.3	1.7	92.2	円礫の両面に線刻状の擦痕が残るが規則性はないと考えられる。
510	Ｄ区	砥石	〃	4.3	2.9	3.2	80.7	粒子の細かな砂岩。断面形は方形を呈し，規格性が強い。４面ともに使用される。（中世以降の物と思われる）

写　　真

写真　1



調査区遠景（三宝山より）



調査区調査前風景

写真　2

調査区調査前風景

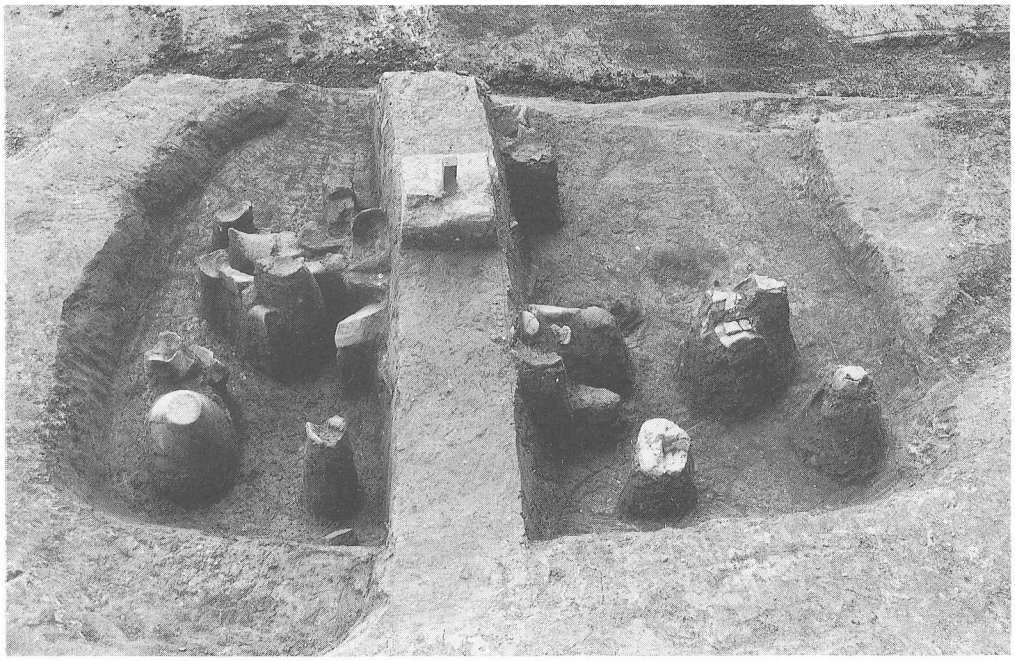
ＳＴ１　完掘状態

ＳＴ２　完掘状態

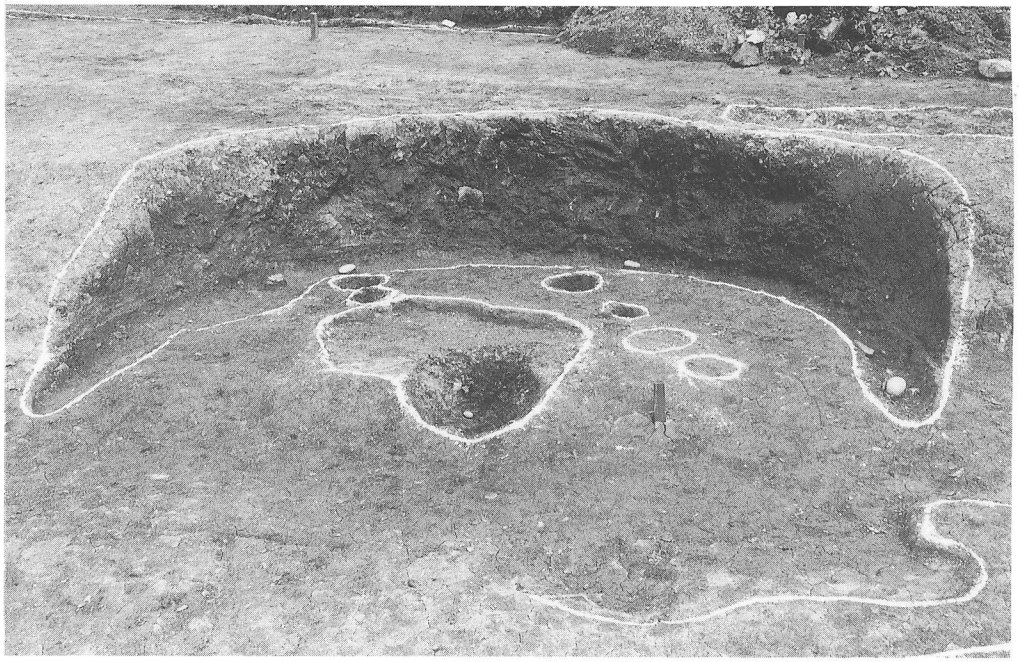
Ａ区　完掘状態

写真　4

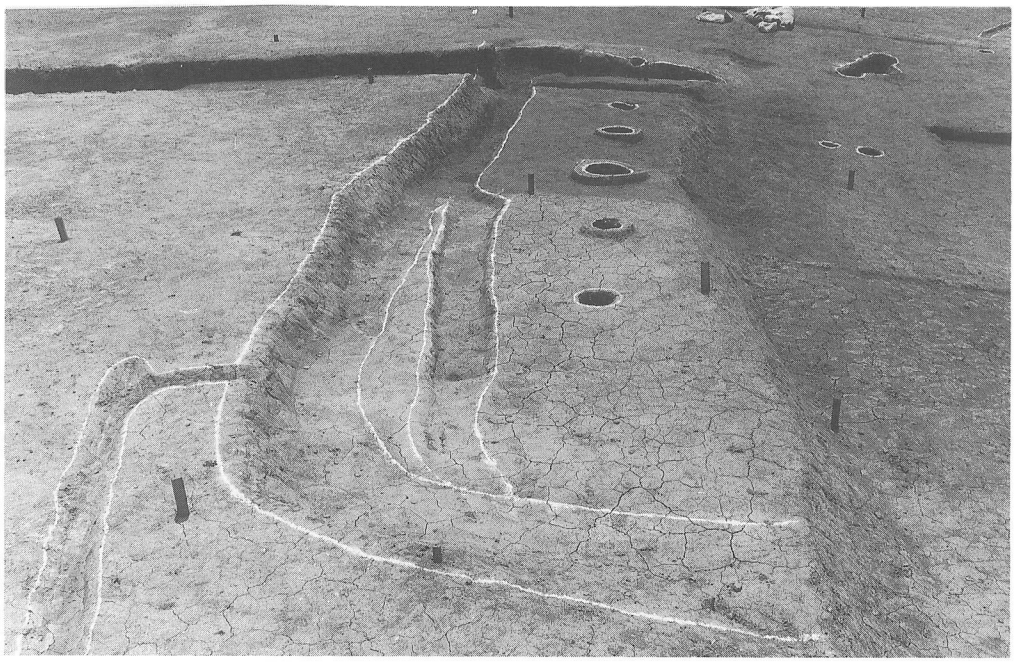
Ｂ区　完掘状態



ＳＫ２　遺物出土状態

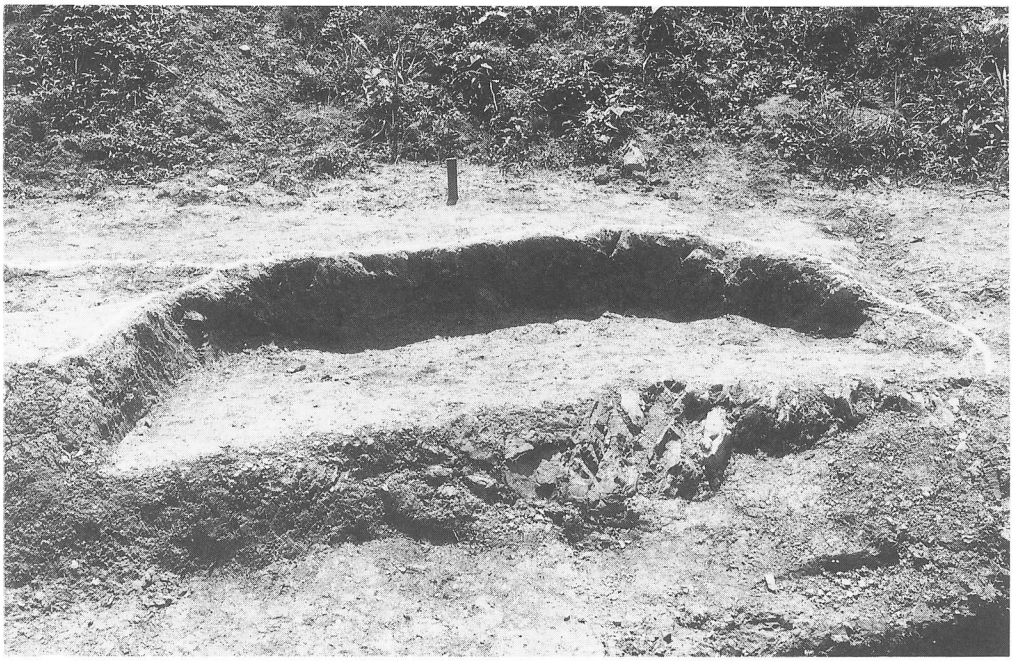


ＳＴ３　完掘状態



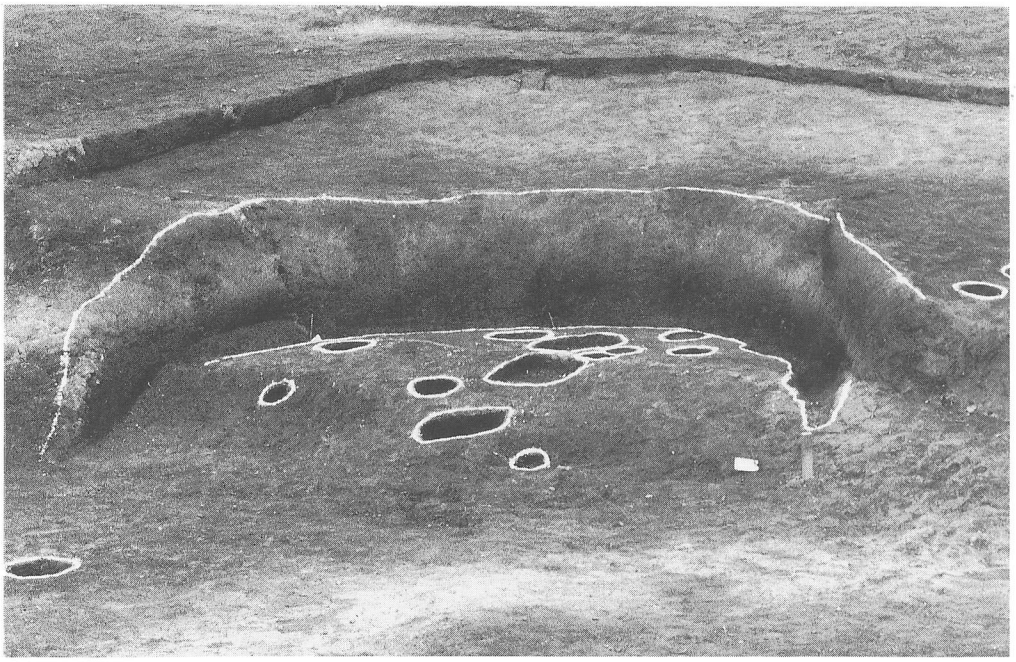
ＳＸ１　完掘状態

写真　6

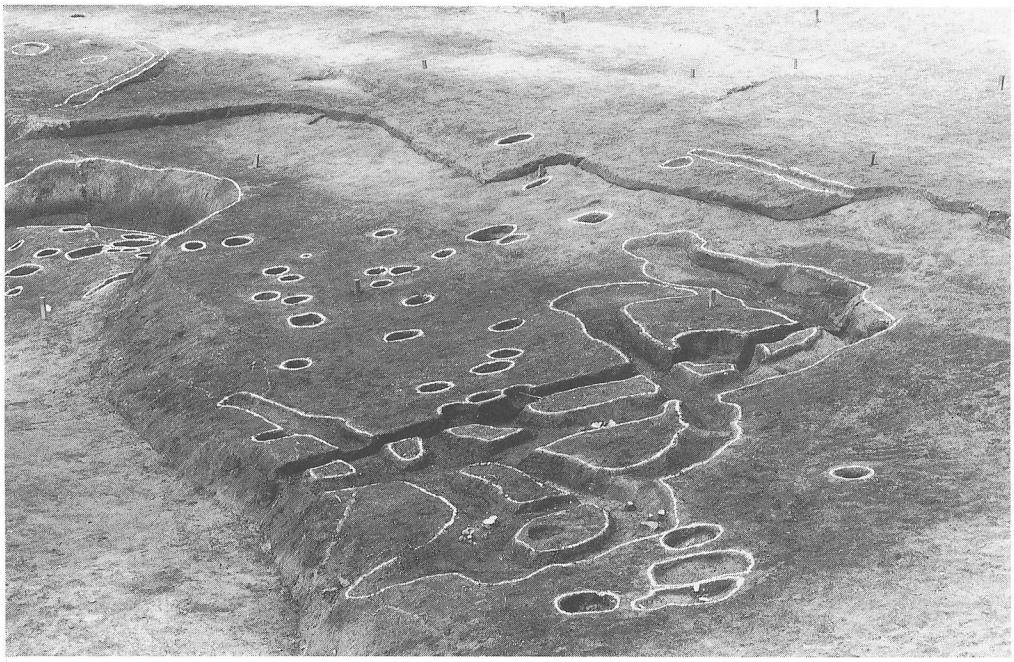


ＳＫ３　完掘状態

ＳＤ６　完掘状態

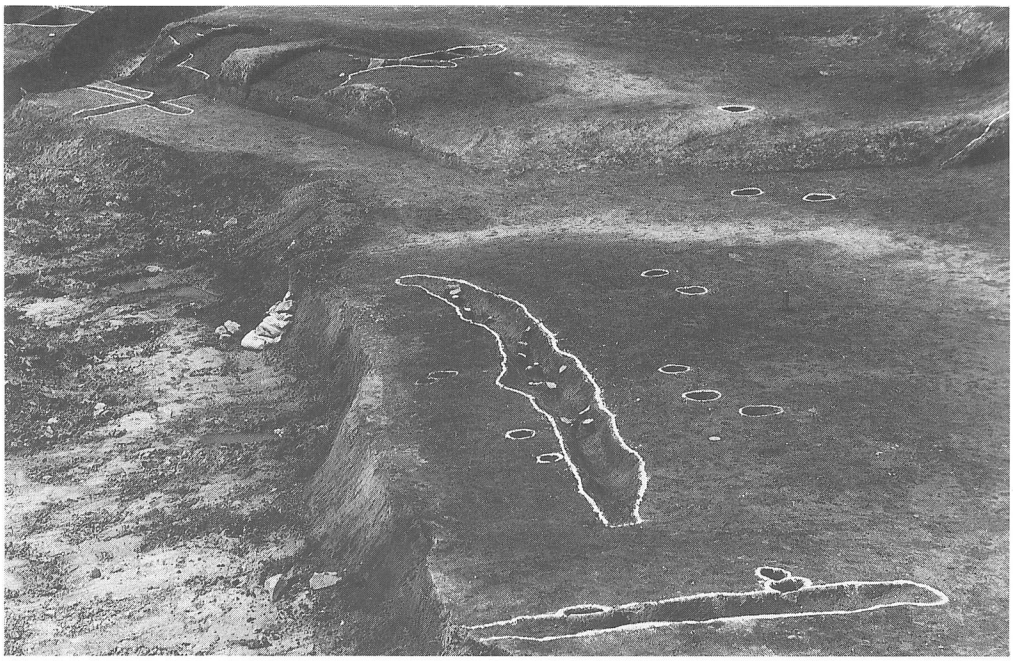


ＳＴ４　完掘状態

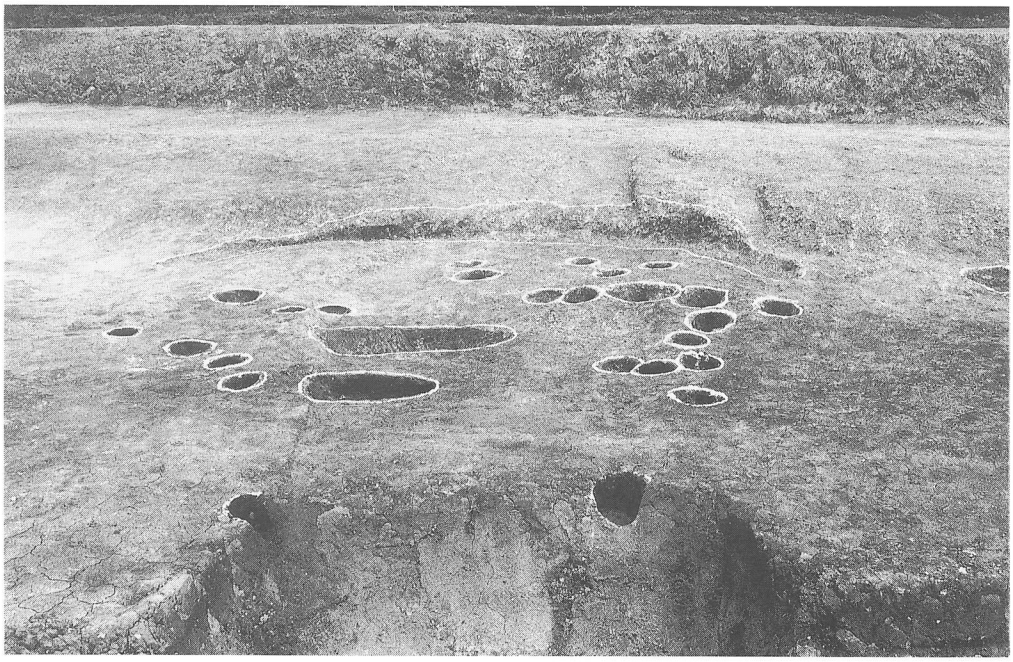


Ｄ区　端部完掘

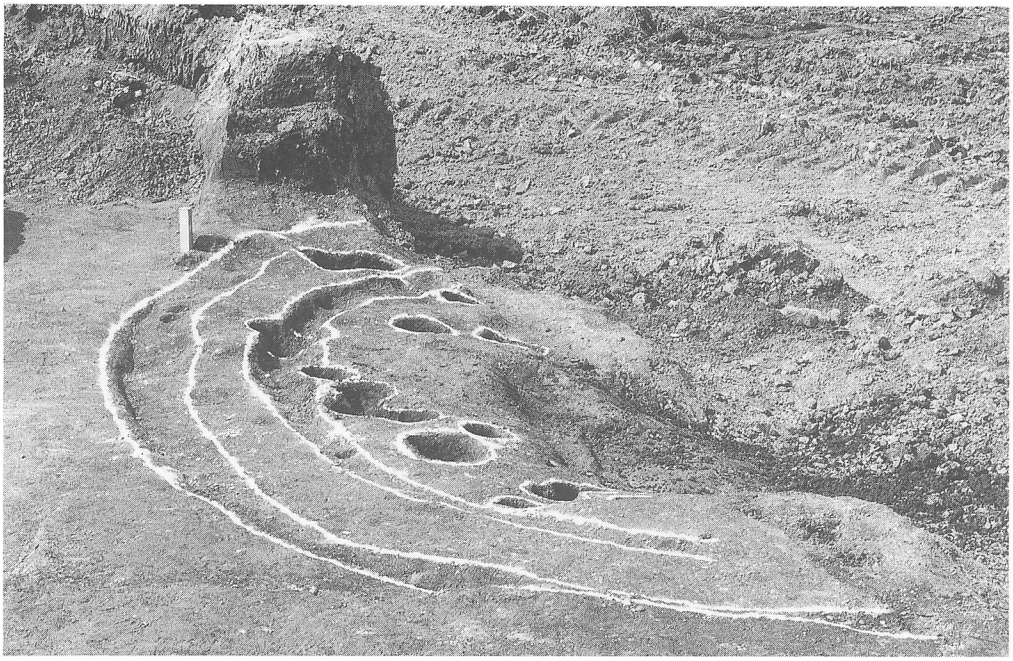
写真　8



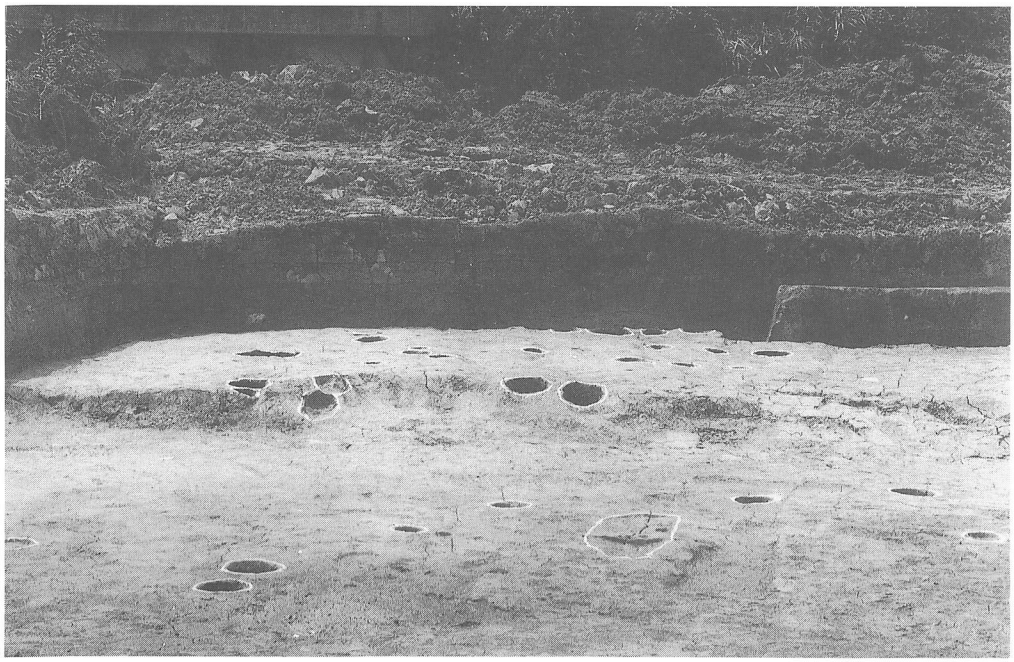
ＳＤ13・14　完掘状態



ＳＴ５　完掘状態

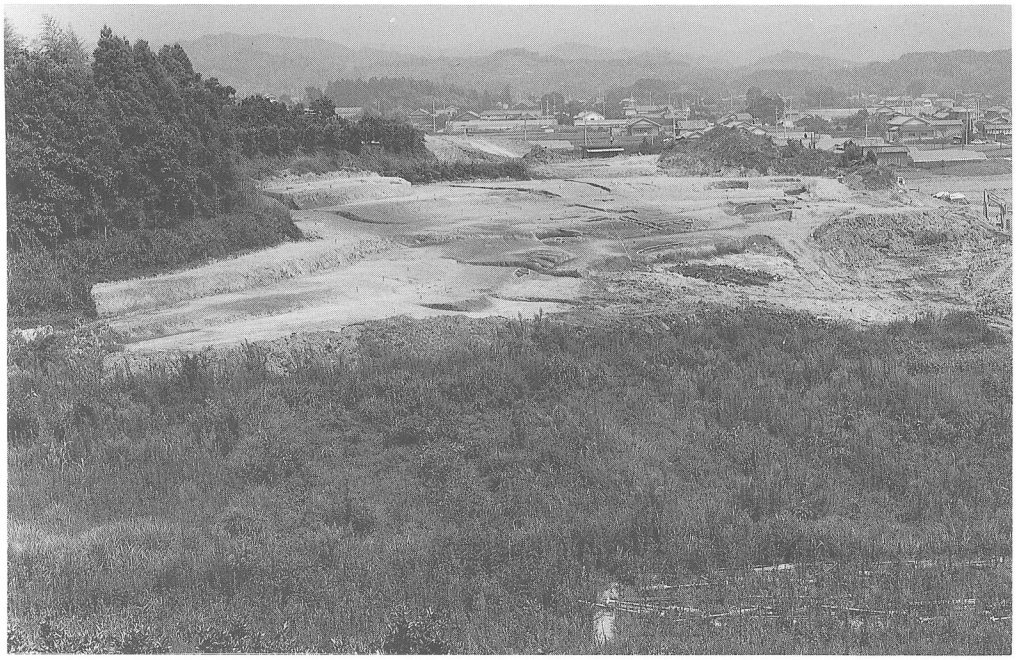


ＳＴ６　完掘状態

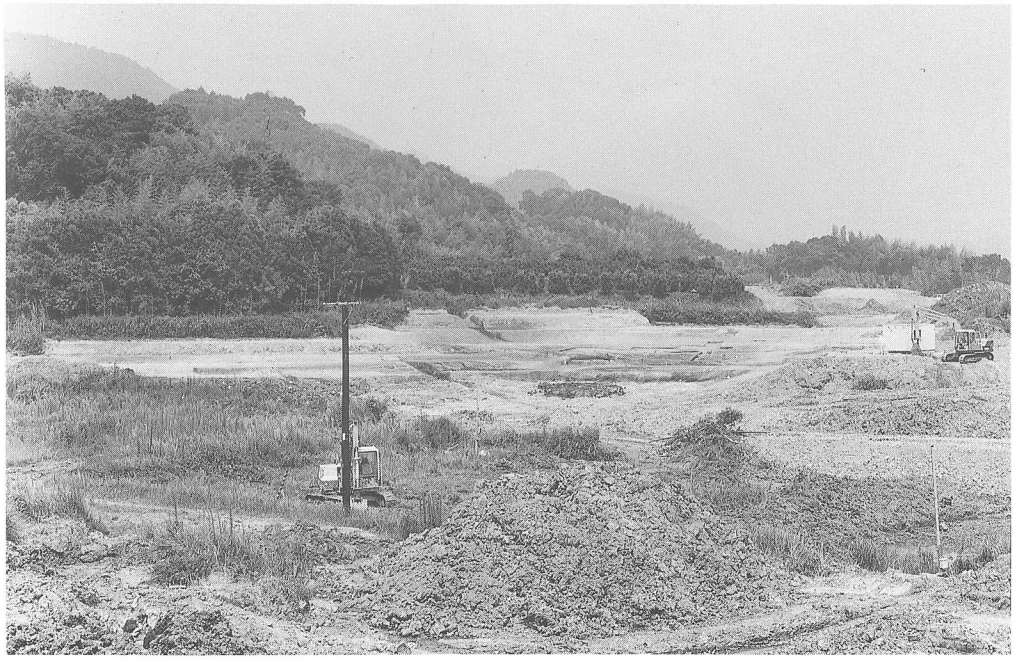


Ⅱ－Ａ区　ピット完掘状態

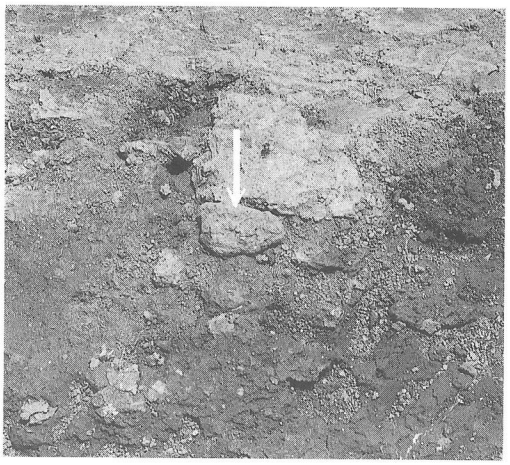
写真　10

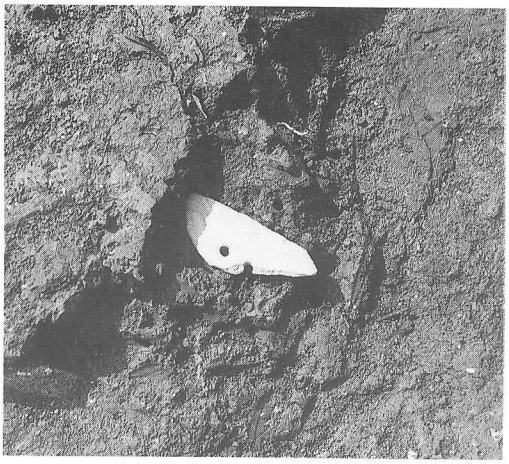


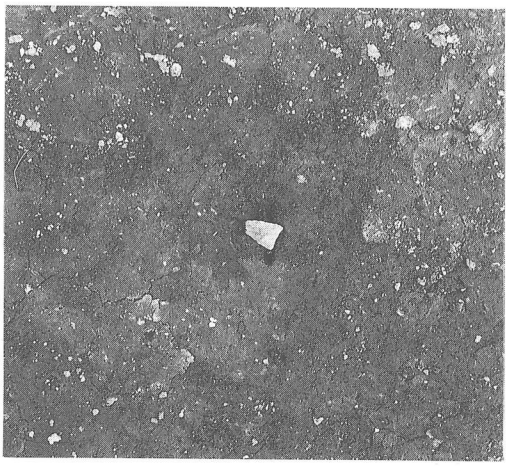
調査区完掘状態遠景



調査区完掘状態遠景

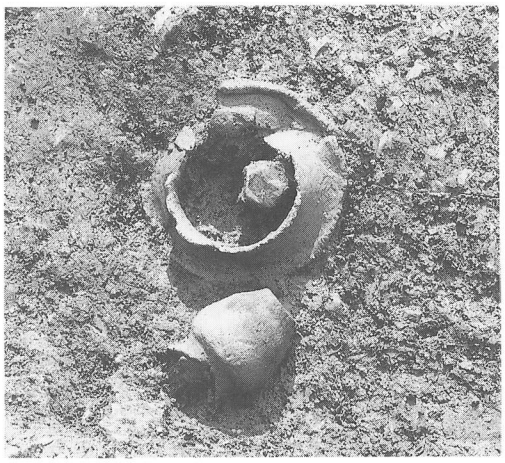


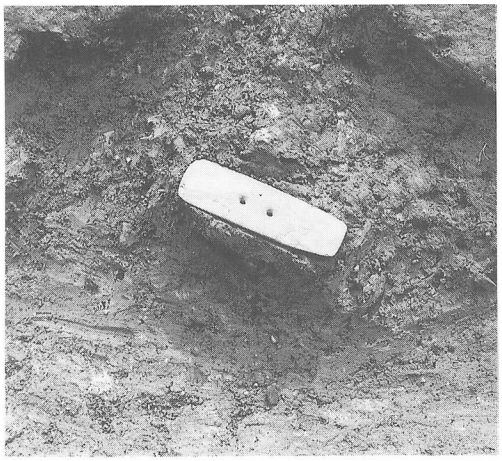


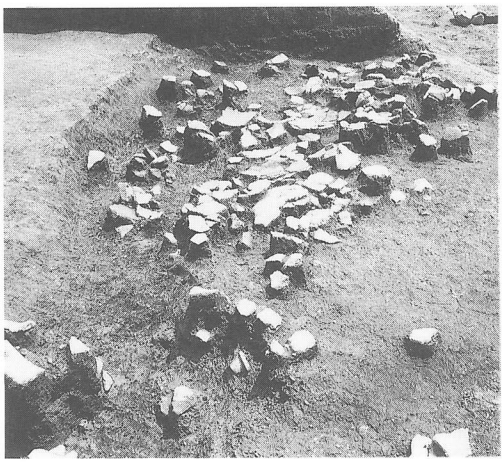


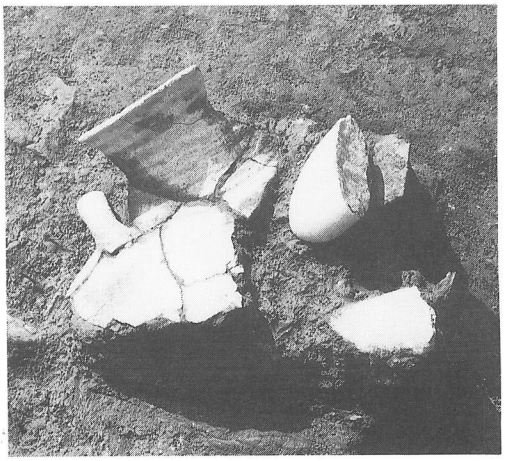
遺物出土状態

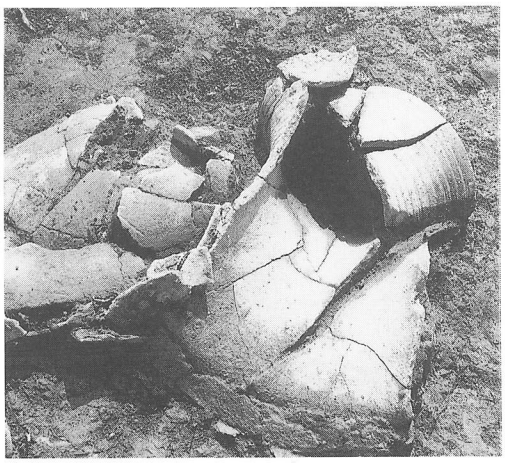
写真　12





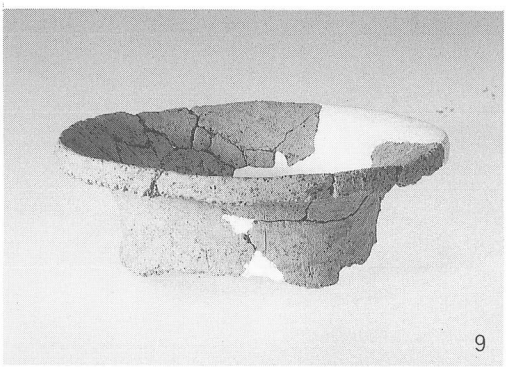




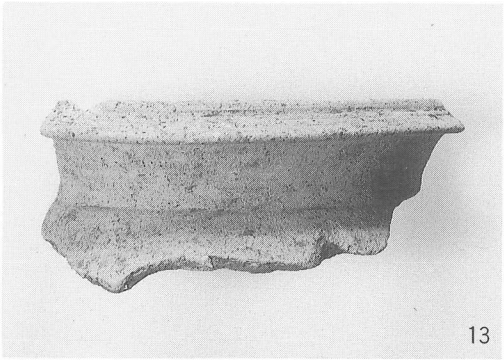


遺物出土状態

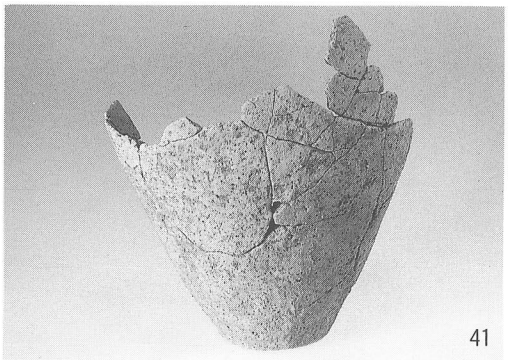
7

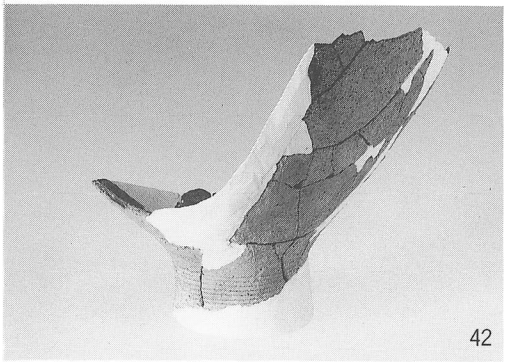

9

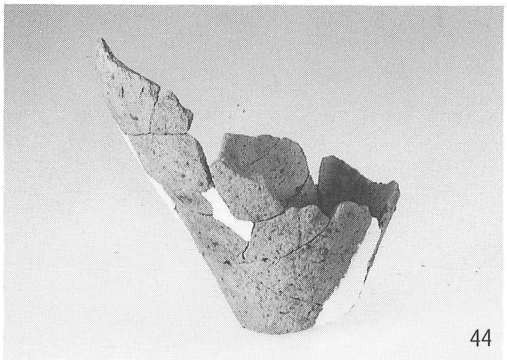
10


13

27


41

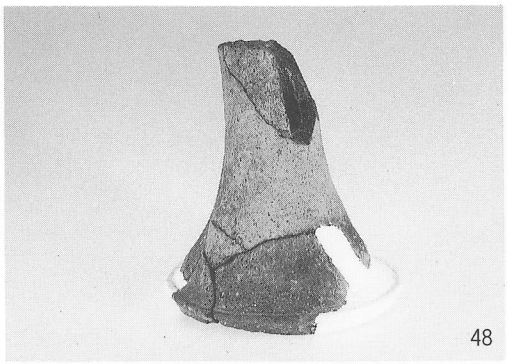

42

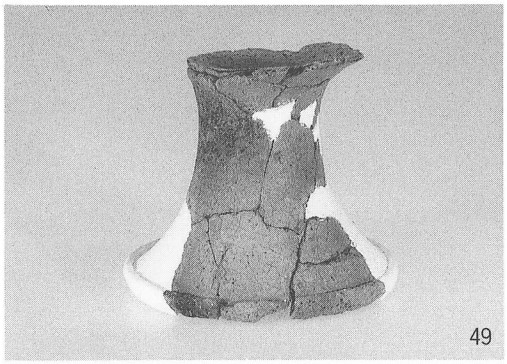

44

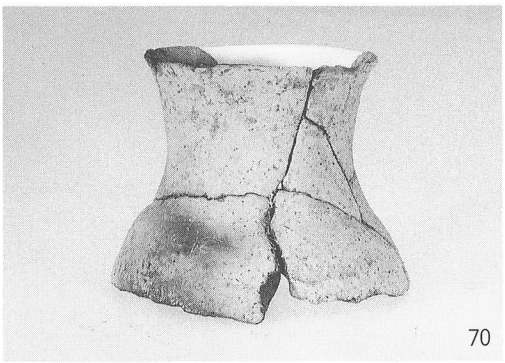
出土遺物　1

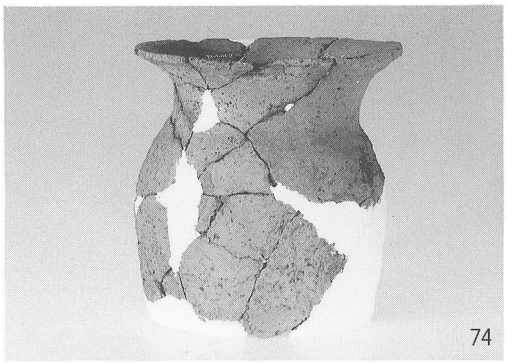
写真　14

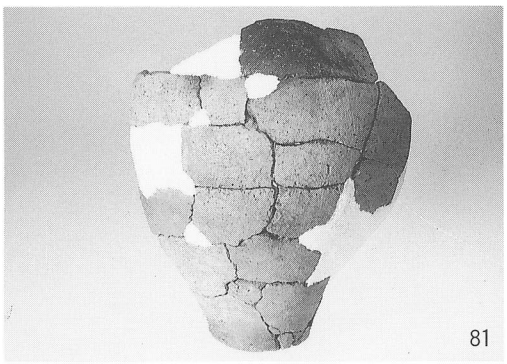
47

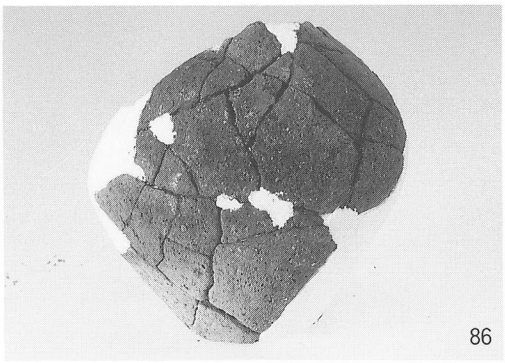

48


49


70

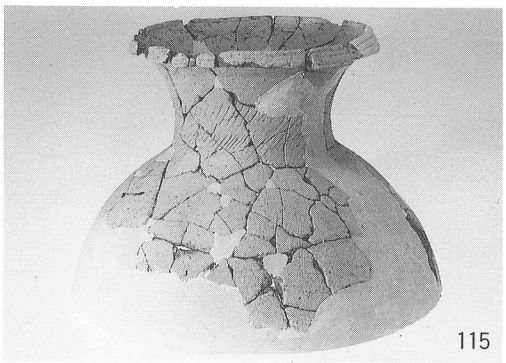

74

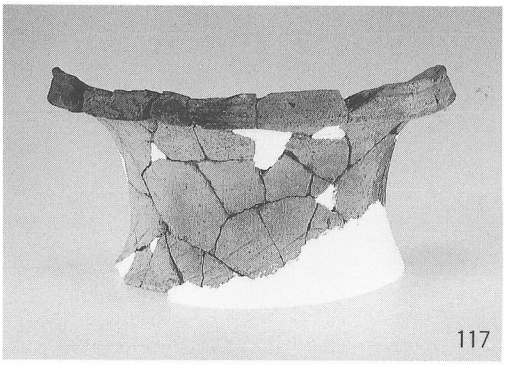

81

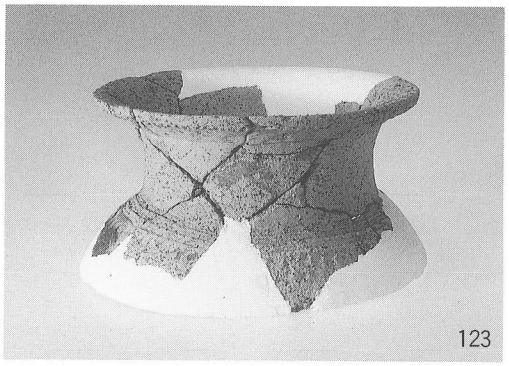

86

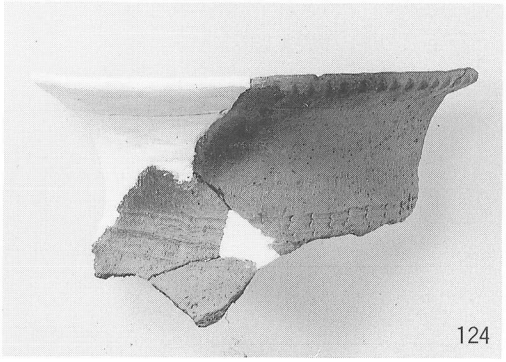
99

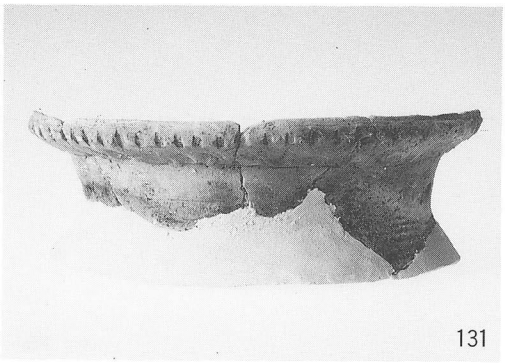
出土遺物　2

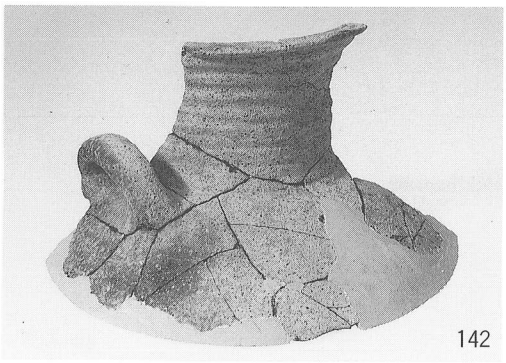

115

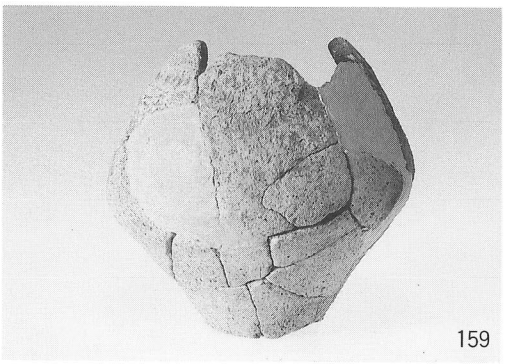

117


123


124


131


142

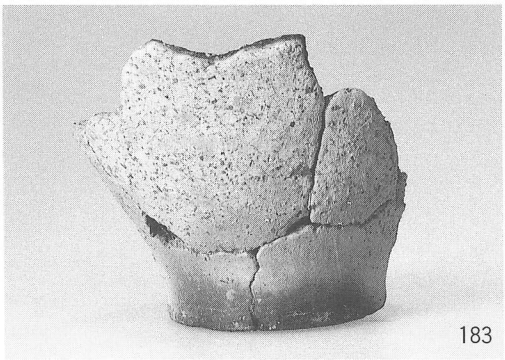

159

165

出土遺物　3

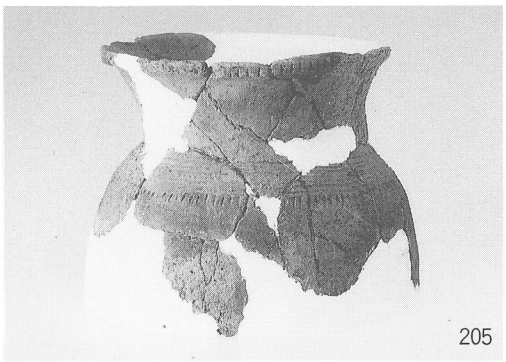
写真　16

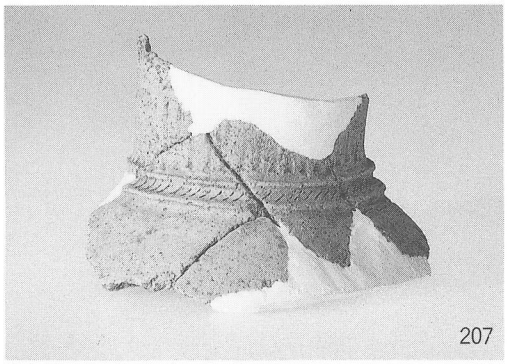
179

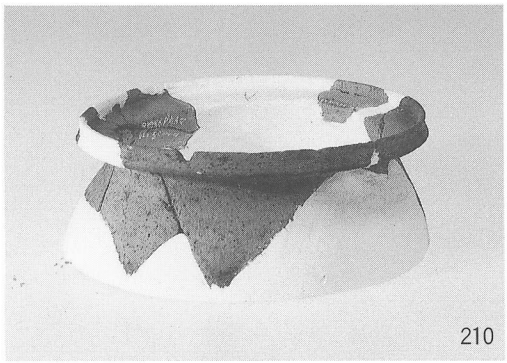

183

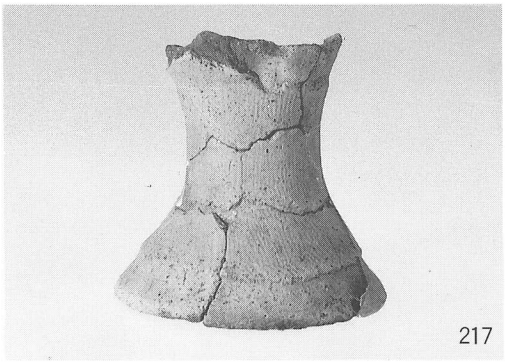
184

201


205


207


210


217

出土遺物　4

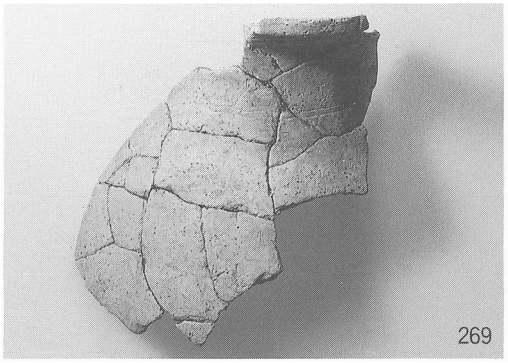
228

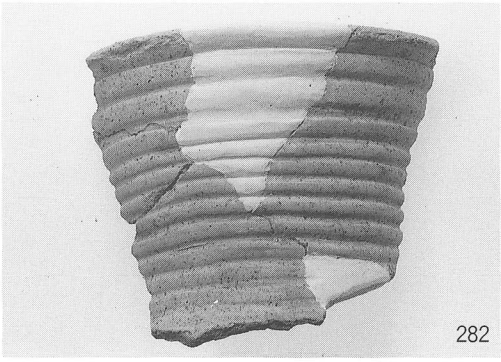
245

226

267

265


269

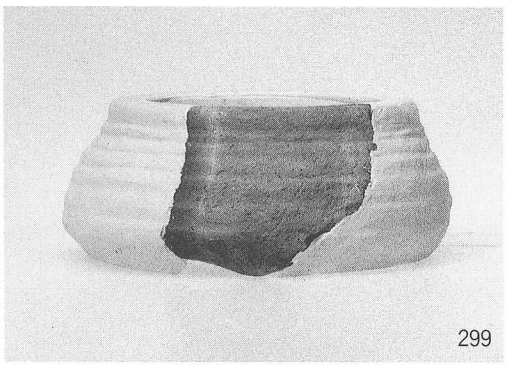

282

289

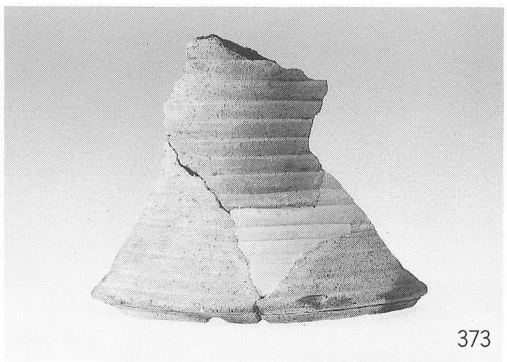
出土遺物　5

写真　18

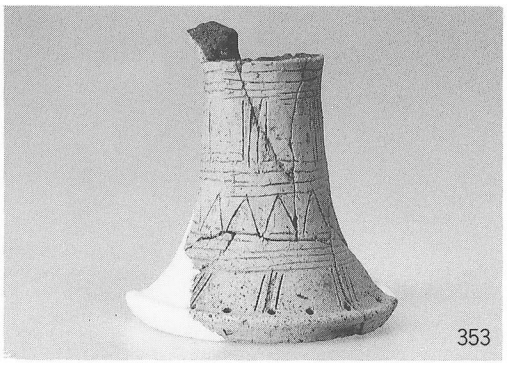
295

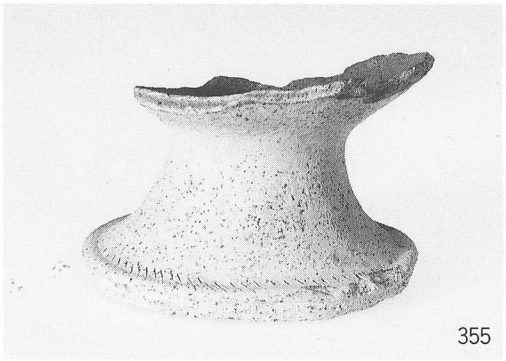

299

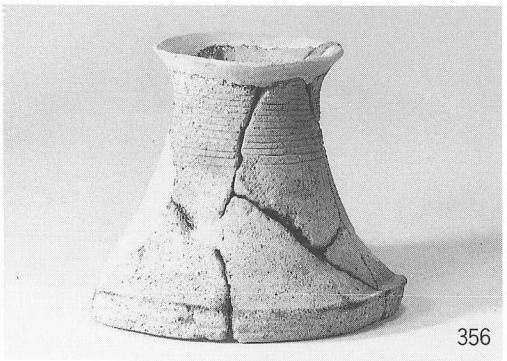
360


373

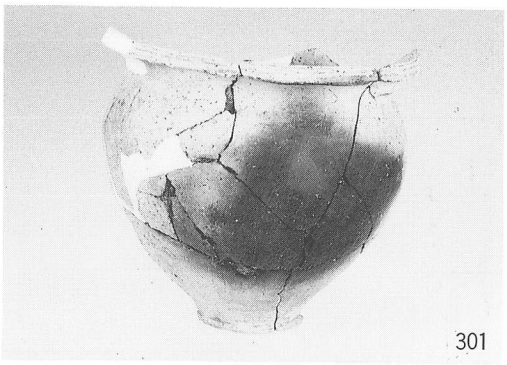
352

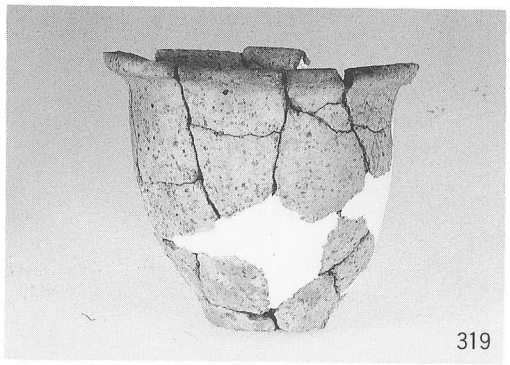

353

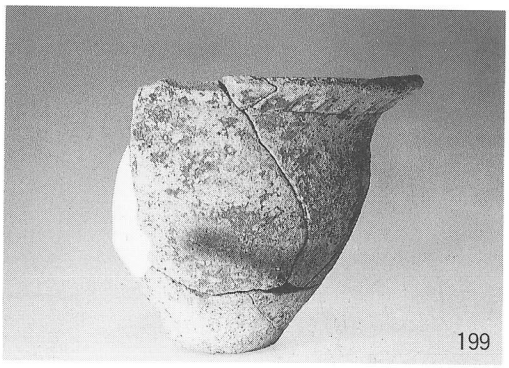

355

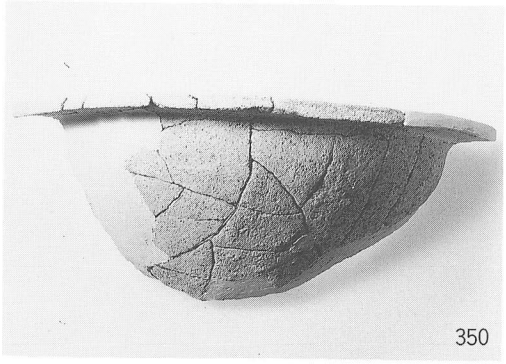

356

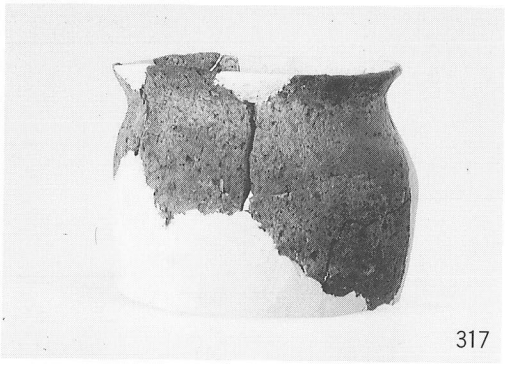
出土遺物　6

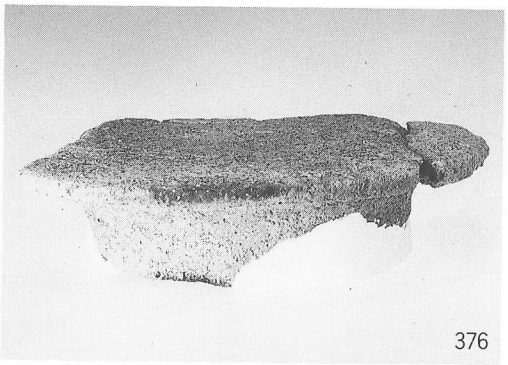

301

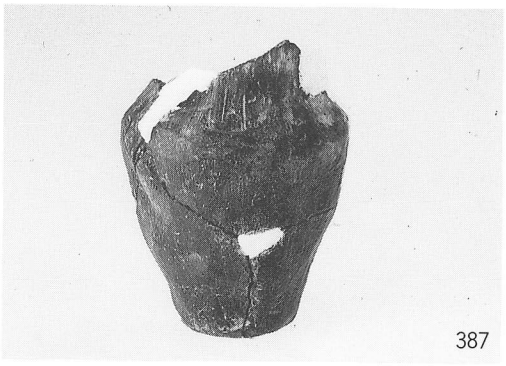

319

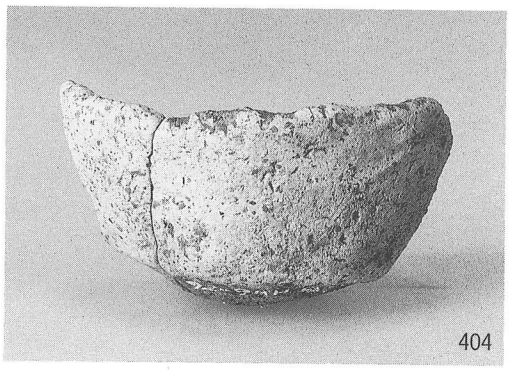

199


350


317

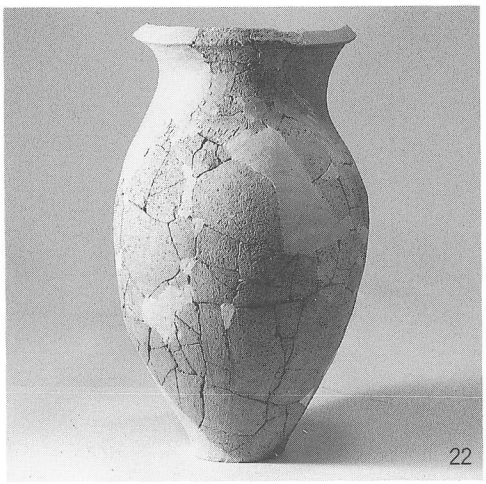

376

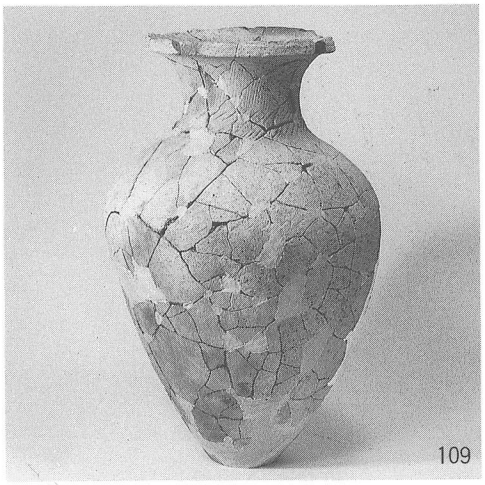

387

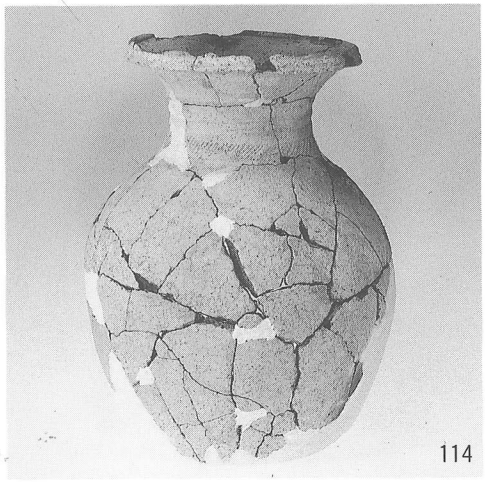

404

出土遺物　7

写真　20



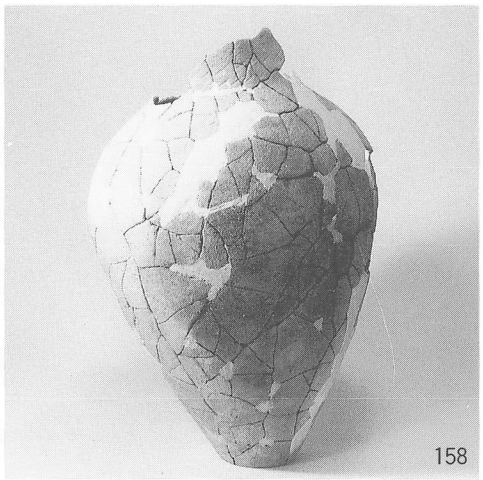


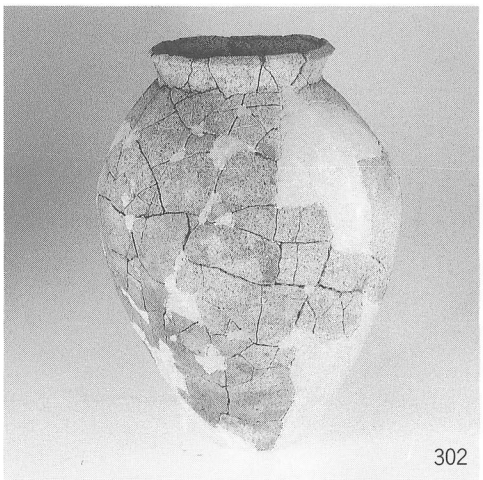


出土遺物　8

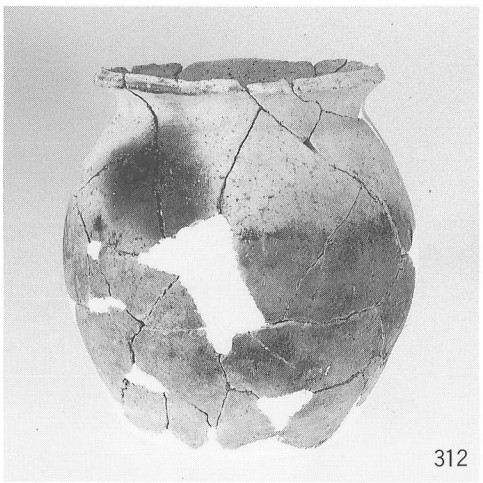
121

140


158

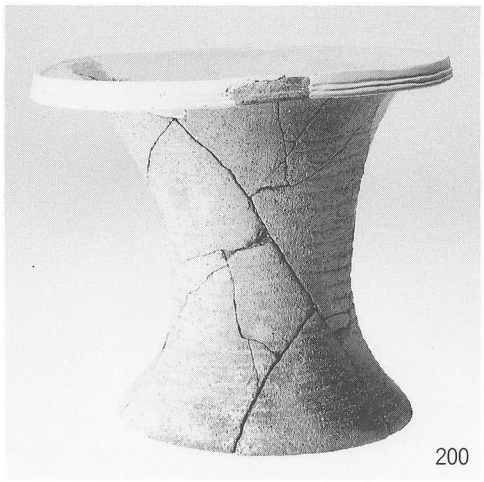

302

303

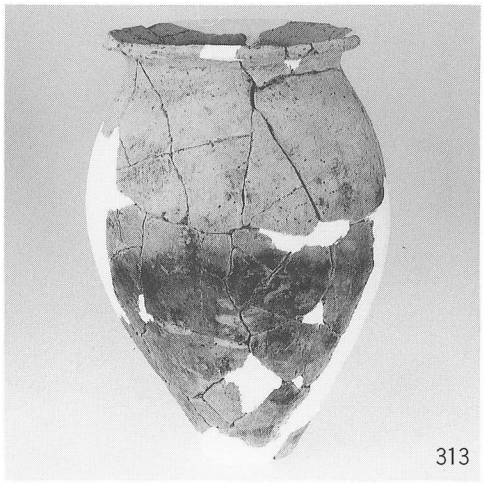

312

出土遺物　9

写真　22


200

268

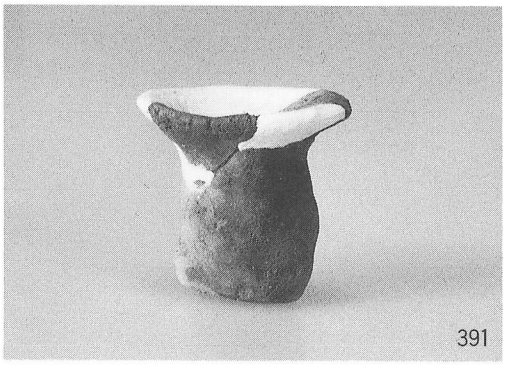

313

315

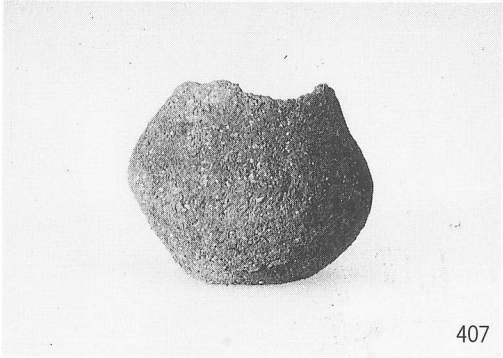
314

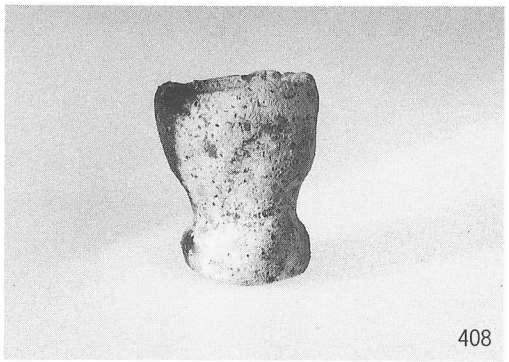
52

出土遺物　10

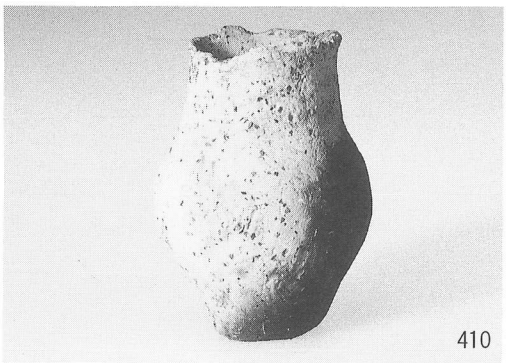

391

392

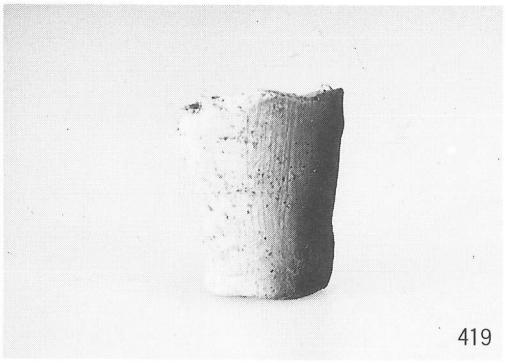

407


408

409


410

416


419

出土遺物　11

写真　24

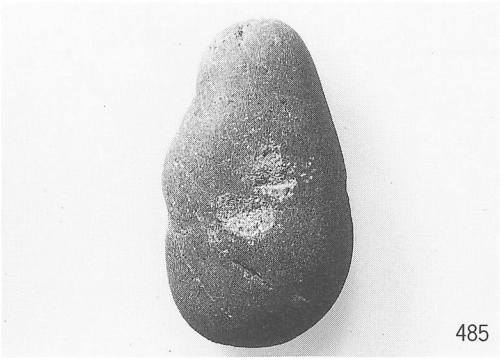
388

389

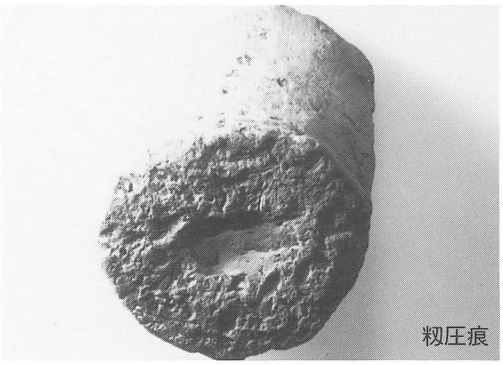
97

509

457


485

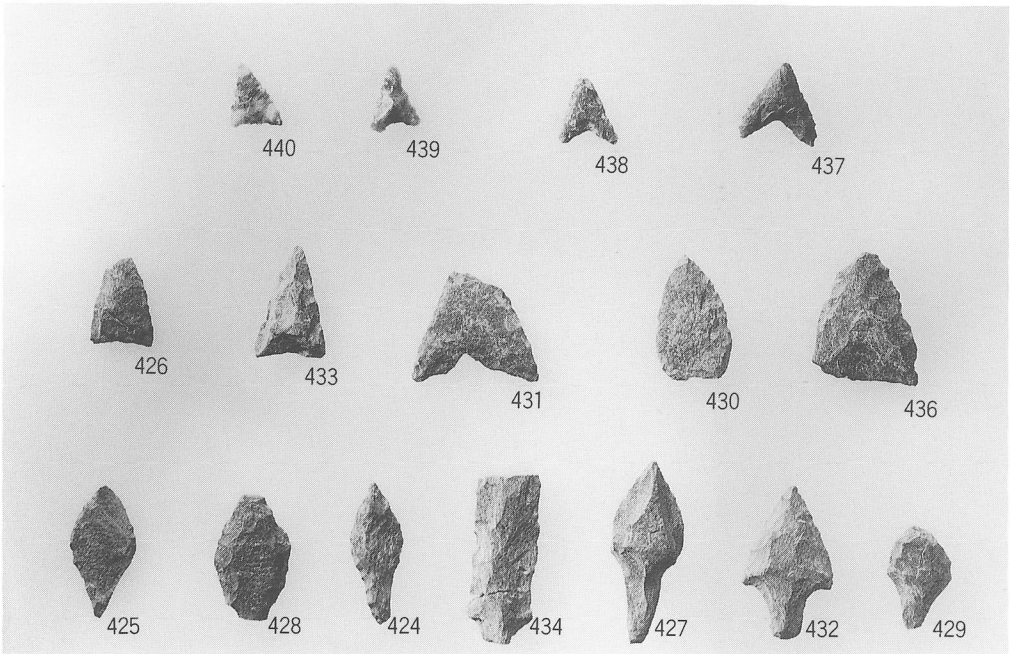
桃の種子


籾圧痕

出土遺物　12

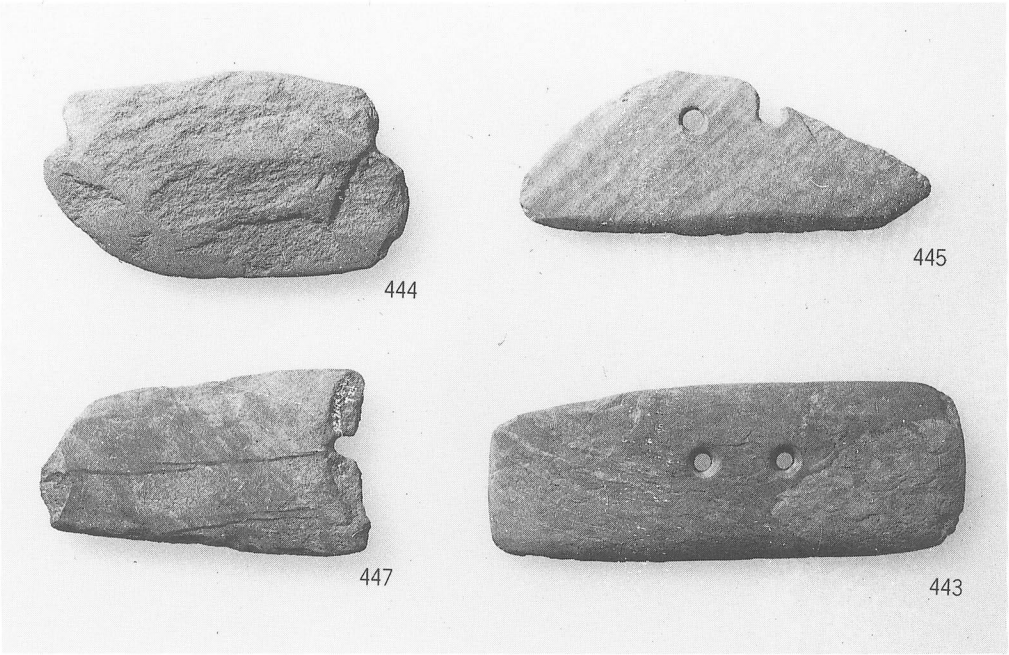
423
421
422

鉄　鏃

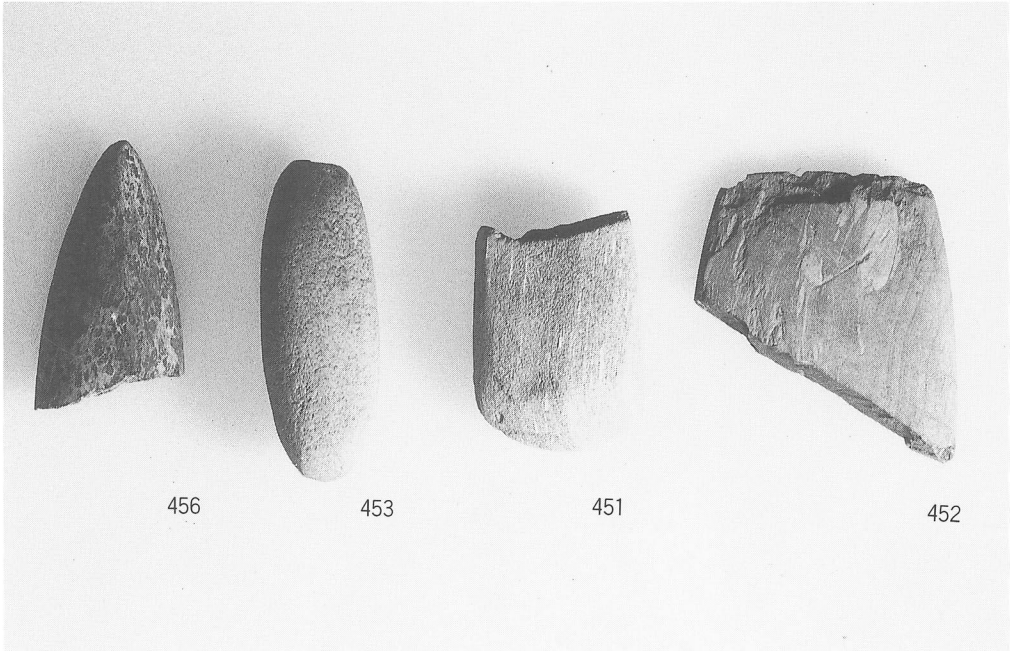

440
439
438
437
426
433
431
430
436
425
428
424
434
427
432
429

石　鏃

写真　26

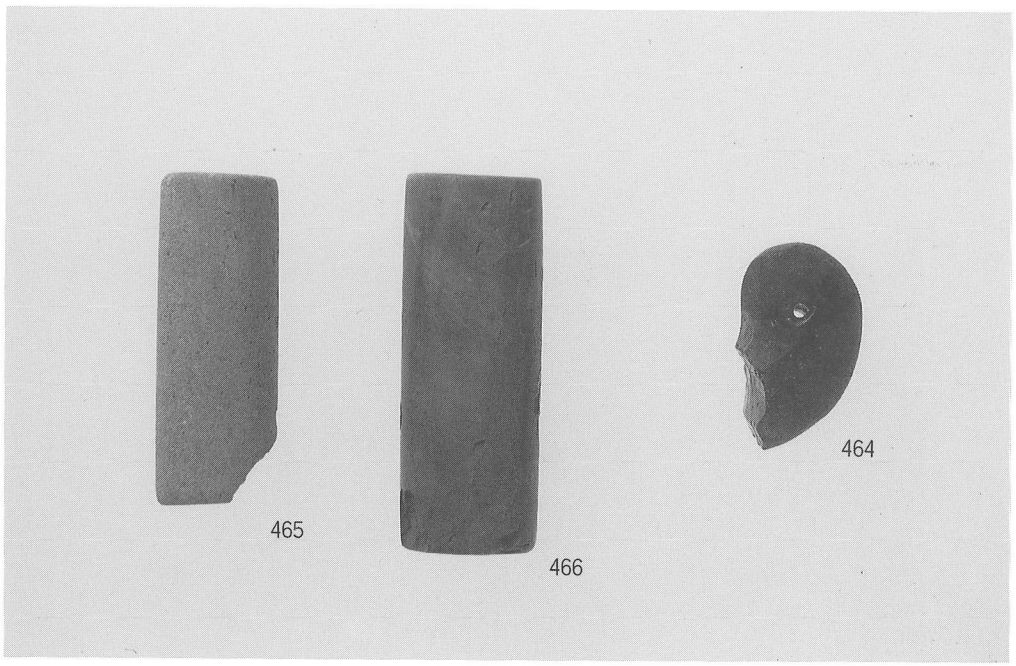


石包丁



石　斧

器台形ミニチュア



ガラス製勾玉，管玉

付図　第70図　調査Ⅰ区全体図

本村遺跡発掘調査報告書

(野市町埋蔵文化財調査報告書第3集)

1993年3月

編集　野市町教育委員会

発行　高知県香美郡野市町西野2706

電話　(08875)6－0511

印刷　西村謄写堂